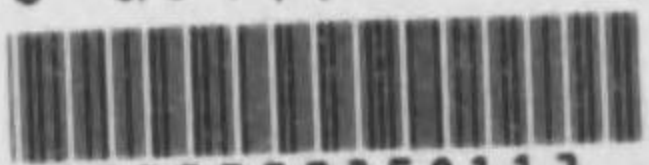


918.6-G34イウ



1200500759117

918.6



始



33.11. 7

718.6
G345
UD



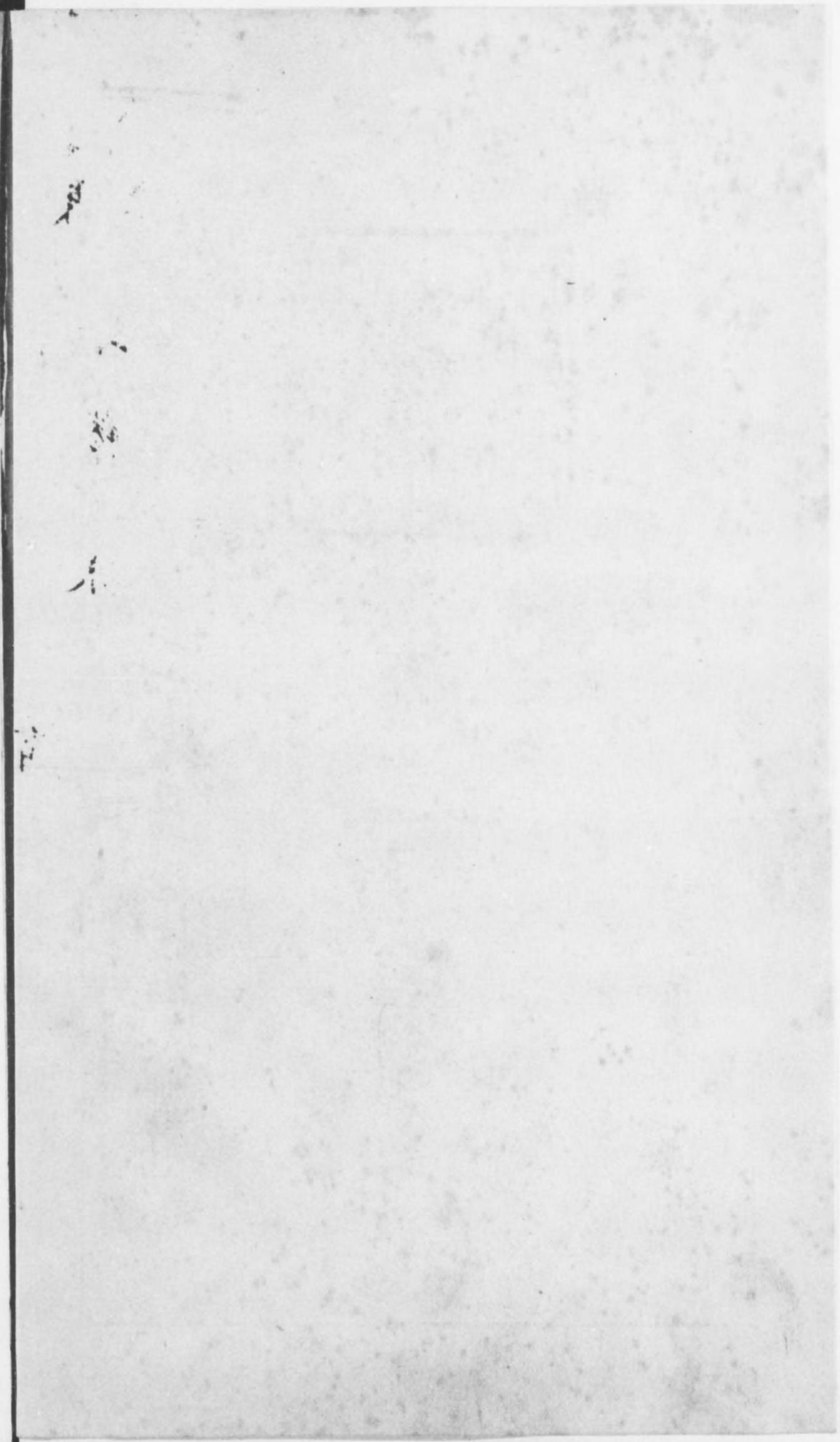
島崎藤村集

改造社版

杉浦非水装幀



欠



~~11143~~

(次 目)

「島崎藤村集」目次

巻頭寫眞(無題)

序にかへて(筆蹟)

生ひ立ちの記……………一

25 千曲川のスケッチ……………三

26 父を追想して……………五
(地中海の旅)

佛蘭西だより抄……………一〇三

27 燕のごとく歸る……………一五〇

故國を見るまで……………一五九

28 故國に歸りて……………一九七

飯倉だより抄……………二一七

29 春を待ちつゝ……………二五五

30 子供のため……………三〇四

年 辭……………三二一

欠

序をかへて

島崎雪村

かりそめ、位置をあちこちに移し、小語も浅草も、巴里も、客舎も、飯舎も、感想記行隨筆、消息の類を書き綴つて来たところが二十五年の餘りし及んど。ある意味から言へば、これを私の自叙傳である。おのづからある半生の旅日記である。自分し詩小説その他の集りゆづり、斯うしと讀物をこころよ提供するところを、決して苦味なきやいと思ふ。

生ひ立ちの記

(ある婦人に與ふる手紙)

私の子供が初めて小学校へ通ふやうに成つた其翌日から、私は斯の子供を喜ぶ始めました。昨日の朝、湯洗は子供が湯に赤の御飯を配りました。早く煙火の影に夜更しすることの多い都會の生活の中でも、子供ばかりは夜も早く寝、朝も早く起きますから、弟の方も兄と一緒に早く床を離れました。兄は八歳、弟は六歳に成ります。お人好しの兄に比べると弟はなかくきかない氣で、玩具でも何でも同じ物が二つなければ承知しないといふ風です。ところが其朝に限つて、兄の方には新しい靴や、帽子や、其他學校用のものが買つて宛行はれてあるに引かへ、弟のためには子供持の川傘と、麻裏草履としか有りません。弟は地面を踏んで、ぐづり始めました。兄と一緒に朝の晴に對つても、兄が晴々しい顔で赤の御飯をや

つて居る間、弟は泣きもせず、不平らしく萎れて、不性無性に窓を打ち始めました。そのうちに不問思ひ附いたやうに、食事申自分の膳を離れて、例の新しい雨傘を取りに立つて行きました。それを大事さうに自分の膳の側に置いて、それから復た食ひ始めました。家のものが皆な可笑さうに思つて笑ふと、弟は自分の爲たことを囁り笑はれたかと思つたかして、やがてその雨傘を元の場所へ仕舞に行つて、今度は好きな御飯も食はずに泣き續けました。學校までは二三時あります。そこへ通ふ子供は馬車や自転車などはびしく通る廣い道を越して、町を折れ曲つて行くのです。昨日の朝は家のものが一人隨いて、近所の子供や親戚と一緒に學校へ行きました。今朝は送りだけ行つて、試みに獨りで歸らせることにしました。兄さんは最早歸つたやうな顔をして居ました。獨りで歸つて被入つしやイヤと言ひました

ら、うんなんて——
隨いて行つた朝は斯様なことを言つて學校の方に居る子供の數で切つて居ました。昨日學校の敷地で家のものが涙が見えなく成つたと言つて泣いたといふ話などもして泣きました。
斯の兄の方の子供は、性來弱く、幾度か醫者の手を煩はした程で、今日のやうに壯健らしく成らうとは思ひもありませんでした。昔の丹精一つで漸く學校へ通ふまでに漕附けたのです。それを思ふと斯兄は朝晩保護の役目を引受けて呉れた親戚の姉さんや下婢に餘程御禮を言はねば成りません。學校の終る頃には、家のものは皆な言ひ合せたやうに門口に出て、獨りで歸つて来る子供を待受けました。
「あ、兄さんが歸つて来た、歸つて来た」と一人が言ふと、近所の人も往家に出て眺めて、「まるで、靴が多いて来るやうだ。」と申しました。
學校歸りの子供は靴を肩に掛け、草履袋を手には提げ、新しい帽子の微塵を充らせながら、半ば夢のやうに家の内へ歸りました。
地方に居る私や私の子供のために心配して居る貴女に、私は斯のことを書き

「あ、一本脚の人が被褥なところを歩いてら。」
と二本の杖に身を支へながら行く人の後姿を見つけて、それを私に指して見せました。
電車通りの向側には、よく玩具を買ひに行く店があります。子供はその店の方へ行くと、駄々をこねて開入れませんから、私も持参

「買つて、買つて……買つてばかり居るぢやないか。そんなに父さんは金銭がありやしないよ。」
漸くのこと、子供を言ひ隠して、それから橋の畔の方へ連れて行きました。そこに煙草と菓子とを賣る小さな店があります。小さな硝子張の箱に飾られた千菓子の入ったのが有りまして、それを二層買つて、一つを子供の手に握らせると、それで機嫌が直つて、私

「知らない。」
と言ひ放ちながら、急に家の方へ馳出して行つて了りました。
恐らく斯の兒の強情なところは私の血から傳はつたものでせう。しかし私は斯の兒ほど泣き易くはありませんでした。丁度、弟の方の子供がらゐる年頃のことでした。ある晩、私は母友達の問屋の子息と喧嘩して、遅くなつて家の方へ歸つて行きました。叱られるなどいふことを預けながら、果して、家の門を入つて田舎風な小障子のほまつた出入口のところまで行くと、私が問屋の子息を泣かせたことは早や家の方へ知れて居りました。やかましい問屋のお婆さんがそれを言附けに殺込んで来たといふことでした。で、私は懲らしめの爲に、そのまゝ庭に立たせられました。薄暗い庭から見ると、女關の方も裏口の方も皆な戸が閉つて、唯小障子の明いたところだけ燈火が射して居る。私

「あ、一本脚の人が被褥なところを歩いてら。」
と二本の杖に身を支へながら行く人の後姿を見つけて、それを私に指して見せました。
電車通りの向側には、よく玩具を買ひに行く店があります。子供はその店の方へ行くと、駄々をこねて開入れませんから、私も持参

「買つて、買つて……買つてばかり居るぢやないか。そんなに父さんは金銭がありやしないよ。」
漸くのこと、子供を言ひ隠して、それから橋の畔の方へ連れて行きました。そこに煙草と菓子とを賣る小さな店があります。小さな硝子張の箱に飾られた千菓子の入ったのが有りまして、それを二層買つて、一つを子供の手に握らせると、それで機嫌が直つて、私

「知らない。」
と言ひ放ちながら、急に家の方へ馳出して行つて了りました。
恐らく斯の兒の強情なところは私の血から傳はつたものでせう。しかし私は斯の兒ほど泣き易くはありませんでした。丁度、弟の方の子供がらゐる年頃のことでした。ある晩、私は母友達の問屋の子息と喧嘩して、遅くなつて家の方へ歸つて行きました。叱られるなどいふことを預けながら、果して、家の門を入つて田舎風な小障子のほまつた出入口のところまで行くと、私が問屋の子息を泣かせたことは早や家の方へ知れて居りました。やかましい問屋のお婆さんがそれを言附けに殺込んで来たといふことでした。で、私は懲らしめの爲に、そのまゝ庭に立たせられました。薄暗い庭から見ると、女關の方も裏口の方も皆な戸が閉つて、唯小障子の明いたところだけ燈火が射して居る。私

は夏梨の樹の下に獨りて震へながら、家のものが皆な煙に集つて食事するのを眺めました。目頃黙つて居る兄の顔などは、私の仕したことに就いて非常にも立てたやうに、恰に畏しく見えました。其晩に限つて、誰も救ひに來て呉れるものが有りません。斯の刑罰は心にも甘んじて受けなければ成らないやうなものでした。私は皆なの夕飯の終る頃まで、心細く立ち候いました。

斯ういふ時に、私の側へ來て言ひ有めたり、皆なに御説をして呉れたりしたのは、お牧といふ下婢です。目上の兄達が奥の方へ行つた後で、お牧は私の話を遠慮へ持つて來て勤めて呉れましたが、到頭其晩は食ひませんでした。

私の生れた家では、子供に一人づつ下婢を附けて養ふ習慣でして、多くは出入りのものから取りました。私に附いたお牧は榮結の家で、理髮店といふものは未だ私の故郷には無かつた頃です。お牧の父親が榮結の道具——あの引出の幾つも附いた、鬚剃油などのにほひのする、古い汚れた箱を提げてよく吾家へ出入したことや、それから彼の穢い髮結が背後に立つて父の腰などをこし／＼とやつた

ことは、未だに私の眼に書いて居ます。お牧の父親と言へば土地でも有名な穢い男でした。その如に養はれると言つて、よく私は他から調教されたものです。でも、お牧は乳を呑ませないといふばかりで、其他のことは殆んど乳母同様私を見て呉れました。

母や祖母などは別として、先づ私の幼い記憶に上つて來るのは斯の女です。私は斯の女の手を抱かれて、奈様な百姓の娘が歌ふやうな唄を歌つて聞かされたか、そんなことはよく覚えて居りません。お牧は料理飯といふものを造へて、庭にあつた廣い木の葉に鹽揚げを包んで、それを私に呉れたものです。あの氣の出るやうな、甘い、飯の味は何時までも忘れられません。昔いふ村の香氣も今だに私の鼻の先にあるやうな氣がします。お牧は又、紫藍の葉の漬けたのを、箱の皮に入れて呉れました。私はその三角に包んだ、箱の皮が梅色の色に染まるのを望みにして、よく吸ひました。

「姉さん、何か、姉さん何か。」
と言つて、私の子供は朝から晩まで娘達に菓子やねだつて居ります。どうかすると、兄と白い砂糖などを菓子子の代りに分けて買つて居

く大きな井戸について石段を降りますと、その下の方に暗い米蔵が有りまして、それに續いて松薪だの松葉の薪だのを積重ねた小屋が有りまして、太助は裏山の方から歸りて左様いふものを運んで來るものでした。その小屋の内で、一日薪を割る言をさせて居ることも有りまして。小屋に面して古い池が有りまして、欄の上の葡萄の葉は青く深んだ水に映つて居りました。石垣のところには雪下などがあの日ばたきするやうな白い小さな花を見せて居りました。そこは一方の裏木戸へ續いて、その外に葡萄が祭つてあります。栗の樹が立つて居ます。栗の花が枝から垂下る時分には、銀さんが他の大きな子供と一緒にあの枝から栗を捕つて來たものですが、それを踏み潰すと、鮮色の血が流れます。栗の身から、銀さん達は甘い餅の材料を取つて、魚を釣る道具に造りました。その原料を煎に浸して、小屋の前で細長い餅に引延して乾すところを、私はよく立って見て居りました。栗の餅が又、大きく口を開く頃に成りますと、毎朝私達は裏の方へ附いて行つたもので、そのして風に落された栗を拾はうとして、樹の下を深し廻つたものです。それを人の知らない中に

ます。それを見て、私は自分の幼少い時分に、黒砂糖の塊を舐めたことを思い出しました。私がお牧の背中に負さつて、暗い夜道を通り、寺の境内まで村を居を見に行つたことは、幼女の記憶から消せないもの一つです。顔見世の晩で、長い桶のついた湯桶に照らして見せる異様な人の顔、異様な髪、異様な衣裳、それを私はお牧の背の中から眺めました。初めて見た老居は、私の眼には唯だところ／＼光つて映つて來るやうなものでした。丁度、眞闇なところに動く不思議な人形でも見るやうに。

これほど親しいお牧では有りませんが、しかし彼女の切れた指の皮の裂けたやうな手を食事の時に見るほど、可厭はしいものも有りませんでした。お牧の指が茶碗の縁に觸ると、もう私は食へませんでした。子供の癖は、特に私には悪しかつたのです。お牧ばかりでは有りません。私の直ぐ上は銀さんといふ兄で、この銀さんが洗手盤を使つた後では、私は顔を洗へませんでした。銀さんは又、わざ／＼私を嫌がらせようとして、面白半分にも、私の顔を吐いて見せたりなどしたものでした。私の生れた家には太助といふ年をとつた家

集めて置いて、小屋の前で私に焼いて呉れたら、母屋の煙の方まで見せに持つて來て呉れたりしたのも太助でした。

何かにつけて私はイヂの汚ないやうなことがかり覚えて居ります。けれども、ずつと年をとつた人と同じやうに、少年の私にはそれが一番楽しい欲でした。斯様なことを私は最初の貴女に御話するからと言つて、それを不作法とも感じません。種々な幼少い記憶がそれにまつて浮び現つて來ることは、争へないのですから。序に、太助が小屋から里芋の子を母屋の方へ運んで行きますと、お牧がそれに蒸粉を混ぜて、煙の大鍋で煮て、あの煙の切れ／＼手で芋餅といふものに造つて呉れたことも書いて置きます。芋餅は、私の故郷では、寒い晩秋の朝の食物の一つです。私は冷たい大根おろしを附けて、食べたの熱い蒸粉を皆なと一緒に煙で食ふのが楽しみでした。口をふう／＼言はせて食つて居るうちに、その中から白い芋の子が出て居る時などは、殊に嬉しく思ひました。

昨日、一昨日はこの町にある神社の祭

で、近年にない賑ひでした。町々には由車、馬屋などが出られ、手古舞まで出るといふ噂のあつた程で、鼻の先の金色に光る獅子の後へは同じ模様の衣裳を着けた人達が幾十人となく随いて手に手に扇を動かして、初夏の日のあつた中を横つて通りました。それ獅子が来た、御輿が来たと言つて、子供等は提灯の下つた家の門を出たり入つたりしました。

「御祭で、どんなに嬉しいのか知れませんか——」と姉さん達は斯の子供等のことを言ひましたが、兄の方は肩に掛けた藤の鈴を鳴らして歸つて来て、後鉢巻などにして貰ひ、黄色い團扇を顔のところに差して、復た町の方へ飛び出して行くといふ風でした。提灯に蠟燭の火が映る頃から、二人とも足袋履にまで成つて、萬燈を振つて騒ぎ廻りました。

私も祭らしい目を送りました。町に響く太鼓、鼻がれて通る伏天王、屋敷の上の馬鹿囃、野蠻な感じのする舞——すべて、子供の世界の方へ私の心を連れて行くやうな物ばかりでした。

毎年のやうに私は出して著る物が二枚あります。母の手紙にしたもので、形見として残つ

て居るの最早それだけです。私は十五年の餘も大切に保存して居ります。それが又私の持つて居る書物の中で、一番着心地の好い書物なのです。短い箱の中に、私はそれを取出すのを楽しみにして居りますが、それを著る時は妙に安心して居られるやうな気がします。その中一枚はあまり見苦しく成つたと言はれて、今年からは袋衣にして著ることにしました。

私の母は斯うした手紙をよく丹精したものです。私が子供の時分に著た書物は、大抵母の綴つたものでした。私の生れた家は、其本陣と言つて、街筋にあつて、ずつと昔は大名などを泊めたので、玄關も廣く、その一段上に板の間がありました。そこから廣い障子部屋に抜いて居ました。その板の間の片隅に機が置かれてありました。私が表の方から古い大きな門を入つて玄關の庭に遊んで居りますと、母が障子の影に腰掛けて鉛々と杖の音をさせたものでした。

頬の紅い、左の眼の上に黒子のあつた母のことと言へば、白い髪を切つけて居た祖母のことも御話しなければ成りません。祖母は相應に名のある家から嫁いで来た人で、年はとつても未

といへば、山田出入の家の婆さんまで頼まれて来て、若葉をホイロに掛けて揉む時には男も一緒に手傳ひました。玄關前の庭の横手には古い椿の樹がありましたが、その實から油を絞りました。私は母や姉の織つた衣物を著、太助の造つた草履を穿いて、少年の時を返つたのです。

例のお牧に連れられて、映し繪を見に行つた晩のことでした。あの見世物師が来て、安達が原だの、鶴島の猫騷動などを映して見せ、それでいくらかの木戸銭を取りました。障子に映つた

鬼婆、振上げた出度丁、後ろ手にくし上げられた娘、それから老女に化けた怪しい荷の幻影などは、夢のやうな恐怖を誘ひました。家へ戻つて行つても、私は安心しませんでした。「祖母様、お前さまは眞實の祖世様かなし……一寸背後を向いて見させれ。」

「これ、何を馬鹿言ふぞや。」

母や姉は側で笑ひました。その頃から私は一人夜ひに渡はれて行くといふ恐怖なども感じて、祖母と二人きり寂しい隠居所の方へ行く時には、寢床の中に小さく成つて来たこともありました。お化より何より、一人夜ひが私

には一番恐ろしかった。それは夜風の鳴く日暮方にも通るもので、一度渡はれたら、両親の許へ歸つて来る事が出来ないうやうにも思はれました。

すこし見慣れないものが有ると、私は子供心に眼をとめて見ました。そして不思議な恐怖に襲はれることが有りました。太助がよく働いて居た木小屋の前を通り抜けて、一方の奥木戸の外へ出ますと、そこには稲荷が祭つてあり

ます。葉の尖つた椿、暗い杉、巴且杵などが其邊に茂つて居まして、木戸の横手にある石垣の隙には見上げるほど高い稲荷が立つて居ました。あの稲荷の出た幹の上の方に、ある日私は大きな黒い毛蟲の體を見つけた。田舎でよく育つた私の眼にも、その體ばかりは薄氣味の悪いほど大きかつた。そして毒々しい黒い翅を震はせて居ました。私は小石を拾つて投げつけようとしたが、恐しくなつて、そのまゝ母屋の方へ逃げて歸つたことが有りました。

斯の手紙を書きかけて置いて、私は兄弟の子供を連れながら河岸の方まで歩きに行つて来ました。柳神社の境内まで行くと、兄の方はおいと服を立て、家の方へ歸つて了りましたか

だシツカリして居りました。尤も私の覺えてからは最早すこし曲つて居りましたが、一帯、私は七人の姉弟のうちで、一番の末の弟で、私の直ぐ上が銀さん、それから上に二人姉があつたさうですが、斯の人達は幼少くて亡くなりなりましたさうです。その上に兄が二人あつて、一人は母の生家の方へ養子に養ひました。一番小長が姉です。姉は私がまだ極く幼少い時に嫁に行きましたから、殆んど吾家に居たことは覚えていません。長兄の結婚は漸く私が物心づく頃でした。親を迎へてから、禮遣は一番賑やかで、食事の度に集つて見ると可成り大きな家族でした。その頃から私は祖母に隨いて、毎晩隠居所の方へ泊りに行くやうに成りました。そこは井戸に近い二階建ての離れ家で、階下は物置やら味噌蔵やらに成つて居りました。暗いところに行くのですから、私は祖母と一緒に提灯つけて通りました。

私の家では、生活に要する物は大概は手造りにしました。野菜を貯へ、果實を貯へることなどは、殆んど年中行事のやうに成つて居りました。母は若い機を相手にして、木梨の汁などで練をよく染めました。茶も家で造りました。茶摘

ら、私は弟の方だけ連れて、河岸へ出ました。船宿などのごちやうど並んで居るところです。投網も乾してあります。そこで私は小船を借り一人の子供を乗せて水の上を滑り過つたこともあります。河岸へ行く度に、子供はそれを言出して、復た船に乗りたいたと強請りましたが、今日は止まして、一緒に柳並木の下を歩きました。

ふと私は十二三ばかりの獅子を冠つた男の兒が本町の方へ歸つて行くのに出逢ひました。「おい、そこんところで一つ通つて見て呉れな

いか。」

私は呼び留めまして、袂から二錢銅貨を二つ取出して渡しました。「御覽、角長御だよ。」と小聲で言つて聞かせますと、子供も石の機に倚死つて眠りました。人通りの少ない静かな柳のかげで、雪袴のやうなものを穿いた少年が柔らかな身體を種々に動かして見せた。兩足で首を挟む、逆に結婚返りする、自由自在にやりました。少年は細い瘦せた、曲線の爲に成長れないやうな身體をして居ました。「お鏡を持ちながら造るのかい。そこに置いた

れを紫の緋で束ねて、後の方へ垂れて居ました。上段の間を隔て、寛き間といふのも有つて、そこが兄の居間に成つて居りました。村の旦那衆はよくそこへ話に集りました。仲の間は明るい光線の射し込む部屋で、母や親が針仕事をひろげたところでした。障子を明けると、細長い坪庭を隔て、石川の下に叔母の家の板屋根などが見え、ずつと向うの方には遠い山々、展けた谷、見渡むやうな廣々とした平野までも窺ひました。丁度私の四合は高い山の麓で、一段づつ石垣を築いて、その上に村落を造つたやうな位置にあります。私の家はその中央にありました。叔母の家といふはお霜婆といふ女に貸してありましたが、心易く私にの家へ出入した人でした。そこから通つて来るには是非とも坂道の往來を上らなければなりませんでした。

お霜婆はてか／＼した禿を薄い髪で隠して居るやうな女でした。若い女中を一人使つて、女ばかりで暮して居りました。どうして斯様な人が叔母の家を借りて居たのか、皆私には解りませんが、兎に角村の旦那衆がよく集るところではありました。お霜婆は私を可愛

愛がうて呉れましたから、私も遊びに行き行きました。半ば自分の家のやうに心易く思つた位でした。旅の宿屋が唐人館などを吹いて通ると、必とそれを呼んで、棒の先にしやぶるやうにした水筒を私に買つて呉れたのも、弟の愛さ

ら可いぢやないか。私が見てるから大丈夫だ。と私が言ふと、少年はそれと左様だといふ顔で笑つて、手に一ぱい握り締めて居た刺貨を柳の根元のところに入れて置いた。一つ二つ刺貨を造りました。身體の中心を兩手だけで支へて、土の上を動き廻りなぞして見せました。斯ういふ少年に探がせて世渡りするらしい目に焼けた女がそこへ通りかゝりました。間もなく少年は掌の土を拂ひ、赤い布で頭の上の小さな髷子を包んで、その女の後を追ひました。「兄さんも来れば可いのに、お髷子が見られるのに。」

「お髷子が見たつて、左様言つてやりませう。」私は弟の手を引いて歸りました。家の門口まで行くと、兄の方が飛んで来て、髷子を見せたかつた不平を顔りに表しました。弟は又、身振手眞似をして兄を羨ましがらせました。「あ、好いなあ。」

「来れば可いぢやないか。」何故兄さんは一緒に行かなかつたの。お髷子が見られたのに。」「父さん、そのかはり蜜豆買つて——」

「さあ、お前達は二人とも龜だよ。父さんが兎に成るから。」

「父さんが兎？」と兄の子供は念を押すやうに私の顔を覗き込みました。

「あ、龜と兎と聞けくらべしよう。いゝかい、お前達は龜だから、そこいらを歩いて居なくちやいけない。」

お伽話の世界の方へ直に子供等は入つて行きました。二人とも龜にでも成つた氣で、揃つて手を振りながら部屋の内を歩き廻りました。

「龜さんはもう出掛けたか。どうせ晩まで掛るだらう……」

と私は子供等に聞えるやうに言つて、「こころで一寸、一眠りやるか……」

私が横に成つて、ぐうぐうと音をかく眞似をする、子供等は驚喜したやうに笑ひ乍ら、私の周囲を廻つて居りました。そのうちに、私は半ば身を起して、大欠伸したり、兩手を延ばしたりして、眠から覺めたやうに四角を見廻しました。

「や、これは寝過ぎた……」

と私が失策つたやうに言へば、子供等は眼を圓くして、急いで床の間の隅に隠れました。私

は龜の在所を尋ね顔に、わざ／＼驚愕の方へ行つて見たり、長火鉢の側を廻つたりしました。

「兎さん、こゝよ。」

と子供等が手を打つのを、私は聞えない振をして、幾通りか廻りながら漸くのことゝ龜の隠れて居るところへ行きました。其時、子供等は勝つたやうな聲を揚げて、喜び騒ぎました。

どうかすると私は斯様な事談をして、子供は相手に遊び戯れます。斯ういふ私を生んだ父を、嫌な人であつたかと言へば、それは嚴格で、父の膝などに乗せられたといふ覺えの無い位の人でした。父は家族のものに對して絶対の主權者で、私等に對しては又、熱心な教育者でした。私は父の書いた「三字經」を習ひ、村の學校へ通ふやうに成つてからは、「大學」や「論語」の素讀を父から受けました。あの後藤點の栗色の表紙の本を抱いて、おづ／＼と父の前に出たものです。

父の書院は表庭の隅に面して、古い枝ぶりの好い松の樹が直ぐ障子の外に見られるやうな部屋でした。赤い毛氈を掛けた机の上には何時でも父の好きな書籍が載せてありましたが、時には和算の道具などの置いてあるのを見かけたこ

とも有りません。父はよく肩が凝ると言ふ方でして、銀さんと私が叩かせられたものですが、肩一つ叩くにも只は叩かせませんでした。歴代の年號などを誦讀させました。終には銀さんも私も選りばかり居たものですから、金米糖を褒美に呉れるから叩けとか、按摩賃を五風づつ遣るから頼むとか言ひました。

「享保、元禄……」

私達は父の肩につかまつて、御経でもあげるやうに誦讀しました。

何ぞといふと父が私達に話して聞かせることは、人倫五常の道でした。私は子供心にも父を敬ひ、畏れました。しかし父の側に居るとは窮屈で堪りませんでした。それに父が持病の指でも起る時には、夜眠れなと言つて、紙を展げて、遅くまで獨りで物を書きました。その儀儀を持たせられるのが私でしたが、私は唯眠くて成りませんでした。

斯うした嚴格な父の書院を離れて、仲の間の方へ行きますと、そこには母や、姉が針仕事をひろげて居ります。私は武者繪の戲寫などして、勝手に時を送りました。母達の側には別に小机が置いてあつて、隣の家の娘がそこで

手習ひをしました。お文さんと言つて、私と同年で、父から讀書を受ける爲に毎日通つて来たのです。父を「お師匠様」と呼んだのは斯の娘ばかりでなく、村中の重立つた家の子はあらゆる父の弟子でした。中には隣村から通つて来るものも有りました。

私は今、町の湯から歸つて、斯の手紙のつゞきを貴女に書いて居ります。八歳ばかりに成る近所の女の娘が二人来て、軍艦や電車の形を餘念なく描いて居る私の子供の側で、「あねさま」などを出して遊んで居ります。そのさまを眺めると、私が隣の家の娘と遊んだのは丁度そんな幼少い年頃であつたことを思い出します。

お文さんの許は極く懇意で、私の家とは互に近く往來しました。風呂でも立つと言へば、互に提灯つけて通ふほどの間柄でした。相接した裏木戸傳ひに、隣の裏庭へ出ると、そこは暗い酒藏の前で、大きな造酒の樽の影には男達が出入して働いて居たものです。新酒の造られる頃、私は銀さんと一緒によく重箱を持つて、「ウムシ」を分けて貰ひに通ひました。この隣の「ウムシ」それから吾家で太助が送る焼米などは、私が少年の頃の好物でした。私は又お

文さんと一緒に、庭の美濃柿の熟したのを分けて分けて貰ひ、それに妻香煎を添へ、玄關のところに腰掛けて食ふのを樂みとしました。

貴女は「オバコ」といふ草などを採つて遊んだことが有りますか。お文さんはあの草の蠟燭に絲を通して、機を織る子供らしい眞直をしたものです。私が裏の葡萄園の巴旦杏の樹などに上つて居ると、お文さんはその下へ来てあの葉を探しに草葉の間を歩き廻りました。斑風が来て鋭い聲で鳴いた竹藪の横は、私達がよく遊び廻つた場所です。そこで樹の實を集めるばかりでなく、時には椋鳥の落して行つた青い斑の入つた羽を拾ひました。

私が祖母と二人で毎晩泊りに行く隣居所に對ひ合つて、土蔵がありました。暗い金物戸の閉つた石段の上は、母が器物を取出しに行つて、鏡前をがちゃ／＼言はせたところでした。私は母に連れられて、土蔵の二階に昇り、父の藏書を見たこともありませう。古い本棚が幾つも積み重ねてありませう。斯の土蔵の下には年をとつた柔らかな蛇が住んで居ました。太助などは「主」だと言つて、誰にも手を弄かせずに大事にして置きました。その「主」が頭を出して現

をして居る白壁の側、土蔵の前にある柿の樹の下あたりは、矢張り私達の遊び場所でした。甘い香のする柿の花が咲くから、青い葉の附いた空な實が落ちるまで、私達少年の心は何を見ても退屈しませんでした。

お牧は井戸から水を擔いで土蔵について石段を上つて来ます。斯の柿の樹のあるところから、更に石段を上つて母屋の勝手口へ行くまでが、彼女の水汲に通ふ路でした。その邊は薄木陣時代の屋敷跡といふことでしたが、私の覺えた頃は既に桑畑で、林檎や桐などが畠の間に植ゑてありませう。隣の石垣の上には高い壁が日に映つて見えませう。それがお文さんの家でした。

私達が子供の時分には、妙に暗い世界が横たはつて居りました。多勢村のものが寄集まつて一人の眼隠した男を取圍いて居る光景を一寸想像して見て下さい。激昂した衆人の新調の中、その男の手にした幣帛が大幣に震へて来ることを想像して見て下さい。其時は早やある狐の乗移つたといふ時で、非常に權威ありげな所、御古といふものを傳へます。どうかすると斯の狐の乗移つた人は遠い森を指

た。

私達が子供の時分には、妙に暗い世界が横たはつて居りました。多勢村のものが寄集まつて一人の眼隠した男を取圍いて居る光景を一寸想像して見て下さい。激昂した衆人の新調の中、その男の手にした幣帛が大幣に震へて来ることを想像して見て下さい。其時は早やある狐の乗移つたといふ時で、非常に權威ありげな所、御古といふものを傳へます。どうかすると斯の狐の乗移つた人は遠い森を指

して飛び走つて行くことも有りませんでした。私は又、村の小學校で、狐のついたといふ生徒の一人を日撃しました。その少年は顔色も變り手足を震はして居ました。

斯ういふ不思議なことが別に怪しまれずにあるやうな、迷信の深い寒氣の中で、私は子供の時を送つたのです。何等かの自然の現象で、一寸解釋のつきかねるやうなことは、知らない生物の世界の方へそれを押しつけておりました。山には狼の語が残り、高には狼や狐が囁はれ、暗くなれば夜鷹だの狐だの鳴響のするのが私の故郷でした。それほど私達の幼少時の生活は無限の世界と接近したものでした。蜂の蟻も多くありました。殊に地蜂と言つて、五層も六層も土の中に巣を造るのは、土地で賞美される食料の一つでした。兄達は蜂を捉へて来て、その皮を剥ぎ、逆さに蜂に差し、地蜂の親の餌を探しに來るのを待たせたものでした。蜂の肉に附けて置いた紙の片で、それを咬へて飛んで行く蜂の行方を眺めると、巢の在場所が知れました。小鳥の種々の豊富なことも故郷の山林の特色です。鶉や鶺鴒で捕れる鶺鴒の類はおびただしい数でした。雀などは小鳥

の部にも数へられないほどです。子供ですら梅の尻尾の毛で雀の羽を造ることを知つて居ました。

私は、同じ年頃の子供ばかりで遊ぶ時は、まだそれほど遠く行きませんでした。でも裏の田圃道に出て、高い榎木の上の方に小鳥の囀るのを聞くのは楽しみでした。田圃側には、スイコギの葉を垂れたのが有りました。それを採つて、鹽もつけずに食べました。村の小學校のあった小山の下のところには細い谷川が流れて居ます。そこへ私はお牧から借りた笠を持って行つて、魚をすくつたことも有ります。お文さんも隣まくり、裾からげで、子供らしい淡紅色の腰巻まで出して、石の間に隠れて居る魚を漁りました。何年かの間、私は斯の隣の家の娘と二人ざり隠れるやうな場所を探さうに成りました。私は、田圃の間に、ある林の樹の下を歩き、又は玄關から細長い扇風の小座敷を造り抜けて、上段の間の横手に坪庭の梨の見えるところへ行きました。すると極りで、若い娘が私達を探しに來ました。お牧、お稲妻、斯の手紙には私は主に少年の

眼に映じた婦人のことと貴女に書くつもりですから、その順序として、地味い隣の家の娘のことを御話するのです。有難い言へば、私は女といふものに初めて子供らしい情熱を感じました。私はお文さんを強く抱締めたこともありませう。斯の子供らしきは、娘所の他の家の娘にも起りました。私は三日ばかり置いた、情熱に苦められたことを覚えて居ます。尤もその娘のことは直と忘れて了ひましたが。

ある日、私はお文さんに誘はれて隣の家へ遊びに行きました。酒屋の香氣のする庭を通り抜けて、藪造りになつた二階の部屋へ上つて見ました。隣とはよく格差をしましたが、そんなに奥の方がまはれられて行つたのは私には初めてです。丁度そこへお文さんの兄さんの道さんがやつて來ました。道さんはお文さんや私より二ツ三ツ年長の少年で、村の小學校でも評定な好く出来る生徒でした。其日まで私は夢中でお文さんと遊んで居て、第三者といふものを知りませんでした。お文さんの部屋で、道さんと一緒に成つて見て、それが解つて來ました。私は唯道さんに見られたといふだけで、何となく少年らしい羞

恥を感じました。それより私はお文さんを離れて、今度は道さんだの、それから曲の男の兒と遊ぶやうに成りました。

お文さんは相變らず吾家へ手習に通ひました。しかし私が道さん達の仲間入をするやうに成つてからは、以前のやうに彼女と親しくしませんでした。御承知の通り、狭い田舎では大抵の家が遠い割類の形に成つて居ます。左様いふ家の一つに、丁度お文さんと同じ年ぐらゐな娘が有りました。惡戯好きな學校の朋輩は、その娘の名と私の名とを並べて書いて見たり、課業を終つて思ひ思ひに歸つて行く頃には、村の樹のあるお寺の坂の上あたりから、大きな聲で呼ばつたりしたものです。それを聞くといふは、
「費を喰へ。」
といふ風で、吾家を招して歸りました。それから九歳の秋に東京へ遊學に出掛けるまで、私の好きなことは山家の子供らしい荒くれた遊びでした。大抵に私は遠く行くやうに成つて、男の友達と一緒に深い澤の方まで虎社の窟などを折りに行き、「カルサン」といふ勞

働の終を著けた左助の後に隨いて、松蔭の切掛してある涼しい山林の中を歩き廻り、黙傍に「酸い葉」でも見つけると、それを生でむしやくく食ひました。太助とは、山の神の祠のあるところへ餅を供へにも行つたことが有ります。都會の子供などと遊び、玩具も左様自由に入りません。私は竹と半紙で「するめ紙着」を手造りにすることを覚えてました。それを村はづれの岡の上へ持つて行つて、他の子供と競争で掲げました。「シヨクノ」東京の言葉でいふネツキは、最も私の心を樂ませた遊びです。木は不自由しない村ですから、私は太助の釣座に、強さうな木の尖端を鋭く削つて貰ひました。どうかすると刺された田圃側には、多勢村の少年が群がって、斯のシヨクノを土の中に打込んで遊びました。私の父はやかましいので、斯ういふ遊びに勝つても、表から公然と稽ぎ込む譯に行きません。左様いふ時に、都合の好いのはお稲妻の家でした。

銀さんと私とがいきなり、上京と定まつた頃は、母の頼む程がいそがしうに成りました。母は私の爲にヨウイキの角帯を縫ひました。なにしろ私はまだ田舎の小學校で僅か學んだば

かりで、小さな服の袖に金糸刺を入れて呉れるからと言はれて、それを樂みに海學の日を待つほどの少年でした。

五

且那様はじめ、お子様がた御隠りもなき由、殊に此節は幼い二人を相手に驚しい目を送つて居らるゝとか。先頃子供の前へ持つて下すつた御地の青い林は斯のあたりの店頭にあるものと異なり樹から採ら取つたばかりのやうな新鮮を呼吸しました。御座で子供も次第に成身して参ります。前節の老爺上京の節も、孫達の顔を眺めて、隣に「て来て見ると大した遊ひだと申した位です。私がたはむれに、弟の方の子供を抱き上げて見て、更に兄の方を抱き上げながら大分重くなつたと申しましたら、兄の子供はさう嬉しうに首をすくめて笑ひました。「重くなつたと言はれるのが、そんなに嬉しいのや。」と側に居る娘も笑ひながら言ひました。毎日長い鎌草を持つて町の家へ來る時給を追ひ返して居た兄の子供も、復た復た夏休み前と同じやうに腕を肩に掛けて、學校へ通ふやうに

女伶久那神の馬

成りました。近所の毛筆屋の子で眼のぼつちりとした同級生が毎朝誘ひ合せては出掛けます。ある夕方、その子が遊びに来て門口から私の家を見ました。『斯とか電燈とかで明るい屋敷の中に、吾家ではまだ洋燈を用ひて居ます。』

八月の末から九月の初めにかけて毎年のやうに降る大雨が今年は一時にやつて来て、乾き切つた町々を濡らしました。隅田川も濁つて灰汁を流したやうに成りました。狭い町中とは言ひながら、早や秋の蟲が縁の下の方でしきりに鳴きます。冷々とした借屋の空気のうちでその鳴聲を聞きながら、毛筆屋の子に交はれた洋燈の下で、私は斯の手紙を書き續けます。

少年の私が銀さんと一緒に東京へ遊學することになり、成りました時は、銀さんが數へ年の十二、私が九つでした。まだ他に、お文さんの二番目の兄さんも眼の治療のために同行することに成りました。

その日も近づいた頃、銀さんは裏の梨の樹のまへて口の酸くなるほど言つて聞かせた教訓を一つ／＼文字に表はして書いたものでした。私はその全部を記憶しませんが、父がああ几帳面な書體で認めた短紙の中には、ありありと眼に浮んで来るものがあります。

『行ひは必ず篤敬。云々。』
兄に引連れられて、翌日私達三人の少年は故郷の山村を發ちました。坂になつた驛路の名残の兩側には、それぞれ屋敷のある親しい家が並んで居ます。私達は一軒々々田舎風な挨拶をするために立寄りしました。日頃洗濯や餅つきの手傳ひなどに來る婆さんとか、又は出入の百姓とかの人達までいづれも門に出、石垣の上立ちして、私達を見送つて呉れました。九月の日のあつた村はづれまで送つて來て呉れる人もありました。暗い杉の木立の側を通り、澤を越して行きますと字跡と言つて一部落を成したところがあります。その邊まで私達に附いて來て名残を信む人もありました。お牧の家のある峠を離れて、私達は感らしい山道に上りました。

下あたりには懸掛けて、兄貴に東京行の頭を刈つて貰ひました。村には理髮店といふものも無い時でしたから、兄貴が禿で、掛ける布も風呂敷か何かで間に合せて、銀さんの髪を短く剪りました。私の方はまだ一向な子供でしたから、髪も長く垂下げたまま、可からうと言はれました。私はソツと家を抜け、子供心にも別れを告げるつもりで、裏道づたひにお牧の家をさして歩いてまゐりました。私は人に見つからないやうにと、何の位苦心して竹藪の側や田圃中の細い道などを通つたか知れませんが、何故といふに、村で一番不潔な男を製に持つたそのお牧の手に養はれたといふことは、絶えず私から調戲はれる材料に成つて居ました。私に調戲はれると言ふよりは驚かされるやうな氣がして、その皮に堪へ難い侮辱を感じて居りました。で、隠れるやうにしてお牧の家まで歩きました。丁度お牧の父親も家に居る時で、例の油染みた髮精の道などが爐邊に置いてあつたかと覺えて居ます。お牧の家の人達は非常に喜びまして、私のために鍋で茶飯を煮いて呉れました。私が茄子が好きだからと言つて、皮のまま輪切にしたやつを味噌汁にして呉

も要るほど不便な時でした。それに大きな谷の底のやうな斯の山間を出て、馬車にでも乗れるといふ處まで行かうとするには、是非とも高い峠を二つだけは越さなければ成りませんでした。

『金米糖を呉れなかりや、歩けない。』
『呉れるから、歩け。』
私は兄と斯様な押問答をして、露後の石に懸掛けては休み／＼、復た出掛けました。そのうちに金米糖どころでは無くなつて來ました。私には歩けなく成りました。何となくお腹まで痛く成つて來ました。私は洋傘をそこへ投出して動かずに居たこともあり、すると兄が私の傍へ來て、私の帯へ手拭を結はへつけまし

れました。その貧しい爐邊で味つた粗末なおおつけは、私に取つて一生忘れられないものです。それから三十年あまりの今日まで、どうかして私は彼様いふ味噌汁を今一度飲みたいと思つて、幾度同じやうに造らせて見るか解りませんが、二度と彼の味を思出させるやうなものには遭遇ひません。

月田舎のことですから、私達が東京へ發つ前には毎晩のやうに親しい家々から客に呼ばれました。私は銀さんと一緒にお文さんの家へも呼ばれて行つて、鶏肉の汁で味をつけた押飯(お)の馳走に成りました。何かにつけて田舎風の養應を取替すといふことは、殊に私の村では昔から多い習慣のやうに成つて居ました。出發の前の朝、祖母は私達を爐邊に招きま

て、それで私を引き立てました。斯の骨の折れる山道を越して、漸のことど峠の下まで歩いて行きますと、澤深い温泉宿のやうな家々の灯が私の眼に嬉しく映りました。そこが中仙道の香掛であつたかと覺えて居ます。何處から馬車に乗つたかといふことも、はつきりとは記憶しません。唯、前の方へ突進する馬車と、時々馬丁の吹き鳴らす喇叭と馬を驅ます聲と、激しく衝突される私達の身體とがあるばかりでした。

狭い車の上で復た日が暮れました。暗い夜の道を後に残して、私達は乗りつけに乘つて行きました。斯の馬車の旅で私達は一人の女の客とも道連れに成りました。矢張り東京まで行く客で、故郷に残して置いて來た私の母などよりははずつと若い人でしたが、私達の村にでも居さうな、田舎風な婦人ではありましたが、旅の包の中から菓子を取出して、それを紙包にして私に呉れたりなどしました。終には私も斯の小母さんのやうな人に慣れて、その膝の上に抱かれました。そして馬車に揺られて眠く成つて來ると、そのまゝ寝て了つたこともありました。

「追判だ。追判だ。」

「追判だ。追判だ。」といふ聲を聞きつけて、急に私は眼を覺ました。馬車が何處を通るのか、音目それは私には解りませんでした。間に振る馬丁の烈しい鞭の音と、尋常ならぬ車の上の人達の様子とで、賊といふことだけは知れました。馬車が疾驅してその場所を通過した後で、氣の荒い馬丁は手綱をゆるめて、賊が馬の脚へ来て掛らうとしたとか、斯の邊の夜道は物騒だとか、確かに自分の一鞭は手合へがあつたとか、兄達に話しかけて笑ひました。復た馬車は暗黒の中を衝いて進みましたが、それが夜道へ響けて可恐しい音

をさせました。夜が明けてから、私は田舎町の中を乗つて通りました。高い竹垣の上で宙垂をする消防火の姿が馬車の上から見えました。そこは上州の松井町でした。鳥川を越した時の記憶は未だによく残つて居ます。私は馬車を降りまして、皆な歩いて渡りました。あの邊の廣調とした白い光つた空は、まだ私の眼にあります。客だけ下して置いて、河原から水の中へ引き入れた馬車の音を、まだ私は聞くことが出来るやうな氣がして居

ます。

斯の夜はすつかりで矢張り七日ほどかゝりました。私は馬車に乗つたまま、半分歩のやうに東京へ入りました。その馬車が着いたところは萬原橋でしたが、あの頃の廣小路のさまは殆んど尋ねることも出来ないほど變つて了ひました。今でも寄席や旅人宿は残つて居ます。あの並びに馬車の着くところが有りまして、その前の並木の陰で私は車から下りたかと思ひます。

六

落著く先は姉の家でした。長兄に引連れられて山の中へ出て来た私達兄弟の少年は、はじめて大きな都會の空気に觸れ、日頃故郷の方でよく噂の出る姉とも一緒に成ることが出来たのです。前にも御話しました通り、姉は私が覺えの無いほど極く幼少な時分に嫁入した人でした。田舎者が多勢で押掛けて来た姉の家は、銀座の裏側にあたる閑静な町の角にあつて、灰色な圓柱の並んだ、古風な煉瓦造りの一つでした。二階には四間ばかりの部屋がありました。その一室の硝子窓から町の裏側の屋根だの物干だの

の見えるところが、私達兄弟の勉強部屋によ

からうと言はれて、そこで私は祖母と一緒に新製した机を並べ、夜はその部屋で二人枕を並べて寝ました。田舎に居た頃とは違ひ、こゝでは茶の出る時間も午後と定つて居て、甥と一緒に茶うけの豆せんべいなどを買ひに行き、廣い爐でノンキに食事をしつづけたものが今度は姉の家の祖母さんや姉夫婦の側にかしこまつて、銀さんと御取調で食ふことに成りました。

「どうだ、是がオサシミだ。」と姉に言はれて、私は初めてオサシミといふものを口に入れて見たことを覚えて居ます。姉が馳走振りに取つて呉れた新鮮な魚肉よりも、故郷の方で食へ慣れた鹽辛い魚の方が私の口に適ひました。一年に一度づつ年取の晩の膳についた鹽梅の味などは私には忘れられないものでした。その頃の姉はまだ若く見える人で、物の言ひ方なども、はき／＼として居て、私の知らないことは深切に教へて呉れ、萬事につけて私をいたはつて呉れました。斯の愛情は少年の私には有難いものでした。私の故郷の習俗で、他の別荘を呼ぶには「わりや」と言ひ、自分のことは

奈様な目上の人の前でも、「おれ」でしたが、その時都會の少年のやうに言葉遣ひを習ひ、「君」とか「僕」とかいふ言葉も姉からをそはりました。

姉が私の爲に種々と注意して呉れたことは、次の一例を御話しただけで解らうと思ひます。子供の時分に私はよく鼻液が出ました。それを兩方の袖口で拭きましたから何時でも私の著物には鼻液が干乾び著いて光つて居りました。そればかりでなく、著物の胸のあたりをも汚したものです。姉はそれを見て取つて、私が食事の時に茶碗を胸に當てることは止せと言ひましたが、自然とついた癖は直さうと思つても容易に直りませんでした。何時の間にか私の茶碗は胸のところを當つて居ました。そこで姉は一計を案出しました。四角に切つた鐵葉の片に紙を著けまして、食事の度に私に掛けさせることにしたのです。

「御飯！」といふ聲を聞くと、私は客があるか無いかを第一に思ひました。姉の家の人達は兎も角、知らない客の前でアリキを自分の首に掛けるほどきまりの悪いことは有りませんでした。

全く、アリキの前垂には私も馴らせられませんでした。でもその御飯で、かちりと茶碗の音がする度に自分でも氣が著いて、著物を汚す癖は直つて行きました。

姉の夫といふは背の低い、立派な成金のあつた人でした。國から出て来て、一時は大藏省の官吏にも成りました。斯の人と兄とは極く親しい間柄で、私のことも眞身の弟のやうに見て呉れ、私のために数寄屋河岸にある小學校を選んで呉れました。斯の人は又、聲揚に應を擧げながら私を前に置いて「論語」の素讀を授けて呉れたり、閑暇な時には東京の町々だの公園だのを見せに連れて歩いて呉れました。私は未だに斯の人が當時流行つた臘虎の帽子を知つた紳士らしい風采を覚えて居ます。それから、親兵式の日に連れられて行つて、初めて櫛櫛といふものを買つて宛行はれたことなどを覚えて居ます。その頃の事を思い出すと海の見える座敷で海苔の香氣を嗅いだことが私の幼い記憶に浮び返つて来ます。なんでも其日は姉の家のものが皆な揃つて外出して、私はめづらしい處で一緒に食事をしたやうに思ひますが、それが品川邊の料理屋であつたか何處であつたか

の側でよく歌ひました。二階座敷で時折楽しい酒宴のあつたことも、

は、よく覚えて居ません。唯海苔の香氣の記憶だけ、しかも鼻の先へ匂つて来るやうに残つて居ます。そんな風にして私は諸方へ連れられて行きました。

姉夫婦の傍には私は一年あまりしか居りませんでした。しかしその間に受けた愛情は少年の私の心に深く刻み著けられました。それからすつと後になつて、姉の夫の身の上には種々な變化が起り、その行ひには烈しい非難を受けるやうな事もありました。さういふ中で、猶私が周圍の人のやうには姉の夫を考へて居なかつたといふは、全く斯の少年の時に受けた温かい親切の爲で、丁度、それが一點の燈火の如くに私の心の奥に燃えて居たからであります。

素朴な私の田舎の家と違ひ、姉の家にはまた別の空氣がありました。その祖母さんは名古屋風の趣味を持った人で、綺麗に片附けた下座敷へ琴を取出して時々なぐさみに掻鳴しました。甥は私よりは三つも下の少年でしたが、讀書の文句などを讀記して居て、斯の祖母さんの側でよく歌ひました。

見た時は、私のために心遣い始めた位で、
た。豊津の姉さんの早く、早くで、終には私は
青く成つて了りました。

七

私は極く早い頃から肺病な性質をあらはし
ました。娘さんは國に居る頃から私と違ひまし
て、木登りの窓から脚に大きな刺などが差さ
つても親達に見つかるとはそれを隠して居ると
いふ方でしたが、私は他の身體の移殖を想像
するにも堪へませんでした。東京へ修業に出
てから、二番目の兄に連れられて寄席など
へ遊びに行きますと、中人前あたりには妙に私
は心細く成つて来るのが癖でした。斯の兄は
其頃から度々上京しまして旅館に目を流りま
したから、私もよく銀座邊の寄席へは連れられ
て行きましたが、騒がしい樂屋の鳴物だの役者
の假白だのを聞いて居ると、何時でも私は堪へ
難いほどの不安な念に襲はれました。その度に、
私は兄一人を残して置いて、寄席から逃げて歸
り歸りました。それほど私は臆病でした。
一方から言へば私は八歳の昔に早や初恋を
感じたほどの少年で、そのことは既に貴女に御

話しましたが、その私が豊津の姉さんのやう
な家庭の空氣の中に置かれて、種々な大人の嫉
妬を見たり聞いたりしながら、しかも少年らし
い多くの誘惑から自分を護り得たといふのも、
一つは斯の臆病からだといふので思ひ當ること
が有りませう。

二番目の兄は豊津の姉さんの傍に長く私を
置くことを好みませんでした。そこで私は姉
や兄達の懇意な豊田さんの家の方へ引取られ
て、豊田さんの監督の下に勉強することに成つ
たのです。丁度それは私が十一の年の秋頃で
した。
貴女は十二といふ年頃をお母さんの側で奈
何な風に送つたでせうか。私は全く獨りで
お母さん、姉さんからも離れて、早くから他人
の中へ投げ出されたやうなものでした。それが
私に取つての修業といふものでした。私はい
かにせば、豊津の姉さんのやうな性急で氣むづ
かしい人を喜ばずであらうかと、そんなことに
心を砕きました。一口等閑にされた私は豊田
さんの方へ引移つて、思はぬ深切と温い心と
を見つけたのです。
豊田さんと言へば、私が東京に居ました時

分にはよく私も使に行きましたからその細
君や豊田さんには全く知らない顔でもありませ
んでした。姉の家から細い路次を曲つて行くと、
籠甲屋、時計屋などのある銀座の裏通りの町、
そこにある黒い十蔵屋の豊田さんの家、鐵格
子の嵌つた窓などは、私には既に親しいもので
した。私は豊田さんのことを小父さん、豊田さ
んのことをお婆さんと呼ぶやうに成りました。
細君は本来なら小母さんと呼ぶべきでしたが、
豊田さんとは大分年も違つて居ましたし、兄で
も姉でも斯の人ばかりは豊田の姉さんと言ひま
したから、私もそれに倣つて姉さんと呼びま
した。

例の社來に面した鐵格子の嵌つた窓——私
に取つては忘れることの出来ない朝に晩に行つ
た窓——その窓の下にある三疊ばかりの小部屋
に私は豊津さんの家から選んで行つた自分の
机を置きました。壁によせて、抽斗の附いた
本箱をも置きました。抽斗の中には上京の折
に父が餘別に書いて呉れた座右の銘などが入れ
てあります。稀には私は幾枚かある其短冊を
取出して見ます。「温良恭謙」と一行に書い
たのがあれば「勉強」とか「儉約」とかの文字を

いくつも書き並べたのもあります。私は器械
的に繰返して見て、寧ろ父の手紙を見ようといふ
だけに満足して、復た紙に包んで元の抽斗の中
へ藏つて置きました。國許の父からはよく便り
がありました。父は村の中の眺望の好い位置を
選んで小さな別荘を造つたとかで、母と共に新
築の家の方へ移つたことや、その建物から見え
る遠近の山々、谷、林のさまなどを書いて寄し
ました。其頃から漸く私も父へ宛て、手紙を
書くやうになりました。時には豊田の小父さん
がにこ／＼しながら私の机の側へ來まして、
「お父さんの許へ奈何な手紙を書いたか、お見
せ。そんなことを隠すもんぢや無い。」
と言ひますから私が學校の作文でも書くや
うに半紙に書きつけた手紙を出して見せませ
と、小父さんは笑つて、それを奥の方に居るお婆
さんや姉さんのところへ持つて行つて讀んで聞
かせたりなどしました。「むう、斯の手紙はな
かなか好く出來た。なんて小父さんは私を
した後で、此處に斯く書けとか、地處は彼様直
せとか言つて呉れました。道さん——ほら、お
文さんの直ぐ上の兄さん——からもめづらしく
便りがありました。私は窓の下にその幼友達

の手紙を展げて、何度も何度も繰返して讀みまし
た。二年暮り半分途中で都會に暮して來た私
の心は川合々々々した日のあつた故郷の田圃
側の方へ歸つて行きました。しばらく忘れて居
てめつたに平素思ひ出さないやうなことが、しか
も一部分だけ妙に私の頭の中に入つて來ま
した。例へば、お水がよく水汲みに行つた裏の
深い井戸の中へ、ある夏の日のこと兄が手製の
レモン水を贈つてしまして、細引に釣して冷し
たことが有りませう。私はそのレモン水の酸
を思ひ出しました。私は又、道さんだの門屋の子
息だのと一緒に遊び過つて村の裏河づたひの細
道、清水の橋、落雷のために裂けた高い杉の幹、
それから楽しい煙草の火に映るお父さんのお母
さんの艶々とした頬などを感じて居て居まし
た。道さんへ宛て、少年らしい返事を出しました。
その返事は道さんから父の方へ廻つたと見え
て、父が私の書いた手紙を批評して寄したこ
とが有りませう。

受取つた手紙を讀んで行くうちに、若い娘の
懐疑といふことになつて行きました。「行ひは
必ず篤實」などと餘別の短冊に書いて呉れる父
のことですから、其手紙も至極眞面目に、私に
も喜べといふ意味でした。しかし私は「あ、左
様か、姉さんに赤んぼが出來たのか」では済ませ
ませんでした。何故と言ふに、大人には左様い
ふ言葉は何でも無くても、少年の私は初めてそ
れを見つけたのですから。しかも父の手紙の中
に見つけたのですから、私は自分の身のまは
りに何れとも言つて見やうの無い世界のあること
を感じ始めました。
例の窓からは往來を隔て、時計屋の店頭が見
えます。白い障子の嵌つた窓を通して細々と時計
を磨いて居る亭主の容子が見えます。その窓の
下へは時計來て聲を掛ける學校の友達もありま
した。斯の少年は或は私より一つ上でしたが、
家が三十間隔で近くもあり、それに毎日同じ道
を取つて學校へ通ひましたから、自然と心易く
成りました。「六ちゃん、六ちゃん」と言つて學
校でも評判な元氣の好い生徒でした。六ちゃん
が横町を廻つて通ひに來る朝などは、私は
豊田のお婆さんに詰めて貰つた辨當を持つて、

一緒に運んで、須左衛門町の廣い通りへ出、丸
茂といふ紙店の前を通ぎ、(あの紙店では私達
はよく高書のおとりかへをして貰つたり黄ば
んだ紙や半紙を買つたりしました。それから数
寄屋河岸について赤煉瓦の學校へ通ひました。
どうかすると六ちゃんも二人で講堂の空箱を振
りくりながら歸つて来て、往來の真中へぶちま
けたことも有りました。

豊田の姉さんは性來多病で——多病な位
ですから、情けな性質の婦人だと他から言はれて
居ました——起きたり臥たりしてるといふ方で
したから、直接に私の面倒を見て呉れたのは主
にお婆さんでした。

「お婆さん、霜降が辛い。」
そんなことを言つて夜中に私が泣きますと、
お婆さんは臥床から身を起して、抱きかかると、
私の足を叩いて呉れました。

斯のお婆さんは私に、行儀といふものを見習
えなければ成らないと言つて、種々な細かい注
意を拂ふことを教へました。容の造り、髪は私
の役廻りでしたが、私はお婆さんに言ひ附けら
れた通り客の下駄を直し、茶などもよく運んで
行きました。

「江戸は火事早いよ。」
これがお婆さんの口癖でした。お婆さんに言
はせると、東京は生馬の眼でも抜かうといふ
位の敏捷な氣風のところだ、愚問々として居
ては駄目だ、第一都會の人は物の言ひ方からし
て、さう——よくそれを私に言つて聞かせたも
のでした。姉さんも笑ひながら、

「そりや、お前さん、東京の人の話は、何で通
るからね。ちよいとあの何を何して下さいな——
あの何ですか——それで、お前さん、話ももう
ちやんと解つて了ふんだからね。えらいよ。」
斯様な風に言つて聞かせました。地方から出
て来た斯の姉さんでもお婆さんでも、小父さん
を助けて、都會で自分等の運命を築き上げよう
とする健氣な人達でした。

めづらしく姉さんの氣分の好い日が續いて、
屋外へでも歩きに行かうといふ夕方などは、お
婆さんは非常に悦びました。その頃、足張町
の角のところに毎年のやうに八百屋の市が立
ちました。私は静かに歩いて行く姉さんやお
婆さんの後を隨いて、買物に集る諸方の内儀さ
んだの、市場の灯だの、積み重ねた野菜と野菜の
間だのを歩き廻るのを楽しみにしました。銀座の

縁日の喧嘩などには、よくまた小父さんに連れら
れて行つたものです。乞食の集つて居るやうな
海嘯いところから急に明るい群集の中へ出るこ
とは、妙に私の心を驚かせました。小父さんは
夜見世をひやかすのが好きで、私を連れては種
々な物のごちややく、並んだ露店の前を眺め眺め
歩きました。

斯の手紙を書きかけて居るうちに、私は今
一寸、で、姉の家や豊津さんの家を振返つて
見たいやうな心が起りました。といふのはあの
二軒の家に有るもので、豊田さんの家には無い
ものがあります。私の生れた家にも無いもので
す。私が姉の家に居る頃、あそこの祖母さんが
時々なぐさみに琴を鳴らしたことを貴女に聞話
しましたらう。小さな甥までが謡曲の一ふしぐ
らゐる前記して居ることを御話しましたらう。

鶯津さんの家が矢張りそれで、しめやかな小唄で
も口吟さんで見るとやうな聲が老人の部屋から時
時洩れて聞えました。左様いふ音響の空氣とい
ふものは豊田さんの家の方へ移つてからは、バ
ツツたり無くなりました。
何故私が斯様なことを御話するかといふに、
あの甥の一生を考へ、豊田さんの家に残つた人

達のことを思ひ、又今日までの私自身の生涯
を辿つて見るに、斯の家に附いた空は、何處ま
でも同じやうに流れて行つて居ますから、それ
は實に争はれないものだと思ひます。私の父
はあれでもいくらか讀書を吹いたといふことで
すが、私の兄弟で好い耳を持つて居るやうな
ものは一人も居りません。あの甥の造つた家庭
には、別に樂器を置かないまでも、何處かに音
樂の空氣の流れた好ましいところが有りました。
た。あの甥の一生がそれでした。私は自分自
身がもうすこし寛濶であつても好いと思ふこ
とは度々ですが、しかしそれを奈何することも
出来ません。私が今住む家は殆んど周囲を音
樂で取繞かれて居るやうなところにあります。
表へ出れば一申節の師匠、裏へ行けば常盤津の
家元、左様いふ町の中に住ひながら、未だに私
は自分の家へはらかな空氣を取入れることも
出来ずに居ります。

それから比べて見ますと、音響に趣味を有
つことは——私はその性質を身に近い女達に
も、自分の子供にも見つけることが出来るやう
に思ひます。私自身にも繪畫を好むことは天
性に近いやうな氣がします。少年の時代から、
いくらか進んだ普通教育を受けるまで、私は
最もそれを得意にしました。斯の傾向はずつと
早い頃からあらはれまして、豊田さんの家へ行
つて二年目に成る頃には、私は柔かい鉛筆と畫
學氣を携へ、各地の居留地の方までも鉛筆
畫を作りに出掛けたことがあります。豊田のお
婆さんは私が何をするかと思つて、ある日、
私の行く方へ一緒に歩いて來ました。私はお
婆さんを橋の畔に立たせて置いて、草地邊の景
色を寫しました。私は又、參謀本部の方までも
行つて、あの建物を寫した鉛筆畫を一枚取りま
した。それは粗末な不傳らしいもので有しまし
たが、兎も角も、御手本に據らないで、自分で見
たまふを畫にしようと思つたものでした。小
父さんに勧められて私は左様いふ小さな製作
の一つを國の方へ送りました。父から來た手紙
の中には、昔は繪畫を學ぶのが好からうと思
ふ。といふ意味のことを書いて寄したことも有
りました。

お婆さんや姉さんが私のために注意して呉
れたことは、娘さん、お兄さんの話まで届いたの
を見ても解ります。私達兄弟の少年は二人だ
け東京に残つて居てもめづつたに逢ふやうな機
會は有りませんでした。なにしろ娘さんは御店
ずまひの身で、宿人の時より外には豊田さんの
家へも來られませんでしたから、娘さんの著
物の洗濯でも出来た時には私の方から持つて
行きました。日本橋の本町です。風呂敷包を據
へながら、粗問屋の店頭まで行きますと、そこに
居る番頭が直ぐ私を見つけて、小僧にそれ
と知らせたものです。娘さん、前年の座敷を拂
ひながら、奥の蔵の方から出て來て、庭で荷造り
をする人達の間などを通りましてそれから私
の方へ來ました。私の口から言つては可笑しい
やうですが、娘さんも大きく成りました。それ
に髪などを短くしまして、すつかり御店風に成
りました。私達二人は店頭の橋手の日のあたつ
た土蔵のところに倚凭りながら、少年らしい簡
單な言葉を変換すのみでした。
私は勤奉公する娘さんから自分の自由な
身を羨み見られるのがつらいと思つたことも
有り、時にはいそがしさうな店頭の様子を眺め
て、空に話もせず別れて來ることが有りました。
左様いふ時には、私達は唯につこり顔を見
合せるに當りませんでした。娘さんも亦黙つて
私の手から洗濯物を受取つて、御店の方へ引

込んで行つて了りました。ある日、豊田さんの家では田舎からの文の客を迎へました。お霜葉がめづらしく訪ねて来たのでした。お霜葉は散々國の方の話をして、豊田のお婆さんや姉さんから私達兄弟のことも聞取りました。お霜葉で國への土産話が出来た、それを別れ際まで話さしました。他人の家で修業する身には、若い出入の女も客だと思ひましたから、私はお霜葉の下駄を揃へて置きました。

「まあ、彼の履物まで直して下すつたさうな」と言つて、お霜葉は私の方を見て、ほろりと涙を落しました。

若いお霜葉が歸つて行つた後で、お霜葉の話の中に、私が「俺が——」と言つたことは私の耳に残りました。私の故郷では、目上の者に對しても、女でも「俺」です。

斯の手紙の序に、私は田舎言葉のことをここに書きつけませう。一概に田舎言葉と言ひまされども、鄙びた言葉づかひが柔軟に偏り、東京言葉では言ひ表はせないうやうな微細な陰影までも言ひ表はせるのが有ります。

時を見て、袋戸欄の上へ身體を寝かし、足の方から段々高く持ち上げて見事に畳の上へ立つたと思ひましたら、そこに豊田の小父さんが笑ひながら立つて見て居て、ひどく私は赤面したことが有りました。

山家育ちの私は、時には小父さんから、叱られるやうな悪戯をもやりました。ある時私は手頃な小刀を得ました。國に居れば鉈や鎌で立木の枝を拂つたり皮を剥いたりしたやうに、私は唯譯もなくその小刀を試みたくて成りませんでした。で、入口の椅子の中に開める戸へ行つてそれを試みました。大きなフシ穴を一つ割り抜いて了つた頃に、小父さんが来て見て来れまして、

「貴様もつと柄巧な奴だと思つたら、存外馬鹿だな」と言つて叱られました。斯ういふ悪戯をした時でも、小父さんは常に寛大で、私に好く言つて聞かせるだけでした。私は斯の善良な主人から手荒い目などには一度も逢つたことが有りません。それだけ又た少年の心にも深く斯の小父さんを尊敬しました。

ある日、私は表の方から馳出して來まして、

私の故郷の方の言葉では大きいといふことを三段に形容することが出来ます。それから助詞などにも古い言葉が残つたのが有つて、面白く、細かく、しかも簡潔な働きをして居るの気がつくことが有ります。田舎言葉と言つても、粗野なばかりでは有りません。

八

私は奥の入口のみを貴女に御話して、まだ奥の方をお目に掛けませんでした。豊田さんの住居は二階の二階建の家屋から出来て居て、それが高い引窓から明りを取るやうにして板敷の廊下で結びつけてありました。中央の廊下から奥の二階へ通ふことも出来、臺所の方へ廻ることも出来ました。奥の下座敷が豊田の小父さんや姉さんやお婆さんの居間でした。客でもあると、小父さんは煙草盆を提げて土蔵造の内の部屋へ出掛けて來ます。その暗い部屋の外が玄關で、私の机が置いてあるのもそこなれば、私がよく行つた往來の見える窓もそこにあります。

格子を開けて上らうとする拍子に上り欄に激しく躓きました。私の身體は飛んで玄關に轉げました。

「馬鹿め、上から下へ轉がり落ちるつてことは有るが、下から上へ轉がり落ちる奴が有るか」といふ。

斯う言つて小父さんは笑ふやうな人でした。斯の小父さんは細工が好きで、銀座の夜店から鉈、鉈の類を買つて來まして閑暇な時には種々な物を手造りにしました。大工の用ひるやうな道具箱までも具へて有りました。小父さんの器用なことは天性で、左様な道具を使つて餘念もなく箱を組立てたり板を削つたりする間がまた小父さんの一番楽しみな心の落ち著く時のやうに見えました。私は小父さんから厚い木の片で「コンパス」の人物を造つて貰つたことも有ります。

奥座敷の縁先にはタ、キの池が有りました。そこには澤山金魚が飼つて有りまして、姉さんも氣分の好い時にはその縁先に出て、長い優美な尻尾を引ながら、青い藻の中に見え隠れする魚のさまなどを眺めては病を患へたものでした。小父さんは好く身體の動人でしたか

た。斯様な風に、私の勉強する部屋はいくらか奥の方と離れて居ましたから、そこで私は種々な少年らしい遊戯を考へ出しました。私は國に居てよく木登りをしたやうに、その土蔵造の部屋へ入口へ兩脚を突張りまして、それを左右の手で支へて、次第に高く登つて行くことを企てました。手を放せば、トンと私は入口の階段の上へ飛び降りることが出来たのです。朝に晩に大人に見つからないやうにばじではよく登りましたが、ある時私の手が滑つて堅い階段のところでひどく脊骨を打つたことがありました。しばらくの間私は身動きすることも出来ませんでした。これに懲りて次第にその遊戯も止めるやうに成つて行きました。

もつと危い遊戯を考へ出したこともありませう。それは土蔵の二階へ昇る梯子が二段に成つて居た爲に、私は下から逆さに昇つて行くことを企てたのです。これは梯子が足を掛け易く出来て居たからでもありました。しかし斯の危い戯れよりも安全で、もつと少年の私の心を喜ばせたのは、低い梯子から高い梯子へ昇らうとする中途の袋戸欄の上から、逆さにでんぐり返しを打つことでした。ある日も人の居ない

ら、その池に臭い泥でも溜ると、一番先きに立つて水を替へたり掃除をしたりしました。左様いふ時には私も小父さんの手傳ひで手桶に半分ばかり入れた水を裏の井戸から池の方へ運ぶことが出来るやうに成りました。

家の裏は丁度銀座通の裏側にあたる路次でした。もし私が父に勤められて當家にでも成つて居たら、彼様いふ路次を畫いたらうと思ふほどゴチャ／＼した面白味のあるところでした。家々の下障が水汲みに集るのもそこでしたし、番頭や職人などが朝晩に通ふのもそこでしたし、豊田さんの家の裏には小屋なども造りつけて有りました。時々薪を燃る臭いするものもそこでした。まるで私は小鳥かなんどのやうに、唯譯もなくその間を歩き廻りました。時には路次の奥の方までも入つて行つて、活版屋の裏に堆高く積重ねてある屑の中から細い活字を拾ふのを楽しみました。丁度私が國に居た頃、板の賣り拾ひに行つて其下に落ちて居た欄鳥の羽を見つけたやうに。

話はいろ／＼に飛びますが、こゝで私は子供と著物のことをすこし書きつけたいと思ひます。少年時代の神懸賞は妙に著物などにも表は

れると思ひます。私はどつちかと言へば、頭著しな方だ、著ると言はれる物を著て學校へ通ひました。羽織や袴がすこしぐらゐ汚れても著られた物でさへあれば満足しました。豊田のお婆さんは私の學校の方の成績を褒めまして、ある時私のために黒ずんだ黄八丈の羽織を仕立て直して呉れました。それは國の方に居る母が手織にした物でした。私が持つて居る羽織では上等の物でした。ところが黄八丈などを著て學校の式に出る女達は一人も居ません。私はそれを思ふと、何となく人に嘲罵はれさうな気がして、氣落ちかしくて堪りませんでした。お婆さんはわざ／＼式に間に合はせる積りで夜更までして仕立て直して呉れたのですが、到頭私は強情を言ひ張つて、その羽織を著るだけ許して貰つたことが有りました。

父が私に逢ふのを樂みにして上京しましたことは、私に取つて忘れ難いことの一つです。何故かと言ひますに、それぎり私は父には逢ひませんから。

豊田さんの家の奥の二階は廣い静かな座敷で、そこに父は旅の毛布やら荷物やらを解き、暫時逗留しました。豊田のお婆さんの亡くなつ

た連合だの、親戚にあたる年若い漢學者だの、其他豊田さんの身のまはりの人で父の懇意な人は深山ありまして、國に居る頃は父もまだ昔風に髪を束ねまして、それを帯の紐で結んで、後の方へ垂れて居るやうな人でしたが、その裏で名古屋へ来て始めて股襷に成つた話などを私にして聞かせました。私は心の中で、お父さんも大分開けて来たと思ひました。

「あれは被褥と、これは斯様と——」

そんなことを父はよく細語のやうに言つて、自分の考へを認めようとするのが癖でした。

奥の二階からは廣い物乾場を通して町家の屋根、窓などが見られます。父は旅の包の中から桐の箱に入つた鏡を出しましたから、

「お父さん、男が鏡を見るんですか。」

と私が尋ねますと、父は微笑んで、鏡といふものは男にも大切だ、殊に斯うして旅にでも来た時は、自分の容姿を正しくしなければ成らないと私に話しました。

父は随分奇行に富んだ人で、到るところに逸話を残しましたが、しかし子としての私の眼には面白いといふよりも氣の毒で、異常なといふよりも突飛に映りました。斯の上京で私

はそれを感じたのでした。私の學校友達の六ちゃんの家へも父が訪ねて行かうと言ひますから、私は一方には嬉しく思ひながら、一方には復た下手なことをして呉れなければ可いかと唯復た下駄を履いて、三十間堀の友達の家へ案内して行きました。六ちゃんの家ではお婆さんが後家さんで六ちゃん達を育て、居ました。訪ねて行くと、先方でも大層喜んで呉れましたが、別れ際に父は六ちゃんのお母さんからお盆を借りまして、土庫がはりに持つて行つた大きな蜜柑をその上に載せました。やがてつか／＼と立つて、その蜜柑を佛壇へ備へたといふものです。斯ういふ父の行ひが少年の私には唯奇異に思はれました。私は父の精神の美しいとか正直なとか考へる餘裕はありませんでした。何でも早く六ちゃんの家を辭して豊田さんの方へ父を連れて歸りたいと思ひました。

父は私の通ふ學校を見たいと言ひますから、數寄屋河岸の方へ案内しまして赤煉瓦の建物を見せました。河岸に石の轉がつたのが有りまして、子供達の遊ぶ路に斯ういふ石は危いと言つて、父はそれを往來の片岡に寄せたり、お堀の中へ捨てたりするやうな人でした。

父が逗留の間に新尾州公の邸をも訪ねました。その時、私は父に伴はれて、以前の尾張の御様といふ人の前に出ました。父は私が學校で作つた繪畫の裏に私の名前など書いたものを尾州公の前に差出しました。私は廣い御座敷に身を置いて燈火の影で大人の話を聞かされたのと、歸りに御墓子を頂いて来たのとその他に今記憶して居ることも有りません。父は又淺草邊の鹿の子といふ飲食店へも私を連れて行つて、その主人や内儀さんに私を引合せました。

「斯様なお子さんがお有りなさるの。」と内儀さんは愛想よく言つて、父と私の顔を見比べました。私は内儀さんばかりでなく多勢の女中からジロジロ顔へ来て顔を見られるのが厭でした。鹿の子の主人は地方人で、父とは懇意な人でした。

その時の私の心では、私は矢張郷里の山村の方に父を置いて考へたいと思ひました。私は一日も早く父が東京を引揚げて、あの年中憎火の燃えて居る爐邊の方へ歸つて行つて、お祖母さんやお母さんや、兄夫婦や、それから太助などと一緒に居て貰ひたいと思ひました。久し

振の上京で、父は東京にある舊い知人を訪ねたり、亡くなつた人の御墓参をしたりしまして、間もなく郷里の方へ戻つて行きました。後で國から出て来た人の話には、餘程私が嬉しがるかと思つて上京したのに、子供には失望したと言つて、父が郷里へ戻つてから嘆息して他に話したと云ふ。斯の手紙で私が今貴女に御話して居るのは、銀座の大倉組の角に點いた白い強い電燈の光が東京の人の眼に珍しく映つた頃のことです。日新聞の角にあつた日新聞社の前に花丸の點く電燈などに、私は豊田さんの家の人達に隨いて、明るい夜の銀座通を歩きに行きましたものです。

九

豊田さんの家で可愛らしい赤兒の生れるまで、私は土蔵の中の部屋でお婆さんの側に寝かされましたが、赤兒が生れてからはお婆さんの代りに下婢が土蔵の方へ来て寝ることに成りました。とても子供があるまいと言はれて居た豊田のお母さんは男の兒が生れたので、急に家の内の光景が變つて暖かになつて来ました。それにして下婢と同じ部屋に私を寝かして可からうか、と注意深いお婆さんがそれを言ふと、

「お婆さん——あんな子供が有りませんか。」と小父さんが笑ひました。

私は奥の部屋の中庭にあたりながら、眼たい耳に斯の話を聞いて居ました。小父さんの言ふ通り、私はまだ子供でした。でもお婆さん達の話に分らないほどの子供では有りませんでした。

こゝまで書きつけて来ますと、豊田さんの家へ奉公して居た種々な下婢が私の眼に浮びます。あるものは目見えに來たかと思ふと直に暇を取つて行つたのもありましたし、あるものは又随分長いこと好く勤めたのもありました。左様いふ下婢と私との隔りは最早お婆さんと私との隔りでは無くなつて來ました。私には無智な被褥の言ふことや爲ることが分つて來ました。私が玄關の小屋屋に机を控へて勉強して居りますと、彼等の一人が主人の子供を抱いて來て、窓の外を見せながらよく當時の流行唄を歌ひました。そんな唄を歌つて居ることが奥へ知れやうものなら、直に御目玉を頂戴するほど豊田さんの家では嚴しかつたものだから、それを主人に聞えないやうに、窓のところへ來て

は歌ひましたのです。

私は誘惑され易い年頃になりました。もし私に性来の臆病と、一種の自尊心とが無かつたら、早く私は少年らしい好奇心の捕虜と成つたかも知れません。で、私は下婢が傍へ来て来たしきりに歌ふみだらな流行歌などに耳を傾けて、氣は浮々とさせることを感じながら、一方には左様いふ女と縁に口も利かないほど彼等を憎み蔑視するやうな心を持つて居ました。

私がよく行く窓の外には種々雑多のものが通りました。一匹流行つたパン屋が太鼓を叩いて来ますと、奥の方に居る小母さん達までその音を聞きつけて、往來の見える窓側の櫺の格子から眺めました。

「パン屋のパン、

木村屋のパン」

風變りなパン屋夫婦の洋装、太鼓や三味線の音などは人の氣を浮き立たせました。あるパン屋はもと相應な官吏であつたとか、細君はそれ者の果だとか、どうして夫婦ともナカノの洒落者だとか、小母さん達は空欄で互の眼前を通る藝人の噂をしました。町々の子供等ばかりでなく、大人まで争つて呼びとめては買つたは感激の涙を流すやうに成りました。

斯ういふ物に感じ易い私の少年時代が一方では極く無作法な驚くれた時でも有りませんでした。姉がまだ東京に居ました頃、あの家の二階の袋戸欄の前へ幼い甥を呼びつけて、その戸欄の中に入れて置いた燧銃頭が何日の間にか失くしたことを責めたことが有りました。私はそれを見て、心の中で甥の行ひを笑つたり憐れんだりしました。どうでせう、その私が豊田さんの家へ来てからは甥を笑へなく成りました。私は白状します、どうかすると私はお腹が空いて空いて堪らないことが有りました。さういふ時には我知らず甥と同じ行ひに出て、煮付けた唐辛の葉などはよく噛みました。私は又、自分の空腹を満たす爲でも何でもないのに、酒屋へ使に行つた歸りなどには往來で酔の醜を傾けて、人知れずそれを紙めて見たりしました。

注意深い豊田のお婆さんでも左様々々氣が附きません。私はそれを好い事にして、ある日、酒屋から酒を買つて戻りました。煮物にで

ものでした。それパン屋が来たと言へば、窓の外に狭い社來は人だかりがして、何となく私の幼い心をそそりました。

豊田さんの家である年の節句か何かの折に草餅を造つたことをも、私はこゝに書きつけて置きたいと思ひます。何故といふに、田舎に居る身内のものから遠く離れた私には、左様いふ草餅の香氣などを嗅ぐほど可憐しい思をさせるものが有りませんでしたから。尤も草餅と言つても、蓬のたりない都では田舎で食べるほど青いシヨク／＼としたのは出来ません。これでもつと草が多く入つて居て、餅の合せ目から田舎風のアンコが這出したら。そんなことを思ひました。

「お婆さん、僕の田舎では其様な風にしません。」
「お婆さん、僕のお婆さんやお婆さんやお婆さんが下婢を相手にしてその草餅を造る、私は出来たのを重箱に入れて買つて近所へ配りに行きました。見ると、お婆さん達は扱ねた餅を手頃にちぎつては、それを掌で薄べたく圓く延ばして居りますから、

「高い酒屋だねぇ。」
とお婆さんに言はれた時は、思はず私は打く成りました。

午後三時は毎日私の塾かした時でした。物のキマリの好い豊田さんの家では、三時といふと必と煎餅なり焼芋なりが出ました。あのウマさうに氣の出るやつを輪切にした水芋か、黄魚くぼこ／＼とした栗芋かによつかる時には殊に嬉しく思ひました。夏にでも成ると、土蔵の扉間から涼しい風の來るところへ御飯を待出して、その上から竹の簾を掛けて置いても、まだそれでも暑さに蒸されて御飯の臭氣が御飯に移ることがあります。儉約なお婆さんは、それを押飯に丹精して、醬油で味を附けて置いて、熱い火で焼いたのを茶の時にしました。いかに三時が待遠しくても、終にはその押飯の微かな臭氣が私の鼻に付いて了ひました。折角丹精して造ることを思ふと、お婆さんの氣を悪くさせたくない。私の癖として、人が悪い氣をするのを見ては居られません。そこで私は押飯

が造つて居たのを思出して、母は小皿にちぎつた餅を宛行つてその上で伸ばすといふ話をしました。

お婆さんは成程とは思つたやうでしたが、え、斯の子は——にんとにペンカワなことを言ふ子だ。」
と叱るやうに言つて見ました。「ペンカワ」とは矢張私達の田舎で使ふ言葉で、まあ生意氣と言つたら近いかも知れませんが、すつかり意味の御飯まる東京言葉は一寸思ひ置りませぬ。

私の學費は毎月極めて郷里から送つて寄して呉れるといふ風には成つて居ませんでした。これには私は多小の不安を感じて居ました。すると、ある時のこと長兄の許から手紙が来て、金は纏めて豊田の小父さんの方へ送つたから買ひたい物があらば買へ、苦しい中でも貴様達は東京へ出してあるのだから、その積りで勉強せよ、と言つて寄りました。態度私はその手紙を繰返し讀んで見て、兄の言葉に圓まされたか知れません。丁度、故中村正直氏の書いたナポレオンの小傳が私の手に入りしました。傳記らしい傳記で私が初めて讀んだのは恐らくその小

の造り場に窮つて、玄關の小部屋の下へそつと藏つて置くことにしました。土蔵造で床も高く出来て居ましたから。斯の人の知らない倉庫を暮の壁掛には開けなければ成りませんでした。その時は實にはらく／＼しました。

私の生れた家では子供に金銭は持たせない習俗でした。それが前に成つて、私は東京へ出て來てからも自分で金銭を所有したことは少く、餘分なものは家の人に預けました。時とすると豊田さんへ來る客から土産がはりとして包んだ金銭を買つたことも有りましたが、それよりか珍らしい風景の彩色した版畫でも買つた時の方が私には有難かつたのです。私は子供の時分から金銭に對しては淡泊な方でした。で、私は唐辛の葉の煮たのなどは摘んでも、他の所有する金銭を欲しいといふ心は起りませんでした。ところがそれが、全く私に無いとは言へません。有りません。私は別に何を買ひたいでは無し、それで居ながら不圖さういふ心に成つたのです。その一時の出来心で私の爲たことは、知られずに濟んだとは言へ、今だに私は冷汗が流れるやうな心地が残つて居ます。

田して書きつけて見たことも有りませんでした。小母の裏原はもう其時分から散いて有つた。すこし小母が気分が好い時には、池の金魚の見えるところへ人を集めて、荷を思ひやる爲に花札を引いた。其時自分は雨だの日の出だのを重いてある札を持つて見て、「青たん」とか、「三光」とかいふことを始めて習つた。よく裏原の方では、小母の爲に牛肉のソツプを製へた。儉約なお婆さんはそのソツプ流へ味を附けて自分等にも食はせたが、終にはそのにほひが鼻へ著いて、誰も食ふ氣に成れなかつた。仕方が無いから、お婆さんはそれを乾して三時の茶といふと出した。そのソツプを製へる爲に生の牛肉を細かく塞の目に切つて、口の長い大きな徳利へ入れる。是がまた一役で、氣の長いものでなければ動まらなかつた。丁度奥の二階には、小父の親戚に當る年老いた漢學者が親子連で来て世話を成つて居て、精白牛肉の切り役は斯の濃厚な白髪のお婆さんに廻つた。老先生が眼鏡を掛けて、階下で牛肉を切つて居る間は、奥の二階は閑寂として居る。そこには先生の書箱が置並べてある。机の上には先生の置き忘れた金銭がある。その金銭を十銭許り盗んだものがある——この

なかつたまでです。そこで私は小父さんに言ひ出しかねて、尾張町邊の夜見世の前へ誘はるるまゝに隨いて行きました。「どうだ、是は貴様丁度好からう」と小父さんは店先で探ひまして、私の頭合ふか何かと冠せて見ました。私は肉々買つて買ひたくなないのですから、これはすこし大きい、いやこれは堅過ぎるの、種々なことを並べて、到頭強情を言ひ返して了りました。「貴様に帽子を買つて置くことは悪く、人の好い小父さんが何日に無い調子で言ひました、それほど少年時代の好き嫌ひは大人の心に適じかねる、名のつけやうの無いものかとも思ひます。」

斯の手紙を書きつけける前に、年老いた姉を見舞ふため、雪深い道里の方まで一寸行つて来ました。姉のことは既に貴女に御話しました。あの昔かつた姉が今年に最早五十八歳です。七人あつた姉弟のうち姉は一番の年長者、私はまた一番末の弟にあたります。

盗みをしたものが自分だ。金銭を置き忘れる位のお婆さんのことですか、斯の私の行ひも別段不慮されずに終つたのでせう。懶惰の情はずつと彼に成つてその年老いた漢學者の死する頃までも續いて居ました。私が老先生の靈前へと思つて、香奠を封じた手紙を書いた時にも、活々と胸に浮んだはそのことでした。假令金銭は儲かでも、私には全く左様いふ心を起したことが無いとは言へないのですから。

金銭はあまり欲しいとは思はなかつたが、品物は欲しいと思つた。私は斯ういふ言ひ廻しをして自分の少年時代に爲たことを精解しようと思ひません。取りましたから取りました。どういふものか、ふいとそんな量見に成りました。それが私の幼い日の中で消すことの出来な記憶の一つとして残つて居るのです。それから同じ物語の續きとして、もう一つ私に書きにくいことを書きました。「尾張町の夜店には野菜の市があつて、家の人が買ひに出掛けたものだ。自分もよく隨いて行つた。そこには少年の眼を引き易いやうな繪本を賣ふ店もある。美しい表紙畫の草雙紙が数

多そこには並べてある。何がなしにその草雙紙が欲しく成つて、何處も其前を往つたり来たたりして、終に泥塵に粉れて一冊懐中に入れた少年がある——斯の少年が、自分だ。其時自分は捕まりさうにして、命がけで逃げた。草雙紙は置場所に因つて、溝の中へ投げて捨てた。もし彼の時抽つたら、自分の生涯は奈何な風に成つて行つたらう……」

千曲川のスケッチ

はしごき

敬愛する 吉村さん——樹さん——私は今序にかへて君に宛てた一文を斯の書のはじめに記すにつけても、先般呼び置れたやうに君の親しい名を呼びたい。私は多年心掛けて君に親しいと思つて居たその山上生活の記念を深く今記めることが出来た。

樹さん、君と私の縁故も久しい。私は君の生れない前から君の家にまだ少年の身を託して、君が生れてからは幼い時の君を抱き、君をわが背に乗せて歩いた。君が日本橋久松町の小学校へ通はれる頃は、私は自金の明治学院へ通つた。君と私は洋人と兄弟のやうにして成長して来た。私が木曾の姉の家に一夏を遊んだ時には君をも伴つた。その時がたしか君に取つての初旅であつたと覺えて居る。私は信州の小諸で家を持つやうに成つてから、二夏

ほどあの山の上で妻と共に君を迎へた。その時の君は早や中學を卒へようとするほどの立派な青年であつた。君は一夏はお父さんを伴つて来られ、一夏は君獨りで来られた。斯の書の中にある小諸城址の附近、中瀬温泉、津間一帯の傾斜の地などは君の記憶にも親しいものがあらうと思ふ。私は序のかはりとしてこれを君に宛てるばかりでなく、斯の書の全部を君に宛てて書いた。山の上に住んだ時の私からまだ中學の制服を着けて居た頃の君へ。これが私には一番自然なことで、又あの當時の生活の一番好い記念に成るやうな心地がする。

『もつと自分を新鮮に、そして解系にすることは出来ないか。』

これは私が都會の空気のなかから脱け出し、あの山國へ行った時の心であつた。私は信州の百姓の中へ行つて種々なことを學んだ。田舎教師としての私は小諸義塾で町の商

人や舊十族やそれから百姓の子弟を教へるのが勤めであつたけれども、一方から言へば私は學校の小使からも生徒の父兄からも學んだ。到頭七年の長い月日をおの山の上で送つた。私の心は詩から小説の形式を採らばやうに成つた。斯の書の主なる土臺と成つたものは三四年間はかり地方に黙して居た時の印象である。

樹さん、君のお父さんも最早居ない人だし、私の妻も居ない。私が山から下りて来てから今日までの月日は君や私の生活のさまを變へた。しかし七年間の小諸生活は私に取つて一生忘れることの出来ないものだ。今でも私は千曲川の川上から川下までを生々と眼の前に見ることが出来る。あの淺間の麓の岩石の多い傾斜のところを置くやうな気がする。あの土の上にほひを喚ぐやうな気がする。私がつぎつぎに公けにしたものをよく讀んで居て呉れる。君は何程私があのお山の上から深い感化を受けたかを知らるゝであらうと思ふ。斯のスケッチの中で知友神津猛君が住む山村の附近を君に紹介しなかつたのは遺憾である。私はこれまで特に若い讀者のために書いたことも無かつたが、斯の書はいくらかそんな積りで書いた。故

ちやした中で、子供は昔な家になりました。

とは古い歌などを引合に出して、時忘れることの出来ないといふやうな情緒の溢れた言葉が書き送られてあつたこと、それからそれへと幼い日のことを追つて見ると書くべきことは多くありますが、こゝで筆を止めます。

私は母やお牧に抱かれた頃から始めて、婦人の手を離れるとは言へないまでも、すくなくも自立の出来る頃まで斯の手紙を持つて行きたいと思ひました。婦人に對する少年らしい一種の無心——左様いふ時が一度私には来ました。私は側目もふらずに、鏡々と自分の道を歩き始めた時がありました。そこまで御話しなければ、斯の手紙を書き始めた最初の目的は達したとも言へません。しかし今はそれをする時がありません。

私は遠い旅を思ひ立つて、長く住み慣れた家を離れようとして居ます。私が御地を去つて東京へ引移らうとした時、貴女のお母さんの家へ小さな記念の桐箱を残して来たことが、丁度胸に浮びます。貴女の御存じない子供は三人も斯の家で生れ、貴女の次女であつた妻もこゝで亡くなりました。今夜は斯の家で送る最後の晩です。旅の荷物やら引越の支度やらごちやこ

しく地方に住む人達のためにも、斯の書がいくらかの慰めに成らばなぞとも思ふ。

學生の家

地久節には、私は二三の同位と一緒に、御牧が野の方へ山遊びに出掛けた。松林の間など、を回廊のやうに歩いて、小松の多い岡の上で大分息を吐いた。それから揚子といふ村へ引返して、田舎の中の田舎とても言ふべきところで暫くを遊んだ。

私は今、小話の城址に近いところの學校で君と同年位の學生を教へて居る。君は斯ういふ山の上の春が、奈何に待たれて、そして奈何に短いものであると思ふ。四月の二十日頃に成らなければ、花が咲かない。梅も櫻も杏も殆んど同時に開く。城址の横古岡には二十五日に祭があるが、その頃が花の盛りだ。すると、梅もきまりのやうに風雨がやつて来て、一時にすべての花を流して行つて了ふ。私達の教室は八重櫻の樹で囲繞されて居て、三週間はかり

前には、丁度花東のやうに密集したやつが教室の窓に近く吹き飛ばれた。休みの時間に出てみる、薄い花の影が私達の顔にまで射つた。學生達はその下を遊び廻つて、戯れた。殊に小學校から来たての若い生徒と来た、あつちの樹に隠れたり、こつちの枝につかまつたり、まるで小鳥のやうにどろだらう、それが最早すつかり初夏の光景に變つて了つた。一週間前、私は君の御當を食つた後、四五人の學生と一緒に横古岡へ行つて見た。荒廢した、高い石垣の間は、新緑で埋もれて居た。

私の教へて居る生徒は、小話町の青年ばかりでは無い。平原、小原、山浦、大久保、西原、野、其他小話附近に散在する村落から、一里も二里もあるところを歩いて通つて来る。斯ういふ學生は多く農家の青年だ。學校の日課が済むと、彼等は各自の家路を指して、松林の間を通り、鐵道の線路に沿ひ、あるひは千曲川の岸に歩いて、蛙の聲などを聞きながら歸つて行く。山浦、大久保は對岸にある村々だ。牛蒡、人参などの好い野菜を出す土地だ。野は北佐久の領分でない、小話の傾斜にある農村で、その附

近の村々から通つて来る學生も多い。こゝでは男女が別して労働する。君のやうに都會で學んで居る人は、養蠶体などといふことを知るまい。外國の田舎にも、小話の産地などでは、學校に收穫体みといふものがあるとか、何かの本でそんなことを讀んだことがあつたらう。多忙しい時季が来ると、學生でも家の手傳ひをしなければ成らない。彼等は又、少年の時から左様な労働の手助けによく慣らされて居る。

Sといふ學生は小原村から通つて来る。ある日、私はSの家を訪ねることを約束した。私は小原のやうな村が好きだ。そこには生々とした樹蔭が多いから、それに、小話からその村へ通ふ高の間の平かな道も好きだ。私は盛んな青葉の香を嗅ぎながら出掛けて行つた。右にも左にも山がある。風が来る、線路の波のやうに動揺する。その間には、妻の徳の白く光るのが見える。斯ういふ田舎道を歩いて行きたが、深い谷底の方で起る蛙の聲を聞くと、妙に私は歴しつけられるやうな心地

に成る。可怖しい繁殖の聲。知らない、不思議な生物の世界は、活氣づいた感を通じて、時々私達の心へ傳はつて来る。

河原Sの家では牛乳屋を始めた。可成り大きな百軒で父も兄も土地では人望がある。斯ういふ田舎へ来ると七人や八人の家族を見ることは別にめづらしくない。十人、十五人の大きな家族さへある。Sの家では年寄から子供まで、田舎風に整齊な家族の人情が私の心を惹いた。

君は農家を訪ねたことがあるか。入口の庭が廣く取つてあつて、栗所の帳から直に裏口へ通り抜ける。家の建物の前に、幾坪かの土間のあることも、農家の特色だ。斯の家の土間は葡萄畑などに留めて、その横に牛小屋が作つてある。三面ばかりの乳牛が飼はれて居る。

Sの兄は大きなバケツを提げて、牛小屋の方から出て来た。戸口のところに、Sが母と二人で腰を屈めて、新鮮な牛乳を濾すに支度をした。暫時、私は立つて眺めて居た。

やがて私は牛小屋の前で、Sの兄から種々な話を聞いた。牛の性質によつて温順しく乳を搾らせるのもあれば、それを怖むのもある。ア

パレるやつ、落着いたやつ、いろ／＼ある。牛は又、非常に鋭敏な耳を持つもので、聲音で主人を判別する。斯様な話が出た後で私は斯ういふ乳牛を休養させる爲に西の入り牧場などが設けてあることを聞いた。

鐵道

斯の山の上で、私はよく光澤の無い茶色の雲の娘に逢ふ。どうかすると、灰色に近いものもある。草葎の小屋の前や、桑畑の多い石垣の側などに、左様な娘が立つて居るさまは、いかにも荒い土地の生活を思はせる。

「小さな御百姓なんつものは、春秋働いて、冬になればそれを食ふだけのものでござす。まるで鐵砲蟲——食つては抜け、食つては抜け」學校の小使が私に斯様なことを言つた。

烏帽子山麓の牧場

水鏡書家M君は飯米を漫遊して歸つた後、故郷の根津村に家を新築した。以前、私注の

學校へは同じ水鏡書家のM君が教へに来て居た。M君は澤山前州の風景を描いて、一年ばかりで東京の方へ歸つて行つた。今ではB君がその後をうけて生徒に畫學を教へて居る。B君は製作の餘暇に、根津村から小話まで通つて来る。

土曜日に、私は斯の書家を訪ねるつもりで、小話から田中まで汽車に乗つて、それから一里ばかり小話の傾斜を上つた。

根津村には私達の學校を卒業したOといふ青年が居る。Oは兵學校の試験を受けたと言つて居るが、最早一人前の砲兵として取しからぬ位だ。私はその家へも寄つて、Oの母や姉に逢つた。Oの母は肥満した大きな體格の婦人で、赤い髪々とした顔の色などが素樸な快感を與へる。一體千曲川の沿岸では女がよく働く、隨つて氣血も強い。恐らくこれは都會の婦人ばかり見慣れた君などの想像もつかないことだらう。私は又、斯の土地で、野蠻な感じの女に遭遇ふこともある。Oの母には其様な荒々しさが無い。何しろ斯の婦人は驚くべき強健な體格だ。Oの姉も労働に慣れた女らし

て居る子供に逢つた。牛が来て戸や障子を突き破るとか、小屋の周囲には物が作つてある。年をとつた牧夫が住んで居た。僅かばかりの獲せた畑も斯の老翁が作るらしかつた。破れた屋根の下で、牧夫は私達の爲に湯を沸かしたり、茶を入れたりして呉れた。

壁には、蛇、鱉、鱉の殻を入れた『山籠』といふものが掛けてあつた。斯様な山の中までよ訪ねて来て呉れたといふ無付で、牧夫は私達に牛飼の経験などを語り、斯の牧場の管理人から月に十圓の手宛を買つて居ることや、自分以外の牧場から斯の西の人の澤へ移つて来たものであることなどを話した。牛は角が小さい、それでこすりつけるやうにして、物を破壊して困るとか言つた。今は草も短く、少いから、草を食ひ、進むといふ話もあつた。

牧夫は一寸考へて、見えなくなつた牛のことを言出した。あの山間の深い澤を、山の背の方へ行つたかと思ふ、とも言つた。

「ナニ、あの澤は深くて下りれるなんてものぢやねえ。標の葉でもこいて食つてら。」

斯う言つた。直したやうに、その牛のことを言つた。

間もなく私達は牧火に作はれて、斯の番小屋を出た。牧夫は多くの牛が持つて居るといふ無付で、手に籠を提げて行つた。途次私達に向つて、斯の牧場は紫草ですから、牛の爲に好いのです。とか、今は木が低いから、夏はいきれていけません。とか、種々の事を言つて聞かせた。

こゝへ来て見ると、人と牛との生涯が殆んど混り合つて居るかのやうである。斯の老翁は牛が糞を嘗めて湯水を飲みさへすれば、病も癒えるといふことまで知悉して居た。月曜日の牝牛の鳴聲まで聞き分ける耳を持つて居た。

アケビの花の紫色に咲いて居る谷を越して、復た私達は牛の群の見えるところへ出た。牧夫が近づいて来ると、黒い小牛が先づ耳を振りながらやつて来た。ついで、顔の広い日付の愛らしい赤牛や、首の長い黒牛などがぞろぞろやつて来て、脚踏車と言はないばかりに頭を振つたり尻尾を振つたりしながら、壘の方へ近づいた。牧夫は私達に、牛もこゝへ来たばかりには、家を懐しがら、二日も経てば慣れて、黒い牛は黒い牛と集り、白い牛は白い牛と馴れ合つてゐるといふ話をして、向うの両岸の方には臥たり起きたりして遊んで居る牛の群も見え……

斯の牧場では月々五十錢づつで該方の持主から牝牛を預つて居る。左様いふ牝牛が今五十頭ばかり居る。種牛は一面置いてある。牧夫が勤めの主なるものは、牛の繁殖を監督することであつた。禮を言つて、私達は斯の番人に別れた。

二

奇夢の熟する時

學校の小使は面白い男で私に種々な話をして呉れる。斯の小使のかたは、自分の家で小作を作つて居る。それは主に年老いた父と、弟とがやつて居る。純小作人の家族だ。學校の日課が終つて、小使が教室々の掃除をする頃には、頬の紅い妻が子供を背負つてやつて来て、夫の手持ひをすることもあつた。學校の教師仲間の家でも、いづらか品のあるところへは、斯の男が行つて野卒の手入をして遣る。校長の家では毎年可成な農家ほどに野菜を作つた。野菜なども作つた。休みの時間に成ると、私は斯の小使をつかまへては、耕作の話の聞いて見る。

い手を有つて居た。

私はB君や、B君の隣家の主人に誘はれて、根津村を見て廻つた。隣家の主人はB君が小學校時代からの友達であるといふ。パノラマのやうな風光は、斯の大傾斜から遠くに望むことが出来た。遠く谷底の方に、千曲川の流れて行くのも見えた。

私達は村はづれの田圃道を通つて、ドロ柳の若葉のかけへ出た。谷川には鬼芹などの毒草が茂つて居た。小山の裾を這んで、二人とも草の上に足を没出した。そこでB君の友達は提げて来た樽を取り出した。斯の草の上の酒盛の前を、時々若い女の連が通つた。草薙に行く人達だ。

B君の友達は思出したやうに、

「君とこゝで飯打ちに来て、半日飲んで居たつけないか。」

と言ふと、B君も同じやうに洋行以前のことを思出したらしい調子で、

「もう五年前だ。」

と答へた。B君は寫生帳を取り出して、灰色なドロ柳の幹、風に動くそのやはらかい若葉などを寫し、話した。一寸散歩に出るにも斯の

雷家は寫生帳を離さなかつた。

翌日は、私はB君と二人きりで、鳥帽子が籠の籠を指して出掛けた。私が牧場のことを尋ねたら、B君も寫生かた、一緒に行かうと言出したので、到頭私は一晩厄介に成つた。尤も、斯の村から牧場のあるところへは、更に一里ばかり上らなければ成らない。案内なしに、私などの行かれる場所では無かつた。

夏山——山裾——斯ういふ言葉を聞いた丈でも、君は私達の進んで行く山道を想像するだらう。『のつべい』と稱する土は乾いて居て灰のやう。それを踏んで雑木林の間にある一條の細道を分けて行くと、黄蘗なすしい若葉のかけで、私達は旅の商人に逢つた。

更に山深く進んだ。山鳩などが啼いて居た。B君は歩きながら飛騨の話を始めて、十一といふ鳥を聞いた時の淋しかつたことを言出した。『十一……十一……』とB君は段々聲を細くして、谷を渡つて行く鳥の啼聲を真似て聞かせた。そのうちに、私達はある岡の上へ出て来た。

君、白い鈴のやうに垂下つた可憐な草花の一面に咲いた初夏の光に満ちた岡の上を想像し

かまへ。私達は、あの香気の高い谷の百合が斯様に生えて居る場所があらうとは思ひもよらなかつた。B君は西洋で斯の花のことを聞いて来て、北海道とか淡路山脈とかにあるとは知つて居たが、なにしろあまり澤山あるので終には探る氣もなかつた。二人とも足を没出して草の中に寝轉んだ。まるで花の臥床だ。谷の百合は一名を君影草とも言つて、『輪廻の歸來』を意味するなどと、花好きのB君が話した。

話の面白い美術家と一緒に、牧場へ行き着くまで、私は倦むことを知らなかつた。岡の上には寝るところに驚愕の花が咲いて居た。斯の花は牛が食はない爲に、それで斯う繁茂して居るといふ。

一周すれば二里あまりあるといふ廣々とした高原の一部が、私達の眼にあつた。牛の群が見える。何と思つたか、私達の方を目掛けて突進して来る牛もある。斯うして放し飼にしてある牛の群の側を通るのは、憎れない私達には氣味悪く思はれた。私達は牧夫の住んで居る方へと急いだ。

番小屋は谷を下りたところにあつた。そこへ行く前に澤の流れて飲んで居る小牛、藪を探つ

付いた、大きな煙草入をぶらさげて居た。下君は其隣房を指して、此處で第一の老態であると私に言つて聞かせた。...

古城の初夏

私と同僚に理學士が居る。物理、化学などを受持つて居る。學校の日課が終つた頃、私は斯の年若い學士...

た。蠟燭の火は水を注ぎかけられたやうに消えた。無気な學生等は學士の机の周圍に集つて...

「先生、蠟燭やいけませんか。」
「ええ、蠟燭は鳥などのやうに酸素を吸しがりませんからナ。」

問をかけた生徒は、つと教室を離れたかと思ふと、やがて彼の妻が窓の外の桃の樹の側にあらはれた。
「ア、蠟燭を取りに行つた。」

もなく笑つた。「なんだ、死んだ」と言ふのもあれば、怖い奴」といふものもある。...

「最早マナリましたかネ。」
と學士も笑つた。
其日は、校長はじめ、他の同僚も懐古園の方へ弓をひきに出掛けた。

はじめに私が學士に逢つた時は、唯斯様な田舎へ来て置かれて居る年をとつた學者と思つただけで、左様親しく成らうとは思はなかつた。

いわけに行かなかつた。是れ何れもかも外部へ露出した人を、私もあまり見たことが無い。何時の間にか私は斯の老學士と仲好に成つて、自分の身内からでも聞くやうに、その朝へきれないやうな嘆息や、内に憤る聲までも聞くやうに成つた。

私達は揃つて出掛けた。學士の口からは、時時佛蘭西語などが流れて来る。それを聞く度に、私は學士の華やかな過去を思ひやつた。學士は又、そんな調はない風采の中にも、何處か往時の瀟灑なところを失はないやうな人である。...

白い黄ばんだ袖の裾は最早地に落ちて、香煙を放つて居た。學士は弓の袋や、タスキの類を入れた籠を提げて歩きながら、
「ねえ、實は斯ういふ話サ。私共の二番目の竹が、あれで子供仲間やナカク、相撲が取れるんですとサ。...

私は笑はずに居られなかつた。學士も笑を制へかねるといふ風で、
「兄のやつも名前が有るんですよ。實は何とつけたと聞きましたら、父さんが弓が御好きだからよく當るやうに矢當りつけましたとサ。...

「あの先生も、鷄に、馬に、小鳥に、朝顔——何でもやる人でサナ。朝の頃は鶏を作るし、よく何處の田舎にも一人位はあゝいふ御醫者で奇人が有るもんです。...

奇人は斯の藝者ばかりでは無い。誰か藝で、閑散な目を送りがねて、千曲川へ釣りに行く學士

風の人もあれば、姉と二人ざり城門の傍に住んで懐古園の方へ水を選んだり、役場の手傳ひをしたりして居る人もある。...

今弓を提げて破壊された城址の垣道を上つて行く學士も、ある藩の士族だ。校長は、江戸の御家人とかだ。...

私は斯の古城址に遊んで、君などの思ひもよらないやうな風景を望んだ。それは茂つた青葉のかげから、遠く白い山々を望む美しさだ。日本アルプスの新々の氣は、こゝから白雲を望むやうに見える。

私の家の組合だ。私は馬場裏へ移ると直ぐその組合に入れられた。一體此の小説の町には、平地といふものが無い。すこし傾でも降ると、細い川まで砂を押し流すらぬ地勢だ。私は本町へ買物に出るにも組合の家の横手からすこし勾配のある道を上らねばならぬ。

組合頭は別荘のある立屋の卒主だ。此の人が日頃出入する本町のある商家から、商賈も閑な頃で店の人達は東澤の別荘へ休みに行って居る。私を誘って立屋にも遊びに来ないか、とある日赤頭が誘ひに来たことであつた。

私は君に古城の附近をすこし紹介した。町家の方の道はまだ爲なかつた。立屋に誘はれて商家の山荘を見に行った時のことを話さう。君は地方にある小さい都會へ来たことが有るだらう。そこで行き逢ふ人々の多くは——近所から買物に来た男女だとか、旅人だとかで、茶外町の人が少いのに気が付いたことが有るだらう。田舎の神宮は斯様なところにも表れて居る。小宮が左様だ。東町や、小路や、田圃の間の道などを探んで、勝手を知つた人は多く往つたり来たりする。

私は立立屋と一緒に、町家の軒を並べた本

町の通を一瞥して、丁度左様いふ田圃の道へ出た。東側から小説の町の一部を見ると、白壁づくりの建物が土壁のものに混つて、堅く石垣の上に築かれて居る。中には高い三層の窓が城郭のやうに疊日に映じて居る。その建物の感じは、表側から見た暗い質素な暖簾と對照を成して土地の氣質や富を表現して居る。

歩秋だ。一年に二度づつ黄色くなる野原が、私達の兩側にあつた。既に刈取られた麥も多かつた。半道ばかり歩いて行く途中で、鷹にした魚肉の菰包を提げた百姓とも一緒に成つた。

立立屋は百姓を顧みて、
『もうすつかり植付が済みましたかネ』
『はい、漸く二三日前に、これでも昔は十日前に植付けたものでござすが、近頃はすつと遅く成りました。日陰に成る田にはあまり實入も無かつたものだが、此節では一ばいに取れますよ。』
『暖くなつた哉かな。』
『はい、それもあります。昔と違つて川の敷がすつと増えたものだから、田の水もウルミが多くなつてねえ。』

百姓は始め／＼答へた。
東澤の山荘には商家の人達が集つて居た。店の方には内儀さん達と、二三の小僧とを残して置いて、皆なこゝへ遊びに来て居るといふ。東京の下町に人となつた君は——日本橋傳馬町の針問屋とか、淺草橋屋町の隠宅とかは、君にも私にも可憐しい名だ——恐らく私が今奈何いふ人達と一緒に成つたか、君の想像に上るであらうと思ふ。

山荘は二階建てで、池を前にして、靜かな澤の入口にあつた。左に淺い谷を隔んだ松林の方は、曇つて夜もよく見えなかつた。快晴の日は、富士の山嶺も望まれるといふ。池の邊に咲亂れた花あやめは楽しい感じを興へた。立立屋は庭の高麗桐葉を指して見せて、特に東京から取寄せたものであると言つたが、あまり私の心を惹かなかつた。

私は庭の奥にある二階の部屋へ案内された。田舎橋の手織物を着て襦袢の前垂を掛けた、髪も質素に短く刈つたのが、主人であつた。此人は一切の主権を握る相棒者ではないとのことであつたが、しかし、堅氣な大店の主人らしく見えた。でつぷり肥つた番頭も傍へ来た。池の鯉の鰓焼

懐古園内の藝、木蘭、藤、牡丹などは一時花と花とが映り合つて盛んな香氣を發したが、今では最早濃い新緑の香に變つて了つた。千曲川は大空の上まで登らなければ見られない。谷の深さは、それだけでも想像されよう。海のやうな淺間一帯の大傾斜は、その思はずだ松の樹の下へ行つて、一線に六月の空に横はる光景が見られる。既に君に話した鳥帽子山荘の牧場も君の住む根津村などは見えないうまでも、そこから松林の向に指すことが出来る。私達の矢場を捲く橋、橋の轍も、その高い石垣の上から目の下に瞰下すことが出来る。

境内には見晴しの好い茶屋がある。そこに預けて置いた弓の道具を取出して、私は學士と一緒に苦蒸した石段を下りた。靜かな矢場には、學校の仲間以外の類も見えた。

『そも／＼大弓を始めてから明日で一年に成ります。』
『一年の御稽古でも、しばらく休んで居ると、まるで當らない。なんだか申談のやうですナ。』
『こりや驚いた。片二ですぞ。しつかり御頼申しますぞ。』
『ボツン。』

『左様はいかない——』
『斯様な話が、張弓をひく遊學の先生や、體操の教師などの間に起る。理學士は一番窮い弓をひいたが、熱心でよく當つた。』
古城地といへば、全く人の住まないところのやうに君には想像されたらう。私は幾つた城門の傍にある門番と、園内の茶屋とを君に紹介した。まだその外に、鶴を養ふ人なども住んで居る。斯の人は病身で、無聊に苦むところから、私達の矢場の方へ遊びに来る。そして私達の弓が揃つて引続けられたり、矢の羽が頬を指つたりする後方に居て、奇矯な批評を浴せかける。誠に、どうです。先生、もう弓も他いたから——貴様、この矢場で、鳥でも何へ。なんと来に日にやあ、それこそ此方のものだ——しかし斯の弓は、永代續きさうだテ。『斯様なことを言つて退返すので、折角入れた力が抜けて、弓もひけないものが有つた。』
小説へ来て歸れた學士に取つて、斯の縁蓋は更に奥の方の隠れ家のやうに見えた。愛蔵する鷹の羽が揃つて白的の方へ走る間、學士はすべてを忘れるやうに見えた。

急に、熱い雨が落ちて来た。雷の音も聞え

た。淺間は曇まで、隠れて、灰色に煙るやうに見えた。いくつかの雲の群は風に送られて、私達の頭の上を山の方へと動いた。雨は通過きたかと思ふと復急に落ちて来た。『いよ／＼本物かナ。』と言つて、學士は新しく自分で製つた七寸的を取出しに行つた。

城地の茶室には雨に濡れながら働いて居る人々もあつた。皆なで雲行を眺めて居ると、初夏らしい日の光が遙かに青葉を通して来た。弓仲間も男んで一手づつ射はじめた。やがて復たザアと降つて来た。到頭一回は斷念して、茶屋の方へ引揚げた。

私は學士と一緒に高い荒廢した石垣の下を歸つて行く途中、東の空に深い色の虹を見た。實に學士はユツクリ／＼歩いた。

山 莊

で、主人は私達に酒を勧めた。階下には五六人の小僧が居て、料理方もあれば、通ひをするものもあつた。

一寸したことに、質で賑やかな大店の家風は表れて来た。番頭は、私達の前にある冷室の奥にのみ花舞臺が人つて、主人と自分のにはそれが無いのを見て、「こりや舞臺ばかりしやいけねえ。オイ、舞臺をすこしかいて来てお呉れ。」

と舞臺のところから階下を覗いて、小僧に吩咐けた。間もなく小僧はワンと大きく割つた花舞臺を二階持つて上つて来た。

やがて番頭は階下から舞臺の搬を運んだ。それを仕立屋の前に置いた。二枚落していかうと番頭が言つた。仕立屋は二十年以来はつたり止めて居るが、舞臺でも無いからそれぢや一つやるか、など、笑つた。主人も好きな顔と見えて覗き込んで、仕立屋はなか／＼買が好いやうだとか、そこに好い手があるとか、しきりと加勢をしたが、そのうちに客の取と成つた。番頭は舞臺を覗んで、「さあ舞臺でも来い」といふ顔付をした。「お貸しなさい。舞臺だ」と主人は飛んで出て、番頭を相手に差し始める。どうやら主人

の手も悪く成りかけた。番頭はびつしやり自分の頭を叩いて、「恐れ人つたかな」と舌打した。到頭主人の取となつた。復た二番目が始まつた。

階下では、大きな市着を腰に着けた男の兒が、黒い洋火と盛れて居たが、急に家の方へ歸ると駄々をこね始めた。小僧がもてあまして居るので、仕立屋も見兼ねて、子供の機嫌を取りに階下へ降りた。其時、私も趣を歩いて見た。小僧の手の花の裏のいも映いて居た。舞臺の下へ行くと、池の中の舞の踊るのを見えた。「斯う水があるよ、なか／＼舞は舞まらんものさな」と言つて居る者も有つた。

池を一廻りした頃、番頭は赤い顔をして二階から降りて来た。「先生、勝負は奈何でしたネ。」と仕立屋が尋ねた。

「二番とも、これサ。」番頭は鼻の先へ振り拳を叩いて、大犬狗をして見せた。そして、高い、快活な聲で笑つた。「斯ういふ人と一緒に、どちらかと言へば陰気な山の中で私は時を送つた。ボツ／＼雨の

落ちて来た頃、私達は斯の山莊を出た。番頭は半ば解つた調子で、「お二人で一本だ、相合傘といふやつはナカ／＼意気なものですから。」と番傘を出して貸して呉れた。私は仕立屋と一緒にその相合傘で降りかけた。「もう一本お持ちなさい」と言つて、復た小僧が追ひかけて来た。

毒消賣の女
「毒消は宜う御座んすかねえ。」家の門に立つて、鋭い越後訛で叫ぶ女の聲を聞くやうに成つた。

黒い旅人らしい姿、背中にある大きな風呂敷、目をうけて光る笠、あたかも黒が同じやうな禁煙ひで、互に首を成して味手を違へず道いところからやつて来るやうに、彼等もはる／＼此の山の上まで降りて来る。そして鳥の音が彼方、此方の軒に別れて響ぶやうに彼等も亦た二人か三人づゝに成つて思ひ／＼の門を訪れる。此陣私は學校へ行く途中で、毎日のやうにその毒消賣の聲に逢ふ。彼等は血氣壯なところまで互によく似て居る。

馬鹿

「何處の土地にも馬鹿の一人や二人は必ずある」と人が言つた。

貧しい町を通つて、黒い雨の生えた館屋に違つた。館屋は高い石垣の下で唐人笛を吹いて居た。その邊は停車場に近い町だ。私が學校の往還によく通るところだ。岩石の多い山道の間へ出ると、坂道の上の方から荷車を曳いて押流されるやうに降りて来た人があつた。荷車には居つた豚の腹が載せてあつた。後で、私は役の人が銀馬鹿だと聞いた。銀馬鹿は黙つてよく働く方の馬鹿だといふ。此の人は又自分の家屋敷を他に占領されてそれを知らずに働いて居るともいふ。

祭の前夜

春風が清く吹くは、やがて土地では祇園祭の季節を迎へる。此の町で羨望をしない家は、折るほどしか無い。寺の僧侶すらそれを一年の主なる収入に費へる。私の家では一度も解つたことが無いが、それが不思議に聞える位だ。斯ういふ土地だから、暗い暮御と、羨みやうな

奥氣と、舞の陣と、桑の川不出来と、ある時は暗い夜で働いて居る男や女のことを想つて見て買はなければ、それから後に来る祇園祭の楽しさを君に傳へることが出来ない。種を腹に差して麻袋を負つたやうな人達は、旅舎は一時購買の聲で満たされる。左様いふ手合が、思ひ／＼の旅舎を指して雨の收穫を運んで行く光景も、何となく町々に活氣を運べるのである。

二十日ばかりもジメ／＼と降り續いた天気が七月の十二日に成つて漸く晴れた。雷雨の夜の日は赤に赤にきりめいた。長いこと増勢に隠れて見えなかつた遠い山々まで、楕圓色に顯れた。此の日は町の大人から子供まで互に新しい服を着用して待つて居た日だ。

私は町の團體の時間について多少聞いたこともあるが、そんなことをこゝで君に話さうとは思はない。たゞ、祭以前に新選を重ねたと云ふだけにして置かう。一時は祭とさせるとかさせないとかの騒ぎが傳へられて、毎年の始めにアーチ屋に作られる踊り着が漸く七日日に町々の空へ掛つた。その餘波として、舞臺を滑

ぎ込まれるが煩さに移轉したと言はれる家すらあつた。左様いふ騒ぎの待上るといふだけで、如何に此の祭の町の人から受けられて居るかい分る。多くの商人は殊に祭の賑ひを期待する。舞臺から得た報酬がすくなくも此の時には費されるのであるから。

夜に入つて「御立」といふ儀式があつた。此の晩は主の町の人々が提灯つけて社の方へ集る。それを見ようとして、私も家を出た。社には居る難い。社頭で菓子を買つて居る人に逢つた。舞臺で一家を成した人物だとのことだが、最早長いこと此の田舎に隠れて居る。

十三日の話

本町の通には紅白の提灯が社衆の人の顔に映つた。その影で、私は社屋の、細肩のYなぞの手を引き合つて来るのに逢つた。いづれも近所の快活な娘達だ。

た。そこには温泉があるばかりでなく、家から歩いて行くには丁度頃合の距離にあつたから。中瀬の附近には豊かな耕地も多い。ある岸の上まで行くと、傾斜の中腹には小じんまりとした校長の別荘がある。その下に温泉場の旗が見える。林檎園が見える。千曲川はその向を流れて居る。

午後の一時過ぎに、私は田圃の道を通つて、千曲川の岸へ出た。蘆、藁、それから短い楊などの多い石の間で、草野から来て居る師範校の學生と一語に成た。A、A、Wなどいふ中、斯の人達は夏休を應用して、本を讀みに私の家へ通つて居る。岸には熱い砂を踏んで水泳にやつて来た少年も多かつた。その中には私達の學校の生徒も混つて居た。

暑くなつてから、私はよく自分の生徒を連れて、こゝへ泳ぎに来るが、隅田川などで泳いだことを思ふと水漬からして飽ふ。青く澄んだ川の水は油のやうに流れて居ても、その濁の澄しいこと、言つたら、眩暈がする位だ。川上の方を見ると、暗い岩壁から白波を捲けて流れて来る。川下の方は又、矢のやうに早い。それが五里瀧の赤い崖に突き當つて、非常な勢で落ち

て行く。どうして斯の水漬が是處の岩から向うの崖下まで真直に突切れるものではない。それに澄んだ水の中には、大きな岩の隠れたのがあつた。下手をマゴつけば、押流されて了ふ。だから餘程上の方からでも泳いで行かなければ、目的とする岩に取付いて上ることが出来ない。平野を流れる利根などと違ひ、この川を中心は岸のどちらかに傾いて居る。私はこの河底の露れた方に居て、満載の花などの吹いた岩の蔭で、二時間ばかりを過した。熱い砂の上には這ひのめつて、甲羅を乾して居るものもあつた。ザンブと水の中へ飛込むものもあつた。このあたりは小娘まで遊び来て、腕まくりをしたり、尻を痛折つたりして、足を水に浸しながらかたかた遊び廻つて居た。

三つの藁藪帽子が石の間にあらはれた。師範校の連中だ。
「ちつたア釣れましたかね。」と私が聞いた。
「え、すつかり釣られて了ひました。」
「どうだネ、君の方は。」
「五尾ばかり掛るには掛りましたが、半な取されて了ひました。」
「む、む、二時間もあつたのだから、ゆつくり言

れるやうにしたものだ。閑雅な小樽で、崖に倚つて眺望の好い位置に在る。
先生は共立學校時代の私の英語の先生だ。あの頃は先生も男のさかりで、ア、ギングの「リップ、デア、キントル」を教へて呉れたものだ。その先生が今では斯ういふところに隠れて、花を植ゑて楽しんで居る。幾つたりするやうな、白髭の翁だ。どうかすると先生の口から先生自身がリップ、デアン、キントルであるかのやうな戯談を聞くこともある。でも先生の趣味は年と共に銷磨し盡すやうなものでもない。客が訪ねて行くと、談論風發する。

くさうだ、私は是迄左様いふ處へ一切足を入れたなかつたが、一つ諸君連れてつて呉れ給へ、斯う言ふぢやないか。」
「フワン。」

「一機諸君はよく菓子を好かれるが、一回に凡そ何の位食べるんですか、と先生が言ふから、左様です、まあ十錢から二十錢位食ひますつて言ふと、それはエライ、そんなに食つてよく胃を害さないものだと言はれる。え、學校へ歸つて来て、夕飯を食はずに居るものも有りますとやつたさ。」

「さうだがねえ、いろ／＼なのが有るぜ、菓子に胃散をつけて食ふ男があるよ。」
三人は何を言つても気が晴れるといふ風だ。中には、手を叩いて、踊り上つて笑ふものもあつた。それを聞くと、私は喉飯さずには居られなかつた。

やがて、三人は口笛を吹き／＼一緒に泊つて居る旅舎の方へ別れて行つた。
此の温泉から石垣について坂道を上ると、そこに校長の別荘の門がある。横の名を水明樓として居る。此の建物とは先生の書齋で、士族風數の方にあつたのを、こゝへ移して住まは

て行く。どうして斯の水漬が是處の岩から向うの崖下まで真直に突切れるものではない。それに澄んだ水の中には、大きな岩の隠れたのがあつた。下手をマゴつけば、押流されて了ふ。だから餘程上の方からでも泳いで行かなければ、目的とする岩に取付いて上ることが出来ない。平野を流れる利根などと違ひ、この川を中心は岸のどちらかに傾いて居る。私はこの河底の露れた方に居て、満載の花などの吹いた岩の蔭で、二時間ばかりを過した。熱い砂の上には這ひのめつて、甲羅を乾して居るものもあつた。ザンブと水の中へ飛込むものもあつた。このあたりは小娘まで遊び来て、腕まくりをしたり、尻を痛折つたりして、足を水に浸しながらかたかた遊び廻つて居た。

三つの藁藪帽子が石の間にあらはれた。師範校の連中だ。
「ちつたア釣れましたかね。」と私が聞いた。
「え、すつかり釣られて了ひました。」
「どうだネ、君の方は。」
「五尾ばかり掛るには掛りましたが、半な取されて了ひました。」
「む、む、二時間もあつたのだから、ゆつくり言

るやうにしたものだ。閑雅な小樽で、崖に倚つて眺望の好い位置に在る。
先生は共立學校時代の私の英語の先生だ。あの頃は先生も男のさかりで、ア、ギングの「リップ、デア、キントル」を教へて呉れたものだ。その先生が今では斯ういふところに隠れて、花を植ゑて楽しんで居る。幾つたりするやうな、白髭の翁だ。どうかすると先生の口から先生自身がリップ、デアン、キントルであるかのやうな戯談を聞くこともある。でも先生の趣味は年と共に銷磨し盡すやうなものでもない。客が訪ねて行くと、談論風發する。

水明樓へ来る度に、私は先生の好く整理した書齋を見るのを楽しみにする。そればかりではない、千曲川の眺望はその樓上の欄に倚りながら、志に負ふことが出来る。對岸に煙の見えるのは大久保村だ。その下に見える釣橋が戻り橋だ。川向から聞える朝々の鶯の鳴聲、毎朝農村に點く灯の色、種々思ひやられる。

水明樓へ来る度に、私は先生の好く整理した書齋を見るのを楽しみにする。そればかりではない、千曲川の眺望はその樓上の欄に倚りながら、志に負ふことが出来る。對岸に煙の見えるのは大久保村だ。その下に見える釣橋が戻り橋だ。川向から聞える朝々の鶯の鳴聲、毎朝農村に點く灯の色、種々思ひやられる。

水明樓へ来る度に、私は先生の好く整理した書齋を見るのを楽しみにする。そればかりではない、千曲川の眺望はその樓上の欄に倚りながら、志に負ふことが出来る。對岸に煙の見えるのは大久保村だ。その下に見える釣橋が戻り橋だ。川向から聞える朝々の鶯の鳴聲、毎朝農村に點く灯の色、種々思ひやられる。

水明樓へ来る度に、私は先生の好く整理した書齋を見るのを楽しみにする。そればかりではない、千曲川の眺望はその樓上の欄に倚りながら、志に負ふことが出来る。對岸に煙の見えるのは大久保村だ。その下に見える釣橋が戻り橋だ。川向から聞える朝々の鶯の鳴聲、毎朝農村に點く灯の色、種々思ひやられる。

水明樓へ来る度に、私は先生の好く整理した書齋を見るのを楽しみにする。そればかりではない、千曲川の眺望はその樓上の欄に倚りながら、志に負ふことが出来る。對岸に煙の見えるのは大久保村だ。その下に見える釣橋が戻り橋だ。川向から聞える朝々の鶯の鳴聲、毎朝農村に點く灯の色、種々思ひやられる。

けて行つて来た。あの話を君にするのを忘れてた。

温泉地にも種々あるが、山の温泉は別種の趣がある。上田町に近い別所温泉などは開けた方で、随つて種々の便利も具はつて居る。しかし山圍らしい温泉の感じは、反つて不便な田舎、温泉寺などに多く味はれる。あの邊にも相應な温泉宿は無いではないが、なにしろ土地の者が味噌や米を携へて勞苦を忘れに行くとはいふ場所だ。自炊する浴客が多い、宿では部屋だけても貸す。それに部屋付の籠が具へてある、浴客は下駄穿のまま庭から直に櫓橋を上つて、檢上の部屋へ通ふことも出来る。斯の土足で昇降の出来るやうに作られた建物を見ると、山深いところにある温泉宿の氣がする。鹿澤温泉(山の湯)と來たら、それこそ野趣に富んで居るといふ話だ。



半ば秋葉は包まれ、半ば赤い崖に成つた山脈に添うて、千曲川の激流を左に望みながら私は汽車で上田まで乗つた。上田橋——赤く塗つた鐵橋——あれを渡る時は、大河らしい千曲川の水を眼下に眺めて行つた。私は上田附近の平地にある幾多の村落の間を歩いて通つた。

あの邊はいかに田舎らしい氣のするところだ。途中に樹蔭もある。籠掛けて休む粗末な茶屋もある。青木村といふところで、いかに農夫等が勞苦するかを見た。彼等の背中に木の葉を挿して、それを籠かの目障りしながら、田の草を取つて働いて居た。私などは洋傘でもなければ歩かない程の熱い日さかりに、斯の農村を通り抜けると、すこし白く濁つた川に臨んで、谷深く坂道を上るやうに成る。川の色を見たけれども、湯場に近づいたことを知る。そのうちに、斯様な看板の掛けてあるところへ出た。

夏休みも終つて、復た私は理學士やB君や、それから植物の教師などと學校でよく面を合せるやうに成つた。

學窓の I

私の授業を始める日に、まだ櫻の葉の深く重なり合つたのが見える教室の窓の側で、私は上級の生徒に釋迦の話をした。私は「釋迦論」を選んだ。あの本の中には、王子の一生が一篇の戯曲を讀むやうに寫出してある。あの中からは私は釋迦の父王の話、王子の若い友達の話などを借りて來て話した。青年の王子が憂鬱に沈みながら、東西南北の四つの城門から樹園の方へ出て見るといふ一節は、私の生徒の心をも引いたらしい。一つの門を出たら、病人に逢つた。人は病まなければ成らないかと王子は深想した。他の二つの門を出ると、老人に逢ひ、死者に逢つた。人は老いなければ成らないか、人は死ななければ成らないか。斯の王子の逢着する人生の疑問がいかに簡潔に表してある。最後に出た門の外で

道者に逢つた。そこで王子は心を決して、斯のLinoを解かんが爲に、あらゆるものを破り捨て、行つた。

學窓の II

樹木が一年に三度づつ新芽を吹くと、今迄私は氣がつかかなかつた。今は九月の若葉の時だ。學校の校舎の周圍には可成多くの樹木を植ゑてある大きな櫻の實の熟する頃などは、自分等の青年時代のことまでも思ひ起させたが、斯

十九夜の月の光が斯の谷間に射し入つた。人が多く寂靜まつた頃、まだ障子を明るくして感心に議論して居る浴客の聲も聞えた。

理窟ツばい人達の言ひさうな言葉だ。翌日は朝霧の籠つた巖谷に朝の光が満ちて、近い山も遠く、家々から立登る煙は霧よりも白く見えた。淺間は隠れた。山のかたは青がかつた灰色に光つた、白い雲が山脈に添うて居るのも望まれた。國さんといふ可憐の少年も姉嬢に附いて來て居て、温泉宿の二階で玩具の銀笛を吹いた。そこは保福寺と地藏峠とに挟まれた谷間だ。二十日の月は其晩も遅くなつて上つた。水の流が枕に響いて眠れないので、一旦寢た私は起きて、斯ういふ場所の月夜の感じを味つた。高い欄に倚凭つて聞くと、さまざまの蟲の聲が水音と一緒に成つて、斯の谷間に満ちて居た。その他暗い澤の底の方には種々な聲があつた。——遅くなつて戸を閉める音、深夜の人の話聲、犬の鳴聲、樂しさうな農夫の叫び。四日目の朝まだ暗いうちに、私達は月明りで

うして夏休み過に復た斯の庭へ來て見ると、何となく白ツばい林間の葉や、紅味を含んだ櫻や淡々しい青桐などが、校舎の白壁に映り合つて楽しい影日向を作つて居る。樂しさうに吹く生徒の口笛が彼方此方此起る。テニスのコートで城門の方へ移してからは、櫻の葉蔭で角力を取るものも多い。

田舎牧師

學校の歸りに、夏から病んで居るBの家を訪ねた。その家の裏を通り抜けて石段を下りると林檎の畠がある。そこにも初秋らしい日が映つて居た。朝顔の花を好んで毎年培養する理學士が、ある日學校の歸途に、新しい弟子の話を私にして聞かせた。弟子といつても朝顔を培養する方の弟子だ。その人は町に住む牧師で、一部の子供から「日曜學校の叔父さん」と懐かしがられて居る。斯の叔父さんの説教最中に夕立が來た。まだ朝顔の弟子入をしたばかりの時だ。彼の心は毎日樂しんで居る畑の方へ行つた。大車な貝類業の方へ行つた。雨に打たれる朝顔鉢の方へ行つ

た。説教そこ〜にして、彼は夕立の雨を朝顔
欄の方へ出出した。
『いかにも田舎の教師さんらしいちや有りませ
んか。』と理學士は斯の新しい弟子の語をして
笑った。その先生はまた、火の見舞にきて、朝顔
の語をして行くほど、自分でも好きな人だ。

九月の田圃道

朝顔に添うて赤坂(小諸町の一部)の家ついで
の見えるところへ出た。
浅間の山麓にある斯の町々は眼から覚めた時
だ。朝顔の煙は何となく温つた空気のの中に登
りつゝある。霧の聲も遠近に聞える。
熱しかけた稲田の周囲には、夏も葉を垂れて
居た。稲の中には既に下葉の黄色くなつたのも
有つた。九月も半ば過ぎだ。稲穂は種々で、あ
るものは薄の穂の色に見え、あるものは全く
草の色、あるものは紅毛の房を垂れたやうであ
るが、その中で濃い茶褐色の色が稲を作つた田
であることは、私にも見分けがつく。
朝日は谷々へ射して来た。
田圃道の草は足を濡らしてかゆい。私はそ
の間を歩き廻つて、蟋蟀の啼くの聞いた。

山中生活

此節 浅間は日によつて八回も煙を噴くこと
がある。
『あゝ復た浅間が焼ける。』と土地の人は言ひ合
ふのが癖だ。男や女が仕事しかけた手を休め
て、屋外へ出て見るとか、空を仰ぐとかする時
は、きつと浅間の方に非常に大きな煙の團が
望まれる。左探いふ時だけ火山の麓に住んで
居るやうな心地を起させる。斯ういふところに
住み慣れたものは、平素は、そんなことも忘れ
勝ちに暮して居る。
浅間は大きな煙の爲に崩されたやうな山で
今いふ山前山が往時の噴火口の跡であつたらう
とは、誰しも思ふことだ。何か山の形に一定
した面白味でもあるかと思つて来る。人は、大
概失望する。浅間はかりでなく、麓科山脈の方を
眺めても、何の奇も無い山々ばかりだ。唯、面
白いのは山の空気が。昨日出て見た山と、今日
出て見た山とは、殆んど毎日のやうに變つて居
る。
理學士の住んで居る家のあたりは、荒町の裏
手で、酢屋のKといふ娘の家の大きな醤油蔵

で私は種々なことを教へて貰つた。斯の探検教
師が稲田を眺めたばかりで、その種類を區別す
るほど明らかつた。
五六本松の間に倚つて立つて居るのを望ん
だ。町道神のあるのは其處だ。
寺窪といふところへ出た。農家が五六軒づつ
ところ／＼に散在するほどの極く遠鄙な山村
だ。君に黒斑山のこと未だ話さなかつたと思
ふが矢張り浅間の山ついでだ、ホラ、赤坂の城址に
ある天主堂——あの石垣の上の松の間から、黒
斑のやうに見える山林の多い高い傾斜、そこを
私は今歩いて行くところだ。あの天主堂から
黒斑山の麓にあつて、遠く點のやうな白壁を
一つ望む。その白壁の見えるのも斯の山村だ。
鷹俵を負つて腰を屈め乍ら歩いて行く農夫が
あつた。體操の教師は呼び掛けて、
『も、濱物ですか』と聞いた。
『今ややすと二割方得ですよ。』
荒い氣候と賑ふ人達は今から野菜を貯へる
ことを考へると見える。
前の／＼に降つた涼しい雨と、前の日の好
い日光とですしは草の獲物もあるだらう。斯
ういふ體操教師の後に隨いて、私は學生と共に

松林の方へ入つた。斯の松林は體操教師の持
山だ。松葉の枯れ落ちた中に僅かに數本の黄し
めごと、牛額としか得られなかつた。それから
餘の葉の間を分けて「部分木の林」と稱へ
る方へ進み入つた。
私は可成深い松林の中へ来た。若い男女
の一家族と見えるのが、青松葉の枝を下したり
それを束ねたりして働いて居るのに逢つた。
女の方は二十前後の若い妻らしい人だが、垢染
みた手拭を冠り、襟袷肌襦袢と尻端折といふ風
で、前垂を下げて、草履を穿いて居た。赤い荒
くれた髪、粗野な日に焼けた顔は、男とも女
ともつかない感じがした。どう見ても、ミレエ
の百姓畫の中に出て來さうな人物だ。
その弟らしいのが三四人、どれもこれも黒
い垢のついた顔をして、髪はまるで蓬のやうに
見えた。でも、健かな、無心な聲で、子供らし
い唄を歌つた。
母らしい人も林の奥から歩いて來た。一同仕
事を止めて、私達の方をめぐらしさうに眺めて
居た。
斯の人達の働くあたりから岡ついでに上つ
て行くと斯う平坦な松林の中へ出た。刈草を負

の窓などが見える。その横について荒町の通
へ出ると、墨表、鯉節、茶、雜貨などを向
ふ店々の軒を並べたところに、可成大きな鍛冶
屋がある。高い暗い屋根の下で、古風な籠に結
つた老翁が鐵錘の音をさせて居る。
斯の昔氣質の老翁が學校の體操の教師の父
親さんだ。
朝風の涼しい、光の熱い日に、私は二人ばか
り學生を連れて、その家の鍛冶場の側を裏口へ
通り抜け、體操の教師と一緒に浅間の山麓を指
して出掛けた。
山家と言つても、これから私達が行かうとし
て居るところは眞の山の中だ。深い山林の中に
住む人達の居る方だ。
粟、小豆、飼馬の料にするとかといふ稗など
の畠が、私達の歩いて行く岡邊の道に連なつ
て居た。花の白い、草の紅い、薔薇の畠なども到
るところにあつた。秋のさかりだ。體操の教師
は耕作のことに委しい人だから、驛方に光つて
見える畠を私に指して見せて、あそこに大きな
紫紅色の葉を垂れたのが「わたり栗」といふや
つだとか、こつちの方に細い青黒い葉を垂れた
のが「一かられい小豆」といふ種類だとか、御蔭

山番

つた男が林の間の細道を歸つて行つた。日
は濡れて濡つた草の上に映つて居た。深い林の
中の空氣は水中を行く魚かなんぞのやうに其草
刈男を見せた。
がら／＼と音をさせて、柴を積んだ車も通つ
た。その音は寂しい林の中に響き渡つた。
熊笹、柴などを分けて、私は草を探し歩い
たが、其日は獲物は少なかつた。枯葉を踏んで
除けて見ると稀にあるのは紅藪といふ食はれな
いのか、腐敗した初草位のものだつた。終には
探し抜れて、左様／＼は腰も言ふことを聞かな
く成つた。軽い腰籠を提げたまゝ南風の花の吹
いた畠のあるところへ出て行つた。山番の小屋
が見えた。
山番
番小屋の立つて居る處は尾の石と言つて、黒
斑山の直ぐ裾にあたる。
三峯神社として盜賊除の御札を貼けた馬小
屋や、萩などを刈つて乾してある母屋の前に立
つて、日の映つた土壁の色を見た時は、私
は餘程人里から離れた氣がした。
鋭い眼付の赤犬が飛んで來た。しきりと私

遊を怪むやうに吠えた。斯の犬は番人に飼はれて、種々な役に立つと見えた。

番小屋の主人が出て来て、私達を迎へて呉れた頃は、赤犬も頭を撫でさせるほどに成つた。主人は靴も朝らずに林の監督をやつて居るやうな人であつた。細君は襦袢で、斯の山の中に出て来た南瓜などを切りながら働いて居た。

四人の子供も出て来た。一番年長のは最早十四五になる。異い帯を締た草履などを穿いた、しかし髪は黒い髪だ。年少の子供は私達の方を見て、何となくキマリの悪さうな差を帯びた顔付して居た。その側には、トサカの美しい、白い雄鶏が一羽と、灰色な雄鶏が三羽ばかりあそんで居たが、やがてこれも裏の草の中へ隠れて了つた。

小屋は二つに分れて、一方の處を敷いたところには座敷であるが、實際平素は寢室と言つた方が當つて居るだらう。家族が食事したり、茶を飲んだり、客を迎へたりする時々の座敷には薄縁を敷いて、耕作の道具、食器の類はすべてその邊に置き並べてある。何一つ飾りの無い、煤けた壁に、石版畫の彩色したのや、木版刷の模様をついた屏などが貼付けてあるのを見ると、

そんな粗末な版畫でも、何程か斯の山に住む人達の眼を悦ばすであらうと思はれた。

暮の賣出しの時に、近在から町へ買物に来る連中がよく斯の版畫を眺しがるのも、無理はないと思ふ。

私達は草鞋掛のまま、湯で足を休めた。細君が雑煮の鹽漬にしたのを、茶を出して勧めて呉れた。湯いた私達の口には小屋で飲んだ茶がウマかつた。冬は斯の處に焚火を絶したことが無いと、主人が言つた。こゝまで上ると、餘程氣候も違ふ。

一緒に行つた學生は、小屋の裏の方まで見に廻つて、柿は積ましても湯が上らないことや、梅もあるが味が苦いことや、柿だけは斯の邊の地味にも適することなど種々な話を人から聞いて来た。

やがて晝飯時だ。

庭の栗の樹の蔭で、私達は小屋で分けて貰つた菓を食した。主人は薄縁を三枚ばかり持つて来て、樹の下へ敷いて呉れた。そこで晝飯が始まつた。細君は別に鶏と茄子の露、南瓜の煮付を馳走振に勧めて呉れた。いづれも大鍋にウンとあつた。私達は各自手盛でやつた。學生は

掘飯パンなどを取り出す。體操の教師はまた、好きな酒を用意して来ることを忘れなかつた。

斯の山の中で林檎を試植したら、地梨の蟲が上つて花の實を喰ふ爲に實らずに了つた。これは細君が私達の食事する側へ来ての話を聞いた。赤犬は朝つて来て、生徒が投げてやる鳥の骨をシャブつた。

食後に、私達は主人に案内されて、黒い土の色の畠の方まで見て廻つた。主人の話によると、松林の向うには三千坪ほどの桑畠もあり、畠はその三倍もあつて、凡一萬坪の廣い地面だけがあるが、自分の代となつてからは家族も少しも届きかねて、荒れたまゝに成つて居るところもある、とのことだ。

私達が訪ねて来たことは、餘程主人の心を悦ばせたらしい。主人はむつとりとした顔のある顔に似合はず種々話をした。蕎麥は十俵の收穫があるとか、試植した銀杏、杉、竹などは大半枯れ消えたとか、栗も十三俵ほど揃つて見えたが、十四度も山火事に逢ふうちに残つたのは既に五六間の高さに成つてよく實りはするけれども、樹の数は焼けて少いとか話した。

落葉松の畠も見えた。その前は草のやうに嫩

かで、目をうけて、美しくかいて居た。畠の周囲には地梨も多い。黄に熟したやつは草の中に隠れて居ても、直ぐと私達の眼についた。尤も、あの實は私達にはめづらしくも無かつたが。

主人は又、山火事の恐いことや、火に追はれて死んだ人のことを話した。これから一里ばかり上つたところに、炭焼小屋があつて、今は柵の木炭を焼いて居るといふ話もした。

斯の山番のある尾の石は、高峰と稱へる場所の一部とか。尾の石から藪野の湯までは十町ばかりで、毎日入湯に通ふことも出来るといふ。藪野と聞いて、私は以前家へ手守に来て居た娘のことを思い出した。あの田舎娘の村は藪野だから。

土地案内を知つた體操教師の御座で、めづらしいところを見た。斯うした山の中は、めづらしいところの来られる場所では無い。一度私は歴史の教師と連立つてこゝよりもっと高い位置にある番小屋に泊つたことも有る。

彼等はまだ開墾したばかりで、こゝほど林が深くなかつた。

別れを告げて尾の石を離れる前に、もう一度

私達は番小屋の見える方を振り返つた。白樺などの混つた木立の中に、小屋へ通ふ細い坂道、岡の上の榎木、それから小屋の屋根などが見え

白樺の幹は何處の林にあつても眼につくやうだが、あの山標を丸くしたやうな葉の中には最早美しく黄ばんだのも混つて居た。

六
秋の修學旅行

十月のはじめ、私は植物の教師T君と一緒に學生を引連れて、千曲川の上流を指して出掛けた。秋の日和で楽しい旅を続けることが出来た。斯の修學旅行には、八つが嶽の裾から甲州へ下り、甲府へ出て、それから諏訪へ廻つて、そこで私達を待受けて居た理學士、水産家、B君其他の同僚とも一緒に成つて、和田の方から小諸へ戻つて来た。斯の旅には殆んど一週間を費した。私達は藝科、八つが嶽の長い山脈について、あの周囲を大きく一週りしたので。その中でも、千曲川の上流から野邊山が原へかけては一度私が遊びに行つたことのあると

ころだ。其時は所々の仕立屋の亭主と一緒にだつた斯の處で、私は以前の記憶を新しくした。その話を君にしようと思ふ。

甲州街道

小諸から岩村町へ出ると、あれから前に續く甲州街道は割合に平坦な、廣々とした谷を貫いて居る。黄ばんだ秋らしい、南佐久の山分が私達の眼前に展げて来る。千曲川は斯の田畠の多い谷間を流れて居る。

一體、厚川に合する迄の千曲川は、殆んど船の影を見ない。唯、流れるまゝに任せてある。この一帯だけで、君はあの川の性質と光景とを想像することが出来るやう。

私は、佐久、小縣の高い傾斜から主に谷底の方に下瞰した千曲川をのみ君に語つて居た。今私達が歩いて行く地勢は、それと趣を異にした河原だ。白田、野澤の町々を通つて、私達は直ぐ河の流に近いところへ出た。

馬流といふところまで岸に流うて、濁ると河の勢も確かに一變して見える。その邊には、川上から押流されて来た恐ろしく大きな石が埋まつて居る。その間を流れる千曲川は大河とい

ふよりも寧ろ大きな霧流に近い。斯の霧流に面した休茶屋には甲州屋としたところもあつて、そこまで行くと何となく甲州に近い気がする。山を越して入込んで来るといふ甲州商人の往來するのを見られる。

馬道の近くで、學生のTが私達の一行に加はつた。Tの家は宮司で、街道から少し離れた閑逸な松原の畔にある。Tは私達を待受けて居たのだ。

白楊、蒸、楓、漆、樺などの類が、私達の歩いて行く河岸に生ひ茂つて居た。兩岸には、南牧、北牧、相木などの村々を数へることが出来た。水に近く設けた小さな水車小屋も到るところに見られた。八つが嶺の山つゞきにある赤々とした大崩壊の跡、金時、國師、甲武信、三國の山々、その高く聳えた頂、それから名も知られない山々の遠く近く重なり合つた姿が、私達の眺望の中に入つた。

日が傾いて来た。次第に私達は谷深く入つたことを感じた。時々私はT君と二人で立止つて、川上から川の下へ流れて行く水を見送つた。その方向には、夕日が山から山へ反射して、深い秋らしい空気が

の中に遠く炭火の煙の立登るのを見えた。斯の谷の盡きたところに海の口村がある。何となく川の音も耳について来た。暮れてから、私達はその村へ入つた。

山村の一夜

斯の山村の話の中に、私は斯様なことを書いたことがあつた。

「清佛戦争の後、佛蘭西兵の用ひた軍馬は吾陸軍省の手で買取られて、海を越して渡つて来ました。其中の十三頭が種馬として信州へ移されたのです。氣象雄健なアルゼイ種の馬が南佐久の奥へ入りましたのは、是時のことです。今日一口に種馬と稱へて居るのは、専らこのアルゼイ種を指したものです。其後南佐久の淺間驛といふ、名高い種馬も入り込みました。それから次第に馬の改良が始まる、野邊山の原の馬市は一年程に盛んに成る、其噂が某の宮殿下の御耳まで届くやうに成りました。殿下は陸軍騎兵附の大佐で、かくれもない馬好です。御寵愛のフアラリスと云ふ亞刺比亞産種馬として南佐久へ御貸付になり

ますとさあ人氣が立つたの立たないのぢや有りません。フアラリスの血を分けた當歳が三十四頭といふ評聲に成りました。殿下の御喜悅は何程でしたらう。到頭野邊山が原へ行啓を仰せ出されたのです。」

以前私が仕立屋に誘はれて、一夜を八つが嶺の麓の村で送つたのは、丁度その行啓のあるといふ時だつた。

静かな山村の夜——河水の氾濫を避けて斯の高原の裾へ移住したといふ家々——風雪を防ぐ爲の木曾などに見られるやうな石を載せた板屋根——岡の上にもあり谷の底にもある灯——露びた旅舎の二階から、薄明るい星の光と夢の空気を通して、私は會堂の地をもう一度見ることが出来た。こゝは一頭や二頭の馬を飼はない家は無い程の産馬地だ。馬が土地の人の主なる財産だ。娘が一人で馬に乗つて、暗い夜道を平氣で通る程の、實に質村な人達が住むところだ。風呂桶が下水の溝の上に設けてあるといふことは——いかに斯の邊の人達が骨の折れる生活を営むとはいへ——又、それほど生活を簡易にする必要があるとはいへ——来て見る度に

私を驚かす。こゝから更に千曲川の上述に當つて、川上の八ヶ村といふがある。その邊は信州の中でも最も不便な、白米は唯病人に頂かせるほどの、貧しい、荒れた山奥の一つであるといふ。

私が着いたと聞いて、仕立屋の親に成る人が提灯つけて旅舎へ訪ねて来た。こゝから小詰へ出て、長いこと私達の校長の家に奉公して居た娘があつた。

その娘も今では養子して、子供まであるとか。斯ういふ山村に連関して、下女奉公する人達の一生なども何となく私の心を引いた。君はまだ「ハリコシ」なぞといふ物を食つたことがあるまい。恐らく名前も聞いたことがあるまい。熱い灰の中で焼いた蕎麥餅だ。草履穿で焚火に、温りながら、その「ハリコシ」を食ひ食ひ話すといふが、此の邊での燗邊の楽しい光景なのだ。

高原の上

朝私達は野邊山が原へ上つた。私の胸には種々な記憶が浮び揚つて来た。フアラリスの駒三十四頭、牝馬二百四十頭、牝馬まで合せ

て三百餘頭の馬が列をつくつて通過したのも斯の原へ通過だつた。馬市の立つといふあたりに作られた御假屋、紫と白との幕、あちこちに菓をかけた商人、四千人餘の群集、そんなものがゴチャ／＼胸に浮んで来た。あの時は私は仕立屋と連立つて、秋の日のあつた原の一部を歩き廻つたが、今でも私の眼について居るのは長野の方から知事に隨いて来た背の高い参事官だ。白いしなやかな手を振つて、柔かな聲音をさせる紳士だつた。それで居て動作には敏捷なところもあつた。丁度あの頃私はトルストイの「アンナ、カレニナ」を読んで居たから、私は自分で想像したヴロンスキイの型をその参事官に當照して見たりなぞした。あの紳士が肩に掛けた雙眼鏡を取出して、八つが嶺の方に見える牧場を遠く望んで居た様子は——失禮ながら——私の思ふヴロンスキイそのまゝだつた。

あの時の混雑に比べると、今度は原の上も寂しい。最早霜が来るらしい雑草の葉のあるひは黄にあるひは焦茶色に成つたのを踏んで、ボツ／＼と立つて居る白樺の幹に朝日の映るさまなどを眺めながら、私達は板橋村といふ方へ進

んで行つた。斯の高原の廣さは五里四方もある。荒涼とした原の中には、蕎麥などを蒔いたところもあつて、それを耕す人達がところ／＼に僅かな村落を形造つて居る。板橋村はその一番取付にある村だ。

以前、私は斯の邊のことを、斯様な風に話の中に書いた「晴れて行く高原の霧の眺めはどんなに美しいものでせう。すこし裾の見える八つが嶺が次第に険しい山脊を顯はして来て、終に紅色の光を帯びた崖まで見られる頃は、影が山から山へ映して居りました。甲州に跨る山脈の色は幾度變つたか知れませんが、今は、紫がかつた黄、灰がかつた黄。急に日があつて、夫婦の行く道を照し始める。見上げれば、ちぎれ／＼の綿のやうな雲も浮んで、いつの間にか青空に成りました。あゝ朝です。

男山、金峯山、女山、甲武信嶺、などの山も残りなく隠れました。遠く其間を流れるのが千曲川の源、かすかに見えるのが川上の村落です。千曲川は朝日をうけて白く光りました——」

した人物だ。一時は私も斯うした文藝を好んで書いたものだ。

「情誼の半端に、取引、草鞋穿で、煩悶した農夫は、幾許か夫婦の側を通る。銀を肩に掛けた男もあり、肥桶を担いで腰を捻って行く男もあり、爺の煙草入を腰にぶら下げながら歩いて行く男もありました。気候、雑草、煮度、積土などを相手に、秋の一日の烈しい労働が今は最早始まるのでした。

既に働いて居る農夫もありました。黒々とした「ノツベイ」の島の側を過んでまゐりますと、一人の荒くれ男が汗汗に成つて、傍目をふらずに高を打つて居りました。大きな銀を打込んで、身を横にして仆れるばかりに土の塊を起す。氣の遠くなるやうな黒土の臭氣は芬として、鼻を衝くのでした。…板橋村を離れて、旅人の群にも逢ひました。

高原の秋は今です。見渡せば木立もところろ／＼。枝といふ枝は南向に生延びて、冬季に吹く風の勁さも思ひやられる。白樺は多く落葉して高く空に突立ち、細葉の楊柳は露るやうに低く隠れて居る。秋の光を透る風が騒しく吹渡ると、草は黄な波を打つて

動き回って、枯葉もうらがへりました。

こゝかしこに見える大石には秋の目があった。つて寂しい思をさせるのでした。「ありしをで」の葉を垂れ、弘法菜の花をもつのは安です。

「かしばみ」の實の落ちこぼれるのも安です。安には又、野の鳥も住み隠れました。笹の葉蔭に巣をつくる雲雀は、老いて春先ほどの勢も無い。鶉は人の通る物音に驚いて、時々草の中から飛立つ。見れば不恰好な短脚をひらげて、舞揚らうとしてやがて、パツタリ落ちるやうに草の中へ引隠れるのでした。

外壁の樹木の黄に枯々とした中に、まだ緑勝な葉をとどめたところも有る。それは水の流を旅人に教へるので、そこには雑木が生茂つて、泉に溜うて枝を垂れて深く根を浸して居るのです。

今は村々の農夫も秋の労働に追はれて、この高原に馬を放すものも少い。八つが嶺山脈の南の裾に住む山梨の農夫ばかりは、冬季の林に乏しいので、速く安まで馬を引いて来て、草刈集めて居りました。…」

これは主に舊道から見た光景だ。趣の深いのも舊道だ。

以前私は舊道の方をも取つて、歸り路に原の中を通つたこともある。其時は農夫の男女が林を満載した馬を引いて山梨の方へ歸つて行くのに逢つた。彼等は辨當を食ひながら歩いて居た。聞いて見ると往復十六里の道を歩いて、其間に林を刈集めなければ成らない。朝暗いうちに山梨を出ても、休んで辨當を食つて居る暇がないといふ。馬を引いて歩き乍らの辨當——實に忙しい生活の光景だと思つた。

斯様な話を私は同行のT君にしながら、舊道を取つて歩いて行つた。三軒家といふ小さな村を離れてからは人家を見ない。この高原が牧場に適するのは、林が多いからとのことだ。今は馬匹を見ることも少い。が、丘陵の起伏した間には、遊び廻つて居る馬の群も遠く見える。

白樺の下葉は最早落ちて居た。林葉や草のそよ／＼と殊に柳の葉の鳴る音を聞くと、風の寒い、日の熱い高原の上を旅することを思はせる。「まぐそ嵐」といふが八つが嶺の方の空に鳴ん

で居るのを見た。私達はところ／＼にある茶色の枯の立木をも見て通つた。それが遠い灰色の雲などを背景にして立つさまは、何となく茫漠とした感じを興へる。原にある一筋の細い道の傍には、紫色に咲いた花もあった。T君に聞くと、それは松葉草とか言つた。斯の邊は古い戦場の跡でもあつて、杜若海口の城主が甲州の武士と戦つて、戦死したと言傳へられる場所もある。

甲州境に近いところで、私達は人の背ほどの高さの木梨を見つけた。葉は落ち盡して、小さな赤い實が残つて居た。草を踏んで行つてその實を探つて見ると、まだ濃い。中には霜に打たれて、口へ入れると溶けるやうな味のするものもあつた。間もなく私達は甲州の方に向いた八つが嶺の側面が覆まれるところへ出た。私達は樹木の少ない大傾斜、深い谷々などを眼の下にして立つた。

「富士！」と學生は互に呼びかはして、そこから高い峻しい坂道を甲州の方へと下りた。

七

落葉の一

毎年十月の二十日といへば、初霜を見る。雑木林や平坦な耕地の多い武蔵野へ来る冬、凄々とした感じの好い都會の霜、左様いふものを見慣れて居る君に、斯の山の上の霜をお目に掛けたい。この桑島へ三度か四度もあの霜が来て見給へ、桑の葉は忽ち縮み上つて焼け焦げたやうに成る、高の土はボロボロに爛れて了ふ。…見ても可恐しい。猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ。そこへ行くと「雪の方はまだしも感じが柔かい。降り積る雪はむしろ平和な感じを抱かせる。

十月末のある朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために色づいた柿の葉が面白いやうに地へ下るのを見た。肉の厚い柿の葉は霜のために焼け損はれたり、縮れたりもしないが、朝日があたつて来て霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで脆く落ちる。しばらく私はそこに立つて、茫然と眺めて居た位だ。そして、其朝は殊に烈しい霜の来た事を思つた。

落葉の二

十一月に入つて急に寒さを増した。天長節の朝、起出して見ると、一面に霜が来て居て、桑島も野來島も家々の屋根も皆な白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋もれる許りであつた。すこしも風は無い。それで居て一葉二葉づつ静かに地へ下る。屋根の上の方で鳴く雀もいつもよりは高きささしまささうに聞えた。

空はドンヨリとして、霧のために全く灰色に見えるやうな日だつた。私は勝手許の焚火に凍えた兩手をかざしたく成つた。足袋を穿いた爪先も寒くしみて、いかにも可恐しい冬の近よつて来ることを感じた。斯の山の上に住むものは、十一月から翌年の三月まで、ほとんど五ヶ月の冬を過さねば成らぬ。その長い冬籠りの用意をせねば成らぬ。

落葉の三

木枯しが吹いて来た。十一月中旬のことであつた。ある朝、私は湖の押寄せて来るやうな音に驚かされて、眼が

覺めた。空を渡る風の音だ。時々それが沈まつたかと思ふと、急に復た吹きつける。戸も鳴れば、障子も鳴る。殊に南向の障子にはバツ／＼と木の葉のあたる音がして其間には千曲川の何音も平素から見るとずつと近く聞えた。障子を開けると、木の葉は部屋の内までも舞込んで来る。空は晴れて白い雲の見えるやうな日であつたが、裏の流のところに立つ柳などは烈風に吹かれて髪を振ふやうに見えた。枯々とした桑島に茶褐色に残つた葉葉なども左右に吹き舞いて居た。

其日、私は學校の往と還とに停車場前の道を横ぎつて、直線帽子やフランクの布で頭を包んだ男だの、手拭を冠つて兩手を袖に隠した女だの、行き過ぎるのに遇つた。往來の人はいづれも鼻汁をすつたり、血縁を紅くしたり、あるひは涙を流したりして、顔色は白ツぱく、頬、耳、鼻の先だけは赤く成つて、身を縮め、頭をかぎめて、寒さうに歩いて居た。風を背後にした人は飛ぶやうで、風に向つて行く人は又、力を出して物を押すやうに見えた。土も、岩も、人の皮膚の色も、私の眼には灰色に見えた。日光そのものが黄ばんだ灰色だ。

その日の木枯が野山を吹きまくる光景は凄まじく、烈しく又勇ましくもあつた。樹木といふ樹木の枝は折れ、骨も折れ、柳、竹の類は草のやうに靡いた。柳の實で梢に残つたのは吹き落された。梅、李、櫻、桐、銀杏などの霜葉は、その一日で悉く落ちた。そして、そこに葉まつた落葉が風に吹かれては舞ひ揚つた。急に山々の景色は淋しく、明るく成つた。

炬燵話

私は君に山上の冬を待受けることの奈様に恐るべきかを語した。しかしその長い寒い冬の季節が又、信濃に於ける最も趣の多い、最も楽しい時であることを告げなければならぬ。

それには先づ自分の身體のことを語さう。左様だ。斯の山國へ移り住んだ當時、土地慣れない私は風邪を引き易く困つた。斯様なことで遠いで行かれるかと思ふ位だつた。實際人間の器官は生活に必要な程度に應じて發達すると言はれるが、丁度私の身體にもそれに適したことが起つて来た。次第に私は烈しい氣候の刺激に抵抗し得るやうになつた。東京に居

た頃から見ると、私は自分の皮膚が殊に丈夫に成つたことを感ずる。私の肌は極く冷たい山の空氣を呼吸するに堪へられる。のみならず、私は春先迄枯葉の落ちないあの樹林を鳴らす寒い風の音を聞いたり、眞白に霜の来た高層を眺めたりして、屋の外を歩き廻る度に、斯ういふ地方に住むものでなければならぬやうな、一種刺すやうな快感を覺えるやうに成つた。草木までも、こゝに成長するものは、柔い氣候の中にあるものは違つて見える。多くの常緑樹の葉がこゝでは重く黒ずんで見えるのも、自然の消息を語つて居る。試みに君が武蔵野邊の緑を見た眼で、こゝの裸地に繁茂する赤松の林などを望んだなら、色彩の相違だけでも驚くであらう。

ある朝、私は深い霧の中を學校の方へ出掛けたことが有つた。五六時先は見えないほどの道を歩いて行くと、これから野面へ働きに行かうとする農夫、番小屋の側にシヨンボリ立つて居る線路番人、霧に濡りながら貨物の車を押す中年者の男などが迷つた。そして私は——私自身それを感ずるやうに——斯の人達の手などが頬紅に照れるほどの寒い朝でも、皆

な見かけほど氣候に應じては居ないといふことを知つた。

『奈何です、一枚着やうぢやありませんか——』斯様なことを言つて、皆な歩き廻る。それでも温熱が取れるといふ風だ。

それから私は學校の連中と一緒に成つたが、朝霧は次第に晴れて行つた。そこいらは明るく成つて来た。淺間の山の裾もすこし顯れて来た。早く行く雲などが眼に入る。ところ／＼に濃い青空が見えて来る。そのうちに西の方は暗れて、ゴツと日が映つて来る。淺間が全く見えるやうに成ると、でも冬らしく成つたといふ氣がする。最早あの山の麓にも白雲のやうな雲が覆まれる。

小 六 月

氣候は變返す。温暖な平野の地方ではそれは

ど際立つて感じないやうなことを、こゝでは切に感ずる。寒い日があるかと思ふと、また寒さに暖かい日がある。それから復た一層寒い日が来る。いくら山の上でも、一息に冬の底へ沈んで了はない。秋から冬に成る頃の小春日和は、斯の地方での最も忘れ難い最も心地の好い時の一つである。俗に「小六月」とはその樂しさを言ひ顯した言葉だ。で、私はいくらか斯の話を引展して、もう一度十一月月上旬に立返つて、左様いふ日あたりの中で農夫等が野に出て働いて居る方へ君の想像を語らう。

小春の同遊

風のすくない、雲の無い、温暖な日に屋外へ出て見ると、日光は眩しいほどキラ／＼輝いて、静かに照めることも出来ない位だが、それで居ながら日陰へ寄れば全然寒い——處は寒く、光はなつかしい——斯の暖かさと寒さとの混じ合つたのが、楽しい小春日和だ。

左様いふ日のある午後、私は小諸の町裏にある赤坂の田圃中へ出た。その邊は勾配のついた岡ついで、田と田の境は例の石垣に成つて居る。私は枯々とした草土手に身を寄せ掛

て、眺め入つた。手廻りの好い農夫は既に收穫を終つた頃だ。近いところの田には、高い土手のやうに箱を積み重ね、穂をこぎ落した藁はその邊に置き並べてあつた。二人の丸顔に結つた女が一人の農夫を相手にして立働いて居た。男は雇はれたものと見え、鳥打帽に背の筒といふ小作人らしい風體で、女の機織を取り／＼親の依を造つて居た。そのあたりの田の面には、斯の一家族の外に、野に出て働いて居るものも見えなかつた。

古い茶形帽を冠つて、黄菊一株提げた男が、その田圃道を通りかゝつた。

『まあ、一服お喫ひ。』と呼び留められて、茶形帽と鳥打帽と一緒に石垣に寄りながら煙草を煙し始めた。女二人は話しく／＼働いた。

『金さん、お日はどうです——それは結構——あゝ、あゝ、さうとも——』など、女の語る聲が聞えた。私は屋外に目を送ることの多い人達の生活を思つて、聞くともなしに耳を傾けた。振返つて見ると、一方の畦の上には菅笠、下駄、辨當の包らしい物などが置いてあつて、

そこで男の煙草の煙が日の光に青く見え

た。「さいなら、それぢやお静かに。」

と一方の形骸はやがて別れて行つた。

鳥打帽は銀を執つて田の土をすこしナラし始

めた。女二人が鎖と親を張つたり、稲こぎし

たりして居るに引替へ、斯の雇はれた男の方は

はかしく仕事もしないといふ風で、すこし

働いたかと思ふと、直に銀を杖にして、此方を

眺めてはボンヤリと立つて居た。

同達は光の海であつた。黒ずんだ土、不規則

な石垣、枯々な桑の枝、群の草、田の面に乾し

た新しい草、それから遠くの方に見える森の

梢まで、小春の光の光ち溶れて居ないところは

無かつた。

私の眼界にはよく働く男が二人までも入つ

て来た。一人は近くにある田の中で、大きな銀

に力を入れて、土を起し始めた。今一人はいか

にも背の高い、瘦せた、年寄な農夫だ。高い石

垣の上の方で、林草の茶色に見えるところに牛

身を馴して、モミを打ち始めた。遠くで、その

男の姿が隠れる時でも、上つたり下つたりす

る穂だけは見えた。そして、その穂の音が遠い

もまた彼等の心には入れない。

何だなんて聞いても、名を知らないのが多い位

に、澤山いろ／＼と御座います。」

「好きな辰さんの父親は、女徳、男徳のこ

とから、渡間の裾で砂地だから稲も良いのは作

れないこと、小藁高へ来る鳥、稲田を比すとい

ふ鳥類の話を私にして聞かせた。地獄

時」と言つて、同じ鳥の種を高くにも、農夫は

地獄に落ちたことを考へるといふ話もした。

小藁は東西の風をうけるから、南北に向つて「ウ

午後の三時迄、其日私は赤坂裏の田圃道を歩

き廻つた。

そのうちに、高岡の柿や雑木に雀の群のかし

ましいほど鳴き騒いで居るところへ出た。刈取

られた田の面には、最早青い麥の芽が二寸ほど

も延びて居た。

急に私の背後から下駄の音がして来たかと

思ふと、ぱつたり立止つて、向うの石垣の上の

方に向つて呼び掛ける子供の聲がした。見ると

茶色になつた藁高を隔て、親子二人が収穫を

急いで居た。子供は茶の入つたことを知らずに

来たのだ。信州人ほど茶好きな人達も少なからう

と思ふが、その子供が復た騙出して行つた後で

も、親子は時を惜むといふ風で、母の方は稲穂

をこぎ落すに飽きなく、息子はその親を叩く方

に廻つてすこしも手を休めなかつた。遠く離れ

ては居たが、手拭を縫つた母の身を運べつ縮め

つするさまも、息子のシャツ一枚に成つて後ろ

向に働いて居るさまも、よく見えた。

子供に彼様なことを言はれると、私も明瞭が

乾いて来た。

家へ歸つて濃い熱い茶に有付きたいと思ひ午

後

ら、元来た道を引返さうとした。斜めに射して

来た日光は黄を帯びて、何となく遠近の眺望が

改まつた。岡の向うの方には數十羽の雀が飛

び集つたかと思ふと、やがてまたバツト散り隠

れた。

君は何程私が農夫の生活に興味を持つか

といふことに氣付いたのであらう。私の話の中

には、幾度か農家を訪ねたり、農夫に話し掛け

たり、彼の働く光景を眺めたりして、多くの

時を遣つたことが出て来る。それほど私は値

きない心地で居る。そして、もつと／＼彼等を

よく知りたと思つて居る。見たところ、〇〇

で、質素で、簡潔で、半ば野外にさらけ出され

たやうなのが、彼等の生活だ。しかし彼等に近

づけば近づくほど、隠れた、複雑な生活を營

んで居ることを思ふ。同じやうな服装を着け、

同じやうな農具を携へ、同じやうな耕作に従

つて居る農夫等。譬へば、彼等の生活は極く地

味な灰色だ。その灰色に幾通りあるか知れない。

私は学校の暇々に、自分でも銀を執つて、すこ

しばかりの野菜を作つて見て居るが、どうして

「後田が養ひますナ。」

と告な言ひなつた。

私は驚かされた土の香を嗅ぎ、弱つた蟲の聲

を聞きながら、隠居から身の上話を聞かされ

た。斯の人は六十三歳に成つて、まだ耕作を休

まずに居るといふ。十四の時から食、古の道

樂を覚え、三十時代には十年も人力車を引いて

自分が小藁の車夫の初だといふこと、それから

同居する大藁の専らなもして、鐵道に親を引つ

ぶされてから其男も次第に、安落したことを話

した。

「お百姓などは、能の無いものゝ爲すこんで

す。」

と隠居は自ら嘸るやうに言つた。

其時、要の白い、背の高い、勇健な體格を具

へた老農夫が、同じ年寄好な仲間と並んで、い

收 獲

ある日、復た私は光高寺の橋手を通り掛け

えた。灰白い夜の雲も穿まれた。

深山の燈影

赤々と硝子に燃る燈火を見た時の私達の
喜びは言へやうもなかつた。私達は漸くの
ことと清水の山小屋に到着した。
小屋の主人はまだ月明りの中へ何か片付け
て働いて居る様子であつた。私達は小屋へ入
つて、我々の足を見せ、脚絆のまゝで横造に寛
いだ。W君は毛布を身に纏ひながら、
『本家の小僧さんが、お竹さんにどうか明日は
大根洗ひに降りて来て下さい。』それにK
さんの結婚が来ましたから、小僧さんも見せた
いから。それは立派なのが出来ましたよ。』
お竹さんは吾人の細君のことで、本家の小僧
さんとは小僧を川がけに私達にすこしは多く
米を持って行けと注意して呉れた人だ。W君
は斯の人達と親交で、話しても憎くない。
米を入れた頭際袋、牛肉の燻製、それから
から一かけの半端なそば、土産がはりにそこへ
取出された。
吾人は小屋へ入りがけに、
『肉には葱が宜しうござせうナア。』

と亭主は言つて、色の黒い野鼠が斯の小屋へ
来ていたづらをする事など、山の中らしい話
をして笑つた。
『すこし煙たくなつて来たナア。開けるか。』と
W君は起上つて、細目に小屋の障子を開けた。
しばらく屋外を眺めて立つて居た。
『あ、好い月だ、清えんとして。』
と言ひながら斯の向角が光に反る頃は、銅から
白い泡を吹いて、湯氣も立のぼつた。
『さア、もういよ。』
『肉を入れて下さい。』
『どれ入れるか。』一寸待てよ、芋を見て――』
亭主は貝殻で芋を一つ指つた。それを銅蓋の
上に載せて、いくつかに割つて見た。芋は肉を
入れても可い程に煮えた。そこで新聞紙包が
解かれ、竹の皮が開かれた。赤々とした牛の肉
がすこし白い脂肪も混つたのを、亭主は箸で銅
の中に入れた。
『どうも仕さらなむひがする。斯様な物土産な
ら毎日でも頂きたい。』と亭主がW君に言つた。
細君は戸棚から、茶碗、茶筒、湯瓶などを取出
し、飯は直に釜から盛つて出した。
『どうも、やすか、斯の煙道の方がめづらしくて

と言ふと、W君も笑つて、
『あ、葱は結構。』
『序に、芋があつたナア。左様だ、芋も入れ
るか。』と吾人は屋外へ出て行つて、葱、芋の
切へたのを持つて来た。やがて煙道へドツカと
落し、ぶす／＼燃る薪木と大火箸であらけ、ば
つと燃えかけたところへ、煙の皮を折りくべた。
火勢が盛んに成ると、皆の顔も赤々と見え
た。
吾人はまだ年も深く、前の年の四月にこゝへ
引移つて、五月に細君を迎へたといふ。火
の煙は細かに輝きまはす小いけれど、正直な
るほど好きな性質を表して居た。話をしては人
きく口を聞いて、話を振る、吾の見える程に笑
ふのが癖のやうだ。その欠け方はすこし無作法
ではあるが、包み隠しのないところは趣味の無
い面白い若者が、直に腹意に成れさうな人だ。
細君はまた吾人の聞き者で、顔色の赤い、髪
の厚く黒い、どこかにまだ知らしむところの皮
つた、若くもつた女だ。まことに似合つた好い
若夫婦だ。
部屋の方は暗いランプに照らされて居て、煙
道のみ明るく見えた。小屋の庭の隅には葱が

好うござせう。』
と細君に言はれて、私達は其火を眺め、夕
飯を始めた。其時は他程空腹を感じて居た。
『さア、肉も煮えやした。』と細君は給仕しなが
ら、湯桶に言つた。
『お竹さん、湯を下さい。』と、澤山頂きます
から。』とW君も心易い調子で、『うまい、斯の
葱はうまい。熱、熱、フウ〜。』
『どうも寒い時は肉に限りませうナア。』と亭主は
一筋にやつた。
三杯ほど肉の汁をかへて、私も感心な食欲
を満した。私達二人は湯をゆるめるやら、
洋服のズボンをゆるめるやらした。
『さア、おかへなすつて――山へ来て御飯がま
づいなんて仰有る方はありませんよ。』
と細君が言ふうち、つとW君の前にあつた茶
碗を引きたかつた。W君はあわて、茶碗返さ
うとするやうに手を伸ばしたが、間に合はなかつ
た。細君はまた一ぱい飯を盛つて勧めた。
W君は喉ひながら頭を抱へた。『ひどい〜
〜ひどくやられた。』
『えッ、やられた。』と亭主も笑つた。
『その位はいけやせう。』

置いてあつて、そこから煙が登り始めた。飯を
たくも聞えて来た。細君はサク〜と葱を切
りながら、
『私は幼少い時から寂しいところへ育ちやし
たが、斯の山へ来て慣れる迄には、飯食に成し
い思をいたした。』
斯う山日の話を聞いて聞かせる。亭主も私達
が訪ねたことを聴き、さうに、その年作つた
といふ話の出来などを語り聞かせて夫婦して夕
飯の支度をして呉れた。煙には馬に食はせると
かの馬鈴薯を煮る大鍋が掛つてあつたが、それ
が小僧に取替へられた。細君が芋を入れ、小僧
主はその上へ蓋を載せる。私達は『手廻り提げ
ても』といふ俗話にあるやうな生活の眼のあ
たり見た。
小僧は肉の香を嗅ぎつけて新聞紙包の傍へ
鼻を押しつけ、亭主に叱られた。やがて私達の
後を越つて湯桶なくW君の脚に上つた。野郎
と復た亭主に叱られて煙道に踏み、寒さに火を
眺め目を細くした。
『私はこの猫といふ奴が大嫌ひですが、本家で
もつて無理に貰つて呉れつて、連れて来やし
た。』

『どうして、もう深山に居て、實際入りませ
ん。』とW君は、息を吐いた後で、『チ、それぢや
やるか。どうも一ぱい食つた。』え、香の物
でやれ。』
楽しい笑聲の中に、私は夕飯を済ました。
『お前も御馳走に成れ』といふ亭主の語で、細君
も飯を始めた。戸棚の中に入れられた小僧は、
物欲しさに叫びた。山の中のこと、亭主は
牛肉を包んだ新聞紙をもめづらしさうに展げて
讀んだ。W君はあまり話込み過ぎたかして、毛
布を冠つたまま、暫時あをのけに倒れて居た。
炭火、鬼符の語などが夫の口からかはる
がはる話された。やがて細君も湯を片付け、馬の
飲料にとフスマを入れた大鍋を煙に掛け、馬の
ある夜この山の中で夫の留守に風が吹いて新
築の家の倒れたこと、もし斯の小屋の方へ倒れ
て来たら、其時は馬を引出さうと用意したに、
何方に倒れて、可憐しい思ひをしたことを話し
た。めつたに外へ泊つたことの無い夫が其晩に
限つて本家で泊つたことも話した。
新築の家といふは小屋に近く建てあつた。
私達は其家の傍へ案内されて、そこで一晩泊
めて貰つた。漸く昔話が出来たばかりだとか、

置いてあつて、そこから煙が登り始めた。飯を
たくも聞えて来た。細君はサク〜と葱を切
りながら、
『私は幼少い時から寂しいところへ育ちやし
たが、斯の山へ来て慣れる迄には、飯食に成し
い思をいたした。』
斯う山日の話を聞いて聞かせる。亭主も私達
が訪ねたことを聴き、さうに、その年作つた
といふ話の出来などを語り聞かせて夫婦して夕
飯の支度をして呉れた。煙には馬に食はせると
かの馬鈴薯を煮る大鍋が掛つてあつたが、それ
が小僧に取替へられた。細君が芋を入れ、小僧
主はその上へ蓋を載せる。私達は『手廻り提げ
ても』といふ俗話にあるやうな生活の眼のあ
たり見た。
小僧は肉の香を嗅ぎつけて新聞紙包の傍へ
鼻を押しつけ、亭主に叱られた。やがて私達の
後を越つて湯桶なくW君の脚に上つた。野郎
と復た亭主に叱られて煙道に踏み、寒さに火を
眺め目を細くした。
『私はこの猫といふ奴が大嫌ひですが、本家で
もつて無理に貰つて呉れつて、連れて来やし
た。』

戸のかはりに唐紙を押しつけ、その透間から月の光も透れた。私達は毛布にくるまり、燈火も消し、寝て話もせずに眠った。

山の上の朝飯

翌朝の三時頃から、同じ家の内に泊つて来た土方は最早起き出す様子だ。斯の人達の語聲は、前の晩遅くまで聞えて居た。雄子の鳴聲を聞いて、私達も朝早く床を離れた。

私達は重なり疊つた山々を眼下の下に望むやうな場所へ来て居た。谷底はまだ明けきらぬ。深い八ヶ岳は灰色に包まれ、その上に紅い雲が覆引いた。次第に山の端も輝いて、紅い雲が淡黄に変わる頃は、前夜直前であつた落葉松の林も見えて来た。

亭主と連立つて、私達は小屋の周囲にある玉泉寺の古剎などの間を見て廻つた。大根を乾した下の箱の中から、家鴨が二羽ばかり這出した。そして喜ばしうに羽ばたきして、そこいらにこぼれたものを拾つては、首を縮めたり、黄色い口を開き掛つたり、ひよふ／＼と歩き廻つたりした。

馬が首を出して、鼻をアル／＼言はせた。冬の季節のことだから毛も長く伸び、背は高く、目は優しく、肥大な骨格の馬だ。亭主は例のフスマ、草、葱のうでたのを混ぜ、ウタを加へて揉みし、それを大根に入れて、馬小屋の籠に掛けて置つた。馬はあまえて、朝飯欲しさうな顔付をした。「廻つて来い。」と亭主が言ふと、馬は主人の言葉を聞かずに、ぐるりと一度小屋の内を廻つた。「もう一度——」と復た亭主が馬の鼻を押した。それから馬の可憐な動物は籠の中へ首を差込むことを許された。馬がゴト／＼と食ふ物で、亭主は一千九百の白水が一流に流れることを話して、私達を驚かした。

雲國のクリスマス

クリスマス之夜と其翌日は私は長野の方で送つた。長野調候所に技手を勤むる人から私は招きの手紙を受けて、未知の人々に逢ふため私達にはめづらしい。

九

雲國のクリスマス——雲國の調候所——と言つた丈でも、すでに何物か君の想像を動かすものがあるであらう。しかし私はその話を君にする前に、いかに斯の國が野も山も雪のために埋もれて行つたかを話したいと思ふ。

毎年十一月の二十日前後には初雪を見る。あの時は小諸の住居で眼が覚めると、思ひがけない大雪が来て居た。霧の様に細かい雪の降り積むのが、斯ういふ土地の特色だ。あまりに周囲の光景が白々として居た爲か、私の眼にはいくらか青味を帯びて見える位だつた。朝通ひの人達が、下駄の面につく雪になやみながら往來を迫るさまは、恰も暗夜を行く人に異ならない。

赤い布で頭を包んだ草鞋穿の小學生徒の群、町家の軒下にワゴンボリと佇立む鶴、それから停車場のほとりに貨物を満載した車の上に乗つて雪の積つたさまを見るとき、降つた、降つた、と左様思ふ。私は雲古國の松に掛つた雪

が、時々崩れ落ちる處に、凍々とした白い煙を擧げるのを見た。谷底にある竹の林が皆草のやうに臥て了つたのを見た。

岩村田通ひの馬車が斯の雪の中を出る。馬丁の吹き鳴らす喇叭の音が起る。薄い草を掛けた馬の身はピツショリと滑れて、細く凍れた。馬からは雪が滴る。ザク／＼と音のする雪の路を馬車の輪が滑り始める。白く降り埋んだ道路の中には、人の往來の跡だけ一筋赤く上の色になつて、うね／＼と印したさまが眺められる。

家ごとに出て雪をかく人達の混雑したさまも、斯ういふ土地でなければ見られない光景だ。薄い霧が霧かき来て雪のあとの町々を立ち取めた。その日の黄昏時のことだ。晴れたナと思ひながら門口に出て見ると、ばら／＼と冷たいのが雪にかゝる、ヤア降つてるのかと、思はず愛に響くと、霧のやうに見えたのは矢張り細かい雪だといふことが知れる。二度ばかり掻取つた跡もまた薄白くなつて、夜に入れば、時々家の外で下駄の雪を滑す音が、ハタ／＼と聞える。自分の家へ客でも訪れるのかと思ふと、それが往來の人々であるには驚かされる。雪明りで、晴やかなにも雪は融る事が出来

る。町を通ふ人々の提灯の光が、夜の雪に映つて、花やかに明るく見えるなとも Picturesque だ。

君は斯の國に於ける雪の第一日あらましを君に話つた。斯の雪が降り降り降つては了はないことを、君に思つて見て貰ひたい。殊に寒い日だ、庭だとか、歩道の屋根だとかには、何時までも消え残つて、降り積つた上へと復た積るので、その雪の凍つたのが春までも待たずことを思つて見て貰ひたい。

しかし、これだけで来た、私が斯ういふ雲國に居るといふ感じを君に傳へるには、不十分だ。その雪の来た翌日になつて見ると、屋根に残つたは、一尺ほどで、軒先には細い氷柱も垂下り、庭の林檎も倒れ臥して居た。霧の聲まで遠く聞えて、何となくすべてが引被せられたやうに成つた。雪の翌日には、きまりで北の障子が明るくなる。灰色の空を通して日が照し始めると雪は光を含んでキラ／＼輝く。見るもまぶしい。軒から垂れる雪の音は、日がな一日單調な、退屈な、倦しく寂かな思をさせる。更に小諸町裏の田圃側へ出て見ると、後々と萌え出した草などは皆な白く埋もれて、間つき

てに私は雪の積つた暗い町々を通つた。時々私は技手と一緒に凍つた杖を杖に足をつけて、後都の方へ走つた。女連の笑聲を聞くこともあつた。その高い楽しい笑聲が、寒い冬の空気に響いた時は、一層雪國の夜のやらしい思ひをさせた。後に成つて私は、若い牧師夫人が二度ほど滑つて倒んだことを知つた。

赤々とした燈火は會堂の窓を透れて居た。そこに集つて居た多勢の子供と共に、私は町舎らしいクリスマスの歌を聴いた。

長野測候所

「長野測候所、私は親切な技手に作られて、長野測候所のある町の上に登つた。」

「途次技手は私を顧みて、ある小説の中に有名な朝の霞の赤色なるを記したところが有つたと記憶するが、霞は白い處を行くのだから、赤くなるといふことは如何などと語つた。流石専門家だけあつて話すことがすべて精しかつた。測候所は建物としては小さいが、眺望の好い位置にある。そこは東京の氣象臺へ宛てて日毎の報告を送る場所に通きないと言ふけれども、萬般の測候は始めての私にはめづらしく

思はれた。雲がやがて雪を降しつゝ、日を送る人の生活なども、私の心を引いた。

「やがて私は技手の後を離れて、寒い雪道を昇り、測候所の上へ出た。朝の長野の町の一部がそこから見渡される。向うに連なる山の裾には冬らしい霧が立ち昇り、その間の空處などところだけ後が明かに透けて見えた。」

「風力を測る器械の側で、技手は私に、要風雨の前の雲——例へば廣闊な海岸の地方で望まれるやうなものは、その全形を斯の信濃の地方で望み難いことを話して呉れた。その理由としては、山が高くて、氣流の測候から雲はちぎれちぎれに成るといふ説明を加へて呉れた。」

「雲の多いのは冬ですが、しかし雪割です。雲の多いと言つたら、矢張り夏でせう。夏は——雲の量に於いては——冬の次でせうかな。雲の妙味から言へば、私は春から夏へかけてだらうと思ひますが……」

「斯う技手は言つて、それから私達の頭の上を流る霞の霞の雲を眺めて居たが、思ひ付いたやうに、

『あの雲は何と何と云ふか。』

と私に指して覗いた。

馬牛の一

の起き伏すさまは、さながら雪の波の押し寄せて来るやうである。流石に田と田を區別する低い石垣には、大小の石の両も置かれ、黄ばんだ草の葉の垂れたのが見られぬでもない。遠い森枯々な梢、一帯の人影、すべて柔かに深い藍色を帯びて見える。斯の藍色——もしくは少しし紫色を帯びたのが、これからの色彩の基調かとも言ひたい。暗闇として、いかにもおぼつかないやうな蒼然しむ世界の方へ、人の心を連れて行くやうな色調だ。

翌々日に私はまだ無雪といふ方の谷間へ出たことがあつた。日光が恐しく烈しい勢で私に迫つて来た。四面皆雪の反射は殆んど堪へられなかつた。私は眼を開いてハッキリ物を見ることも出来なかつた。まぶしいところは通り過ぎて、私はほと／＼痛いやうな日光の反射と熱とを感じた。そこはだら／＼と次第下りに谷の方へ落ちて居る地勢で、高低の差別なく川原もしくは桑畑に成て居る。一段々々と馴んで落ちて居る地層の側面は、焦茶色の枯草に掩はれ、ところ／＼綺麗な土のあらはれたる場所もある。その赤土の波の上は枯々たる桑畑で、ウネナリに白い雪が積つて、日光の輝きを受

けて居た。其大波を越えて、勢の山脈が望まれ、遂かに日本アルプスの高い山々も見えた。其日は私は千曲川の雄しい音を立て、流れるのを聞いた。

「斯様な風にして、滑つたと思ふのが復た積り、雪れた道は土は復た融れ、十二月に入つて曇つた空が續いて、日の光も次第に遠く薄く射すやうに成れば、周囲は半ば凍りつめた世界である。高い山々は雪嵐に包まれて、全體の姿を顯す日も稀だ。小諸の停車場に架けた電線からは水が溢れて、それで太い氷の柱のやうに成る。小諸は降らない日でも、彼後の方から上つて来る汽車の屋根の白いのを見ると、ア彼方は降つてるなと思ふこともある。冬至近くに成れば、水もつかぬ水蒸氣の群が細線の集合の如く寒い空に響り、その響けとした趣は目混なほどに殊に私の心を引く。其頃には、軒の水柱も次第に長くなつて、尺餘に及ぶものもある。草葺の屋根を得ふ濁つた雪が滑るのだから、茶色の長い剣を見るやうだ。積りに積る雪はやがて縁側より高い。その間から雪を出す石楠花などを見ると葉は寒さうにべたりと垂れ、強い雪だけは大きく強く附着して居る。冬籠

りする土の中の蟲同様、寒氣の強い或なぞは、私達の身體も凍こまつて了ふ……」

「斯ういふ寒さと、凍つた空気を歩いて、私は未知の人々に逢ふ楽しみを想像しながら、クリスマスのあるといふ日の暮方に長野へ入つた。測候所の技手の家を訪ねると、主人はまだ若い人で、草履にあたりながら氣象學の話や、文學上の精しい引論などが、私の心を榮しませた。ラスキンが「近代畫家」の中にある雪の研究の語なども出た。ラスキンが雲を三層に分けた頃から思ふと、九層の分類にまで及んだ近時の雲形の研究は進んだものだ。斯う主人が話して居るところへ、ある婦人の客も訪ねて来た。

「私が主人から紹介されたその若い婦人は、牧師の婦人で、婦人が親しい友達であるといふ。快活な聲で笑ふ人だつた。その晩飯はクリスマスの唱歌で、その夫人の手に成つたものも有るとのことだつた。やがて隣室を覗ふ時刻も近づいたので、私は連立つて技手の家を出た。

「私が案内されて行つた會堂風の建物は、丁度坂に成つた町の中途にあつた。そこへ行くま

鐵道草

とは随分物敷な話だとは思つたが、しかし私の意は物々として解へ難いものがあった。朝早く私は上田をさして小諸の住居を出た。小諸停車場に汽車を待つ客も少い。開夫等は集つて散留の遊びをして居た。田中まで行くと、いくらかお客を加へたが、その田舎らしい小さな車は本末より更に閑静で、停車場の内へ女子供の群子をつつまさき、汽車の窓から見た。

初春とは言ひながら、寒い裏はんだ朝日が車窓の硝子に射し入つた。窓の外は、枯々な木立さびしく、野にある人の影もなく、ひっそりとして雪の白く残つた谷々、石垣の間の桑島、茶色な標の妙葉などが、私の眼に映つた。車中にも数へるほどしか乗客がない。隣のところに古い帽子を冠り、古い外套を身に纏ひ赤い毛布を敷いて、まだ十二月らしい顔付しながら、さびしうに居眠りする職員もあつた。斯うした汽車の中で目を凝つて居る人達のことと思ひやられた。(この山の上の所謂な道生活に堪へ得るものは、實際は旅後人ばかりであるとか。)

へ、敬遠を以て開いた土地だ。この一帯の風景といふものも畢竟地勢の然らしむるところで、小諸のやうな砂地の傾斜に石垣を築いて其上に骨の折れる生活を営む人達は、勢ひ實業に成らざるを得ない。寒い氣候と狭れた土地とは自然に勤勉な人達を作り出した。この島からは上州のやうな豊富な野菜は受取れない。堅い地大根の澤庵を噛み、朝飯の汁に用ひて働くのは小諸である。十年も昔に流行つたやうな紋付羽織を脱ぎ不潔に着用して、それを取ともせず、舌むしる粗服を誇りとするが小諸の且節である。けれども私は小諸の言葉も一種の形式主義に落ちて居るのを認める。私は、他所で着て来たやばらか物を以てそれを粗服に着更へながら小諸に入る若い旅後人のある一とを知つて居る。要するに、表面は美しく見せて其實態は、表面は無愛想でも其内深切な貴ぶのが小諸だ。これが生活上の形式主義を産む所以であらうと思ふ。上田へ来て見ると、都會としての規模の大小はさて置き、又實際の殷富の程度は兎に角、小諸ほど陰鬱で重々しくない。小諸の商人は買ひたか御買ひなさいといふ無愛想な加付をして居て、それで割合に良い品を

安く賣る。上田ではそれほどノンキにして居られない事情があると思ふ。絶えず周圍に心を配つて舊い城下の繁昌を維持しなければ成らないのが上田の位置だ。店々の前につけを見て、驚つて顧客の注意を引くやうに、快く出て居る。鹽、鹽前太物、其他上田で小賣する商品の中には、小諸から供給する荷物も少くないといふ。

死地に赤かれ行く牝牛はむしる冷痛で、口には茶色のちるみを帯びて居た。皆な立つて眺めて居る中で眼は彼方此方と牛の周圍を廻つて歩きながら、皮をつまみ、咽喉を握へ、角を叩きなどして、最後には尻尾を揺上げて見た。検査が済んだ。屠手は多勢寄つて群つて、群を眺ましたり、呟つたりして、チツとそこに動かない牛を無理やり屠場の方へ引かされた。屠場は数個で、丁度屠場の廣い流し場のやうに流されて居る。牛の頭を引すまして、屠手の一人は頸引を前後の間に投じた。それを、ツツと引絞ると、牛は中心を保てない姿勢に成つて、重い體を横倒しに板の間の上へ倒れた。その前額あたりを日がけて、仰の大鏡の鋭い尖つた管を骨を砕けよとばかりに打ち込む

ものがあつた。牛は目を廻し、足をややくくくして、鼻息も白く、剛かな鳴き聲を残して置いて、鼻息も絶えんとした。斯の南部牛のまだ氣息の残つたのを取纏いて屠手のあるものは尻尾を引き、あるものは頸引を引張り、あるものは出刃でもつて咽喉のあたりを切つた。そのうちに多勢して、倒れた牛の上に乗つて、茶色な腹の邊と言はず、脊と言はず、とん／＼踏みつけると、赤黒い血が切られ、咽喉のところで流れ出した。砕けた前額の骨の間へは棒を深く差込んで攪り廻すものもあつた。氣息のあるうちは、牛は鼻を悶えて、呻いたり、足をヒク／＼させたりして苦んだが、血が流れ出した頃には全く氣息も絶えた。黒い大きな牛の倒れた姿が、前後の間は一本づつ屠場の柱にく／＼りつけられたまゝ、私達の眼前に横はつて居た。屠手の一人はその茶色な腹の皮を縦に裂いて、見る間に皮を剥ぎ始めた。また一人は、仰の大鏡を振つて、牛の頭を二つ／＼打つ／＼に、白い尖つた角がポロリと板の間へ落ちた。斯の南部牛の黒い毛皮から、白い脂肪に包まれた中身が顯はれて来たのは、間もなくであつた。

屠牛の二

黒い外套に鼻打帽を冠つた屠者が入つて来た。人々は互に斯の挨拶を取換した。屠手の群はいづれも白い袖を捲き、素足に赤飯草履といふ驚さうな風體で、それ／＼太刀を握める。庭の隅にかいんで鋭い出刃を磨き居るものもある。肉屋の亭主は板扉に立て掛けてあつた大鏡を取つて私に示した。屠場を見らやうな道具だ。一方に五六寸ほどの尖つた鐵管が附けてある。あの柄には鋭いた牛の血が滴着して居た。屠場に用ゐるのだ。肉屋の亭主は着居た調子で、前には太い針の形をしたのを用いたが、斯の管状の方が丈夫で、打撃に力が入ることなどを私に説明した。

屠場の黒い牝牛が、やがて中央の庭へ引出

屠場の黒い牝牛が、やがて中央の庭へ引出

赤い牛が馬場へ引かれて来た。

屠牛の三

赤い牛に続いて、黒い種の特も、赤の如く、馬場に集られた。屠場には三頭の牛の體が横はつた。ふと屠場の外に豚の鳴き聲が起つた。庭へ出て見ると、白い、肥つた、豚の短い豚が死物狂ひになつて、哀しく可笑しげな聲を揚げ乍ら、庭中逃げ廻つて居た。子供まで集つて来た。近ふものあれば、逃げ

「牛は宜う御座んすが、豚は啼き泣いて、復た私に屠場へ入つて見た。豚は五人掛りで押へられながら、鼻を動かしたり、踏しけに呻つて鳴いたりした。牛の場合とは違つて、大鏡などが用ひられるでも無かつた。屠手はいまなり出刃を握つて生きて居る豚の明喉を突いた。これに私は

「斯ういふ肉屋の亭主に聞いて、復た私は屠場へ入つて見た。豚は五人掛りで押へられながら、鼻を動かしたり、踏しけに呻つて鳴いたりした。牛の場合とは違つて、大鏡などが用ひられるでも無かつた。屠手はいまなり出刃を握つて生きて居る豚の明喉を突いた。これに私は

すくなくからず啼き泣いて居ると豚は一瞥を上げて鳴いた。牛の冷静とは大逆ひだ。豚の明喉からは赤い血が流れて出た。その毛皮が白

いだけ、屠場に血の色が私の眼に映つた。三人ばかりの屠手がその上に集つてドン／＼踏み付けるから見るうちに、忽ち豚の氣息は絶えた。年をとつた屠手の頭は彼方此方と屠場の中間を廻つて指圖し乍ら歩いて居た。その手も、握つて居る出刃も、牛と豚の間に黒く染まつて見えた。最初に屠られた南部牛は、二人掛りで

毛皮もほとんど剥ぎ取られた。すこし離れて屠場の光景を眺めると、生々とした毛皮からは白い氣の立つのが見える。一方には竹箒で木の間の血を掃く男がある。屠場へ出刃を置くものもある。赤い日の光は注ぎを射つた軒先から射し入つて、太い柱や、そこに凝んで倒れて居る牛や、白い被服を着けた屠手等の肩などを照らして居た。

そのうちに、ある屠手の出刃が南部牛の白い腹部のあたりに加へられた。卵色の腹に包まれた臓腑がべろ／＼と溢れ出た。屠手の中には牛の爪先を屠場のところから切り放して、土間へ投出すのもあり、豚の中間へ出刃を入れて肉を

「このダンベラは、どうかして其方へ片付けて。屠手は屠手に言付けて、大きな風呂敷包を見るやうな臓腑を片付けさせたが、その邊の柱の下には赤い牛の尻尾、或、小さな二つの角などが残つて居た。

肉屋の若い者はガラ／＼と籠車を庭の内へ引き込んだ。箱にはアンベラを載せて、牛の骨を投入した。

「十貫六百——八貫二百——」

「三貫八百——」

それは最後に割つた豚の片皮を積み上げる聲だつた。肉屋の亭主は言にせり、牛はほとんど屠場の隅が無い。屠場は四角に置る。屠場と角

裂くものもあつた。牛の體からは骨が流れて、それが血のほひに流つて、屠場に滴ちた。

屠牛の四

私は赤い牛が「引割」といふ方法に掛けられるのを見た。それは、鉋で屠骨を切開いて、骨と骨との間に横木を入れ、後部の腹に綱を繋いで逆さに滑車、釣し上げるのだ。屠手は三人掛りでその綱を引いた。

「あゝまだ尻尾を切らな／＼や。」

屠手の頭は手づからその尻尾を切り放つた。

「さあ——車々」と言ふものもあれば、「ホラよいせ」と掛聲するものもあつて、牛の體は柱と柱の間に高く逆さに掛つた。屠場の中

央から真二つにそれを鉋で引割るのだ。ザクザクと、まるで氷でも引くやうに。

「どうも切れなくて不可。」

「鉋が切れないのか、手が切れないのか。」

と頭は頭らしいことを言つて、笑ひ眺めて居た。

「屠手が入つて来た。子供はおづ／＼と屠場を覗いて居た。犬もボンヤリ眺めて居た。屠手は

十

千曲川に沿うて

これまで私が君に話したこと、君は津間山脈と葛科山脈との間に展開する大きな深い谷の光景を想像することが出来たらうと思ふ。私は君の心を津間の山脈へ連れて行つて、あそこから見渡した千曲川の話をしたし、かつと上流の方へ誘つて行つてそこにある山々村の話をした。暇さへあれば私は千曲川沿岸の地方を探るのを樂みとした。私は岩村田から香坂へ抜け、内山峠を越して上州の方へ下りて見たし、依田川といふ千曲川の支流に臨んで和田峠から諏訪の方へも出て見たし、靈泉寺の温泉から梅木峠を越して別所温泉の方へ廻つたこともある。田澤温泉のことは君にも話した。君は私と共に、千曲川の上流にある主な

「ハイ。」

「醬油で煮染めたやうな物ぢやないナ。」

南部牛は既に四つの大きな肉の塊に成つてその一つづつの皮が屠場の奥の方に釣された。屠手の頭はブリキの箱を握つて来て、大きな丸い黒印をベタ／＼と牛の皮に捺して歩いた。

不思議にも、屠られた牛の體らしい、次等に見慣れた「牛肉」といふ感じに變つて行つた。豚も最早一時間前まで鳴き騒いだ豚の體はなくて、紅味のある豚肉に成つて行つた。南部牛の頭蓋骨は赤い血に染みたままで、片腕に投出してあつたが、屠手が滑車でその血を流し落した。肉と別々にされた骨の主なる部分は、煮でも切るやうに例の大鏡で四つほどに切離せられた。屠手の頭も血にまみれた。屠手を洗つて腕の薪草入を取出し、一服やりながら骨などの細くさまを眺めた。

「このダンベラは、どうかして其方へ片付けて。屠手は屠手に言付けて、大きな風呂敷包を見るやうな臓腑を片付けさせたが、その邊の柱の下には赤い牛の尻尾、或、小さな二つの角などが残つて居た。

肉屋の若い者はガラ／＼と籠車を庭の内へ引き込んだ。箱にはアンベラを載せて、牛の骨を投入した。

「十貫六百——八貫二百——」

「三貫八百——」

それは最後に割つた豚の片皮を積み上げる聲だつた。肉屋の亭主は言にせり、牛はほとんど屠場の隅が無い。屠場は四角に置る。屠場と角

川 船

降つたり止んだりした雪は、やがて雲に變つて来た。あの山々降りそそぐ音を聞きながら、私は飯山行の便船が出るのを待つて居た。男は船帽子を冠り、藁靴を穿き、女は紺色染の眞綿を纏の甲のやうに背中に負つて家の内でも手拭を冠る。それが斯の邊で眼につく風俗だ。舟茶屋を出て川の岸近く立つて眺めると上高井の山脈、菅平の高原、高尾山、其の他の山々は遠く隠れ、對岸の蘆荻も枯れ潜み、洲の形した河心の砂の盛上つたのも雪に埋もれて居た。奥深く、果てもなく白々と横たわつた方から、暗い千曲川の水が油のやうに流れて来る。これが小諸附近の斷崖を突いて、白波を揚げつゝ流れ下る同じ水かと思ふと、何となく大河の勢に嘖つて見える。上流の方には、高い釣橋が多いが、ここへ來ると舟橋も見られる。

そのうちに乗客が集つて来た。私は雪の積つた岸に控つて乗場の方へ降りた。屋根の低い川船で、人々はいづれも膠を突合せて乗つた。水に響く鼓の音、屋根の上を歩きながらの船頭の語聲、そんなものがノンキな感じを與へ

見やうが無かつた。窓に遠く見渡される雪のサクの寒みへは雪が積つて、それがウネウネと進行した白い線を描いた中に、枯々たる木などがボツ／＼立つのも見えた。

雪國の鬱陶しさよ、汽車は千曲川を渡つた。あつた。いづれも私の家に近いところの娘達で、I、Kといふ連中だ。この一人は小諸の小學を卒へて、師範校の講習を受ける爲に飯山まで行くといふ。汽車の窓から娘達の住む方を眺

めて、眼を置きはらして來る娘の年頃で、知らない土地へ二人きり出掛けるのは餘程の奮發だ。でもまだ眞實に娘々としたところのある人達で、互に對て交付き合つたり、黄ばんだ齒をあらはして快活に笑つたり、背後から女達を抱いて車中の退屈を慰めたりする。Y、M、N、な可憐な、見て居ても可愛らしくなるやうな連中だ。御座で私も粉れて行つた。Iの方は私の家の大屋さんの娘だ。

雪野で汽車を下りた。そのあたりは耕地の續いた野で、附近には名高い小布施の栗林もある。其日は四阿、白根の山々も隠れてよく見えなかつた。雪の道を踏んで行くうちに、路傍に梨や梅の枝が見える、ある村の坂のころへ掛つた。そこは水内の平野を見渡すやうな位置にある。私が一度その坂の上に立つた時は秋で、豊饒な稲田は黄色い海を見るやうだつた。向の方には千曲川の光つて流れて行くのを望んだこともあつた。遠く好い薄の杜を見て置いたが、黄緑な髪のやうな梢からコンモリと暗い聲の方まで、あの樹木の全景は忘れずにある。雪の中を私は雪澤まで歩いた。そこまで行くのと、始めて千曲川に舟を見る。

汽車が小諸を離れる時、プラットフォームの上に立つ諸大等の呼吸も白く見えた。硝子窓に映ると山、野、藁、菅、雪に塗られて、谷の下の方を暗い藍色な千曲川の水が流れて行つた。村落のあるところには人家の屋根も白く、土壁は暗く肥桶かづいで藁藁の方へ通ふ農夫等も寒さうであつた。田中の雪を通り過ぎる頃、津間、黒坂、白根子等の、船の山脈の方を望むと空は一面に灰色で、置かれた山々に接した部分だけ陰と白く見えた。Theodor Wiltmann

そんな言葉より外にあの深い空を形容して

船の窓から眺めて居ると、雪とも雲ともつかないのが水の上に落ちる。光線は波に銀色の反射を與へた。

斯うして船を離れて行つた。上高井といふところで、船を待つ二三の客が岸に立つて居た。船頭はジヤブ／＼水の中へ入つて行つて、男や女の客を負つて来た。砂の上を離れる舟底の音がしたかと思ふと、又船の音が起つた。その音は千曲川の静かな水に響いてあたかも牛の鳴聲の如く聞える。舟が鳴くやうにも、それを聞いて居ると、何となく此方の思つた様に聞えて、同行のIの苗字を思出せばそのやうに、Kの苗字を思出せば又そのやうに響いて来る。無邪氣の娘達は楽しさうに聞き入つた。兩岸は白い雪に包まれた中にも、ところ／＼に村々の人家、雑木林、森などを望み、雪文度して岸の上に行く人の影をも望んだ。その岸の上を以前私が歩いた時は、豆栗などの鳥の熟する頃であつた。あの時、斯の岸の下の方に低い橋の澤山私にはあの時、斯の岸の下の方に低い橋の澤山

今、その下を通るのだ。どうかすると、水に近い橋の梢が船の屋根に隠れて、それを滑り抜けて行く時にはバラ／＼音がした。

船の中は割合に暖かだつた。同じ雪國でも高原地に比べると氣候の相違を感じる。それだけ雪は深い。午後の日ざしの加減で、對岸の山々が紫が／＼つた灰色の影を水に映して見える。私は船窓を開けて、つゞやくやうな波の音を聞いた。船にあたる水を眺めたりして行つた。斯の川船は白いペンキで塗つて、赤い二本の筋をあらはしてある。

ある舟橋に差掛つた。船は無作法にその下を滑り抜けて行つた。

岩山を背景にして、廣々として千曲川の河原に積いた町の眺めが私達の眼前に展けた。雪の中には、鳥の鳴聲も聞える。人家の煙も立ちこめて居る。それが舊い飯山の城下だ。

斯の掘出されたといふ感じを強く與へるものは、町の往來に高く築き上げてある雪の山だ。屋根から下す多量の雪を人が集つて積み上げ／＼するうちに、やがて人家の軒よりも高く成る。それが往來の道中に白鬼の如く這いて居る。家々の軒先には「ガソギ」といふものを設けて、その下を雨事ありげな人達が往來して居る。屋内の暗さも大凡想像されよう。それに高い葎蔭で家をかこふといふことが、一層屋内を暗くする。私は娘達を残して置いて、獨りで町へ出て見た。チヂメ／＼雪の中で燈火の照く頃だつた。私は火の方に薄暗い灰色な空が紅色を帯びるのを望んだ。丁度遠いところの火車が曇つた空に映ずるやうに、それが落日の反射だつた。

雪も斯の道でなければ見られないものだ。實に陰鬱な、頭の上から何か引寄せられて居るやうな氣のするところだ。土地の人が信心深いといふのも、偶然では無いと思ふ。この町だけに二十何ヶ所の寺院がある。同じ信州の中でもこゝは一寸上方へでも行つたやうな氣が起る。言葉通ひからして高原の地方とは違ふ。

暗くなるまで私は雪の町を見て廻つた。荷

車の代りに橋が用ひられ、雪の上を馬が抱いて通るのもあつた。前で聞いた雪帽子を冠り、色目物を掛け、湯桶を掛け、爪掛を掛けた、それにて布だの、ショールだの巾を包んだ。雪の山の人達が私の側を流つた。

復た雪が降つて来た。千曲川の岸へ出て見ると、そこは川沿の着いたところで、雪が一面にウネ／＼と長い形橋の上には人の足跡だけ一筋茶色に雪の上に印されたのが望まれた。時には雪靴穿いた男にも逢つたが往來の人の影は稀だつた。高野、中野、其他信越の境に繋がる山々は、唯唯かに山層のかたちを見せ、遠い村落も雪の中に沈んだ。千曲川の水は寂しく音もなく流れて居た。

しかし試みにサク／＼と雪のする雪を踏んで、船橋の上まで行つて見ると、雪を流れる水勢は矢のやうに早い。そこから河原を望んだ時は一面の雪の海だつた。左様だ、白い海だ。その白さは、唯の白さでなく、寂寞とした底の知れないやうな白さだつた。見て居るうちに、全身凍へて来るやうな白さだつた。

飯山で手拭が愛のしるしに用ひられるといふ話を聞いた。雪を切るといふ場合には手拭を裂くといふ。だから斯の邊の近在の女は皆な手拭を大切に、落して置くことを嫌ふとか。

これは幾起が好いとか、悪いとかいふ氣の配りに近い。でも優しい風情だ。

山の上へ

「水内」は古代には一面の水潭であつたらう。その證據には、飯山あたりの町は砂石の上に出來て居る。土を掘つて見ると、それがよく分る。

雪々の土地の話を聞き、同行した娘達を残して置いて、雪の山を登つた。舟橋を渡つて、雪原から町の方に飯山などを望みそれから岸の上の桑畑の雪に埋れた中を橋で走らせた。この橋は人力車の輪を取外して、それに「いたや」の堅い木片で造つた橋を代用したやうなものだ。柵と柵とあつて、二人掛りて引いたり押ししたりする。低い橋の構造だから柵を高く掲げると、乗つた者はいくらか尻餅をついた形になる。とは言へ、斯の乗りにくい橋

が私の肺の心を善ばせた。私は子供のやうな物めづらしさを以て人夫達の細い呼吸を聞いた。凍つた雪の上を疾走して行つた時は、どうかすると私は桑畑の中へ橋を共ブチマケラレさうな氣がした。

「ホウ——ヨウ——」といふ掛聲と共に、雪の上を滑る橋の音、人夫達がサク／＼雪を踏んで行く音まで私の耳に快感を起させた。川船で通つて來た岸の雪景色は私の前に靜かに廻轉した。

中野近くで橋を降りた。道路に雪のある間は足も暖かであつたが、そのうちに黄ばんだ泥をこねつて行くやうな道に成つて、冷く、足の指も凍れた。深切な飯山の洞で、爪掛を引つてそれを私は草鞋の先に掛けて穿いて來た。

一月十四日のことで村々では「ものづくり」といふものを祝つた。「みづくさ」といふ木の赤い條に、米の粉をまらめて臘の形をつくる。それを神棚に飾りつける。養蠶の前祝だといふ。歸りには、日光の爲に眼もまぶしく、雪の反射で眩まされた。其日は千曲川の水も黄砂に濁つて見えた。

郷野から復た汽車で、山の上の方へ戻つて行

つた時は次第に寒さの加はることを感じた。けれども私は薄暗い陰気な雪の中からいくらか明るい空の方へ出て來たやうな氣がして、ホッと息を吐いた。

山に住む人々の一

以前私が飯山からの歸りがけに——雪の道を登つたとは反對の側にある新道に添うて——黄ばんだ稲川の隣の雪間平を通り、ある村はづれの休茶屋に懸掛けたことが有つたその時、私は養光寺の方へ行く「お寺さんか」と聞かれて意外の間に失笑した事が有つた。

同行の御家旦那は外國仕込の洋服を着、ボケツトに寫生帳を入れて居たが、側に「お寺さん」に成り済まして一寸休茶屋の内儀をまごつかせた。私が笑へば笑ふ程、餘計に内儀は私達を「お寺さん」にして了つた。例令内儀は世俗の人と同じやうでもそれも各自の身に具つたものであることなどを、半ば羨み、半ば調戲ふやうな調子で言つた。斯の内儀の語は、飯山

から長野あたりへかけての「お寺さん」の生活の一面を語るものだ。

私は飯山行の途中で、土地の人の信心深いことや、あの山間の小都會に二十何ヶ所の寺院のあることや、左様いふ舊態の保存されて居るところは一寸上方へでも行つたやうな氣のする事を君に言つて置いた。斯の古めかしい空気が、激しく變り行く時の潮流の中で、何時まで突き壊されずに續くものだらうか。兎に角長い冬季を雪の中に過すやうな氣候と相俟つて一般の人の心に宗教的なところのあるのは事實のやうだ。これは千曲川の下流に行つて特に左様感ぜられる。

長野では、私も養光寺の大きな建物と、あの内で行はれるドラマチックな儀式とを見たばかりだし、それに眺望の好い養生寺の境内を歩いて見た位のもので、實際奈何いふ人があるのか、詳しくは知らない。飯山の方では私は何となく高い心を持つた一人の老僧に逢つて見た。連添ふ老僧人もなか／＼のエラ者だ。斯の人達は古い大きな寺院を築き、年をとつても猶活動な氣を失わないで居るといふ風だ。その寺では、丁度禪家に法事があるとやらで、御僧と

いふものを箱に入れ、重なる風筒敷包にして借りて行く男などを見かけた。一寸したことが、古風に感じた。

君は印度に於ける佛道探検の事實を聞いたことがあるか。その運動に参加した僧侶の一人は、斯の老僧の子息さんで、娘の婿にあたる學士も矢張り一行の中に加はつた人だ。學士は當時英國留學中であつたが、病弱な體を提げて一行に加はり、印度内地及び錫蘭に於ける阿育王の遺跡などを探り、更に英國の方へ引返して行く途中で客死した。此學士の子息の遺體が、深山飯田の寺に遺つて居たが、熱帯地方の暑さを香きつけてあつたのなどは、殊に私の心を引いた。老僧の子息さんは、兵隊に假して居るとかで、その人には私は逢つて見なかつた。舊い村かゝつたやうな寺院の空気が、少しも、鬼に角斯ういふ新人物が生れて居る。そして左様いふ人達の背後には、親であり又舅姑である老僧のやうな人達があつて、幾十年となく宗教的な生活を送つて来たことが想像される。

しかし飯田地方に古めかしい宗教的の空氣が残つて居て、二十何ヶ所の寺院が例へば維持の

方法に苦みながらも舊態を保存して居るといふことは、偶然でない。私は其老僧から、飯田の古い城主の中には若くて政治的の理想を、僧侶の服を纏ひ、一生佛敎の傳道に身を投じた人のあつたことを聞いた。又、自説、書翰、其他すぐれた宗教家があるに深い歴史の因縁を遺して居ることも聞いた。

斯ういふことは、高野の地方にはあまり無いことだ。第一左様いふ土地柄で無いし、左様いふ歴史の背景もないし、法の殘影を高く掲げて居るやうな老僧のやうな人も見當らない。私は小僧達で幾人かの僧侶に逢つて見たが、貴族社會の人達に逢つて居ると殆んど變りが無いやうに思つた。榮耀が来れば、寺の本堂の側に、縁の廣が釣られる。僧侶も勞働して、長い冬籠の貯へを造らなければ成らない。

部分に傾けて、他の町に劣らない程の大校舎を建てた。その高い玻璃窓は町の顔のところから起つて見える。

斯ういふ土地だから、良い教育家に成らうと思ふ青年の多いのも不思議はない。種々な事情からして遠く行かれないやうな學問好きの青年は、多く國に居て身を立てることを考へる。毎冬長野の師範學校で募集する生徒の數に比べて、それに應じようとする青年の數は可なり多い。私達の學校にも、その準備の爲に一二年在學する生徒がよくある。

一體に斯の山國では學者を尊重する氣風がある。小學校の教師でも、他の地方に比べると比較的良い報酬を受けて居る。又、社會上の地位から言つても、割合に尊敬を拂はれて居る。その點は都會の教育者などの比でない。新聞記者までも一先生として立てられる。長野あたりから新聞記者を聴いて講演を聞くなどは、こゝらでは珍しくない。何か一職に長じたものと思れば、左様いふ人から新知識を吸収しようとする。小僧達のことでも言つて見ても、名士先生を敬慕する會は實に多い。あたかも昔の御關所のやうに、左様いふ人達の素通りを許さな

御殿で私もこゝへ来てから種々な先生方の話を拜聴することが出来た。故郷澤田吉氏も一度こゝを通られて、何か土産話を置いて行かれたとか。その事は私は後で學校の校長から聞いた。朝鮮亡命の客でよく足を留めた人もある。旅の費などが困つて来れば、相應に旅費を持たせて立たせるといふ風だ。假して軍人も、新聞記者も、教育家も、美術家も、皆な同じやうに迎へらるゝ傾きがある。

斯うした熱心な何もかも同じやうに受け入れようとする傾きは、一方に於いて一種苦しい空氣を形造つて居る。強ひて言へば、地方的單調。その爲には全く氣質を異にする人でも、同じやうな話しか出来ないやうなところがある。

それから佐久あたりには殊に消極な勇氣に富んで居る人を見かける。こゝには頗るノンキな人も居るが又非常に理窟ツぽい人も居る。何故斯う僧人は理窟ぽいだらう、とはよく聞く話だが、一體に人の心が狭いからだと思ふ。標の標が北風に鳴るやうに、一寸したことも直に激し難へるやうな人がある。それに

つけて思出すことは、私が小僧へ来たばかりの時、青年會を起さうといふ話がある有志者の間にあつた。一同光岳寺の廣間に集つた時は盛んな議論が起つた。私達の學校のI先生などは、若い人達を相手に薄暗くなるまでも火花を散したものだ。皆な思ひ切れて、規則だけは出来たが、到底その青年會はお流れになつて了つたことが有つた。

一方に極く静かな心を持つた人と云へば、私達の學校で植物科を受持つて居るI君などが其一人であらう。ほんとに學者らしい、そして静かな心だ。奈何場合でも、私はI君の顔色の變つたのを見たことが無い。小僧から少し離れた西原といふ村から出た人だ。I君の顔を見ると私は學校で誰に逢ふよりも安心する。

山に住む人々の三

貴族と鐵道に従事する人達は他郷からの移住者が多い。町の平和を監督する署長さんと言へば、大抵他の地方の人だ。こゝの巡査の中にはでも土地から出て奉職する人などがあつて、ボクノと親しみの香を散らす。

鐵道の方の人達は停車場の周圍に全く別に

の場は分れて了みました、技手はもし誰かでも
 されたら酒にかこつける下心で、すこし紅い紙
 をして長さんの前に出ました。先朝は大きに
 失禮致しました。揮り乍ら御様なものは、美語
 のイロハだ、皆さんも聞いて下さい。斯の貼紙
 には斯う云ふことが書いてあると云うて、ペロ
 ペロと読んで聞かせました。ウン左様かい、左
 様いふことが書いてあるのかい、成程君はエラ
 イものだ。左様いふ學力があらうとは今迄思
 はなかつた。
 斯様な口論の末から斯長と技手とはすべて
 反対に出るやうに成つた。間もなくその斯長
 は面白くなくて、小紙を去つたとか。
 線路の側に立つて居るポイント・メンこそは
 斯の山で新しい生活を築る移民者の妻であ
 らう。勤めの時間は二晝夜に就つて、それで一
 日の休みにありつくといふ、労働の長いのに苦
 むとか。私は學問の往還に、懐古風の詩をも
 通るが、あの見張番所のところ、ポイント・メ
 ンが寝りてボツと立つて居るのをよく見かけ
 る。

柳田茂十郎

先生柳田茂十郎さんと言へば、佐久地方の
 商人として、いつでも引替に出される。茂十
 郎さんの如きは極端に佐久氣質を發揮した人
 の一人だ。
 諸國まで名を知られた斯の商人も、一時は
 商法の手造りから、豆腐屋にまで身を落したこ
 とがある。そこまで思ひ切つて行つたところが
 茂十郎さんかも知れない。でも、この人が小諸
 で豆腐屋を始めた時は、誰も其の毒に思つて買
 ふ人が無かつたとのことだ。茂十郎さんの家で
 はもと酒屋であつたが、酒は金を稼がして商
 法に働きの少いを見て取り、それから茶商
 に轉じたといふ。時間の正しい人で、すこしで
 も損値すれば、さんく歸つて行くと云ふ風で
 あつたとか。幾人かの子に店を出させ、存命中
 はキチン／＼と屋敷を取り、死に際その店々
 を分けて呉れて行つた。一度でも茂十郎さんの
 家へ足踏したのもうためには、死後に片見が用
 意してあつたと言つて置いて、他に話した女
 があつたといふことも聞いた。私達の學校の校
 長に逢ふと、よく故人の話が出て、客に呼ば
 れて行つて一座した時でも無厭には酒を飲まな
 かつたと言つて徳利を控へた手付までして聞か

せる。
 「酒は飲むだけ飲めば、それで可いものです。」
 萬事に茂十郎さんは斯ういふ調子の人だつた
 と聞いた。

小作人の家

學校の小使の家を訪ねる約束をした。辰さん
 は年貢を納める日だから私に来て見ると言つ
 て呉れた。
 小諸新町の坂を下りると、浅い谷がある。細
 い流を隔て、水車小屋と對したのが、辰さんの
 家だ。座敷には床を敷きつめ、親を山のやうに
 積んで、辰さん兄弟がしきりと働いて居た。
 かねて親意な隠居に伴はれて私は暗い小作
 人の家へ入つた。猫の人物とかで、驚て造つた
 行火のやうなものが置いてある。私にはおらし
 かつた。しるしばかりに持つて行つた土産を
 隠居は床の間の神棚の前に供へ、鈴を鳴らし、
 それから軒端にあたり乍ら種々な話を始めた。
 長く無愛想な無口な五十許りの母せた女も黙
 つて坐敷にあたつて居た。その側には辰さんの
 小娘も餘念なく進んで居た。斯の無口な女と
 隠居の前に蹲居つて居る細帯締めた娘とは隠居

の家に同居する人らしかつた。で、私はこれら
 の人に聞はす隠居の話に耳を傾けた。
 話好きで面白い隠居は上州と信州の農夫の
 比較などから、種々な農具のことや地主と小作
 人の關係などを私に語り聞かせた。斯の隠居
 の話で、私は新町邊の小作人の間に小さな
 同盟罷工ともいふべきが時々持ち上ることを知
 つた。隠居に言はせると、何故小作人が地主に
 對して不服があるかといふに、一體に斯處では
 百坪を一升と稱へ、一ツカを三百坪に算し、
 一升の額は二百八十日に算つて取立てる、一ツ
 カと言つても實際三百坪は無い、三百坪なくて
 取立てるのは其額で取る、地主と平々に分ける
 とところは異数な位だ。そこで小作人の苦情が
 起る。無骨な小作人がまた地主に對する態度は
 種々なところで人の知らない復讐をする。假令
 ば伏の中へ石を入れて日方を重くし、依へ書を
 吹いて目をつけ、又け箱の蓋を覗みないで、薬
 を大事にし、其他種々な悪戯をして地主を苦し
 める。斯様なことをしたところで、結局「三月
 四月は食ひじまひだ。尤も、そのうちには
 も取れる。
 「しかし私の時には定片樓(地主)がお出なさ

ると、必と一升買つて、何がなくとも香の物で
 一杯上げるといふ風でした。今年はずに任しと
 きましたから、彼奴はまた奈何な風にするか。
 ……私の時には昔から左様でした。」
 斯う隠居は私に話して笑つた。
 そのうちに家の外では「定片屋さんになア、奉
 て御吳なんしよつて、早く行つて来て呉れ
 や」といふ辰さんの聲がする。日の光は急に戸
 口より射し入り、晴の南の窓も明るくなつた
 「あ、日が射して来た、先刻までは雪覆でし
 たが、こりや好い雪だ。」と復た辰さんが言つ
 て居た。
 細帯締めた娘は茶をいれて私達の方へ持つ
 て来て呉れた。飯詰にあたつて居た無口な女
 は、ぶいと寮所の方へ行つた。
 隠居は小娘に成つて、
 「私も唯一人です、平常は誰も訪ねて来るも
 のが無いんです。年寄ですからねえ、ですか
 ら置いて呉れといふので、彼々いふものを引受
 けて同居したところが骨が不眠で黙つてあんな
 ものをいれたつて言ひますのさ。」
 「飯などは炊いて呉れるんですか。」と私が聞
 いた。

「それですよ、世間の人は女様思ふ。ところが
 私は炊いて貰はない。どうして其様な事をしよ
 うものなら皆な食はれて了ふ。…そこは私も
 なかく狭いや。だけれども世間の人は、様言
 はない。そこがねえ辛いと言ふもんです。」
 古い津傘の毛氈子の今は飯詰掛と化したのを
 叩いて、隠居は飯口説いた。斯の人の老後の榮
 みは、三世相に基づいて、講義所の農夫等が吉
 内をトふことであつた。六三の呪禁と言つて
 身體の痛みを癒す新術などもする。近所でも物
 議と言はれて居る老農夫である。私は斯の人か
 ら「言海」のことを聞かれて一寸驚かさされ
 た。
 「昔の取を御話し申すんぢやないが、私も若
 い時には車夫をしてねえ、日に八兩づつなんて
 誇いだことが有りましたよ。八兩サ。それがね
 え、もうばつばと湯水のやうに無くなつて了ふ。
 どうして若い時の勢ですもの。私はこれで、
 奈何なことでも人のすることは大膽して見まし
 たが、博奕と牢屋の味ばかりは知らない——え
 えこればかりは知らない。」
 斯う隠居が笑つて居るところへ、黄な筒縮帽
 子を冠つた五十恰好の男が地味な羽織を着て

「なにしろ坊主九分濡りといふ程です。おんな
人々の間に斯様な話が交換された。水車小屋
の亭主は地主に向つて、米價のことを話し合
つて、やがて下駄穿のまゝ、藁の上を越して別れ
て行つた。

「どうだい、お前の體格ぢや二俵位は大丈夫
揃ける。」
と地主に言はれて辰さんの弟は一づゝ、兩
手に抱き、顔を見直して持ち上げて見たりな
ぞして頼れた。

と辰さんは地主に言つて、私にもそれを勧め
た。眞綿帽子を脱いで屋の内に入る地主の後に
隨いて、私も凍えた身體を暖めに行つた。六俵
の二斗五升取りですか。」
斯う辰さんが言つたのを隠居は堪へず、あたり
から開符めた。地主の前に酒徳利の包を解き
ながら、

「二斗五升つてことがあつてもんか。四斗五升
よ。」
「四斗……」と地主は口籠る。
「四斗五升ぢやないや。四斗七升サ。左様だ
——」と復た隠居が言つた。

「四斗七升」と地主は隠居の顔を見た。
「あ、四斗七升か」と云ひ捨て、辰さんは庭
の方へ出て行つた。

私達は辰さんの周囲に集つた。隠居は古い炬燵
板を取り出して、それを蒲團の上に載せ、大井
に蒔菫と油揚げの煮付を盛つて出した。小皿に
は唐辛子の袋をも添へて出した。

古い布で盥を拭いて、酒は湯沸に入れて動
めて呉れた。

「冷ですよ。燵ではありませんよ——定屋様は
是方へ被入つしやるから。」
斯う隠居も氣難な調子で言つた。地主は燵管
を炬燵板の間に差込み、冷酒を紙めく。隠居の
顔を見て、

「斯ういふ時には辰さんが居ると、都合が好い
なア。」
地主の顔には始めて微かな笑があつた。隠居
は待符に、

「辰さんに別れてからねえ、今年で二十五年に
成りますよ。」
「もう好加減に家へ入れるがやいや。」
「まあ聞いて下さい。辰さんには子供が七八も
有りましたが、皆な死んで了つた。今の辰は

と押問答を始めた。地主は辰さんの言ふことを
聞いて、目を細め、無言でちへて居た。氣の利
いた弟は橋の向うへ走つて行つたかと思ふう
ちに、酒徳利を風呂敷包にして、顔を紅くし、
すこし微笑みながら戻つて来た。

「御年貢ですか。御日出度う。」と言つて入つて
来たのは水車小屋の亭主だ。

私は、養生事なぞの仕掛けてある物置の小屋
の方に邪魔にならないやうに居て、棧橋などを
尻に敷き乍ら斯の光景を眺めた。辰さんは俄に
足を掛けて蒲團で三とろばかり縛つて居た。

弟も来てそれを手傳ふと、乾いた繩は時々切
れた。依を縛るに繩が切るやうぢや、まだ免狀
は覺取ないや」と水車の亭主も欠つて見て居
た。

「一俵掛けて見やせう。」
「いくらありやす。出放籠あるは。——十八貫
八百——」
「これは魂消た。」
「十八貫八百あれば、まあよい親です。」
「左様です、依にもありやすが、それは知れた
もんです。」
「おらがとは十八貫あればいいだ。」

入つて来た。
「定屋さんですよ」と辰さんが呼んだ。
地主は屋の内に入つて炬燵に身を温め、乍ら
待つて居た。私が屋外の座の方へ出ようとす
ると、丁度水車小屋の方から娘が橋を渡つて
来て、そこに積み重ねた藁の上へ脚を投げて行
つた。辰さんは年貢の支度を始めた。五歳ばか
りの小娘が来て、辰さんの橋に取懸つた。辰さ
んが父親らしい情の盡つた口調で慰めると、
涙は頭から肩まで垂はせて、泣く度と言ふこ
ともよく解らない位だつた。

「今に母さんが来るから泣くなよ。」
「手が冷たい……」
「ナニ、手が冷たい？ そんなら早く行つてお炬
燵へあたれ。」
凍つた娘の手を握りながら、辰さんは家の内
へ連れて行つた。

谷に面した狭い庭には枯々な柿の樹もあつた
向うの水車も鞆圍ひされる頃で、庭の半は米の
柱と成り、細谷川の水も白く凍つて見える。黄
ばんだ寒い日光は柿の枯枝を通して藪を積み
上げた庫の内を照らして見せた。年老いた地主
は白髪頭を黒綿帽子で包み乍ら、屋の内から出

て来た。南窓の外にある横に倚凭つて、寒さ
うに顔の紅を奪はせ、我と我身を抱き温め、やう
にして、辰さん兄弟の用意するのを待つた。

「どうで御座んすなア、親の造へ工事は。」
と辰さんに言はれて、地主は白い柔かい手で
頬を撫つて見て一粒口の中へ入れた。

「空箱があるねえ」と地主が言つた。
「雀に食はれやして、空箱でも無いでやす。一
依造へて掛けて見やせう。」
地主は家中の藪をあけて、復た袖を掻き合せ
た。

辰さんは弟に命じて藪を真に入れさせ、
弟はそれを圓い一俵筒に入れた。地主は藪を
曲めながら、トボといふもので其藪の上を丁寧
に撫で掛つた。

「貴様入れる、藪掛けなくちや御年貢のやうで
無くて不可」と辰さんは弟に言つた。「さあ、
どつしり入れろ。」
「一わたりよ、二わたりよ」と弟の呼ぶ聲が
起つた。

六つばかりの俵がそこに並んだ。一俵に六斗
三升の藪が盛り入れられた。辰さんは棧橋を取
つて藪をしたが、やがて依の上に倚凭つて地主

と押問答を始めた。地主は辰さんの言ふことを
聞いて、目を細め、無言でちへて居た。氣の利
いた弟は橋の向うへ走つて行つたかと思ふう
ちに、酒徳利を風呂敷包にして、顔を紅くし、
すこし微笑みながら戻つて来た。

「御年貢ですか。御日出度う。」と言つて入つて
来たのは水車小屋の亭主だ。

私は、養生事なぞの仕掛けてある物置の小屋
の方に邪魔にならないやうに居て、棧橋などを
尻に敷き乍ら斯の光景を眺めた。辰さんは俄に
足を掛けて蒲團で三とろばかり縛つて居た。

弟も来てそれを手傳ふと、乾いた繩は時々切
れた。依を縛るに繩が切るやうぢや、まだ免狀
は覺取ないや」と水車の亭主も欠つて見て居
た。

「一俵掛けて見やせう。」
「いくらありやす。出放籠あるは。——十八貫
八百——」
「これは魂消た。」
「十八貫八百あれば、まあよい親です。」
「左様です、依にもありやすが、それは知れた
もんです。」
「おらがとは十八貫あればいいだ。」

下で、百聞らしい話を聞きながら、時を逸つた。高野と流氷の馳走に成つて、間もなく私は此の隠居の家を辭した。

十二

路傍の雜草

學校の往還に——すべての物が白雪に掩はれて居る中で——日に決つた石垣の間などに僅かな雜草を見つけたことは、私の榮みに成つて来た。長い間の冬籠りだ。せめて路傍の草に親しむ。

南向きもしくは西向の桑畑の間を通ると、あの紫の線だけ、紫色な「かなむぐら」がよく顔を出して居る。「車花」ともいふ。あの草の形して草が生えて居るやうな、手の雪間には、必と「青はこべ」も蔓ひのたくつて居る。「青はこべ」は百姓が鶴の糞に呉れるものと學校の小使が言つた、石垣の間には、スアウソンの形した紫青色の葉を垂れた「車のはじき」や、平べつたい肉厚な防寒服を着たやうな「さしや草」などもある。蓮の枯れたのや、其他種々な雜草の枯れ死んだ中に、細く短い芝草が蘇を保つて

半ば黄に半ば枯々としたものもある。私達の學校のあるあたりから十族屋敷地へかけては水に乏しいので、到るところに細い流氷を導いてある。その水は學校の門前をも流れて居る。そこへ行つて見ると、青い芝草が残つて、他の場所で見るとよりは生々として居る。

奈何いふ世界の中には是等の雜草が顔を出して中には極く小さな草の支度をして居るか、それも君に聞いて貰ひたい。一月の二十七日あたりから三十一日を越え、二月の六日まではほとんど寒さの絶頂に達した。山の上に住み慣れた私もある日は手の指の凍り痛むのを懸念、ある日は邪のために發熱して、氣候の激変なるに驚かされる。降つた雪は北向の屋根や庭に凍つて、連日溶くべき氣色も無い。私は根本の下から土と共に持ち上つて来た雜草の爲に戸の閉らなくつた古い部屋を見たことがある。北向の屋根の軒先から垂下る氷柱は二尺、三尺に及ぶ。身を包んで屋外を歩いて居ると息がつかぬ。つて外套の襟の白くなるのを見る。斯ういふ中で元氣の好いのは屋根の上に飛ぶ雀と雪の中を歩き歩く犬のみだ。

床の間に置いたところが、雪の黄ばんで来る頃から寒さが強くなつて、寒い日は起き、寒い日は休む。有様である。驚くべきは南天だ、花瓶の中の水は凍りつめて居るのに、買つて飾した南天の實は赤々と垂下つて葉も青く木氣を失はず、活々と變るところが無い。

君は牛乳の凍つたのを見たことがあるまい。淡い黄色を帯びて、乳らしい香もなくなる。こゝでは雪も氷も、それを解れば白味も黄味もザク／＼に成つて居る。寒所の流氷に流れる水は皆な凍り着く。熱の根、茶釜まで凍り着く。明窓へ薄日の射して来た頃、川原庵で何かで流氷の水をかん／＼打割るといふは暖い風では見られない。夜を越した手桶の水は、朝に成つて見ると半分は氷だ。それを日にあて、氷を叩き割し、それから水を入るといふ始末だ。澤庵も、葉漬も皆な凍つて、噛めばザクザク音がする。時には漬物まで湯ですゝがねばならぬ。奉公人の手などを見れば、黒く凍れ、皮膚裂けてとこ／＼／＼紅い血が流れ、水を汲むには頭巾を冠つて手袋をはめてやる。板の間へ掛けられた糞巾の跡が直に白く凍る朝などはめづらしくない。夜更けて、薪屋々の柱が凍み割れる音を

聞きながら讀書でもして居ると、實に寒さが私達の骨まで滲透るかと思はれる。雪の降つて来る前は反つて暖かだ。夜に入つて雪の降る日などは、雨夜のさびしさとは、違つて、また別の沈静な趣がある。どうかすると、梅も吹くかと思はれる程、暖かな雪の夜を送ることがある。そのかはり雪が積つた後と来ては、寒へがたいほどの凍み方だ。雪のある田舎へ出て見れば、まるで水の野だ。斯うなると千曲川も白く氷りつめる。その氷の下を凍の水の勢で流れ下る音がする。

學生の死

私達の學校の生徒でOといふ青年が亡くなつた。曾て私が仙臺の學校に一年ばかり教師をして居た頃——私はまだ二十五歳の若い教師であつたが——自分の教へた生徒が一人亡くなつて、その葬式に列なつた當時のことなどを思い出しながら、同僚と共にOの家をさして出掛けた。若くて亡くなつた種々な人達のこと、私の胸を往來した。

Oの家は小諸の木坂といふ町にある。途中で同僚の老理學士と一緒に成つて、水彩畫家川君

の以前住んで居た家の前を通つた。その邊は舊十族の屋敷地の一つで、M君が一年ばかり借りて居たのも、矢張り古めかしい門のある閑静な住居だ。M君が小諸の足を停めたころは非常な勉強で、松林の朝、其他の風景を澤山作られた。私がよく邪説に出掛けて、この處の寫生を見せたり、買つたり、ミレエの繪の話をしたりして、時を送つたのもその故家だ。

細い流氷について、坂の町を下りると、私達は同僚のT君、W君などが話し合せてやつて来るのに逢ふ。Oは暮に足立屋へ障子張の手傳ひに出掛け、身體の冷えてゾク／＼するのも聞はず、入浴したが暖かかつたとかで、それから急に床に就き、熱は胸から心臓に及び、三人の醫者が立會で、心臓の水を取つた時は、四合も出たといふ。四十日ほど病んで十八歳で亡くなつた。話好きな理學士を始め、同僚の間には種々とOの話が出た。Oは十歳の頃から病身な母の世話をして、朝は自分で飯を炊き、母の髪まで結んで置いて、それから學校に行つたといふ。病中も、母親の見えるところに自分の床を敷かせてあつた、と語る人もあつた。

葬式はOの自宅で質素に行はれるといふの

で、一月三十一日の午前十時頃には身内もの、町内の人達、教師、同窓の學生などが町内に集つた。Oは耶蘇教者であつたから、喪棺には黒い布を掛け、青い十字架をつけ、その上に牡丹の造花を載せ、棺の前で讚美歌が信徒の人々によつて歌はれる。新葬、履屋、聖書の朗讀といふ順序で、葬儀多後書の第五卷の一章が讀まれた。私達の學校の校長は、Oの言葉を送った。人誰か死なからん、この兄弟のごとく惜まれむことを願へ、といふ意味の詩などがあつた時は、年老いたOの母親は聖書を手にして泣いた。

十族地の墓地まで、私は生徒達と一緒に見送りに行つた。松の多い静かな小山の上にOの遺骸が埋められた。墓地でも讚美歌が歌はれた。その石塔の側、こゝの松の下には、Oと同僚の生徒が懸掛けたり佇立んだりして、この光景を眺めて居た。

暖い雨

二月に入つて暖い雨が来た。灰色の雲も低く、空は曇つた日、午後から雨となつて、遠かに復活するやうな温もりを感じ

には居られないやうな人だ。斯ういふ氣象の先生だから、演説でもする場合には、やゝとすると式飛沫が尊者仲間などにまで飛んで行く細心な理學士はそれを心配して私のところへ相談に来るといふ風だ。

ある晩、同窓といふ料理屋からの使で、警察の署長さんの手紙を持って来た。開けて見ると、私に来て呉れとしてある。私は斯の署長さんが仲義の勢を取らうとして居ることを薄々聞いて居た。果して同窓の二階には小諸警備會の面々が集つて居た。其時私は校長に代つてさまの失言を謝して貰ひたいと言はれた。なにしろ私は先生の演説を知らないのだから、謝して可いものか奈何かの判断もつきかた。謝すべきものなら先生が来て謝する、一應私は先生の意見を聞いてからのことにしようとした。斯の形勢を見て取つた署長さんは、いきなり席を離れ、町の平和といふものゝ爲に、皆なの方へ向いて御辭儀をした。急に尊者仲間も坐り直した。何事も知らない私は讀む氣は解かつたが、署長さんの厚意に對しても頭を下げずには居られなかつた。御辭儀をして斯の二階を引取つた時、つくづく私は川舎教師の勤めもツライも

のだと思つた。

その翌日、私は中欄に校長を訪ねて、先生のために御辭儀をさせられたことを話して呉つた。すると先生は先生で思々しうに、そんな御辭儀には及ばなかつたといふ事だ。實に、損な役廻りを勤めたものだ。

春の先驅

一雨ごとに温暖さを増して行く二月の下旬から三月のはじめにかけて、梅の蕾も次第にふくらみ、北向の雪も漸く溶け、灰色な地には黄色を増して来た。楽しい春雨の降つた後では、濡つた梅の枝が新しい紅味を帯びて見え、長い間雪の下に成つて居た草履根の青苔も急に青き返る。心地の好い風が吹いて来る。青空の色も次第に濃くなる。あの羊の群であるやうな、さまざまの形した白い黄ばんだ雲があなたも春の先驅をするやうに、微かな風に送られる。

私は春らしい光を含んだ西南の空に、斯の雲を注意して望んだことがあつた。ボツと雲の形があらはれたかと思ふと、それが次第に大きくなり、明らかに見えて南へ動くにつれて消

えて行く。すると復た、第二の雲の形が同一の位置にあらはれる。そして同じやうに展開する。柔かな乳青の色の空に、すこしか色の帯を帯びた白い雲が遠く浮んだのは美しい。

星

月の上るのは十二時頃であらうといふ幕方、青い光を帯びた星の姿を南の方の空に望んだ。東の空には赤い光の星が一つ掛つた。天にはこの二つの星があるのみだつた。山の上の星は君に見せたいと思ふものゝ一つだ。

第一の花

「寒い寒いも彼岸まで」とは土地の人のよく言ふことだが、彼岸といふ聲を聞くと、ハツと消息が出る。五ヶ月の餘に渡る長い冬を漸く通り越したといふ氣がする。その頃まで枯葉の帯ちずに居る薔、寒い大きな蕾を持つて雪の中で辛抱し通したやうな石楠花、一つとして過ぎ行く季節の記念でないものは無い。

私達の學校の教室の一角から見える梅の樹は幹にも枝にも紅い艶を持つて来た。家へ歸つて庭を眺めると、土塀に映る梅樹や梅の樹影は何

た。斯ういふ雨が何度も〜来た後でなければ私達は雪へやうの無い烈しい春の儂湯を癒すことが出来ない。

空は雪か雨かと思ふほどで、傘さして通る人や、濡れて行く馬などの姿が眼につく。單調な軒の玉水の音も楽しい。

堅く縮こまつて居た私の身軀もいくらか延び〜として来た。私は昔ひびき快感を思えた。庭に行つて見ると、汚れた雪の上に降りそそぐ音がする。屋外へ出て見ると、残つた雪が雨のために溶けて、暗い色の土があらはれて居る。田舎も漸く冬の眠から覺めかけたやうに、砂まじりの土の顔を見せる。黄ばんだ竹の林、まだ枯々とした梅、李、其他眼にある木立の幹も枝も、皆な雨に濡れて、黒々と穢い寂寥感をして居ない物は無い。

流の音、雀の聲も何となく陽氣に聞えて来る。桑島の桑の根許までも濡すやうな雨だ。斯の泥濘と雪解、冬の瓦解の中で、うれいものは少し延びた梅の枝だ。その枝を通して、夕方には黄ばんだ灰色の雨の空を望んだ。

夜に入つて、静しく暖い雨の音を聞いて居ると、何となく春の近づくことを思はせる。

北山の狼、其他

生徒と一緒に歩いて居ると、土地の種々な話を聞く。ある生徒が北山の狼の話を私にしたら、その足跡は中犬よりも大きく、糞は毛と骨で〜雨晒しになつたのを狼が熱の薬に用ゐる、それは兎や鳥などを捕へて食ふためだといふ。お伽話の世界といふものは斯うした一歩した話のはしにも表れて居るやうな氣がする。

野蠻な話を聞くこともある。こゝには鶴を盗むことを商賣にして居る人がある。牡鶴と北鶴と並ぶところへ、釣針で餌を突れ、鳥の咽喉に引付けて釣取るといふ大を盗むものもある、それは黒い熊で熊の家を呼び出し殺して煮て食ひ、皮は張付けて動物に造るとか。

土地の話の序だ。この邊の神棚には大きな目無し連鹿の飾つてあるのをよく見掛ける。上の八日堂と言つて、その翌日に連鹿を賣る市が立つ。丁度東京の西の市の賑ひだ。賑ひ事が叶へば、その連鹿に眼を入れて納める。私は海の口村の怪しげな温泉宿で一夜を送つたことがあつたが、あんな奥にも連鹿が置いてあるの

を見た。

こゝは養育地だから、豊祭といふのをする。その日は藪の形を米の粉で造り、竹の葉に載せて祭るのだ。

二月八日の道祖神の祭は、いかにも子供の祭らしいものだ。土地の人は訛つて「どうもく神」と呼んで居る。あの子供の好きなと言ひ傳へる路傍の神様の小さな祠のところへ、藪の馬に餅を載せて曳いて行くのは、古めかしい無邪氣な風俗だ。幼いものゝ祭みとする日だ。

御辭儀

私達の學校長が小諸小學校の校長に演説のあつたのを機として、尊者仲間の無能を攻撃したといふ出来事があつた。先生の演説は直接には聞かなかつたが、それがヤカましい問題を惹起したことを、後で私は理學士から聞いた。一體先生がこの地方に退いて青年の教育を始める迄には長い經歷を持つて来た人で、随分町の相談にも預つて種々な方面に意見立てられる人だし、守山あたりの桃高が開けたのも先生の力だと言はれて居る位だ。兎に角、先生はエナアセツクかな所健な體験を具へた、何か爲す

Saturday, July 24, 1948

(てし君を父)

父上。

九つの歳に御下を離れ、其後東京で一皮御迎へることが出来たが、再び私はあなたを見ることも叶はなかつたものでございます。あなたと私の隔りは、この世に居ないものと生きたがらへて居るものとの隔りでございます。しかし私の前には幼少の頃に御別れたまゝ、あなたがあつて、私はまたあなたの前の子供の時の心で居ります。私はいつまでもあなたの子供です。異郷の客舎にあつた間も私の心はよくあなたの前に行きました。あなたの愛を喚起したのも寂しい異郷の旅でした。もし無事に歸國して折もあらば、私は自分の長旅の全部をあなたに宛てて書いて見たいと思つたことも有りました。私は今、自分の船旅の

父を追想して
(地中海の旅)

ボオト、セエド——イオニンヌスの海——シリイ島——テレニエン
ヌの海——佛國マルセユ港

一節なりとも、せめてあなたに宛てて書きたいと思ひます。

私が少年の頃に早く御下を離れたのも、あなたの御恩召によつたことでした。私はあなたから「三字文」「勸學篇」「孝經」「論語」などの素讀を受け東京に遊學する身と成りまして、あるも東京府立小學校に通ふかたは、あるひは姉の夫から、あるひは其他の人々から「孟子」「詩經」などの素讀を受けました。佛子「や」「詩經」などの素讀を受けました。佛子と耶教とはあなたの極力排斥し、敬視せられたものではありましたが、漢學はむしろあなたが自分の子供にまで勧められたものであつたと存じます。小學校を卒へる頃、私は他の少年と同じやうに、英學を修めようと思ひました。私は早や自分の意のままに動き始めようと思ひました。その時のあなたの驚き——私のために御心配下すつたあなたの心は、私は

子供心にもあなたから頂いた御手紙でそれを感ずることが出来ました。それからずつと後に私は祖母さま御死去の節、一度歸に歸り、あなたが遺し置かれた澤山な蔵書を見ようと思ひました。あの土蔵の二階に上つたことが有りましたが、外來のものを異端とせられたあなたの心はそこにもあり／＼と残つて居りました。私が英學を修めるに就いては、しまひには御許しの出たことをも私はよく覚えて居ります。そのあなたがもし今日まで御存命で、私の爲ることを見て居て下さるとしたら如何でせう。御恩召のほどはかりかねますが、わたしはあなたが異端とせられ邪宗とせらるゝ教の國の方へ旅立とうと思ひました。

私はあなたのお側で暮した月日の短かつたやうに、母上のいつくしみを受けた間も短うございました。御承知の無いことながら、私は母上と共に東京で二年を暮したことも有りました。その二年は母上にとつても實に御骨の折れた時でした。母上を記念するのにも、長い年月の間には追々残りすくなくなり、私の手許にも二枚の箱が残りました。それは母上の丹精して、國の方で手取りしたものでした。私の好き

時まで見て居ても飽きないほど面白味がある。吸くなつた氣候のために化生した野蟲が早や軒端に群を成す。私は君に御草のことを話したが、三月の石垣の間には、いたち草、小豆草、蓬、紫くさ、人參草、酸草、大なづな、小なづな、其他數へ切れないほどの草の種類が群を持ち上げて居るのを見る。私は又三月の二十六日に石垣の上にある土の中に白い小さな「なづな」の花と、紫の斑のある名も知らない草の小さな花とを見つけた。それが斯の山の上で見つけた第一の花だ。

山上の春

陪へた野菜は置き、葱、馬鈴薯の類まで乏しくなり、左様かと言つて新しい野菜が取れるには間があるといふ頃は、毎朝々々若布の味噌汁でも吸ふより外に仕方の無い時がある。春雨あがりの朝などに、軒づたひに土壁を削ふ青い煙を眺めると、好い陽氣に成つて来たとは思ふが、食物の乏しいには閉口する。復た油臭い凍豆腐かと思ふと、あり黄色いやつが壁に釣されたのを見てもウンザリする。落雪の後の道をびしょ／＼歩みながら「草餅はいりませんか」

と呼んで来る女の聲を聞きつけるのは嬉しい。

三月の本か四月のはじめあたりに、君の仕事會の方へ出掛けて、それから斯の山の上へ引返して来る時は氣候の相違を感じるものはない。東京では機織の時に、汽車で上州邊を通ると梅が咲いて居て、確水峠を一つ越せば井澤はまだ冬景色だ。私は斯の春の遅い山の上を見た眼で、武蔵野の名残を汽車の窓から眺めて来ると、「ア、柔かい雨が降るナア」と左様思はない譯には行かない。でも井澤ほど小諸は寒くないので、汽車でこゝへやつて来るに附つて、枯々な感じの残つた田舎の間には勢よく晴え出した姿が見られる。黄に枯れた麥の蕾と青々とした新しい葉との混つたのも、離れて見るとナカ／＼好いものだ。

四月の十五日頃から、私達は花ざかりの世界を遊に楽しむことが出来る。それまで堆へて居たやうな梅が一時に開く。梅に續いて直ぐ櫻、櫻から李、杏、菜菔などの花が白く私達の周囲に咲き亂れる。寒所の戸を開けても庭へ出掛けて行つても花の香氣の清ち溢れて居ないところは無い。懐古園の城址へでも生徒を

連れて行つて見ると、短いながらに深い春が私達の心を酔ふやうにさせる……

ました位でした。私の心は漂泊者でした。遊遊者でした。その心から知らぬ旅の道連れのために水の一滴も流んでやるに氣なり、持つて居る薬を分けてやる氣になりました。斯うした私の行が言葉の通じない人達に察せ汲み取られたものでか、歌うたひの細君といふ人が私の側へ来て、あの通り船酔いで苦んで居る自分の夫のために船床を取替へてやつて呉れといふことを、身振や手眞似でもつて強請るやうに左様申しました。私は神戸以来の先着の客で、自分の船床なども比較的良い位置にありましたのです。あまりと言へば無遠慮な請求で、それだけは断りました。

その日は、食堂では長い食卓の上に細引を張し、それでもつて風やコップや葡萄酒の壺などの動搖を防いだ程でした。食卓に来て隣の小さな朝飯、われ／＼の國で見れば飯をやるものも極く稀でした。婦人て物食ふ客は僅かに三四人でした。ブルターニュ生れのドクトルでさへその日は食堂に姿を見せませんでした。よろ／＼しながら私は甲板の上つて見ました。高い白い波濤の山のやうに持上つて来て、甲板の欄もひどく濡れました。まるで私は大波に攫は

れて行くかの心地がしました。青い汚れに服を着けて平氣でその長い廊下を往つたり来たりして居る水夫もございました。強い風を受けて甲板もいくらか傾き氣味でした。それに抵抗して歩いて見ようとすると、私の身体は勢ひのやうに曲りました。

丁度甲板の向うの方から、私と同じやうな姿勢を取つて通風筒の側を歩いて来たのは、例の西居でした。西居は笑ひながら喫煙室の方へ私を誘つて参りました。

「君もなか／＼好い水夫になれる。」と英語で申しましたが、と言ふのはお前も船には強いといふ程の意味であつたと思ひます。斯うした航海はもとより無難の無い私のことですが、あの東京浅草の新片町の方で二夏ほど前に晩に船を押しましたり、少年の頃には瀬川に近く住んであの水を泳ぎ越えたり致しましたので、私が左程の船酔いも感じなかつたのはいくらか水に慣れて居た爲であつたかも知れません。

船はキャンデイと申す島の附近をさして進んで参りました。ボート、センドを離れてから三日目、希臘の半島に添うて進んで参りました頃は、欄を共にして見たあの華やかな職業の人達が、如何にも貧しくみぢめなものであるかと思ひ知りました。一行の中には踊り子の下地とも見える二人の娘も混つて居りましたが、追々とも皆なが白を脱ぎ捨て居る氣味の中で、その娘達ばかりは同じ薄着で震へて居りました。花やかで、しかも汚れた短い上衣の下に、子供のやうなあらはな股の風俗も変さうでした。儼々として育てられると申した國の方での同じやうな美麗の人達のことを思ひ合はされました。太い、低いベユスの髪で、明けても暮れても諸説を連發させ、箱物などする女僕に集り集りして破れるやうな咲笑に甲板の上を埋めるのも、その國の人達の一行でした。無遠慮な驚きの番のやうに一人の女僕と腕を組ませ、皆なの中を騒がせる私と同室の年若な喜劇役者もございました。ある時は斯様なこともございました。よく私の側へ来て藤椅子を並べる年若な悲劇役者もございました。その佛蘭西人が何かしきりと私に話しかけました。私は唯微笑んで解らない言葉を聞くのみでした。するとその悲劇役者はもどかしがりまして、私の前を通り過ぎる喜劇役者の後姿を私に指して見せ、その手で私の上衣の

風も漸く静まりました。春先の故郷を思出させるやうな雲がどんよりと霞んで、かすかに見える雲の隙もこの航海を楽しく思はせるやうに成りました。四日目の午前のうちには、私は早や遠く陸地を望みました。それが初めて見る伊太利の南端でございました。

遠く目指してまゐりました歐羅巴は先づ伊太利の一角から私の眼前に展げました。地中海の空は美しい五月の中旬でございましたが、あの「海の砂漠」とでも申したい様な寂寞と照光と不滅との大洋の中で半分酔したやうな心地を味つてまゐつたといふことが、餘計にその空を柔く思はせ、餘計にその水を重くなく思はせます。人々は眉もひび、及びに甲板の上に集りまして、近づいて来る陸地を望みました。私の眼前には餘々として展開する山々の眺望がございました。次第に私はその山々の全體としての輪廓ばかりでなく、あそこに巒谷がある、あそこに岩石がある、と明かに指して言ふことが出来るやうになりました。あなたの遠い島影は

欄の中から何か物でも掴み取るやうな手付をして見せました。あの喜劇役者には氣をつけよといふ意味を私に通はせたのでした。斯うした人達が左舷に寄つた方の甲板の端々を全部を有間同志でのみ占領して居りました。言語の不通な私にも、他の船客の不平を容易に讀むことが出来ました。何程の不和と、反目と、歎息とが私の周圍にあつたか知れません。殖民地歸りの官吏らしい人達、娘を連れ来た母親、夫婦連れの佛蘭西兵、其他多くの家族の連中が右舷寄りの甲板に場所も狭いまで藤椅子を並べ互ひに膝を突合はして居りましたのも佛蘭西以外に國籍の人達が亞米利加人や英吉利人から色の黒い土人まで申し合せたやうに上甲板の方に集つてしまひましたのも、皆な航海を共にするからの憤懣と忍耐の結果でございました。斯うして長い船旅に疲れて行つた人達の上にもおもしろい變化が起つてまゐりました。船がシリイ島の沿岸に添うて進んでまゐりました頃には、皆な甲板の上に總立になりました。眼のさめるやうな陸上の眺望は皆な藤椅子を捨てさせました。のみならず皆な互ひに同船の旅の名残を惜むやうにさへ成りました。そこで行

けば、最早マルセニユも遠くはございませんでした。その心は誰しも同じやうに感ずるものでございまして。蘇生つたやうな私共の甲板の上では、そこにも、こゝにも、楽しい笑聲が満ちました。うるさいほど騒がしかった若者達の連中までが反つて船中の賑かさを増すやうに成つてまゐりました。

五

船は若葉につままれたシリイの島に近づくやうに、半島の間を通過しようとした。それほど近く船の上から海を見て行くことが出来たのも、意外の嬉しさの一つでして。陸そのものが既に激しい磯波を感じさせた上に、ましてそこは南伊太利でしたから、その近さは、あたかも露草の見物席から舞臺の上を見るほどの近さでした。もしあの磯波の興味が見物の方で動かないで、舞臺の上のものの方から動いて見せて呉れるところにあるとすれば、丁度その波を割んで動いて行く船は、舞臺のうづらにでも身を置いて居るやうな軽い程度の錯覚的な心持を味はせました。私は唯甲板の上に立つてさへ居れば、それでよいのでした。その私

の頭頂を青葉につままれた漁村や濃い緑葉の樹木などが、静かに回轉しました。私は甲板の上から向うに生ひ茂る立木を指して、例のドクトルに尋ねて見ました。「あれは何といふ樹でせう。」「サイプレスさ。」「あゝ、あれがサイプレスですか。」「ゴヨニテの詩文により、サイモンズの紀行により、メンデルソンの日記により、其他伊太利に關して曾て國の方で讀んだものによつて、目下想像して居た南歐の氣分が私の胸に浮んでまゐりました。

メシナの町を通過しました。メシナはシリイの島の中にある主なる町でございます。私はその附近の山麓に見える村や、赤い屋根の田舎や、水のない河に架つた橋などを甲板の上から居ながら數へることが出来ました。橋の上を渡る馬車までも數へることが出来ました。どうしてその邊の河には水流を見ないのか、シリイは左様した乾燥したところなのか、ついそこまでは私も尋ねて見ませんでした。私が舞臺に響いた陸上には驚くばかり美しい風景が、さながら人物をマキにした背景の

みの芝居のやうに、森間もなしに、變化しました。昔思ふものが、そこでは主人公でした。櫻れるごとく空氣の中に見える山々の獨白が、傾斜と村落と樹木との對話が、無言な耕地の歌が、むしろ人間の力を隠れて見えないが、道具にして、青々とした大井の下で、両白い牧歌的な野外劇を見せて居りました。海の方へ奔つて来て居るやうな地勢に連綿した島の中には海岸に達するものもありました。渚には漁船をも見ました。その邊に望まれる山々には割合に樹木は少いかとぞんじましたが、それでも新緑の頃で崩えるやうな色に見えました。

地中海は青藍色をもつて名高いとか承はります。午後には、心持の好い、軟かい五月の風が甲板の上を吹いて、海は青い織物を延べた様でした。日光も左程恐ろしくなくなりました。波のない海の上は、どうかすると湖水を望むやうで、遠くに初夏らしい雲をも見つけました。何といふ劇的な變化のある風景が、航海の無聊を慰めて呉れましたらう。ある時は黒ずんだ火山岩から成る岬の一角が海中に突出して居りました。鮮やかな新緑はその岬の端までも流れて来て居て、島なぞのある傾斜の間には白い

船を遊べたやうな青立した人家を望みました。高く白い塔をも望みました。その白色は日に輝き、青葉に映り、輝全體から来る強烈な色彩の對照は、そこにも私は伊太利のある一面に觸れる心地がいたしました。のみならず、私がまじりけのない歐羅巴風の建築を初めて望み見る心地を深く致しましたのも、そこでした。伊太利の五月——偶然にも、私は最も好い季節を選び、最も美しい關門を通過して、あの歐羅巴の方へ入つて行かうと致して居たかと存じます。左様申せば、私は最も醜い裏口の方から亞弗利加を覗いてまゐつたのかも知れません。斯うした最初の印象は兎角旗の心を左右します。

イオニエンヌの海と申すは、地中海の中でも別にその名がありました。シリイの海岸を通過し、チレニエインヌの海へ行つて復た日が暮れかゝりました。最早マルセニユの港へも一日と二晩ほどの辛抱といふことで、船では食卓も賑かでございます。毎時私の前に掛けるのはドクトルで、ドクトルの右は例の佛蘭西人の隱居、私の右は年若なフイリツピンの青年でした。亞米利加人や英吉利人がそれに續いて

並び懸掛けまして、食卓のその一部だけは英語が通じました。驚けることの好きな隱居は先づ自分をキヤブテンに見立て、それからドクトルが何、フイリツピンの青年が何、日本人の私が何、と一々見立てた名を命じて笑ひました。この人は全く給仕位で、傍の者が迷惑しました。私はドクトルと並んで、互ひのコップに葡萄酒を注いだり、佛蘭西葡萄酒をかけたたりして食事するのが當で、自稱キヤブテンの相手に成りませんでした。その晩は私も自分ながら驚くほど食ひまして、すこし葡萄酒にも酔ひました。あまり隱居の飲け方が醜いので、私も半分に、「われ／＼の勇敢なキヤブテンも、頭捕虜に成りましたね。」

とドクトルに話して笑ひました。年をとつた牛は兎角若い草を食ひたがるよ。」と私に支那の方の俚語を引いて聞かせるほどのドクトルは、その時私が言つた言葉の意味を私以上に釋いたやうでした。すると、ドクトルの左に食べて居た亞米利加人が其邊に高い笑聲を出して、それを隣の西班牙人に傳へる。西班牙人はまたくすくす笑出して、それを隣へ順次りに送

る。日頃隱居の行動に憤慨して居た乗客や、軍あれかしと特權へて居たやうな若者の連中は、そこでも、こゝでも、喧嘩すといふ風で、「キヤブテンが捕虜に成つた」といふ聲は何時の間にかその食堂にひろがりました。私も自分ながら可笑しくなりましたが、その食堂の内でも苦笑する人が一人あることを思ひ、それは可いとしても、いくらかでも女らしい顔をする人がもう一人あることを思ひまして、しまひには自分で自分の柄に無い悪い洒落を差するやうに成りました。

食後に私が甲板の上へ出て見ましたら、食堂で有つたことがまだ船客の間の一つに成つて居りました。「え、君等は何を考へたのかい。」「私の方を見ながら偷計なことを聞きたがる喜劇役者などがあります。それをまた退屈させに話して聞かせるものがあります。」「ブラボオ、ジャボネエー」それは「日本人、萬歳」とでも言ふに當りませう。エルネストシモンの二等で國へ歸るやうな佛蘭西人はそこで評を持つて行つて、一緒に手を叩いて笑はなければ承知が出来なかつたの

です。薄間い甲板の上を、黙つて私の方へ歩いて来る人、ありました。その人が隠居でした。隠居は一寸私に會つて通過ぎましたが、西洋人の氣質といふものをまだよく存せぬなかつた私には、何となく薄氣味悪くも思はれました。これが他の事なら兎に角、女僕に關したことであつて見れば、あるひは伊達な佛蘭西人ならそれほど腹を立てても居ないだらうか、とも思ひ直して見たことでした。思はず私は斯様な馬鹿らしいことまで、あなたに書きました。これも旅の語と御許し下さい。マルセユももうそんなに遠くないこと、想ひ、そろそろ私も上陸の支度にかゝりました。

六

船が漸く終りに近づきました。船がコルシカ、サルヂニアの二つの島の間に通過する頃は、私の胸は荷造りの用意やら、上陸後の準備やら、其他慣れない旅の心づかひで満たされて居りました。微しい不安が――丁度それは私があのA君達やそれから長兄等の人々に送られて神戸から初めて斯の佛蘭西船に上つた時と同じやうに、復たひしひと私の身

に迫つて来るのを感えました。もう一夜を海上に送れば、私は早や全く知らない土地に、全く通じない言葉の中に自分の身を置くのでございませぬから。

私の船室の入口と緑色の襪を履て、對ひ合つた一室には、カナダ生れの年若な紳士がございました。この人は身に熱があると云つて、多くの他の乗客が各自の荷造りの用意などにいそがしがつて居る中で、獨り船床の上に背しんで居りました。翌日の上陸もこの人のみは許されまいとのことでした。時には私は寂しさうにして居るこの船室の人を見に行き、それから甲板の上へ通ふ船中の階段を昇りまして、海の見えるところへ出て見ました。航海の終りの日らしい光景がそこにも、こゝにも私の眼につきました。その時は最早甲板に上下の差別もなく、籠椅子に所有の主もなく、有るものは唯万ひに名残を惜む心のみでございまして、航海中よく私と籠椅子を並べました年若な悲劇役者はその情人と共に前所姓名を私の手帳の端に書いて呉れ、猶私が巴里に行つて佛蘭西の劇場を訪ふ時の參考にもと、この人達が一流として許す俳優の名を書いて呉れました。ムネ・

スリイ、コクラン、マツグス、それから女優としてバルテエ夫人、サラ・ベルナル、レジヤンヌなどの名がその中にございました。歌うたひと喜劇役者とは同室のよしみもあつて、特に名刺を呉れ、歌うたひの細君も喜劇役者の情人なる女優と私の間に集りまして、復た巴里の方で邂逅ふことも有らうと言ひ顔に名残を惜んで呉れました。この人達の言ふことは極く僅かしか私に聞かれませんでした。が、しかしその情はよく感じられました。私の側へ来て英語で話した二人のフイリッピン青年もございまして、その一人は名をサルツサと言つて、巴里見物後は亞米利加の方に留學することと、私に手紙の交換などを望みました。その日は地中海の美しい日没を望みました。夕空には満月も懸つて居りました。

翌朝船床に眼を覺ました頃は私は早や佛蘭西の近海に来て居ました。同室のものは皆な上陸の支度にかゝりました。『君は軍隊の生活をしたことがないのか。』と例の隠居が私をつかまへて、笑ひながら左様申しました。その意味はもし私が兵役に服した経験でもあるなら、もつと手はしこく旅支度

をすることが出来たであらうに、といふ意味であつたのです。着慣れぬ洋服を身に着けて斯く機に上つて来た私は、同室の喜劇役者に上衣の着方からして教はつたやうなものでござい

た。私はこの頃の自分の悪い酒落がそれほど斯の隠居を働けても居ないことを知りました。のみならず、『われは君と同船したことを満足に思ふ』と力を入れて、それを隠居は私への別れの言葉としました。會ては私の日本人であるといふところから同室を拒まうとした斯の佛蘭西人の口から、斯うした別れの言葉を聞いた時は私も妙な氣がしました。『マルセユの入口は實に美しい。是非とも君に見て行つて貰ひたい。』と云つて共に甲板に上ることを促す喜劇役者の傍から、英語でそれを私に譯して聞かせるのも斯の隠居でした。白い土、緑の草、その色彩の調和から成つた畫題ある局々の光景は私の眼に眩しげに映しみたいと思ふものではございまして、しかし上陸前のいそがしさは長く甲板に留ること

を許しませんでした。朝のうちに船は港に入りました。間もなく私に例のドクトルと一棟に非常な混雑の中に立ちました。旅慣れない私のためにマルセユの旅館まで同行を約して呉れたのも斯のドクトルでした。

『ドクトル！ クレエ！』このドクトルの催促する言葉が、どうしても私には通じません。眼前には波止場から入込んで来た人達が乗客の荷物を預らうとしてあわただしく呼び叫んだり、往つたり来たりしたりして居りました。『君、クレエだ。クレエだ。』と復たドクトルが私に催促しました。終ひにはこの深切な佛蘭西人もどかしさうに。『君にはクレエが解らないのか。』と私に申しました。『君には解らないか。』を英語で言つて呉れども、その肝心の「クレエ」が佛蘭西語でした。私達の荷物を預りに来た男が税關を通過する迄の一切の世話をしてくれ、といふやうな、左様いふ旅の事情に初めてぶつかつて見た私には、何がクレエやら、一寸見當がつきかねました。ふと私は連のドクトルの催促するものが荷物の鍵だと氣付きまして、

早速自分の腰袖から取出して渡しました。『君もまた、キイとさへ言つて呉れれば可いのに。』と私はドクトルに話して笑ひました。ドクトルにはまたその「キイ」の英語が浮んで来なかつたやうでした。

多くの乗客が上陸を待機して居た甲板の上で船の事務長が私の名を呼んで、一枚の葉書を送つて呉れました。東京のA君からでした。三十七日の航海の間、全く故郷の消息に接することも出来なかつた私が思ひがけなくその葉書を受取りました時は、實に嬉しく存じました。多くの乗客の中でも、左様した使りを受取つたものは稀でございました。旅慣れたA君はその葉書を西伯利亞船にして、船着場で私を待つやうにして置いて呉れたのです。その中には「あのプラタナスの並木の美しいマルセユで、この葉書を受取つて下さるかと思ふと愉快です」とした、忘れ難い言葉などが認め

ことを感じました。父上。私はあなたの黒い、幻の船に乗って、あなたの邪宗とせられ異端とせらるゝ教の國へ兎も角も無事に迎り着きました。この私の旅は恐らくあなたから背き去る行爲であつたかも知れません。外來のものと言へば極力排斥せられ蔑視せられた程の強い古典の精神をもつて終始せられたあなたが假りに今日までも御存命で、子としての私を見まもつて居て下さるとしたら、そも／＼私が英語の讀本を學び始めようとした少年の日にそれを私に御許し下さつたあなた自身の寛大を今更のやうに後悔されたかも知れません。けれども私のために御心配下さつたあなたの心は長く私に残りました。そのあなたの心は私のたましひの奥底にとぼる一點の燈火のやうに消えずにありました。あなたの前ではありますが、私は無暗と西洋を崇拜するために斯の旅に上つてまゐつたものでもございません。私に取つては西洋はまだ／＼黒船でございました。幻でございました。幽霊でございました。私はもつとその正體を見届けたいとぞんじました。そして自分の夢を破りたいとぞんじました。その心をもつて私は

更に深く異端に分け入り一筋の自分の細道を迎り行かうと致して居りました。

更なる。獨逸方面の消息は最早全く絶えて了ひました。伯林にある河上君、竹田君、生田君、ミュウニツヒにある澤木君、荻野君などは奈何して居られることか氣掛りで成りません。ゾラの「ナ」の終には普佛戦争のまさに始まらうとする當時の巴里を背景として「伯林へ、伯林へ」と叫びつゝ街路を急ぐ人々の光景が描かれてあつたと記憶します。私も遠い旅に來て、その同じ光景を客舎の窓から目撃しようとは實に思ひがけないことでした。恐らく今度の大きな戦争の結果は普佛戦争のそれにも勝るものが有らうと存じます。歐羅巴の地圖を變へ、民族の興廢を變へるばかりでなく、二十世紀の舞臺はまさに斯の戦争から一轉するだらうと存じます。斯の出來事につけても私は戦の方へ行つて見たいと思ふ心が動かないでも有りません。自分の身を苦しめることのみ多くて、思はしい通信を書くことも出來なからうと存じます。それよりも周囲の事情の許すかぎりには斯の藝術の都に踏み留まらうと存じます。測り知れないのは今後の形勢です。あるひは故國との交通の途が一時絶えるやうな日が來な

佛蘭西だより抄

戦時に際會して

倫敦報其他にて容易ならぬ當地の形勢は既に／＼御承知のことと存じます。北の停車場へ人を送りに行つて獨逸國境との交通が絶えたことを知つたのは本月一日の午後でした。アウストリア對セルビア宣戰の日から數へて僅に一週間の後です。西伯利亞經由とした郵便物が全く私共の許へ來なくなつたのも其頃です。翌日(二日)は既に動員令下り、巴里には戒嚴令布かれ、壯丁といふ壯丁は種々國境に向ひつゝあります。斯く形勢が迫つた日から一度當地の様子を御知らせしたいと思ひながら、取りあへず在留の日本人一同大集會に集るとか、各自警察署へ出頭するとか、其他名状しがたき混亂の中にあつて斯の通信を書くことも出來なかつたのみならず、郵便物が發送されるや否やさへ氣遣は

れました。斯の六日はかりの間、私共は事實に於て巴里の鐘城に等しい思を致しました。何故といふに佛蘭西以外の國から來た爲替の支拂は一切禁止され、市民はいづれも争つて食料品の貯蓄を用意するほどの急激な渦の中に立つたからです。一切の乗合自動車は動員のため徴發せられ、時には電車の絶える日さへありました。普佛戦争で苦い經驗を嘗めた巴里市民はまさに來らうとする大きな戦争を豫想して悲壯な感じに打たれました。兎も角も私共は臨時の日本人會を組織し萬一の場合に備へることと致しました。斯ういふ中にあつて石井大使初め當地の大使館員が居留民保護のために極力盡力されつゝあることは私共の心を強くします。今日迄のところ當地に在留せらるゝ同胞諸君は皆無事です。昨日あたりから町々の動搖はやゝ静まり、佛蘭南方に避難を思立つ諸君はこゝ數日のうちにリヨンへ向けて巴里を去ら

いとも限りません。種々申上げたいことも御座います。只今は取急ぎ認めます。私は斯の御便りが無事に故國に届くことを祈ります。

(八月八日、大正三年)

リモオジユの宴會にて

頭も巴里を離れることになりました。巴里に居ては何事も手につきません。ポオル・ロワイアルの宿にしばらく食卓を共にした神戶、河田の二君が英國倫敦へ向けて戦亂を避けられる際に、私にも同行を勧められました。私はむしろ佛蘭西の田舎の方に身を置きたいと思ひまして、巴里の北の停車場で二君と手を分ちました。一年餘の巴里を去る前日、せめて一回の御便りと思ひながら、それを果すことも出来なかつたのは残念です。そのくせ私は夜遅くまで置捨て、行く荷物の側に懸掛けながら、短くとも御便りを送りたいと思つたのです。巴里は如何成るだらう、もう一度私が巴里を見得るの何時の日だらう。そんなことを胸に浮べながらセヌエ河に沿うたドルセエ河岸の停車場へと急ぎましたのは先月の二十七日です。斯の旅に出る前に、警察の分署へ許可を受けに行つた

り、前日の日から鐵道の切符を買ひに出掛けたり、いろ／＼な戦時らしい思ひを致しました。荷物なども制限されるやうに成りましたから、私なども自分の両手に提げられるだけの物の中に、無くては叶はぬ物のみを人れ、書籍などは一切巴里の宿に置いて参りました。

この町へ出掛けて参つた頃はまだ、今日ほど追つた形勢の下にはありませんでした。でも昨日は白耳義ナミウルの要塞が危いとか今日は獨逸軍の先鋒が國境のリールに追つたとか左様いふ戰報を朝に待受ける空気にあつては唯々市民と一緒になつて心配を分つた外は無かつたのです。在留する同胞諸君の無事な顔を見て互に前途のことを語るの外は無かつたのです。私も周囲の事情の許すかぎり彼

けて参つたのです。日々追つて来る日下の形勢はこの九日ばかりの間に巴里の様子を変へました。同胞諸君の殆ど全部は既に巴里を立退きました。私は次の御便りでそのことを御知らせしたいと思ひます。それから巴里の方で見て来た過ぐる一月ばかりの間のことを書いて送りたいと思ひます。

巴里に居るから混雜の際に出しましたが無事に届きましたらうか。只今のところ故國への通信は亞米利加經由とするの外はありません。それすら何時連絡が絶えないとも限りません。此御便りを讀んで頂けるのも三十日の後かあるひは四十日の後かと思ふと實に尙存い次第です。念のため今の宿所を申上げて置きます。この年老いた主婦は巴里のシモネ・マヌさんの姉にあたる人です。郵便物の廻送は巴里の宿へ頼んで来ました。

Chez Madame Mathelin, 41, Chemin de Babylone, Limoges, France. (九月五日)

巴里在留の同胞

一

今朝郵便局へ行き亞米利加經由の郵便物があることを確かめて安心しました。當地からポルドオへ廻り船便に積まれるとすれば、この御便りも思つたより早く御地へ届くことかと存じます。

倫敦が當時邦人に取つて静かな隠れ家であることは、無事に海峡を渡つて行かれた河田君からの書信にもありました。こゝへ来て見ると戦争は何處にあるかといふほど静かだと思つた。こゝでは戦争を他にして時を思ふことが出来ずともありました。河田君等をはじめ六七人の同胞は英國へ向けて戦時の巴里を離れた最初の人達です。

私がドルセエ河岸の停車場から旅に出ました頃は、同胞諸君の多くはまだ巴里に居ました。時となつて以来、私共は團結の必要から不素めつたに顔合せをしたことのない人達まで集つて最寄最寄に集つたの組を造りましたが、各組を合せて百二十三人の同胞はまだ巴里に留まつて居ました。

斯のリモオジユ行には私は多くの興味を興いで出掛けて参りました。私には静かな空気の好いところへ行つて仕事をしたいと思ふ心が

あり、かねて心掛けて居た佛蘭西の田舎を初めて見るといふ楽しみがありました。巴里在留の書家のうち、正宗、金山、榎木、足立の三君と私と一行合せて五人の旅でした。昨年五月、マルセニユからリヨンへ、リヨンから巴里へと向

ひました時は殆ど夜中の汽車旅でしたから、今度の車窓に映るものは初めて見るもののみやうな気が致しました。私は佛蘭西中部の平坦な耕地や牧場やそれから森などをめづらしく眺めて参りました。オート・ギエヌ州に近づくにつ

れて吾國の甲州や信州地方で見るとやうな高峻な山嶽を望むことは出来ないまでも、一年餘を巴里の旅窓で暮した身には久しぶりで山地里しい空気を吸ひました。時には途中の停車場で負傷兵を満載した列車にも逢ひました。その列車が私共の車窓の側に停りました時に同室の佛蘭西人の婦人達が負傷した兵士をいたはつて窓から金銭や果物を與へ、葡萄酒を分けて注いでやるなど、戦時らしい光景を目撃しました。

今になつて見ると、私共五人のものはまだまだ案に懸けられて、三十分ぐらゐの遅延で済む汽車旅を続けられたのです。實に十二日前です。(九月七日)

二

一行五人のうち金山君は英國へ渡る考へて二日ばかりをリモオジユに送つた後、巴里を指して引返しました。九月の一日に私共は巴里にある山本君から手紙を受取つて、非常に形勢の追つたことを知りました。その急いで書いたらしい手紙の中には巴里へ歸ることを止めらるべし、必ずとありました。森田、安井、長谷川の三君は英國へ逃れんとすべしと成つたともありました。私共は山本君から同時に別の手紙も受取りました。

一到頭巴里立退きの幕と成つた。既に佛蘭西政府は池へ移つたらしい。大使館でも昨夜書類の焼却などをやつて居た。昨日午後同邊の飛行機が巴里市に六つの爆弾を落した。一つはガアル・ド・リヨンに、一つはガアル・ド・レストに落ちた。他のはナン・マルタンのピエウロオをこした。最早巴里包圍は免れぬらしい。敵の騎兵は八十キロメートルの處まで来て居る。昨夜一同集合して最終の相談をして、今日の夕方英國へ渡ればリヨンに一同出發する、今日の中には免に角巴里を出る。斯る謂で君等の

荷物も、無論荷物の共置置捨てることにした。あゝ、巴里もわが巴里も遂に獨逸の奴僕に蹂躪せられるのか、小シモンヌが涙ぐんだのを見て、巴里を離れるのは悔愧を感じる。僕には此處は旅の土だ。彼等には墳墓の地だ。感慨無量だ。二君、足立二君が歸國を決したのも斯の手紙を見たからです。二君は漸くのこと、落着いた宿を断り、滑いた旅の荷物を従々こゝくに取片付け、巴里への手紙を書き、一枚の繪畫をつくる暇もなく、翌二日にはリヨンを指して歸國の途に上りました。残暑らしく堪へがたい日でした。すべての物が黄ばみ汗ばんで見えるやうな日でした。田舎の町らしい凸凹した石造の街路の日に熱く焼ける上を歩いて行つて、リモノジュ停車場で歸國の人達に別れた時は實に心細く感じました。(九月七日)

三

九月三日に私共巴里から最終の報告に接しました。それを讀んで巴里の天文臺及びモン・パルナツスの附近にあつた二十一人の組のうち私共を除いた油の人々——繪畫、彫刻、科學等の方面の諸君——は思ひくにあの都を立退

いたことを知りました。十一人は英國へ、一人は米國へ、二人はニスへ、一人はリヨンへ向つたことを知りました。ディエツツ行の列車も明日の朝の三時が最後だとか一歩遅れれば他城の他は無いとか言はれる中であつて、倫敦へ志した人々があるひはアーブル山か、あるひはアルタニエのサンモアかと、戰亂を避け恐ろた光景がその報告で想像されました。市街の夜の燈火が悉く消され、アウロンニエの森には牛、豚、羊の群が籠城の食糧の用意に集められたといふ巴里を私共の組で最終に去つたのは、山本、藤川の二君であつたらしいことをも知りました。在留した同胞の殆どすべては既に巴里を去つたことを知りました。其報告の中には又、籠城を覚悟で残る人が四五人は他の組にある様子だもありました。佛蘭西政府も今はポルドオの方です。其後私は陣方からの通知で、ディエツツから英國に渡れなかつた金山君と百々瀬君とがリヨンへ逃げようとして切符を買ふために十時間も立ち通し、二日にリモノジュを發つた楠木君と足立君とは車掌さへ行先を知らない列車に幾度か乗換へ六箇所の停車場で三時間あるひは六時間

を待ち都台四十時間あまりもかゝつて四日の朝に漸くリヨンに入つたことを知りました。昨日巴里から避難して来た斯の宿の親戚の人達も私共が七時で来たリモノジュまでの汽車旅に三十時間を費したと語りました。兵士の補充、食糧の輸送、負傷兵、捕虜其他を運ぶために昨今の汽車旅の混雑と不安と思ひやられます。巴里ばかりでなく北の國境の方からの多數な避難者の群は荷物列車にまで溢れて居るといふことです。佛蘭西國境の交通斷絶以來全く消息を知ることの出来なかつたミニツヒの澤木君が昨日に成つて倫敦にあることも分りました。伯林の河上君、竹田君、それから生田君なども同じく倫敦でせう。歐羅巴へ来てから知るやうに成つた同胞諸君の多くは今迄は殆ど英國の方に集りました。前途は實に言ふことが出来ません。しかし斯の宿の人達の厚意で私は比較的安んずる場所を置いて居ます。せめては此の佛蘭西中部の町に留まつて種々な旅の御話を續けたいと存じます。(九月八日)

ギエンヌ河の旅情

お前は斯様な田舎が好いのか。こゝにはブルタアニエの海岸に見つけるほどの野趣も無いではないか。田舎の都會としての好ましい、潤ひにすら乏しいではないか。一口に言へば、こゝは平凡な土地ではないか。お前は此の町を歩いて居る時に日本人といふものを未だ曾て見たことが無い貴しい物見高い子供等にぞろ／＼附纏はれて、嫌のやうな煩さを感じないか。

ある人け斯う私に聞くでせう。それにも拘らず私はこのリモノジュに着いた晩から、停車場前に一夜を過してサン・テチエンヌ寺の塔を旅館の窓の外に望みながら朝霧の中に鶴の聲を聞いた朝から、晴一ばいに好い空気を呼吸することの出来る静かな田舎に身を置き得た心地が發します。

戦争は偶然にも巴里のやうな大きな都會の都からしばらく遠れ去る機会を私に與へました。あの石造の街路を走る馬車と自動車と荷馬車との恐ろしげな響きから、あの人を弱くするやうな密集した群衆の空氣から、あのモウバツサンの言葉借りて言へば凡俗なる心づかひ

と饒舌との巴里から……こゝは真に城下らしい町です。自分等の國のことにしては如何あたりを想ひ起させます。こゝは六聯隊ほどの兵營のある聖地の一つです。高崎あたりに似たやうなところもあります。こゝは山地です。松本邊に近いやうなところもあります。しかし仙臺や高崎や松本などに見られさうも無い在郷臭いところもあります。左様した開けたところと在郷臭いところがこゝには一線にあるのです。

ギエンヌ河はこの町を流れる河です。岸の傾斜にあるポプリエの樹、赤い色の瓦屋根は深い緑を水に映して居ます。梨、桃は既に熟し、柿の實もまさに熟しかけて居る野菜畠の間を歩いて、紅い薔薇や白い夾竹桃の花のさかん香氣を放つ石垣の側を歩いて、あるひは斯のあたりに多い羊の群の何はれる牧場の方へ歩き廻りに行つても、私は旅らしい心地を味ふに事を致しません。二頭立の牛が荷車を引いて行く後から木の靴を穿いた婦人などが通りませ。葡萄の葉は露にうるほひ、高を耕す老人は聖地にある子と思ひます。ギエンヌ河の岸に沿うて高く立つサン・テチエンヌ寺への坂道の

角に、十字を彫り刻んだ石の建堂のあることは羅馬教の國らしい思ひをさせます。Notre Dame de Presentationの文字が讀まれます。聖母マリアの像には香華が具へてあつて、體縮み赤顔の鬚つた老婆が堂の前で細長い蠟燭を賣つて居ます。その蠟燭の日に並ぶ火鉢には黒い着物のまゝ石段の上にひざまづく年若女女をも見かけました。

リヨンから楠木、足立二君の便りがありました。それで見るとマルセーユに寄る郵船會社の船には英國からの歸朝の客が多くて、十一月あたりまでは切符を求めるとも出来ないやうな状態です。巴里からリヨンに戦亂を避けた同胞諸君の一部の人々の消息も分りました。リヨンは今多數の避難者のために非常な混雑だといふことです。多分二君はしばらく歸國を見合せてリヨンに滞在されるでせう。英國へ行つたと思つて居た金山君が今は矢張りリヨンの方にあるなど、戦時の旅行の困難が思はれます。(九月十三日)

戦争の空気に包まれたる巴里

一

戦争の空気に包まれたる巴里——實は斯の題
 日の下にもつと早く幾回かの通信を送りたい
 と思つて居ました。巴里に居る時分にそれを送
 りたいと思つて居ました。實は戦争時の状態に入
 ったから巴里の空気が自分の仕たいと思ふこ
 とも河も放擲させて了つたのです。私はボオ
 ルロワイアルの宿の方で毎日のやうに此を御
 話したら彼を御話したらと思ひながら八月
 以降の巴里からは他に一回の通信しか送るこ
 とが出来ませんでした。私は歩きづめに歩い
 て漸く宿に着いた旅人のやうな気がしま
 す。親しみのある燈火の前によつとのこと自分
 を見つけたやうな感じがします。今こそ斯の佛蘭
 西の田舎町でそれが果せると思ふのです。
 聖時の郵便物のことを少しこゝに書添へまし
 て下さい。最早故國への手紙を安心して出せる
 やうに成つたことを申上げて置きたいと思ひ
 ます。戦局に非常な變動が来ないかぎり、亞
 米利加細由とした郵便物が取扱はれるかぎり、
 この恢復された秩序は保たれるであらうと思
 ひます。

一月あまり我が故國からの音信を待たしま
 した。斯のリモオジユへ移りましてから西伯利
 亞細亞あるひは横濱經由とした郵便物が巴里か
 ら運送されてボツ／＼来るやうに成りました時
 は嬉しく思ひました。多分亞米利加を廻つて着
 いたものでせう。一昨々日八月臨時増刊の「文
 章世界」を受取りました。
 それが戦時に成つてから初めて来た雑誌で
 す。七月の三十日に私はある新作の雑誌を巴
 里から書留で出しましたが、あの時分の郵便物
 などは獨逸へ入つたぎりでは居るのではないかと
 心配でなりません。
 しばらく読むことの出来なかつた東京朝日
 と讀賣とがリモオジユへ来るやうに成つた時も
 嬉しく思ひました。私共は今度の戦亂が奈様に
 故國の方へ傳へられて居るかを知りたかつたの
 です。私共は又英吉利、佛蘭西の戦報はか
 りでなくあるひは露西亞側から可成詳しく戦報
 が日本の方に届いて居るかを期待して居たので
 す。既に東京朝日は八月二十七日までの分を
 受取りました。佛蘭西の曆では本月の二十一
 日から秋に入るとあります。朝晩の空気がも
 大分秋らしくなりました。宿のおかみさんの話
 には、この町へ集る多くの負傷兵の爲に毎戸幾
 枚かの毛布を納めさせられたとのことでした。

八月の一日に私は自車で行く人を北の停
 車場に見送るつもりで宿を出、序にガール・
 ド・レストへも立寄つて見ました。めづらしく暑
 い午後一時頃の日光は到るところの石造の街
 路に流れて居りました。ガール・ド・レストに
 里集るは巴里を立退かうとする獨逸人若くは埃
 地利人でした。停車場内の敷石の上へぢかに
 足を投出して汽車を待つ旅支度の人々を見か
 けました。私は自分のすぐ眼前で突然卒倒しか
 けた労働者の男にも遭遇しました。斯の混雑
 を避けて北の停車場へ行つて見ますと、そこ
 にはまた荷物をかゝへた旅客、別離を惜む人々、
 泣き腫らした婦人の顔などまでが時局の急を
 告ぐるかのやうに見えました。この停車場内の
 指示の前で、佛蘭西の交通が既に断絶したこ
 とを知りました。同時に自分等が容易ならぬ場
 合に際會したことを思ひました。(十月二日)

二
 本年の暑氣は随分きびしく御座いました。
 承はれば故國の方には稀なる暑さなりしよ
 し、當地にあつても皆々左様申し合ひました。
 巴里の街路樹——殊にマロニエの葉の多くは七
 月の末に早赤く枯れ死ぬ程の暑さでした。思へ
 ば此恐るべき暑さの中にあつて、戦争の序幕が
 開けたのです。アウストリア對セルビアの官報
 が布告された翌日、何となく巴里の町々のおだ
 やかならぬ様子に心を引かれながら、重家の山
 本君と連立つて夜のグラン・ブールヴァルを歩
 きました。辻々を警める巡査の物々しさと群
 集の激昂とはカイヨオオ夫人解放の當日と聞
 きました。私共はあの政治的婦人が夫に助けられ
 て出たといふ裁判所の鐵門を辻馬車の上から見

く親しみをもつて自分等を迎へるやうに成つた
 ことです。私はそれを通りすがりの婦人の眼
 でも讀み、呼びかける男の聲でも讀みました。
 斯うした親愛の表情は巴里の町を歩いて居る
 日本人の曾て無識しなかつたことです。黄色の
 兄弟よ、勇健なる國民よ、来りて佛蘭西の危急
 を救へとさへその眼は讀まれました。戦争が始
 まりかけたからと言つて、斯う急に日本人がモ
 テルかと思ふと心細いなどよく人に話して
 笑つた位です。例へば天文臺前の停留場に立
 つてシャトレ行の電車を待つとしませう。そ
 こで革の手靴を提げた年とつた婦人と一緒に
 なると思はせう。見知らぬ町の人から聲を掛け
 られるなどといふは今迄に無いことです。その
 年とつた婦人が私に向つて、貴方がたは國へ歸
 らずとも済むのですか、自分の情もいづれは戦
 争に出なければ成りませうまいが田舎に居てま
 だ巴里へ歸つて来ません。手紙を出しましたが返
 事がありません。手紙を出しました。郵便が
 今日下るか明日下るかと思はれて居る頃から、
 幾度となく私は左様いふ見知らぬ人々に遭遇
 致しました。
 京都大學 教授神戶君、助教河田君は巴

三
 今回の事につけて先づ私の心を引いた
 のは佛蘭西人に對して佛蘭西人の態度の著
 しく變つて来たことです。平素は何處のエトラ
 ンゼニかと言つた顔付の男や女までが何とな

里の宿で食卓を共にして居た人達です。八月一日の夕、まだ七時の夕飯までには間のある頃、私は神戶君と一緒に珈琲店のリヤへ行つて懸掛けました。職員が發表されたのも其夕方でした。石柱の上に立つ銅像を中心にして、あの珈琲店の前には立脚場は、一方はルネッサンブルの公園の入口に置き、一方はビュリエーの踏場などに面して居ますが、何となく鬱鬱を帯びて来た町の空気に忙しう人の歩調が私共の脚を打ちました。その並木の下には立つて夕飯を讀むものがあり、この銅像の側には號外を賣るものがありました。三色旗を印刷した職員令、大統領の警告、貨物輸出の禁止命令杯が貼付されてある建物の前には人だかりがして居たのみならず、多勢の婦女まで息をはずませてその間を往つたり来たりして居ました。平和な巴里の舞臺は實に急激な勢ひをもつて一轉しました。それはあだかも劇の光景を全く變へるにも等しいものがありました。僅一週ばかりの間に、私は早や悲壯な、戦時の空気に居たのです。斯の劇的光景を一層トラジックにしたのはジョオレスの最期でした。あの社會黨の首領がモン・マルトルの料理

へようとする人達だと、直ぐ物に氣のつくのは河川君です。日本人も斯う三人揃つて歩けば氣丈夫ですね、一種の示威運動ですなどと話し合ひながら、何となく殺氣を帯びて見える大通りを歩いて参りまして、伊太利街の角を折れ、オペラの廣場へ出、更にあの並木の續いた街路に沿うてマデラインの寺院の前へ出ました。黒く錆びた希臘風の巨大な石柱が並び立つた建物の内部には職師を祈願するための大圓柱のある時でした。龜甲の形を裝飾とした高い天井の三つの圓窓から射し入る日の光は、正面にある壁の彫刻の彫像、青色に描かれた獅子の像などを照して見せ、混亂した町の空気の、著しいコントラストを思はせました。羅馬萬教の儀式は晝間點の長い蠟燭の火で燃え、居ました。没薬と乳香との薫り満ち、微かな宗教の響き渡るその空気にあるものは何とも言はれぬ暗い静かな古めかしさでした。白い上衣に赤い袴を着け球戯を手にした役僧の後に、ナポレオン形の帽子を冠りながら御旗を掲げ、信徒の間を巡る男もありました。入浴する兄弟や親戚の爲に無事を祈らうとする婦人の姿がそこには多く見られました。中に

店で嗜殺されたといふ報知が傳はつたのもその日のことです。佛蘭西は奈何なるだらう、ラテシエ族の精神をあつめた幾多の天才者が受け継ぎ、して築き上げた藝術と學問の世界は果して奈何なるだらう、私は自分の故郷へ行つて獨りで種々なことを思ひました。遠く故國を離れて来て歸らず動亂の渦の中に立つた旅の身にも思ひ當りました。夜十一時近くには雨が降り出して窓から外に見えるプラタマの葉も暗う御座いました。(十月三日)

巴里に赤報令の布かれたのは八月の二日でした。あのポオル・ロワイアルの町角のところに車道に添うた二列の並木の間に、廣告塔とも見まがふ小さな新聞の賣店があります。そこにお婆さんが種々な新聞を並べて賣つて居ます。職員が始めたのも其日です。私は朝晩のやうに新聞を買つて讀まざり居られなく成りました。其お婆さんの店へ行つては通俗な「ル・マタン」を買つて見たり、「デイリイ・メイル」、「ニウヨーク・ヘラルド」などの讀み易い英字新聞を買つて見たりしました。入浴する人達の

首が町を急ぎつゝある中で、時には私共を見て挨拶しつゝ行き過ぎる歩調の一隊の中のある中で、ジョオレスに關する記事をその朝の新聞で讀み、戦争の序幕が開けると共に倒れて行つたあの犠牲者が厚く葬られることを知りました。巴里在留の外國人で立退きたいと思ふものは多く去れ、獨逸もしくは現地利以外の國籍を有するものは在留を許すとのことでは有りませんが、私共エトランゼエとして各自の事も心に掛り、神戸河川の二君と共に大使館を訪ねる積りで、先づグランブールヴァルの方面へ向ひました。あのグランブールヴァルを巴里の銀座あるひは日本橋通とすれば、凱旋門の立つエトワアルは難町九段あたりとも申しませうかある巴里人の話に昔のグランブールヴァルを知るものにはあの大通りも變つて了つた、彼處へ行きたければ誰かしら知名の人に逢へて珈琲を飲み、それらの人達の話が聞かれるやうな床しいことは無くなつて了つた。今はエトランゼエの跳梁に任せてあるのみだ、と言つて嘆息しましたが、落々と雨でも来さうな町空で押掛け、する多勢の人が半日も續いたところを見て、あれは市場だ、食料品を貯

れを職員が始まつた日の新聞の一隅に見つけて、戦争の渦の中へ巻込まれて行く巴里の最後は優美——巴里の管絃の最後のものやうな氣が致しました。一夜の演説を終へた朝晩まで飯を提げて國境へ向はうとすることなどを想像して見ました。早獨逸軍の斥候が東佛蘭西の城を侵したといふ報知すら傳はつて居ました。八月の二日には大使館に日本人一同集まつた。一切の乗合自動車は既に徴發せられ、荷馬車に乗つて町を走る婦女の見えるなども戦時らしい光景と思はせました。ブールヴァルには電車が稀になりました。地下電車へ乗れるか乗れないか分らないとのことでした。斯の調子で行つたら今にも乗るものも無くなる、歩くことを覺悟しなければ成らん、それにしても何といふ暑さだらう、斯く話しく、私共は限なく賑まつてある石造の街路を踏んで、まるで蛇石の河原を踏む思ひをして、高層な建物に反射するドカンとした日の熱の中を出掛けました。戦争が始まつたからと言つて斯う急に日本人が迎へられるかと思ふと心細い、とは私もす

は私共の歸つて居た大理石の水盤の近くへ来て、いちぢりしげな顔つきに御水を頂き、十字形を胸の上に描く十四五の娘をも見かけました。シャン・セリゼエの廣い街路を、門近くまで歩いて行きました。私は、私共は町を横切る龍騎兵の一隊に遭遇しました。黒髪、長く垂れた兜、日に輝く胸間の青などは實用的と思はれない。昔の騎士の遺風を偲ばせました。食パンの塊を載せた數頭の馬車がその後から續きました。町々の男も女も馳せ集つて、國境に赴く壯丁の一行を送りました。プラボオ、プラボオと其氣のやうに叫ぶ聲は可成私共の心を興奮させました。血を見ずには止まないやうな激憤とした空気がそこにもこもにも溢れて居りました。

巴里在留の同胞一同のために取りあへず臨時の團結を作らうといふ下相談が大使館であつたのも其日です。私共は互に身を護ることを考へねば成らなかつたのです。(十月九日)

五

曲の名前は忘れましたがゴムデイ・フランセエズには名残の影が上揚されました。私はそ

こし言過ぎました。何故といふに斯うした非常時の心理は佛蘭西人の態度を變へさせたのみも申上げかねるからです。何故といふに見知らぬ巴里の男や女ばかりが遠く自分等エトランゼエに對して親しみを有つやうに成つたとも申上げかねるからです。實際日本人同志ですら不素は顔を見たことも無く口を利いたことも無いやうな人達まで大使館の一室に集つて、互に同じ胸の鼓動を覚え、互に身の上を氣遣ひ合ひ、取りあはず臨時の團結をつくること、委員會を設けること等を分けること、組織を固むことなど互に心配し合つたのです。故國木田獨歩君の細算の中に「變外」といふのが有ります。皆な集つて、戰争の話をするさまが痛くてあります。菊の花や竹を愛し、和洋和衷の廣間の片隅で、思はず私はあの短氣を思ひ出しました。此際巴里に在留する者は一番よくやつたと言はれるやうにしたい、との石井大使の語は温情の籠つたものでした。

復た宵明に隠れて行きました。社來の人すら稀でした。私は神戶河田の二君と一様に物凄しい町の光景の中をエトヴァルからアルマの橋の畔まで歩きました。そこで漸く一帯の空いた電車を見つづけることが出来た位です。

召集された佛蘭西人の話をよく聞くやうに成りました。河田君の佛蘭西語の教師も出掛けました。宿の内儀さんの初威も出征したとかで、内儀さんのなごは涙を流して居ました。獨逸人の商人が獲して行つた店々の破壊された話をよく聞くやうに成りました。巴里の城門は既に堅く閉ざされ、旅行は不可能となり、外國の郵便は一切支拂を禁止されました。私共は早や事實に於いて遠い萬流しにも等しい境涯にあることを感じました。西伯利亞鐵道の斷絶と共に、故國よりの音信も絶えました。夜が來ました。いよいよ始まらうとする戰争の前觸のやうな静かさが襲ひ迫つて來ました。不素は夜遅くまである珈琲店も早く店を仕舞ひ、周圍はヒツソリとして、町の響も絶えませんでした。(十月十日)

六

巴里亦留のエトランゼエは皆な警察署へ出頭せよとのことでした。私共へは大使館からも沙汰が有りませんでした。どうせ出なければならぬものなら早く行つて済まして來たいと思ひ、丁度委員會のある日でしたが其方の相談も他の委員に頼んで置きました。河田君と二人で出掛けました。町々には兵隊のある最中でした。獨逸の軍車探偵は毎日のやうに捕縛され、モンパルナスの停車場あたりは堅く護衛され、人々は血眼になつて熱い日の中を歩き廻る時でした。幾萬人となく巴里に入込んで居るエトランゼエのあることを思つて見て頂かなければ斯うした混雜も一寸待へば思はれます。行き違ふ人の中で胸のあたりや帽子などに隠々しく三色旗をかざし、危険人物でないことを示し顔なのは、大抵他の國からの寄留者かと思ました。

エトランゼエの事務は陸軍省の管轄に移されたといふ話もあつたので、あの官廳へ行けば義勇兵の受付を教へられ更に警察署へ行けば分署へ行くと言はれ、不案内な私共は大分まごつきました。午後に分署を探して欲はつた通り尋ねて行つて見るとそこは普請の最中です。半町ばかりしか離れて居ないところに住む店

人が、學業の引越ぐるに知らない者は無い、斯様な無敵を踏ませるとは實に不測切だ、と私共は額から汗の流れるにつけても貧しい裏町の窓の下や古ぼけた寺院の側などを通り抜け長いサン・ジャックの町をパンテオンの方へと取つて、ソルボンヌの大學の附近へ出ました。哲學者のベルグソンが「アカデミー」の會合で獨逸に對する佛蘭西の戰争は野蠻に對する文明の戰争だと述べたのも、たしか其頃です。學問するもの藝術に携はるものゆめが斯うなるとしみじみ思はれました。佛蘭西に掛換への無いやうな科學者まで困難に赴いたといふ話を聞きました。これから新しい時代をつくらうとする人達の熱い血潮まで戰場に流れて行く可怖しさと思はれました。私共が歩いて行つた町々にある學校といふ學校は長期の休みのと、悉く閉ざされて居ました。巴里にある一切のムゼエも其頃は既に閉ざされました。

や女が、學生も労働者もいやしげな俗の媚婦まで、一緒にごちゃ／＼と分業の壁に添うて並びながら、「ア、ラ、カアルーア、ラ、カアルー」と呼ぶ聲を聞く丈でも逆上せるやうな気がしました。身動きも出来ない人々のりにあつて、一つの窓から一つの窓まで動くのに二時間も要りました。私共は四時間半も立往生して、漸く二つ目の窓の下へしか動くことが出来ませんでした。「あゝ、斯様な思ひをする位なら戰争にでも行つたが勝だ。」などと苦し紛れに人を笑はして居るものも有りました。向うの高い建物の窓々から顔を出して面白半分に見物するものもあるなどは、餘計に私共の心を焦々させました。後から／＼押して來る人達の中には悲しく高い背と臂の力を利用して昔々の間へ突まうとする女すらありました。私は背は低い方です。河田君とともあまり高い方ではありません。どうかすると私の立つところは河田君が見えなく成ることも有りました。私共は自分等の正當に占めた地歩を失ふまいとするより外の考へもなかつた程です。殊にな訓練は生れて初めてです。番號の札でも渡して置いて先着のものから順に呼出す習は出

七

ないものでせうか、日本の警察なら斯様な不始末はありませんねなどと並べ合いました。終には私も我慢が仕切れず、高い建物と建物との間から遠く町の空に見える雲の形や色などを望みまして、僅に立往生の苦痛を忘れようとしてめました。

到頭其日は一日無駄にして、一晩中立ち明すかと思える男女の列から我出しました。宿に戻つて冷たい夕食にありついた頃は、河田君も私も非常に疲れました。(十月十五日)

翌日は英吉利が獨逸に對して宣戰を布告した日です。佛蘭西の議會であつたボギアニ氏の愛國的演説に滿ちた演説が新聞紙上で披露された日です。朝の七時半に私は河田君と立立つてまた分署へ向ひましたが何百人の人が早やあの壁に押し掛けて居ました。とても私共は目的が達しられさうありませんから兎に角一旦宿の方へ引揚げました。

宿の食事に河田君が見えました。河田君は以前河上君の泊つて、一同に旅館に滞在されたのです。食後にも私達は三人して故郷の噂や

ら戦争の話をやらに耽りました。佛蘭西は弱いと思へばこそ奈何かして勝たして遣りたいと氣を揉んで居るが。昨日は大分心細い印象を受けた。自分は佛蘭西を悲観するやうに成つたと、言出したのは河田君です。戦争に必要なものは整然とした秩序だ、佛蘭西にはその一番大事なものが缺けてゐる。警察へ行つて見ても停車場へ行つて見ても郵便局へ行つて見ても實に成つて居ない、と言ふのは神口君です。公團などへ行つて見ると設備があり整然があり美しい共同生活の響みのあることが感じられながら、奈何して一面は斯うだらう。いかに鼠目に見ても、私は佛蘭西の警察や鐵道に附随の公然と行はれる事實や、どうかすると贖金を掴まされるやうな事實を否定することは出来ません。戦争は一つの國の好いところも悪いところも露して見せるやうなものです。他から来た旅人がその國民の弱點を著しく感ずるのは斯ういふ時です。しかしまた眞實に熱い握手をかはし平素それほどにも思はなかつた人達を好くやうに成るのも斯ういふ時です。

佛蘭西の當時フロオベールの書残したといふ手紙などが私の胸に浮んで来ました。「斯様

な打撃を受けて再び起つことの出来る筈はない、佛蘭西は到底西班牙や伊太利の後を追はねば成らない」と嘆いたあの言葉などが胸に迫つて来ました。佛蘭西戦争に續ぐに今度の大戦争を以てして、もし假りに同じ失敗を繰返すとしたら、其時の佛蘭西は奈様にみじめなものだらう、三度起つことなどが出来やうか、とは旅人の私共にはすらしみじみ感じられました。今度の戦争が佛蘭西國民の生命を賭し、民族の興廢を賭し、全力を擧げ盡しての戦ひであることは、あのサンヂカリストすら通んで國難に赴かうとしつゝあるのを見ても感じられました。斯ういふ中であつて、各銀行の取付が始まつたり、巴里の市民が争つて食料品を貯へたりすることは私共には實に不思議な現象でした。私共は初めそれを信じなかつた位です。何故といふに紙幣を金貨にして各自に所有しなければ安心しないやうな心理は日本人には一寸想像もつかねることです。何故市民は斯様に狼狽するのです。斯の動搖は果して何時迄續くでせう。今から備城の用意をするとは何のことでせうと、もどかしく思はせました。職員が始まつてから各商店で紙幣を受取らなくなつ

たことなどは私共の心を一層不安にしました。戦敗者としての記憶は持ちたくないものと言ふ人もありました。(十月十六日)

八

斯の酒會を書いて居るうちに種々な心持が引出されて参りました。初めて私が巴里のガール・ドリヨンへ着いて有島君の紹介でシモネエへ投宿しシモネエ河も初めて眺めルキサンブルの公園も初めて歩いて見た頃は、何よりも先づ角々の古めかしい、うちしめつて活氣の乏しい爛熟し沈滞し倦怠した空氣の多いのに胸を打たれました。それからあの旅窓で一年を越して、いくらか土地の様子も分り種々な人にも逢つて見るうちに、丁度あのマロニエやプラタマの葉木の若葉が古い都會へ青々として生氣を注ぎ入れるやうに、あそこにもこゝにも清新なものが頭を擡げつゝあるのを知つて巴里を見直す氣に成りました。ポアンカレの新時代が幾分想像されるやうに成りました。矢張り佛蘭西は佛蘭西だ、フロオベールやヌタンダアルやそれからユイスマンなどの文藝に見るやうな誠實は失はれて居ない、後から好いもの

が潮のやうに湧いて来る、斯様な風に考へて居ました。今度の戦争は私の心を暗くします。戦後の社會に跳梁するものは左様いふ好い芽を萎れさせて了ふことを恐れます。あるひは外科の療治のやうに一切の血液の流動が斯の戦後に來る時代から始まらないと言へません。それにしても現代生活の倦怠といふものを奈何御考へでせう。又佛蘭西のあらゆる社會に表れて居るやうな大きなデイルタンナムを奈何御覽でせう。私などはそれを可成恐いものだと思つて来ました。

壯丁といふ壯丁は毎日のやうに巴里を出發しました。十八歳から四十七歳までの男兒は今度の戦争に参加することです。佛蘭西に有数の科學者が國境をさして出掛けたことは先便に一寸申上げました。社會の要路に立つ幾多の人物は進んで戦地に赴き、士氣を勵まさうとして居ることを聞きます。未來の總理大臣として衆望を荷ひつゝあるといふ外務大臣などは進んで陣頭に立たうとして出發したことを聞きます。モウリス・パレスのやうな文學者まで親子で國難に赴くことを出願したとの話を聞きます。私共は斯の佛蘭西の危急な時が

「人」によつて導かれるといふことに多くの驚きを感じます。今度といふ今度は佛蘭西人も可成一生懸命のやうです。

旅の窓から私どもはいろいろに氣を揉んだことを想つて見て下さい。故郷の方の噂や、獨逸方面にある知己の噂などもしない日は無かつたことを想つて見て下さい。旅とは申しても私どもは歐羅巴の大火を見物して居るやうな心は持てないのです。私どもは直接その火事場に居るのですから。

八月五日の午後には驟雨が瀟々い巴里へ來ました。蹄の音をさせて軍馬の群の引かれて行くのか窓の外に見えました。町を通る葬式の列もありました。棺を載せた黒馬車も花環も雨に濡れて居ました。

夕食を早めに済まして、もう一度私は河田君と分署へ出掛けました。相變らず多數のエトランゼニで奈何することも出来ません。餘儀なく翌朝を期して分署の側を離れました。もう私共はそんなことに二日も空しく費して了つたのです。夜の八時半頃にはサン・ミツシエルの通りの珈琲店が悉く店を閉め、唯ところどころのレストオランから僅に燈火が漏れて

九

もう一度分署側の光景を御話させて下さい。國籍を掲げるだけのことに三日も通ふは取立しくもあり、奈様な思ひをしめて、其日は済したいと考へ、朝早く寢室を離れまして、翌朝などもそこへに宿を出ました。朝の珈琲も飲まずでした。九時から漸く開く分署の側へ三時間も前に行つた積りでも、そこには早や五十人か六十人ではきかない程のエトランゼエが詰掛けて居ました。

河田君に番をして居て貰つて、私は分署の近くに朝飯のかはりに成るものを探しに行きました。ある店でパンとバナナを求めて引返しますと、私共の背後へ来て、順に立つ男や女があ

したから、早速そこへ河田君を連れて、二人でい
くらか楽な場所に居りました。私共は石の壁
を背にして並ぶことの出来るやうな場所を見つ
けたので、暑い日は分業の窓の石の上
にも、私共の肩にもありました。でも何となく
秋の氣は通ひ、八月のさかりと言つても日本
の初秋の日あたりを見る様でした。
「あ、漸く三つ日の窓へ来た。三日掛つて漸
く此窓のところまで滑付けた。」
私共は頭を見合せて、互に不思議な位置に
立つことを感しました。
三日も通ふうちに大分知らない話をも覚えま
した。斯うした場所を集つた旅のものは互に
異つた國籍と職業を、境遇を、言葉づかひを
想像し、それをせめてもの心遣りとしてしま
あの恐い背の高い女が復つて来ました。薄
など話し合ふのも、一つの心遣りでした。薄
赤い髪を自然の初毛のままに生じたお婆さんの
隣に同じ色の色の女が帽子も知らずに居たは
親子かと思いましたが、その人は私共の周りで
も人柄な方でした。エチエチアらしく見える
青年の多くは彼國人でした。その中に一人良
家の生れらしい青年も混つて居て、妹にして

も見たい年頃の娘が折々自転車でバンドの水
菓子だのを選んで来るのがありました。娘が男
装で紺色の海軍服を着ては居たものゝ、あれ
は女だなど、隣り人のある前に、私共はその
胸環を覗きつけた手や白く柔かい頬などを見つ
けて居ました。旅に來れば異様な風俗をも目撃
するもので御座います。私は其娘がサイダーの
瓶を運んで来て運にすゝめる前に先づ自分でも
立呑みした時、近くそれを眺めて居た労働者
風の男が、君が健康を願ふなどと囁し立てる
のを聞いて、思はず貴ひ笑ひをしたことも有り
ました。それも一つの心遣りでした。
漸く三日掛りで、私共は分業の石階を踏み、
尋ねられて佛蘭西人の書記の前に立つことが出来
ました。尋ねられることは實に簡単なものでし
た、出生の年月と土地と職業と、巴里に居る
か位のことでした。書記は事務所風の机の上
に私共の旅行券を展げながら、じろくくと私
共の方を眺めて二人の眞實な人相書をも書いて
呉れました。H. Suzuki 身の内似し。髪黒、
鼻に癖あり。
分業を出る頃は雨がポツ／＼落ちて來まし

た。横町にはまだ多勢の人が列をつくつて空
模様を凝し顔に立ちつくして居ました。漸くこ
れで居るだけのことを爲たと考へた時は、思は
ず私共はホットした。(十月二十日)
十一
自分の身に感じて居るのは凄しい疲労と興奮
とでした。
めづらしく新聞の會館にはコメチアが用て居
りました。あの劇専門の新聞もそれを一切とし
て常分休刊するらしく戦地へ行く記者の叫れ
の言葉などが載せてありました。各劇場の俳優
もオペラの歌うたひも多く出張すること
でした。その紙面には英吉利のトオマス・ハアデ
イ及びキツプリングの時事を題目とした詩が二
つありました。キツプリングは「行動の前に」と
いふ歌でした。作者が得意のものとも思はれ
ませんでした。
警察の届を済ましたのは動員令が下つてか
ら六日、丁度白軍義の軍隊が侵入した敵を
撃退して國境を固守するとの報があつた頃で
す。町々はやゝ人も多く、絶えず電報もいく
らか通ふやうに成りました。ブルアルの雨

ります。町を歩きながら物食ふことは西洋人の
中には不氣な人もありますが、私共は作れない
朝食を分業の壁の側で立ちながらやりました。
曾て私は信州小諸の方に居た時分、千曲川の
上流に添うて野邊山が原といふ高原を旅した
ことが有ります。あの原の中で林を刈集めてそ
れを馬に積みながら往復十六里の道を甲州の方
へ歸つて行く巴夫等に遭遇つたことが有りま
す。あの嵐夫等が途中に腹を休める暇もなく辨
當をつかひながら歩いて居るのを見て、いそが
しい生活のさまだと思つたことが有ります。そ
れに比べれば私共の朝食はまだく、豊澤なも
のでした。
巴里を花の都のやうにのみ想像して居て下
さる故郷の方に、斯うした町々をお目に掛
けたら御座います。一步出れば、立派な金木や
銅像などの物々あるところに見られる街路と合
に斯うした陰気な町々のあることは、餘計に貧
しい感じを起させます。實際斯様なところへ來
て立つて見ると、人は大都會にある暗黒を思ひ、
そこで、儼然と悲愴を思はず居られませんか。
そんな狭い横町のやうなところでも、往來は車
道と人道との區別があつて限な、石で敷詰めて

あります。道路の修繕も行届かない場所かし
て、凸凹した石の面が古く磨滅して居ます。土
の呼吸も通はぬ斯うした石造の道路は泥濘るう
れひも無いかはりに、夏などは乾いて堪りませ
ん。人道は大抵一段高く町の兩側に造つてあ
りますが、その邊は、偉の人が並んで歩かれる
ほどの狭さです。丁度私共が列を作つた向側
の石の上へ、何處の裏長屋から御出して來たか
と思はれるやうな婦人が腹を卸して、平氣で私
共の方を眺めて居ます。その邊にはまた、顔も衣
服も汚れ果てた子供が集つて、石の上へ手をつ
き、戸の閉つた空屋の方へ向けて、酸鼻立つ積
古をして居ります。そろ／＼朝の掃除が始まる
頃には、向側の高い窓から被蓋の塵埃も落ちて
來ます。胸の恐くなるやうなことがかり眼につ
く分業の横手のところで、私共は立ち続けま
した。背後の方を見ると、壁に添うて並んだ人達
が早や分業の裏口までも覗いて居ました。それ
復、先の方へ少し動きました。私共はそれを察
しみにして、二歩か三歩づゝ、まるで器械のやう
に動きました。どうかすると背後の方から怪な
が押し来る度に、見張の巡査に追はれて、折角
占めた場所を復多勢で後戻りしたりしました。

「ア、ラ、クウル——ア、ラ、クウル——」
怪しい素性のもので有るか無いかを見分け
て貰ふばかりに、朝から立ち並ぶ人々の發する
嘆息は響へやうの無いものでした。やがて私共
は五時間も立ち續けました。脚は棒のやうに成
つて來ました。河田君も私も丸で命掛でし
た。(十月十九日)
十
……何だかボンヤリして了つた……私は頭
腦が痛くなつて來た……意志が働かないから
是ぢやまるで獸も同じだ……西洋人でも汚穢
いカラを着ける奴も居ますね、帽子も破れて
るし……下等な奴等が多くて氣持が悪い……押
して仕様が無い……この石の壁の方へ御寄りな
さい、餘り樂ですぜ……
分業の側で、私は河田君と斯様な言葉を交
換しました。
前の二日の苦しい経験から私は分業の建物
に接した場所を取つて、べたりと石の壁に寄添
うことを覺えました。河田君は後から押して仕
様が無いから押し返して遣ると言つて腹を張つ
て居ましたが、そのうちに私の腹が少し空さま

側には並ぶ中で、三軒に一軒、五軒に一軒は閉まつて居るのを見て、亭主も米公人も共に町を去つたことが想像されます。私が夜の入口の隣は巴里に多い賣薬店の一つですが、その亭主も店を閉めて出立しました。私の部屋の下にある小さな珈琲店の亭主も翌日は出立するとか言つて居ました。ルネキサンブル公園に近い町の角に椅子を並べた小さな珈琲店は氣の置けない家で、よく私共はそこへ集まりますが、その亭主まで病みあがり一人娘と細君とを置いて出立すると聞きました。亭主はもう四十幾歳かになる頭の禿げた男です。そこでもこゝでも生還の期しがたく再會の期しがたい別離の抱擁や握手や接吻が交されて居たのです。夫を國境へ送つた女の中には巴里に居残つて働くものを多く見かけました。地下電車の改札口にも女が立つやうに成りました。私は普通の電車の中で、女の車掌の帽子を奪り靴を肩に掛け、女に出来るだけのことには男の手を省いて代らうとして居るのを見て、健氣なる佛蘭西の婦人よと申したくなりました。一日は一日より動員の結果が眼につきました。一切の人は國境へ向けて引去りつゝある大

な潮流の中にあつたのです。翌日には委員會を開く筈でしたし、自分の組の人数のことも心に掛りまして午後からシテイ・フアルギエルを訪れました。美術家仲間の外に福見君も見えて、日頃懇話にする佛蘭西人の子息を停車場へ見送りに行つたと話すと、造々スエズを越して来て巴里へ着いたばかりに斯の戦亂に際會したとて嘆く人、警察署の混雑にカフス御まで失つて殆ど一日食はず飲まずであつたと言ふ人、「船柱を失ひし船」とは奇妙な諷刺を教へて笑れたと笑ふ人、いづれも話は故郷の方の時、戦争の時でした。マタイス、マイヨオル、其他の畫家彫刻家も出征したのであらうかなどと噂しました。各自の身にふりかゝつて来た災難をも語り合ひました。山本君は伊州の方にある年老いた兩親を正宗君は岡山に置いて来たといふ妻を案じ、斯の戦争の始まつたことが奇縁に故郷の方の人々をも驚かしたであらうと噂しました。(十月二十二日)

十二

委員會は大使館の一室で大抵毎週二日づつ開きました。神戸、河田、青木、藤原の諸君の外に大使館側では杉村君が加はりました。法律家が多くて毎時議論に花を咲かせました。大使館に奉職する菊池君は東京の柳田君の友人で私も以前から相談の間柄でしたが、多忙な事務の中で手暇を見付けては委員會へも顔を見せました。佐分利君も左様でした。大使館附の海陸軍の武官まで皆なの様子を心配して来て、時には戦局に對する批評などを認められ當惑な取柄家と熱心な素人との對照を見せました。委員會では病人の出来た場合を奈何しようとか、其他同合せること整理すること相談は種々多々でしたが、要するに當り各自の生活を奈何しようといふことが一番根本の問題でした。獨逸方面にある日本人の困るだらうといふことは故郷でよく想像されても、巴里にあるものゝ困つて居る事情などは本國の政府の方でも最初それを信じなかつたらしい、との話もありました。いづれは在留の日本人一同大使館に籠城するやうな時も来るだらう。第一今から食料品が缺乏するやうでは皆一つところへ集つて粥でも喰らなければ成るまい。斯様なことは皆の間に考へられたのです。石井大

使は北京佛蘭西の領事もあるだけに、第一の機會を心配して、そろ／＼伊太利米などを大使館員を集めさせて居たとのことです。その席では少くも種々な事情が分りました。佛蘭西政府が軍人公債を募ることのはかりに、佛蘭西銀行を閉ぢるといふ方針を執つた爲め、日本からの爲替も受取れなくなり、佛蘭西人でも月に百二十法以上の支拂は銀行で拒まれるやうに成つたといふことです。急激な動員と共に陸軍省では食料品の買占を行はうとした、そこで巴里市民が争つて乾物や野菜を貯へるやうな現象が起つて来た、左様聞いて見るとあながち歐羅巴の個人主義を暴露したものだとい概に言つて了へないやうにも思つて来ました。兎に角經濟界の「恐慌」とは斯ういふものかと恐ろしく感じました。猫や鼠まで殺して食つたといふ、昔佛蘭西當時の話をうか／＼聞けない様な氣が致しました。それにつけても私は田山君が書いた日露戦争の從軍記を思ひ出し、從軍記者同志撰飯のことで噂した一節を今だによく覚えて居ります。もし大使館へ立籠るやうな日が來たら、今に私共の間にも撰飯一つで喧嘩の起ることも有らうかと恐ろしく感じまし

た。委員會では巴里在留者ばかりでなく、通りすがりの諸君の爲にも大使の厚意を傳へました。その爲に私はいろいろな旅の同胞が斯の戦亂を避けて居ることを知りました。活動寫眞の撮影に頼まれて長尺のフィルムを半ば寫した頃急に斯の騒ぎに遭遇したといふ女優花子一座、及びその作者にも逢ひました。熱い汗の顔を流れる中で、窓掛の様子から數時まで一切赤いものづくめの大使館の一室に皆の顔を聞いて居た時は、確に私達陣中の一人物でした。旅のあはれな話が多く出ました。今夕正宗君の許へ届いた故國よりの新聞を見ると、巴里邦人義勇軍の隊長に私が擬せられて居る、としてあつたには少し驚かされました。多分山本君からでも送つた手紙の中の洒落が其様な風に誤り傳へられたのでせう。それにしても記者とも有らう人が氣が利かない。私が應病者だ位は思つて見ても笑れたでせうに。

(十月二十三日)

十三

秋序もや／＼候復し、停車場附近の警戒もや／＼寛かになり、紙幣も役に立ち、不安ながらも佛蘭西國內の一部の旅行は出来るやうに成つた八月十日頃には、巴里の市中に残るものは老人と子供と婦女とだけでした。道で行き逢ふ盛りの男はと見ると、大抵皆外國からの寄留者でした。左様いふ人達は目立ちました。私共まで用事なしに遊んで居るかのやうに見えて、町を歩いても氣のさす程になりました。大風の吹き去つた後のやうな寂しき、壯丁といふ壯丁を根こそぎ持つて行かれた後の巴里には毎日々々戦報を持ち受ける心配な心持が残りました。婦女や老人は皆首を延ばして國境の方から来る私情を待受けたのです。窓々には三色旗を飾つて佛蘭西軍の勝利を祈つて居たのです。新しい報知が来る毎に私もちつとして居られませんでした。部屋の中へ行つて新聞と地圖とを見比べたり、東角愛太刀な佛蘭西側の行動をもどかしく思つたりしたのです。昔佛蘭西のあつた年も非常な暑さで、その年の冬はまた非常な寒氣であつた爲、あの戦争に行つたものは皆な難儀しましたとの宿の内儀さんの話でした。八月の十四日には私はすこし陽

氣あたるの氣味で、何分委員會に出ることも出来ず、酷い暑さに苦しんで居りました。時々窓のところへ行くと、驅逐められた人畜者の一團が熱い街路をよるめいて行くのが眼の下に見えました。鳥打帽子を冠り手荷物を提げた人達の行進も力の無いものでした。有るものは唯、目の眩むやうな日光と、洋と、盲目的に前進する歩調と、唸るやうな合唱とでした。

新聞の新聞紙には佛蘭西側の有利な報道しか傳へてありませんでしたが、それに拘らず御達の自耳義役入は着々事實と成つて取られて来ました。少しでも男らしい、誠外の呼聲が聞えると市民の元氣づくことは眼に見えるやうでした。妻れがもに町々を歩いて居る婦人の容子も備れでした。以前は巴里の婦人と申しても、成程トワレットなどは羨ましいには羨ましい、しかし巴里の女ばかりがすべての佛蘭西の女でもあるまい、町舎へでも行つたらもつと素樸かいふ人も有るだらう、左様思つて居りました。戦争の悲しみは巴里の婦人をより自然にしたかと存じます。取りたて、言う程の人でないまでも、赤十字の章の附いた寄附金の壺などを提げて町々を行きかふさまは需れに、美しく思はれ

て来ました。

倫敦の正金銀行支店で爲替の受取れるといふ事情が知れたことは確に巴里の在留者に取つて一つの嬉しい音づれでした。人々は英國行を思ひ立つやうに成りました。神戸君も其一人でした。疎麻を聞くまでは巴里に居る留まりたいと言つて居た河田君も名残惜しげに荷支度を始めました。十四日の晩でしたが、河田君は遅くまで部屋にあるものを片付けて居ました。夜の十二時頃に私が寢室の上へ眼を覺ますとまだ隣室では河田君がゴト／＼音をさせて居ました。壁一重隔てもそれを聞いた時は實に心細く思ひました。何となく巴里は危險に感ぜられて来ましたし、仕事は手につきませんし、いづれは自分も巴里を去らうかと思ふ心が動いて参りました。(十月二十七日)

十口

八月十五日のことでした。拂曉に雷雨の來た後の涼しい午前四時をセヌエ河の方へ出ました。植物園を通りました。平時はよく人の群がる花園にも訪れるものは稀でした。雨ががりの後の濡つた土を踏んで、黄味や紅味をもつ

の河岸まで行くと、越はいくらか變つて村木の問屋などがあります。ピエール・リエール氏のの家へも寄りました。此の詩人のことはいつかの御便りにも一寸申上げました。氏は最早巴里に居ないことかと思ひますから、まだ動員されないと言つて、母親さん姉さんと一緒に食堂で暫時話しました。今年一ばい位に此の戦争が終つて呉れば可いが、と女の人達はいづれも心配顔でした。

河岸で別れ際に、
「河蒸氣はもう通ふやうに成りましたらうか。」
と私が尋ねました。一時は河蒸氣も絶えて居たのです。氏は堅く「私の手を握りました。(十月三十一日)」

十五
河蒸氣が通ふと聞いて、同じ日の午後三時車までアルマの橋まで乗り、ピョングル行の船を待つところへ出ました。乗合所も變更され船の数も減り、それに城塞區域の外へ出るものは警察の計しが必要との話もありましたが、替められたら替められた時と思ひまして石橋の方からやつて来た船に乗りました。混雑き流れて来る

た花の咲き亂れた間を歩いて参りますと、珍らしく異つた植物の科によつて分置され居ました。動物の開始された當時、私は河田君と連立つて寂しいルキサンブルの公園を通つたことが有ります。あの頃などは吾儕二人の旅客の外に公園を歩くものも無いほど寂しい御座いました。青々とした草の上に日の映つたのが眼に浸る程で御座いました。日頃茶の會などのある折々に手紙を呉れる人達も奈何して居ることかと思ひまして、先づギイ・ド・ラ・プロウスにシルザン・レイ氏の家を訪ねました。二人の息子さんを實地の方へ送つた氏は梵語や古代印度の研究に關した書籍の置きかへてある書齋に居て、若い人達の身の上を案じ直して見せました。今年夏は、氏は印度大學からの招きに應じて講演のために出發する筈であつたが、途な難關で折角支度したことも何も止めに成つたと聞きました。哲學者のベルグソン氏なども親交があつて、同じフランス大學に教鞭を執つて居られる氏のやうな人と戦争に

子息さん達から手紙の來る度に心配し眞實なぞを論じて居るといふ夫人のことを想像しながら、やがて私は氏の家を辭し大きな葡萄酒の貯藏所について河岸の方へ出ました。プラタナスの並木の間にセヌエの水の流れて行くのが見えました。河岸の古本屋なども名物の一つといふだけで今はさびれて居ます。橋を渡ると、ベチヌウマの河岸が見えます。そこにクリツ・オダン氏の家があります。氏は巴里人の一人で其住居も當時巴里に残つて居る古い建物の一つだと聞きました。昔風の内庭や廣い石造の階段や色の褪せた壁の残りなどを説明して呉れるのも氏です。門番に就いて尋ねると、氏はアルセイルの種地の方へ前庭を避けて行つたとのことでした。河岸ついでに小さな橋を越して歩いて参りました。あの邊のどこぞちやとした、面白い設計や意匠の到るところに見られる部分には私の好きな場所です。ラベエ

セヌエの水は静かなやうでも其實可成な急流です。隅川川のやうに小舟を見ることも少いので御座います。動物の結果と見え、河蒸氣の船員なども大抵老人でした。

戦時とは申しながら岸のところ／＼に釣を垂れて居る人のノンキさには少し驚かされました。戦争が始まつても釣は廢められないといふ手合でせう。昔佛戦争で捕虜した當時にも巴里の釣は昔西兵に金を呉れてまで釣つた、そしてよく敵に打たれたといふ話もあります。澤木君が「西洋には日本のやうな世間體といふものが無い」と言つたのも面白い言葉です。ピョングルに近い河岸の草土手のところには赤いズボンや穿いた兵隊が足を出して、何處かのおさんどんらしい田舎娘と別離を惜んで居るのが見えました。戦時と言つても左様遠慮して居ない西洋人のノンキなところとおほつびらなところを見せられる度に、實に人前を憚るやうに幼少い時分から仕込まれた自分等のことに思ひ當ります。ポアリエの若木の見える岸へ上つてユウジン・モレル氏の家を訪ねると、門は閉つて居りました。

日頃懇切にして呉れる家族の人達の様子も知

りたく、モレル氏のことゝも氣遣はれて、橋手の裏門を押して入りました。庭の野草高の入手をする男さへ見えません。顔を忘れずに居る犬が出て来て私を迎へ顔に尾を揺つたり庭の間を走り廻つたりしました。入口の石階の方へ行かうとすると、そこへ犬が隨つて来ました。ややしばらくして留守居の家婢が二階の方から降りて来て、明日主人も入替することやウンデイの海岸の方へ行つて居る主人の家族はまだ巴里へ歸らないことを話しました。置手紙でもするならば書けと言つて、油桶の蓋などの掛つて居る静かな食堂の窓を開けて呉れましから、お目に掛りに来ました。お母さん達へも宜敷といふだけのことを簡単に、食卓の上で書いて、いよ／＼モレル氏も出掛けるのかと思ひつゝその家を辭しました。

翌日モレル氏からはエルサイユの兵營に行くことを報じて来ました。氏は情意を盡めた手紙を呉れました。「君の國が今度の戦争には吾等の側に立つて呉れるといふことは嬉しい。吾等は互に味方であると思へることも嬉しい。」としてありました。エルサイユの仕事は言はゞ後方の勤務でせうから、氏のやうな人の入替には

佛蘭西の陸軍省でも幾分か手心をするのではなにかと思はれました。

メテリリンクの消息のある新聞で讀んだことも書添へようと思ひます。白耳義の義人は義勇軍に加はつて母國の爲に戦はうと願ひ出たが、それは許されなかつたとありました。ノルマンディで收穫の手傳ひをして居るとの噂があつたメテリリンクは其新聞記者に斯様な話をして居ます。

「私は今、何事も出来ません、戦争に關した記事でも書いて居るばかりです。」と。(十一月一日——カトリックの死者の祭の日)

十六

日本の開戦の噂は既にしば／＼巴里で傳へられました。戦争の記で埋められる當地の新聞紙に東京發の電報を見つけない日は無い位でした。西伯利亞鐵道線路以來、私共はもう半月あまり故國の新聞を読むことも出来ずに居りました。露領波蘭の自治が巴里に發表されたのは八月十六日で、兎も角も白耳義軍は大勢を支へて居る。佛蘭西南部へ避難を思ひ立つものが有るなら今だ、リヨンへ向ふならば大使館

でも相應の便宜を圖るとのことでしたが、前途の不安を恐れて皆旅行を斷念しました。神戸、河田君等の出發はその際です。送られる人に恐怖があれば、送る人には驚き恐怖が有りました。皆な最寄々に集つて顔を鳩め神話を説くし、あたかも遠洋の破船に等しい有様でしたから、英國行の人達だけは救ひの船にでも乗るやうなものでした。置天にすることを賣めるやうな眼に見えない手が出ました。そこで委員として働いて居た河田君は逃げる理由を書残したのです。第一、巴里を立退き得る事情の下にあるものが此際のは相互の爲と信ずる。第二、自分等は政府の命によつて歐洲に滞在して居る。此際安全な位置に身を置くことは、やがて自分等の職責を完うする所以であると考へる。第三、諸君の一部には委員に對して不平の聲を聞く、不肖な自分はこの位置を退いて他の適當なる人に譲りたいと考へる。

倫敦へ避難した京都大學の仁保博士は河田君等のことを心配してわざ／＼巴里まで迎へに来ました。博士は一晩私の宿に泊りました。戸川秋骨君にでも逢ふやうな話し振りの人でした。十人、二十人づつ獨逸方面から逃げて来る

同僚のあるといふ倫敦の様子が分りました。白耳義の旅行中この戦争に際會し、ある停車場の附近で一夜を送られた時の物語がありました。

十七日の朝神戸君等は仁保博士と連立つて北の停車場から立ちました。露西方面から巴里へ歸つて来た東京大學の穂積君も一緒でした。巴里に在留した貴家のうちで、高村君が一行に加はりました。

どうも委員からして左様な選出してはひどいといふ話もありましたが、私はまた私で遠からず佛蘭西の田舎へ行きたいと思ふ心がありませんから、その日の午後委員を辭し、大使館からシナイ・ファルギエールへ廻つて自分の親の人達に後事を頼みました。巴里はもう見て居られなかつたのです。夕食後には私は疲れて早く寢床に入りました。(十一月四日)

十七

の賛助員の中に、モオリス・パレス及びシャアル・モオラスのやうな佛蘭西の文學者の名を見つけた時は床しく思ひました。(この人達はいづれも政治に關係し、時事を論評し、社會的活動の同盟に加はり、若い佛蘭西のために働いて居ます。多数の貴氏は救護所の前などに居るやうに成りました。そここゝでは施與が始まりました。

町々には饑えた犬が眼につくやうに成りました。風俗と流行の中心と言はれる巴里で、都會風の粧ひをした婦人の側に饑えた犬を見つけるといふことは、戦争といふものが描いて見せる一つの深刻な繪のやうに思はせました。

八月の二十一日頃には負傷した兵士が既に戦地の方から運ばれて来ました。巴里の市民は白耳義方面の大戦の報知を今か今かと待受けて居ました。いよ／＼私も巴里を去ることに決めました。しばらく住んで見た此の都會を愛惜する心が強く起つて居りました。平時ならそれほどの心は持つまいと思ふほど強く、何ぞ復讐の身に巴里を見ることが出来よう、もう一度巴里をり得る日は果して奈何な風に變つて居よう、實に種々雑多なことが自分の胸中

を往來しました。

私は日頃よく歩きに行くルキサンブルの公園へ出ました。そこには私の好きな樹木や草地がありますから、澤木君や野野君などとよく腰掛けに行き、河上君竹田君なども歩きに行つて互に旅らしい心持を語り合つたのもそこです。八月下旬の日光が急に射して来たり又急に影になつたりして行くやうな日でした。よく手入をした並木の列の横に小ルキサンブルには最早黄ばみ落ちたマロニエの葉も見られました。鳩、雀、鳥に似た黒鳥、稀には蝶なども来る長方形の草地は青々として天鷲のやうに刈込まれて、その草地の中央に立つ石柱、兩端に古く錆びた裸形の石像も相變らず休息の心地を與へました。自然と人の意匠とが巧に調和されてきたがら長い織物を見るやうな花壇には黄や白や紅の花ざかりでした。訪ねる人も少くさびしげでした。小ルキサンブルも同時らしい御座いました。二列の並木を通して花壇の向うには、黒衣の尼僧、老人、エトランゼなぞの通り過ぎるのが見え、また織物を織り、狭い静かな街道を隔て、あたかも並木の奥に背骨のごとく見える學校の建物

の窓も閉つて居りました。その奥に見えぬ
建物の石の柱、隅々をもつた庭の植木なども
閑寂として居りました。(十一月五日)

十八

私は小ルネキサンブルを通り抜けて本公
園の方へ出ました。昨年の八月あたり、平和で
あつた日のことも思ひ出されました。その樹
の下は深木と一様に懸けて長い黄昏時を樂
しんだところです。この入口の麗やかな緑の扉
の前は蒼野君が舊國の能衣袋の趣味だと言つ
た處です。黒ずんだブタアアの樹の皮が今年
の夏は多く脱落しました。玉子色の藜肌が着物
でも良いだにあらはに成りました。樹と樹の
間には風況を無造ひつゝ、新聞を讀み、歩い
て行く人が限つききました。

は寂しい氣持になります。こちらの垣の下に
芝生の斜面があれば向うにも蓄蔵が積んであ
り、こちらに石階があれば向うにも獅子の石像
があり、こちらに木製の大木な植木鉢が置いて
あれば向うにも圓い花崗があるやうな、巴里に
於ける唯一のルネッサンス式公園と言はれる、
大きな様式を重んじた園内の設計と意匠とを
そこから窺ひます。私はそこで向うの林の
間に對立する女王や王妃の石像を數へます。十
八世紀の御蘭西の形見がそこに群をなして残つ
て居ることを思ひます。マロニエの林も早や
赤黒く見えました。フロオベールの女友であつ
たといふジョオジサン石像は隠れて見えな
いでも、こんもりと繁つた樹木の上にパンテオ
ンの圓塔と十字架とを窺ひます。私はまた斯
のジャルダンのそも／＼が乳母車を引いて來る
女やあひびきをする兵隊や玩具の帆船を池
へ滑べに來る子供等の爲でなくして、極少數の
人の爲に設けられたすべての設計も意匠もそ
こから割出された、貴族的の意志の今も餘蘊然
と残つたものがあることを思ひ、まだ今日のや
うに種々な人が入込まない時分、今の元老院を
宮殿とし今の公園を逍遙の場所として昔の王

十九

達ふ人毎に私は何となく心を引かれまし
た。枯れ落ちたブタアアの葉を踏む音をさせ
て、公園内の林の間を歩いて來る平常服のま
まの女の連が私の側を通りました。

衣裳を着けた女が通りました。
白のレネスを帽子のかかりとして手袋のやう
に冠り、羅馬舊國らしい古風な服装をして大
を連れてお婆さんが通りました。
顔をあらはした子供を連れながら、新聞を讀
み耽つて行く女が通りました。長い靴下も白、
靴も白、丁度白足袋を穿いた感じに近く、それ
に白の薄い上衣を着て、金髪を背に垂れた十五
六ばかりの娘が黒いものづくめの母らしい
人と一緒に通りました。
赤い綿の短い上衣を着て黒い靴下を長くあら
はした。帽子を知らずに居る女の子供の連が
通りました。
静かなと言つても静かな、氣のめいるほど静
かなトボ／＼とした歩調で、極度に寒れ切つ
た都會人らしい老紳士が通りました。
良家の娘は獨りで屋外へ出ないほど巴里
の一面は舊めかしい氣なところ。必ず
母親が附添ふとか、女中が供をするとか、女の
友達と一緒に歩くとか控します。マロニエの葉
が深く繁つた樹蔭には白い帽子を冠つた娘同
志が書籍を手にしながら腰掛けて、語り合つて
居るものもありました。左様かと思へば、手袋を

はめたまゝ、圓の男の耳を撫でて周囲を仰らぬ
女もありました。パンの塊を持つて來て公
園の雀を養ふ男のあるなどもルネキサンブ
ルでよく見掛ける圖です。
子供に見せるための公園内の人形芝居も閉
つて居りました。私は蓄蔵のある方へ行つ
て見ました。その花崗がさかりの垣には私は
低い鐵柵の周囲、廻りに廻つて、立ち去るに忍
びないほどに美しい圓間のあつたことを忘れ
かねて居ますが、最早深い蓄蔵の香氣も呼吸す
るによしなく、紅く白く色の褪せたのがどこ
どこかに残り残つて居ました。そこから古風な
煉瓦造の建物の裏側が見えました。九つばかり
の窓の間に高く並んだ圓像の裝飾が見えま
した。それがルネキサンブルの美術館です。
あの建物も閉つて居ました。
私は詩人エルレヌの石像の前へも出まし
た。閑寂な芝生の中央に奇石を記さ、二重に
も三重にも花環を懸けたやうな植つた草花
が盛土の上に植えてあります。日の射つた石像
の深い眉と額とは何時見ても強い感傷を起させ
ます。強く悲しんだ人が今も猶そこに悲しみつ
つあるかの感を起させます。下には黄なヒアシ

ンヌ()が何かの微笑のやうに咲いて居まし
た。尤も此のエルレヌの石像はルネキサン
ブルの公園にある不調和の一つだとも思はれ
ますが。
樹蔭に隠れた音楽者ショパンの銅像の立つた
りから芝生の一つが見える一區域は矢張り私
が好きな場所です。樹深く静かで、薄日の漏れ
た草のにも、吹きとまつた落葉も、白梅の幹も、
芝生の中央に立膝をした古雅な裸體の石像も、
何もかも陰氣に青さめて見えるやうな場所です
が、釘きは好きです。そのあたりはまだ草木も
青々として居りました。綠葉はショパンの顔
を掩うて居りました。定めて華やかな生涯を
送つたらうと思はれる彼の音楽者の銅像が隠れ
たところに立たせられて居るといふことも妙な
對照です。ハアブと女の半身とを刻んだ石柱
の上に、彼の秀才らしい音楽者の銅の胸像が
置いてあります。
テエンが英國旅行記の中には倫敦と巴里の公
園を比較して、舊國の公園はまるで室内も同じ
ことだとしてあります。青々とした柔かい草地
の展けたルネキサンブルの一隅へ出て見る
と、梨山の側にも、鹿や獅子の銅像の前にも、紫

蘇なぞをめぐらしさうに花と一線に植えてある
あたりにも、寝るところに貸椅子を提出して編
物や讀書や競争の話を送る人達に逢ひま
した。それを見ると、いかに共同的な屋外生
活が——チエンの言つたまるで室内も同じこ
とのやうに——そこに暮まれて居るかといふ
ことを知ります。

ガン／＼寺院の鐘が町の空へ鳴り渡りまし
た。戦時にあつて聴くと、その鐘の音にも特別な
響が籠つて町から町へ傳はつて来るやうでし
た。左様言へば、黒い喪の章を帽子から肩へ
垂下げた風俗の婦人が何となく目につくやうに
も成りました。此の都督に就つて居る人は奈何
なるだらう、婦女は余様な目に逢ふだらう。四
十年前前巴里の艦隊をした人達は暗い穴蔵のや
うな地下室に隠れて居たといふことですが、そ
れと同じやうな日が復来るだらうかとは、考へ
たばかりでも恐しいことでした。(十一月七日)

二十

何時の間にか私共の家番の亭主も見えなく
なりました。ポオル・ロワイアルで八十三番地
の隣のアパルトマンの世話をして居たあの亭主

につきました。私はこの骨物の鍵に置くまで
懸掛けました。朝の早い出発に疲れたくない
やうになぞと考へて其鍵はよく隠れさせん
でした。

長々と御話を續けました。私は斯の通信を
一きりとして他の題目に移らうと思ひます。恐
らく今度の戦争が佛蘭西人に與へる影響にも
大きなものが有らうと存じます。あらゆる家の
戸は叩かれ、死は近づき、眠りは呼び覚まされ、
破壊は持来され、悲劇は新たにせられ、生は一
層の深刻を加へない譯には行きません。斯の御
便りを書くにつけても胸に滲ぶは日露戦争の當
時、私は信州小諸の方に居て東京の友人が
従軍する前に呉れた手紙を読んだことが有り
ました。私も戦地の方へ行つてみたいと思ひ
ましたが、それは果せませんでした。そこで私
は創作の起稿を思ひ立つたことが有りました。
山家の冬の夜などに、降り積つた雪に響く鐘の
の祝の聲を聞きながら、机に對つて居た時の
心持は今だに忘れません。動き廻つた月日は
丁度自分等の境遇を置き換へたやうなもので
す。私は競争の空想の中へ巻込まれるやうに威
から放へ行くやうに、實にあつたらしい思ひばか

も、もう好い年の隠居でしたが、細君と一人息
子と動員以來来て、掛つて居る子持の女とを
殘して置いて戦地の方へ出掛けました。

露西亞軍が東普魯西に入つたといふ報知の
傳はつた八月廿五日、私は一日前造りで暮
しました。蟬の聲一つ聞かない町中でも最早何
となく秋の空気が通ひました。部屋に殘つ
た蠅は来て旅の靴に取付きました。ダンフェル
・ロシュリウに畫室住居する楠木君は近い者で
すから田舎行の打合せに来てはよく顔を見せて
呉れました。私共は出来るだけ手荷物を減ら
さうとしました。書籍などは皆置捨て、行く思
ひでした。せめてモオパッサンの旅行記一冊は
靴の中に入れておきたいと思ひましたが、それすら
見合せました。戦争以來旅行も不自由に成りま
した。旅客一人につき三十キロ以上の手荷物
は許されません。早くやつて来るリモオジュの
方の寒さを豫想して自分等の手に提げられるだ
けの衣類は成るべく持つて行かうとしましたか
ら。

私の宿では半ば引越の騒ぎをしました。宿の
人達は先づリモオジュへ向ひました。私が巴
里を渡つたうとした前日には獨りざりで自分の部
りして来ました。友人は私と反對に東京の方
にあつて定めし歐羅巴の戦雲を遠く眺めつゝ筆
を執つて居ることであらうかと想像します。
(十一月八日——青島陥落の報を聞く日)

オート・ギエンヌの秋

二月ばかり田舎で暮しました。三日のうちに
私はこの町を去らうとして居ます。ポルドオ
運は汽車で二時間ほどの近さと聞きますから、
そこに大使館を訪ね、それから巴里へ歸らうと
して居ます。斯の町へ巴里から避難して来た人
達も最早大抵歸つて行きました。只今のところ
田舎に居るも巴里に行くも旅の不自由さに相違
ありません。こゝへ移つて来た宿の人達が勧め
て呉れますから、私も正宗君と一緒に歸るこ
とに決めました。巴里は今余様な風になつて居
るか、それを見るのも楽しみです。もう一度あの
都會から御便りすることの出来る日も近いうち
でせう。

佛蘭西、ネイト・ギエンヌ州、リモオジュ市、
パヒロン道——こゝは町はづれにある牧場や山
の多い郊外で、風俗の癖は居ることも想像
以上でした。故人には畫家のコロオ、現存の

屋に残り、兎も角も一年位を遠い旅に暮した事
を思ひ、消息の絶え果てた故國の方の事を思ひ
短くとも巴里を去る前に臨んで一回の御便りを
と思ひましたが、無間と神無は興奮するばかり
で俄に東京の親戚へ宛てた手紙を書くに止め
て了りました。十九年前、仙臺の濱川のほと
りで見つけた青の明星のすがたが窓の外に空
にありました。曾て自分を照して呉れた一點の
星が同じ光を放つて今もまだ自分を照して呉れ
るかと思ひ、眺めました。夜の八時半頃に、三
魚旗を掲げた佛蘭西人の群が國歌を歌ひながら
電車路を通りました。窓からそれを望むのも悲
壯でした。其日の夕刊には英佛聯合軍の襲撃も
效を奏せず、ナミュールは既に危いとしてあ
りました。佛蘭西側の新聞にそれほど不利な戦
争を公けにしたのは初めてであつたと書きます。

獨逸軍の前線がリールに陥れたといふ突然な
戦報を読んだ時にも何程私共は氣に成つたか
知りません。戦況依然たりとか、大勝近きに
ありとか、次第に戦報も淡として来ました。何
事も直接な記事のない新聞を買ふことすら有り
ました。夜の九時といへば町々は早や寂しく、
煙火の數も減り、饑えた犬の鳴聲が何となく耳

人には斯る家のロダン氏などが生れたのも斯の
地方といふことです。佛蘭西内閣のギギアニ
氏が生地も蘭州の町と聞きます。私がこゝへ
参つたのは七月の末、八月の收穫の頃でした
が、女は激しく働いて居ました。吾國で言へ
ば中仙道や甲州街道あたりに似たりを見つけ
ることの多い、すこし行けばサン・ラザールと
いふ小さな村へ出られる、ツウルウズ街道へ佛
蘭西の國道に添うた町はづれが只今の宿のあ
るところでして、そこに私は葡萄が熟するか
ら總て酒に醸されるまで居て見ました。
戦時の秋はこゝにも深いものがあります。働
き盛りの男子は皆品や牧場を去り、馬は微發さ
れ、小屋も空しくなり、陶器の産地といふ斯の
町にある工場も閉され、商家も多く休み、中
學や商業學校の校舎まで戦地の方から送られ
て来る負傷兵の爲の收容所となつて居ます。ポ
ン・ナフは郊外から町の方へ通ふところにある
大きな石の橋です。ギエンヌ河はその下を流れ
て居ます。橋畔のコントアールは一小酒亭の趣
があつて私共の爲に珈琲なども温めて呉れる
家ですが、そこへ行つて懸掛ける度に日本人の
めづらしい男や女の子供によく聞かれました

た。斯の田舎へ来て心を慰めたことの一つは種々な性質の子供と懇話に成つたことでした。橋畔の並木——巴里にも見られないほど太いブクタマの下には黄ばんだ葉の落ちたまる頃でした。二三の可愛らしい小娘がその葉を集めて私の側へ持つて来てはよく戯れました。私は小さな菓子や袋を十文がとこ貸つたのが初まりで、終ひにはその小娘達が私に眼を聞かせるほど親しく成りました。「バトア」と稱へるリモオジユの方言で出来た俚語の一言をそれらの邪氣ない口唇から聞いた時は、思はず涙が追りました。戦時の心配と不安はありながら、斯の田舎で一年のうちの好い季節を送りました。もう毎朝霜が来るやうに成りました。暖爐には薪を焚くやうに成りました。私はこゝで刺戟された心をもつて、もう一度あの都會の空氣の中へ行かと思ひます。よく行つて草を蒔いた牧場にも、赤々とした屋根や建物の重なり合つた河岸の町々にも、リモオジユ市全體を支配するやうなサンチ・チエヌメの高い寺院の塔にも別れを告げて行かうと思ひます。二度ここへ来て見る機會があらうと思はれません。病、斯のあたりの田舎に就いては暫く御話し

たいことも御座います。今はそれをする時もありません。私は十四日の朝の汽車でボルドオの方へ出発致します。(十一月十一日リモオジユの寄合にて)

ボルドオより望へ

リモオジユの停車場まで送つて来て呉れた正宗三郎君と宿の息子さんのエドワールといふ青年とに別れてからは、獨の旅となりました。初めて私がリモオジユへ入つた日は丁度戦地へ出發する人々が送られたり負傷して来た兵士が迎へられたりする頃で、停車場の附近は熱狂した男女で満ちて居りました。そこへ私共五人も揃つて着いた時は、顔を見合ふもの、噂し合ふもの、背後から聞いて来るもの、周囲を固くした町の人達が集つて了りました。あまりの如さに停車場近くの珈琲店をさして駐込んだ位でした。佛蘭西國器の工場を見る爲めに會つて一人の同胞が斯の町に滞在したことがあるとの土地の人の話でしたが、旅するものもめつたに足を留めないやうな田舎です。恐らく日本人を見ることも私共が初め

てのやうな人達も多かつたでせう。今度は来た時ほどの煩悶も無く、改札口の所に立つ警戒の兵士に警察で察知して貰つて来た時時の通行券を示したのみで事が足りました。やがて汽車はリモオジユの町はづれを通り過ぎました。私は一語の別れの言葉も残さずに斯のオート・ギエヌメを立去るには思ひない気が致しました。二月半の滞在は短かつたとは思はせ、私は可成り氣の置けない時をそこで送りました。歐羅巴へ参つてから以來のことがつくりと詰まつて考へられたのもそこででした。ギエヌメ河よ。さらば。汽車の窓からあの河も見えなくなる頃は、秋雨も歇みました。

遠い異國のことは想像も及ばぬと、ある人よりの手紙の中に御座いました。もし斯うした場合にそれらの人達と旅を一緒にすることが出来たらと思ひます。ビスケエ河も近しと聞く佛國の西南へ、葡萄酒を産する温暖な地方へ、その日あたりを想像しつゝ行く時の心を互に語り合ふことが出来たらと思ひます。一緒に旅らしい心づかひを分かち、同室の客を眺め、思ふさま國の言葉を出して話したり笑つたりすることが出来たらと思ひます。何程多様な光景が

吾國の周囲には起りつゝあるでせう。何程多様な印象が日々の記憶から忘れ去られて行くでせう。もしそれらの人達と一緒に窓際に掛掛け、秋雨あがりの後の黄ばんだ雑木林を眺め、白樺、樺、栗などの立木を数へることが出来たらと思ひます。その間から展げて見える丘の上には最早深い秋が恰も忍足で過去りつゝあるかのやうに感ぜられました。時としては海路に流うた石垣の上に野生の萩かとも見紛ふ黄な雑木の葉が落ちこぼれて居て、自分等の國の方の東北の汽車路、殊に白河邊りを思ひ出させました。その葉の色づいたのはアカシヤの若木でした。枯草を満載した。貨物列車が幾葉となく進んで窓の外を通りました。「軍用」とした貼紙を見て戦地の方へ送られる林と知りました。兵士等の飲料に宛られるらしい葡萄酒の樽も幾々貨物列車で運ばれて居ました。(十一月二十三日)

二

佛國中部の田舎を汽車で旅をして見て一番眼につくものは牧場です。もし先便で申上げたやうに是が連があつての旅だとすると、かねてミレヌの畫の複製で御馴染に成つて居た無數の

牧場を車窓から眺めたばかりでも、種々な點がして見たいだらうと存じます。バルビゾンあたりのことは知りませんが、あの田園畫家によつて描かれた羊飼や、飼物をしながら牧場を歸つて行く田舎娘は可成り感心するで有りませんか、其様な點が出るだらうと存じます。いつぞや——と申してもあれは最早何年前かと數へる程になりましたが、伊豆の天城を越して下田の方へ旅したことが御座いました。彼の時の遠は田山君に湖原君に武林君でした。彼様いふ達が欲しう御座います。どうでしう湖原君、こゝにもまた牧場が有りますか、林が未だ枝に残つてますか、あの木の下にも黄色いのが澤山落ちてますか、左様いふ話をして見たいと存じます。もしそれが出来たら、私はあの鳥帽子やハケの山の麓の方にある牧場の話などを持出したでせう。あの邊は、それは奥山で、山場の啼いて居るやうなところですが、あの邊の牧夫の生活と言へば炭坑か山番を思ひ出します、すくなくも私には羊や牛でも飼はうといふ場所はずつと寂しい奥山か、遠く人里を離れた谷間へ持つて行つて考へたいものでした。當地へ参つて見ると大分それが趣の

異なつたものでした。私はリモオジユの宿へ着いたばかりの時、往來を一つ隔てた鼻の先の岡の上に牧場があつてその草池へ来る。牛の群が自分の部屋の硝子窓に映つたには一寸驚かされました。吾國で黍苗や野菜苗に接して多くの黍苗があるやうに、こゝの牧場があります。牧場と申しても、こゝでは田や畠のやうなものです。ある意味から言へば、こゝの牧畜は吾國の雲霞に似て居ります。丁度吾國の農夫が畠へ行くやうな親しみを以て、こゝの人達は牧場へ通ひます。左様考へると、秋雨あがりの日の映つた林の間にも、岡の傾斜にも、村落の近くにも、無数の牧場を眺めて行つた私は丁度黍苗の多い上州や信州の地方を旅するに似て居りました。見給へ、田山君。この邊の草は實に柔かだね、ワイルドな感じが少しね、と山羊を牧するに適した草地を窓の外に指して、一緒に旅らしい心地を語り合ふ事が出来たらと思ひました。

全く見知らぬ西洋人と三等室に膝を突合せ、氣味悪くも思はない迄に、いくらか私も旅慣れました。自分等の國のことにしても東北は東北、甲州線は甲州線、客の種気がお

のづとあるやうに群々で昇つたり降りたりする人達も地方は地方らしく思はれました。車中で乾飯をやる連中も御座いました。食パンに乾飯を添へてむしやくとやつて居ました。横を見て見れば、飯に酒を添へて食ふと相違が御座いません。中には箱の中から冷たい炙肉を取出し食パンと一緒に留つて居る女も御座いました。(十一月三十日)

三

オート・ギエヌを離れ、州のドルドオニユへ入つて、コキユといふ小さな停車場を通り過ぎました。線路の踏切の傍に立つて、旗を赤して居るものは大抵、婦人でした。驚くばかり赤い旗が私の眼に映りました。赤く言へば、そこには何程の色があつたか知りませんが、唯全體を支配して居る調子の整つて見えたのに驚かされました。農家の屋根の赤いのも美しく見えます。五國の草葎のかはりに、こゝのは茶畑の赤瓦です。栗の林も枯々として居て、高粱の紅葉の赤ちやけたのが多く眼につきました。赤土をならした耕地には、遠くとして、草が流れて居りましたが、それは草の芽か

見ました。

山も淋しい時でした。私がモオジユに居た頃に最も朝となく霜が来りました。ところどころの耕地には手廻しの選れた人達と見え、働きの道具を牛に引かせて仕事を急いで居る年寄の夫婦があり、短い袴を着けた女、獨りで山に山へ土を運ぶながら激しく働いて居るのを見かけました。野の熟する八九月を主なる収穫時とする當地にあつては、野良のいそがしい時は、従く過ぎたのでせう。働きの農人が多く、耕地へ去つた馬でもありませう。それにしても山に人を見る事は稀で、私は行く先々の牧場に放たれて居る十頭、十五頭の赤牛や羊を眺めて行きました。田舎の旅らしいことは、ある停車場から一線に乗せた在郷の女、衆を見て左様思はれました。その人達は選けた茶色の髪を無造作に束ね、帽子も短らず、目に映けた手をして、村から召集されて行つた兵士達の噂を心懸顔にして居りました。左様かと思ふと、新聞で見たんだに、鶏を思はせ、それを客車の中へ持込んだ女も有りしました。私共の室では、鶏が鳴き出すといふ奇麗な星しました。その女は幾度も廻舞せにし

ボツン／＼としか眼に入りに入りません。私はあのピナロオの描いたやうな風景を何程迄の外に見つけたか知れませんが、しかし歩いて通つて見たら随分退屈するだらうと存じました。

次第に平地が多くなつて来ました。ポアエといふ小さい停車場を通る頃には、枯々とした葡萄園を見ました。ポルドオも所々なつて来ました。傍に友達でも居たら言ひ合つたこととせう。地味も變り、人家も多くなり、青々とした野草もすらすら見えるやうに成つて来ました。ジロンド川へ近づくにつれて、村々の感じも違つて来ました。ポアエの並木の續いた長い平坦な街道の両側にあるものは、一面の葡萄園と野菜畑とでした。葡萄園にはまだ落ちない葉を見るやうにすら成りました。

暗くなつてガロンヌ河を渡りました。平時は三時間程で来られるといふ距離に十一時間も要りました。汽車の窓を通して暗い空に無数の燈火を望みました。そこがポルドオでした。(十二月三日)

四

是程暗みにしてやつて来れば、それだけでも

深山だつたと申上げねば成りません。私には南方の佛蘭西を想像して来た樂みが有り、そこまで動いたといふ樂みがありました。――ポルドオで私を待つて居て呉れたものは二日とも降り續いた雨では有りませんが。

ポルドオのサン・ジャン停車場前の旅館では一回の通信を送りたいと思ひました。何だかモオジユあたりから見れば日もいづらか長いやうな陽氣も餘程温かめで、同じ十一月の雨でも明るいやうな氣が致しました。何がなしに私は御便りしたいと思ふ心が頻りに動いて、旅館の一室で紙を展げて見たり、部屋の内をあれこれと歩いて見たりしました。やゝ單調ではありましたが汽車の窓から望んで来たポルドオ周辺の平野、見渡すかぎり連綿した葡萄園がまだ私の眼にありました。停車場前で買つて来た大きな葡萄の汁かつた事なども書きつけたかつたのです。高く消した部屋の電燈は物書きには暗く、食堂には人が話し込んで居て、ついその出来なかつたのは残念でした。戸川君が以前新片町へ見た時の話に、西洋の旅館は寢るだけだと言はれたことが有りましたが、来て見ればほんとに寢るだけです。茶や梅干を運んで来

てあつたのを籠から取り出し、自分の腰掛の下に捻込んで、黙つて居るといふ様子をしまし。西洋は西洋なりに、なかく／＼えらい平合も居ると存じます。ある小さな停車場で汽車が停ると葡萄園を窓の外へ賣りに来る女もありました。それを茶碗に注いで、善く勧めるなども、斯うした田舎でなければ見られない圖でした。ベリギユウで乗換へてからは、何となく西南の佛蘭西を指して旅する心持が浮んで参りました。ポルドオ行の三四の婦人とも乗合せました。その中で五つばかりになる女の兒を連れて居た婦人がその娘を膝に載せ、私に腰掛ける席を作つて呉れましたが、その人達の言葉づかひを聞き直さしを見るにつけて、南國的な心持が浮んで来ました。室には乗客も多くなり、召集されて行くらしい兵士も多数乗込みました。中には葡萄園に酔つて大騒ぎで眠つたり喋つたりする兵士もありました。戦時とあれば斯ういふ狼藉も寧ろ可憐なりました。時には喝采されました。列車の片側の廊下のやうに造つてあるところへ出て、時々私は窓際に立ちました。奈何して斯の邊の田舎には斯う人家が少いだらうと思ひ、岡の上に立つ百姓家などが

るでは無し、首飾を纏んで呉れるでは無し、中位の家には浴場の設備も有りません。一風呂入つて来て宿屋の浴衣で夕飯の膳に向ふやうな、デリカなものが御座いません。左様いふところは實に簡陋です。穀風景と思はれるほどです。草を乾にして寝るかはりに、こゝには大きな農家の意匠を施した木製の寢室があつて、ぶくぶくとした毛氈などが掛けられてあるといふ支度です。それに今度は厄介な荷物が有りましたから成るべく汽車に便宜な場所をと思つて、いかにも停車場前の旅館らしい家へ泊り合せてました。まあ斯様なものですと旅した人は申すかも知れませんが、枕頭の上には小さな海の畫が掛けられて居ました。それは横寫か何かでした。霞風堂な部屋の内にあつては其様なつまらない額が光つて見えて、海に近く来た旅の心持さへ浮んだのは不思議でした。

巴里の様子も心に掛り、霜々降る驟雨の中を電車で大使館の方へ行かうとして、途中「ロロ」の光景を目撃しました。新たに戦地の方へ出發しようとする歩兵の列が列をつくつてポルドオの町を通りました。古い市場の建物の前あたりは男女の見物で満ちて居まし

た。衣色がよつた青地の縞縞を着けた兵士等の胸には黄や白の菊の花が挿され、銃の筒先にまでそれが露されたのを見ました。夫を、兄弟を、あるひは情人を送らうとして、熱狂した婦人がその列に加はり、中には腕を擁して口説きつゝ行くものも有るなとも思はれました。(十二月七日)

信濃西武府と一線に引移つて来た人は、アカデミーの連中、其他多数の遊覧者で、ポルドオは賑ふ時でした。葡萄酒の産地であり、葡萄酒の町であるといふ斯の土地に似た古風な港町が何處か自分の腕の方にも有りさうで、今思ひ出させません。海とか山とかに近いと言ふ人も有りませんでした。取りあへずバグ・デ・シャルトロンに大使館を訪ね、巴里の方の標子を聞き、正宗君から頼まれて来た用事をも果し、一月半程前から暮らも粗まれるやうに成つたことを知つて安心しました。大使館附の武官も居合せて、御遊軍の一部はまだ巴里から四五十里位の距離に留まつて居るもの、刺聞の形勢から考へて巴里の危険なやうなことは有るまいとの話でした。

て行つて見れば、白鳥の橋かに昔古池の畔には黄ばんだ柳の葉が未だ深い秋を語り、枇杷の葉に似たマダノリアの濃い緑も生々として居た、そこにも南方の空を思はせるものがあり(十二月九日)

六

葡萄酒の樽などを並べた物置場の多い河岸通でした。右にはバステイルの橋が見え、對岸には同じ名の古い寺院の塔も見えました。水による交通の便も多しと見え、青く澄つた汽船の煙筒白き思き航路、帆柱、帆にひるがへる旗、そのこちや／＼とした河口には何程の物があつたと歌へ盡すことは出来ません。勤いて行く小舟もありました。濡れた三色旗を立て、荷船を

なにしろリモオジュあたりに引籠つて居ては一向に巴里の様子も分らず、復八月の末のやうな思ひをしなければ成らないでは困りますから。通りすがりの旅客を除いては、ポルドオに遊覧した日本人は極く稀のやうでした。私の聞いたところでは日本銀行の青木君一人ぐらゐのものでした。大使館も寂しきうに見えました。名高いポルドオの牡蠣の養殖法を調べに来た尾尾君といふ人が居る筈だと思つて尋ねましたら、同君も斯の町を去つた後でした。

雨は降りたり止んだりして居ました。美術館も閉ざされて居る時でしたが、特に頼めば番人が案内して呉れ、近代の繪畫と彫刻の部だけを見る事が出来ました。斯うした港町にも兎に角相應な美術館があつて、藝術が土地の飾りとなり、葡萄酒屋の亭主等までそれを慕ふやうといふ氣風は羨ましいと思ひます。館内所蔵の繪畫が町の寄附でなければ個人の寄附である事にも心を引かれました。今は訪ねるものも少い、畫堂の一隅にまだ年若なアマチユアらしい女が一人腰掛けて、譜成の十月の夕」と題した演進の畫の模寫を飾りとして居りましたから、試みに斯の館内でどれを代表の作

に推すかと尋ねて見ました。其女はコロオの「ダイアナの浴み」こそ自分はこゝでの傑作と信するが、マアセル・パセエの描いたリシニパンの肖像も評判のものであると語りました。私は四枚ばかりあつたドラクロアの作の向に一番長く立つて居て、やがて雨の降る町へ出ました。草一葉描いた中にも握力の強さを思はせるドラクロアの作からは可成深い印象を受けました。

サン・タンドロレは美術館に近く古いオチツク風の塔の見える寺院です。そこへも行つて暫時暇掛けました。リモオジュのサン・ナチエヌを見た眼には建築の内部に於ても著るしく見劣りがしました。中世の形見に残つた塔も今は現時に有用な機關となり、そこに無線電信の假設備がしてあつたといふ以外に、特にその寺院に就いて申し上げようと思ふことも有りません。丁度私がそこを出ようとする頃は大雨りでした。雨を避けて寺院へ駆け込んだ親子三人の女連がありました。所謂ポルドオレと見えて、頗も豊かに、流石に南方の婦人の感じがありました。その血色は多感で、快活でした。雨の中をジヤルダン・ピユアブリックへと訪ね

引いて行く汽船もありました。雨に濡つたガロンヌはその間を流れて居りました。東京の隅田川にも比べて見たい河でした。大した降りでもありませんでしたから、私は外套のまゝ、珈琲店の外に出してある椅子に腰掛け、水を眺めて居りますと、つか／＼と私の傍へ来て握手を求めた男が居りました。エトランゼと見かけて命の無心でもするのと思ひましたが、「君は日本人だらう」と言ひますから左様だと答へますと、私の手を握つて、「佛蘭西の一労働者が寄せる厚意を受けて呉れるか。」と左襟申しました。見れば大分上層階級のやうでした。恐らく斯うした歳でよく遊覧する物乞でもなく、愛すべき酒場であつたのでせう。凡そ一時間ばかりも私はその河岸に居ました。時とすると雨が上つて、對岸に見える工場の上層階にはボツと薄く日が映りました。ちぎれた雲の間を通して日本の方で見えるやうな青い空の色を望むことも有りませんでした。

私に泊つた旅館の前の旅館は殊異ではありましたが、加氣の置けない家でした。もし時が許すなら、珈琲店を兼ねたその食堂を委しく御話して見たい。私はそこにいそ／＼と立働くおかみさんを、亭主が職場の方へ行つて了つてから若いおかみさん丈では重しの利かないガロンヌを、物食ふ田舎風の者を、召集されて行く兵士を、時々顔を見せる地廻り風の男を、それからそこへ来て酒飲む人達の中心となつて居る氣取つた娘などを眺出したでせう。しかし今は省きます。唯私は旅のスウヴニールとして先便にも一寸申上げた大きな栴檀のことを書添へたいと思ひます。あれは西班牙から来たものでした。今は果物どこの話か、と言はれる人が有るかも知れませんが、實際斯の大きな栴檀の始まつて居る中で、西班牙の栴檀の甘かつたことなどを書くのは氣過ぎませう。しかし見事なものでした。私はポルドオへ来て何を思つたかと思ふにも勝り、假令海まで行かず牡蠣のベッドも見ず仕舞に歸つてもこれだけで澤山だと思つたのはあの栴檀でした。其外皮には石のやうな頑固な力があり、古い茶器のやうな光澤があり、内部には紅い寶石にも輝く美しき光澤がありました。あまり氣に入りましたから二つまで食つて了ふのは惜しく、一つはポルドオに居る間自分の枕許に置いて

寝ました。西園寺の空に生ひ立つ樹木の生命の結晶かとも言ひたい驚くべきの大きな折檻。十一月十六日の晩に私は夜汽車で巴里へ向ひました。(十二月十三日)

七

再び巴里を見るのは何時のことかと思つて出て来たあの都の方へ、もう一度歸つて行く自分の心持は可成り強固なものでした。獨逸軍の飛行機がしばしば飛んで来た頃には "Canton d'air dangereux de la rue sans tranquillite" と巴里人は我々を言ひましたが、奈程いふ冷たい風があつたのを吹飛ばして居るだらう、今度歸つて見たら幾人の同胞に逢ふことだらう、と思ひやりました。夜行列車にはブルジョアらしい何れの方に連れられてある専門學校へ行くといふボルドオ生れの兄弟の二青年と乗合はせ、脚車と無聊を思つて行きました。窓の外は暗し、眠らうとしても目を眠られず、車中のは皆ひどく疲れた頃に汽車の中で夜が明けかゝりました。

時々私は窓際へ行つて立つて見ました。あの黒い大きな影は、あれは「オニ」だ、

髪があるのだ、と見て行くうちに、暗くてよく分らなかつた短い雲の端が紅く燃つて来たのを望みました。あそこに柱がある、こゝに牧場がある、と言ふことが出来るやうに成りました。野は遠くから眺めたばかりで、岡の立木も半分だけ見えました。何もかも未だ朝の床の上にあつて、目を覚ましたまゝ、休息の姿勢で居るかのやうに静かでした。

夜は次第に私からも離れて行きました。そこいらが白々と明けて行くにつれ、何となく自分の心持もハッキリとして来ました。日の出だ、と汽車の窓から望めば、地平線の彼方は朝霧立ち籠めて居て、その間から太陽が紅く見え初めました。窓不足で身体はぞくぞくして居た時です。まだそれはほど暖かぬ朝日を真面に二行といふことも嬉しく、目を放さずに居ることも出来ました。次第に圓い空の輪郭が明けて来ました。あたかも、遠く調製を懸けたかのやうに成りました。車窓の隅に我れて黒い毛皮の外食にくるまつて居た婦人まで立つて美しい日の出を望みました。調子を破つた音楽のやうな形跡が感じられると共に、太は一氣に地平線を離れて行きました。私はもつ

とよく見ようと存じました。私の眼は痛くならぬまで太陽を追ひました。何といふ眩しい光彩が、何といふさかんなエナブイが、何といふ野蠻な音が私の視界を揺らだせう。終にはどうしても目を放さずに居られなく成りました。車中の人々はいづれも争つて窓を開け、射し入る日光に接しようとしたり、清々とした空気を吸はうとしたりしました。

朝に成つて戻つて氣の緩んだ人達は互にいくらでも寝て行かうとしました。私も一眠りして、眼を覺すと、その度に巴里が近くなつて来たことを感じました。朝らしい空もその度に光つて来て、高く低く浮ぶ雲の隙まで色彩を變へて居ました。窓の外は遠くには白々とした雲を見ました。それをところへ人の家の屋根に見て行きました。巴里の近郊は概して平坦な地勢です。二層或は三層の建物から出来た小さな町が幾つとなく散在して居ます。心持の好い朝で、何を眺めても眼が覺めるやうでした。昨年の五月マルセニユから乗つて参りました時にも私は左様氣づきましたが、禽鳥の類の少ないのは物足りな氣がします。どうして斯の邊には斯様な

鳥が居ないのだらうと思ふ程です。ほんとに小鳥一つ啼きません。斯うした心持の好い朝に、早起きの百舌の一種も飛出して呉れたら、日本の十一月のやうな氣もするだらうに、と左様存じました。

近郊から段々巴里の城塞の方へ近づきました。建物の趣なども何となく變つて来ました。リモオジュあたりで見て来たアリミナイゲなものがガツシリとした意匠となり、二層三層の高さが五層にも六層にもなり、城郭のやうに堅えた建物と建物の間には高重ねた煉瓦の斷面のあらはれたのが高く望まれるやうに成りました。そこはもう巴里の町です。朝の八時に私はドルセニ河岸の停車場へ着きました。荷物と一緒に乗つた列車の中から右を眺め左を眺めして参りました。ボルドオを見て来た眼には町々は早や全くの冬景色でした。草木は枯々として居りました。冷たい痕路を踏んで行く馬の蹄の音までが耳に響きました。私が思つたよりも寂寥とした巴里へ来たことを感じました。(十二月十七日)

A

宿へ歸つて取りあへず家番のおかみさんを見舞ひました。入口の階段に近く住む家番のおかみさんは私を見ると部屋から飛んで出て来ました。籠城同様の思をしてずっと巴里に居た人達の心はおかみさんの顔にも讀まれました。私はこの無事を祝しました。聞けば召集されて行つた亭主も無事だとのことでした。

かばらずにある自分の部屋を見るのも嬉しく思ひました。二月半ばかり留守にした間に、えらい塵埃で、置捨て、行つた荷物や書籍などは下手に觸られない程でした。八月の初めあたりに着く苦の新聞や雑誌や、ある人々から送られた小包が長い日数をかけて、よくそれでも失はれずに、自分の留守に届いて居たのも嬉しく思ひました。部屋の窓へ行つて見ました。暗い巴里の冬が最早アウルヴアルへやつて来て居ました。往來の人も稀でした。向うの産科病院の建物、珈琲店、それから御戸君や河上君がしばらく泊つて居た旅館の窓、何もかも眼に浸みしました。

知りませんでした。ずつと巴里に残つて居た一二の輩家もあつたことを知り、した。町を見に行かうではありませんか、何といふ寂しさでせうと、私は正宗君を呼びました。袖木君達の歸つて来た時はもつと寂しかったさうですと同君は言ひました。私共は連立つてサン・ミッシェルの通りへ出ました。エトランゼエは去り、多くの市民は避難し、ほんとに僅かの老人と婦人だけがあの通りを歩いて居ました。シャトレの廣小路へ行つて、いくらか巴里らしい氣がしました。私共はセヌヌの河岸についてサン・ルイの中の島へと橋を渡り、そこからノートル・ダムの方の聖子の望まれるところへ出ました。冷たい石の建物、黒い冬枯の草木、それらは巴里へ来て見る冬の感じでした。石垣の下の方には並んで釣をして居る黒い人の影も羨さうでした。セヌヌも寂しさうに流れて居ました。

私は非常な恐怖が過ぎて行つた後の都を眼前に見る心地がしました。なにしろ一時は巴里市も獨逸軍の包圍を覺悟し、避難者のためにあらゆる汽車を開放したといふ話です。麵麩なぞを乞ふものには誰にでもたいて呉れたといふ

話です。多くの市民は来るものもなく昔な徒歩で立派なといふ話です。それらの人達が夜の街路に積りて居る方まで絶えなかつたといふ話です。

日頃よく雑草を買いに行き居へ寄つて見ました。その草は片断失し程の負荷をして今は戦地の病院に居るとのことでした。ルキキサンブルの公園に居る小さい動物園へ行つて見ました。その草は又白耳義方面の戦場へ向つたざり行方は不明でした。多分獨逸軍の捕虜と成つたであらうとのことでした。町々がいくらかづゝ賑かさを増して来たのは漸く十二月に入つてからのことです。倫敦の河川君から巴里の様子を尋ねて寄りました時、私はその故事の端に、『早く英吉利を切替へ給へ、この痛切な巴里を味ひ給へ。』と書いて送りました。(十二月十九日)

春を待ちつゝ

独逸軍の少壯な精鋭士ドロオメニといふ傳聞西人がありました。斯の人はすつと以前から私の隣の部屋を借りて住んで居て、随つても

照つても毎朝事務所の方へ通ひ、夜になると廊下を這む靴音をさせて歸つて来ました。隣の部屋は裏泊りするだけに充て、あつたのです。戦争になつてから斯の人も召集されて行きました。が、其の消息を聞きません。宿のおかみさんも心懸して戦地宛の手紙を三度も出して見たが、さつぱり返事が無いとのこと。ムクシユウも可哀さうに、多分戦死したであらう、と人々は噂して居ます。もし左様だと信じたいことをしました。ノルマンディあたりの先れの人にも見るやうな佛蘭西人で、昔々南方の人よりは随く、好ましい人物でしたが、隣室には斯の精鋭士の残して置いて行つた武器や雑誌の類がまだ其儘そつくりしてあります。時々私はその空虛な部屋を覗いて見て、後悔を極めた戦場の記事などを讀むにも驚るべき冷たさを感じます。その冷たさが又一重層でた自分の部屋の極近くにあることを感じます。召集されて行つて行方の知れなくなつた人は今は何の位あるか知れません。

ピョウクワルのモレル氏もゾルサイユの兵隊附で働いて居ます。前の日曜に私は一寸氏の留守宅を見舞ひました。二人の子供が淋しげ

にして居ました。家の人の話によると、氏は佛の計された時を得て自動車で見舞ひに来ることもあるさうです。二時間ばかりの間、忙しく家族の人達と食事をして、また自動車でゾルサイユをさして急いで歸つて行くさうです。

ラベエ河岸のリエーグ氏は今軍用の自動車掛りです。氏は巴里の市内で働いて居ます。此節は夕方になると青黒い雲を被けた大きな輪送用の自動車は幾んどなく斯の並木街を通ります。あの自動車を飛ばして行く兵士の中にはネオ・バルナツシヤンの詩人も混つて居ること、眼をとめて見るやうに成りました。六頭の馬に挽かれた高車の列が今日斯の町を通りました。一両車毎に彈藥の箱を載せた車が八頭の馬に挽かれて其後から續きました。御路に集つて斯の光景を見る市民の中には一語狂した叫び聲を發するものも有りません。いづれも皆静かな沈黙を守つて馬上の壯丁を見送るのみでした。斯の光景は何を語るものでせう。戰時の空気がそれほど濃い沈鬱なものに成つて来て居ます。私は水を打つたやうにインとして来た町のさまを眺めて、数月前より

は反つて一層胸を打たるゝことが有ります。其の淋しい降霖を浴び、正月を送り、一日は一日より斯の空の中へ落つて行きました。激しい興奮と動搖との時は過ぎて、忍耐と抑鬱との時が今はそれに代つて居るのです。

今日はまた雪がチラチラして居ます。三月に入つても未だ、私共は冬籠の有様から脱け切ることが出来ません。開くところによれば獨逸はひそかに六十萬の新募兵を訓練し、先づそれを波蘭方面に送り、露西軍軍をして要塞を守るの餘儀なきに至らしめ、更に聯合軍軍に向つて殺戮するの計畫を立てたとか、英吉利の新軍が波蘭海峡を渡りつゝある今日、獨逸に斯の計畫あるは寧ろ當然のことです。昨日露西軍の報が急に活氣を帯びて来たのも斯の邊の消息を語るものでせう。私共はまた近き將來に於いて、オスタンドからアルサス・ロオレンに亘る長い戦線にも獨逸軍の擧げが何等かの形をもつて動いて来ることを豫期して居ます。(三月八日、大正四年)

二

昨日は十七八歳ばかりの青年の一群に町で遭

遇ひました。それらの青年は皆學生でした。普通通の服に軍帯を締め、腕章を着け、脚絆を巻つて、銃を肩にし、列をつくつて、兵式の訓練を受けるために公園の方へ行くのでした。中にはまだ着たしい暗い面さしものを見かけました。彼等はいつれ國難に赴かうとして居る若者達だらう。自分等のことにしたら短い袴を着けて友達と一緒に學校へ通つて居る年頃だ、左様思つて、しばらく其首を見送りながら立つて居ました。此節は、漸く青年期に達したばかりのやうな、身體もまだろく／＼出来て居ない、若い兵士をもよく町で見かけます。

開戦以來、早や七箇月を経ました。動員當時の混雜、市民の狼狽、あの頃の騒ぎを思ふと、自慙に自慙を重ねて斯の非常な時に處して来た佛蘭西人も随分勞めたものと言はねば成りませぬ。私は佛蘭西人の精力の發現が寧ろ左様いふ感服した方面にあることを申上げるのに躊躇しません。動員會が下ると共に大統領が巴里市民に與へた演説は徹頭徹尾市民に抑鬱を説き勧めたものでした。ジョツフル將軍の公報が佛蘭西一流の多難を避け、どこまでも謙遜に、所謂東洋的節流をもつて書かれてあることも人

の知る事實です。昨年の八月以降、當地の新聞紙も殆ど戦争の記事で埋めらるゝ有様ではあります。ル・ジョオナル、ル・ブツチイ、パリジャンとか「マタン」とかの通俗的言としたり紙面にすら、實際あまり挑発的な文字が用ひてありません。昨年の冬、巴里市民がボルドナから再びボアンカレ氏を斯の都に迎へた時です。町々は平日と異なりませんでした。日本の赤十字隊も無事當地へ着きました。佛蘭西政府の當局者はそのために巴里第一流の建築物を用意し、紅い日の丸の旗をエトワアルの凱旋門に近き好位置に懸せさせるほどの款待を盡しました。が、派手々々しい歓迎などは、遠慮したやうです。見るもの聞くものが斯ういふ調子です。痛々しいほど沈んで、そしてシミリとして居ます。戦争が長引けば長引くだけ、ますます「私の身に感じて来たのは斯の制へに制へようとして居るエナアジイです。佛蘭西人の消極的な勇氣です。

只今の巴里は言はゞ留守居の都です。佛蘭西政府もボルドオより歸り、各陣地でもマチネを飛行するやうに成り、寄席や劇場まで閉かれて居ると言へば以前と同じ巴里を一寸想

像させますが、其實巴里見学の爲に諸國から集つて来る多量な外國人を相手にした頃の歡樂の都ではありません。それだけ純粋な巴里が今は反つて味はれます。羅馬教のしつとりした空気が此處にも此處にもしみこめて居ます。劇の興行にしろ、愛國的精神に富んだ出し物を演び、名のある俳優が舞臺の上で古今の佛蘭西詩人によつて作られた多くの詩篇を朗吟し、最後に國歌を歌つて幕を閉ぢるといふしつとりとした行方です。ソルボンヌの大講堂は正而にシヤヅンヌの講堂が描かれてあり、半階圓形の座席の天井、アンフィテートル風の構造、すべてが古雅で心持よく用ゐられて居りますが、毎週の日曜そこで一國民マチネといふ他兵の音樂會があります。佛蘭西の藝術家が劇團に對する事業として開催するもので、私も二度ほどその大講堂へ聴きに行つて見ました。オペラ座や、コメデイ・フランセズ座あたりの名のある女優の朗吟があり、アカデミー會員の學士の朗讀があり、管絃樂の合奏はコンセルヴァトアールの連中が持ち切つて、最後は一同で佛蘭西國歌を歌ひました。戦時らしい活氣は外部よりも内面に湛んで、反つて左様い

ふ音樂會などに遊んで居るのを認めました。今日は午後二人と立立つて、サン・セルマンの長い並木道をセエヌの河岸まで歩きました。モオパッサンの著作などによく書いてあるあの通りも今はさびれ、繁華は他の町に移り、一時の形みはそこにも争へないものがあります。私共はそのさびれた町を味はうとして歩きました。ルリゲルの宮殿の古い建築物やチュレリイ公園の石垣が河岸に見えるセエヌ河の畔へ出ました。河の流れるも何となく霞んで見え、岸に立つマロニエの並木も芽ぐみ、寂しい風時の冬らしく萬物は凍り果てた所の歴史の都へも、清く春が近づいたかと思はせました。(三月十日)

の色に換へて面も凍り果てたといふ太陽は北極の空を想像しないでも、巴里に居てしげく見らるゝものです。寒い雨の来る晩などは遠く離れて居る友人等の名前を呼んで見たいと思ふことすら有りませんでした。窓へ行つて、灰色な光線が射して来て居るところで、東京の柳田君から繪葉書のはしに書いて寄こして呉れた「寂寥懐君」といふ言葉などを胸に浮べて見ます。冷い感じのする窓の硝子を通して望める町の空は暗いとは言つても、早や何となく春めいた紅味を含み、遠い建築物の屋根や煙筒も霞んで見え、底温かい三月に成つたことが自然と感じられます。斯ういふ日には殊に春待つ心が浮んで來ます。

の布や、防寒用の新服から一番先に來るものには、その汚れた感で、風雪の勞苦が思ひやられました。町々の婦女は出て斯の兵卒等をねざらひ、葡萄酒を饗する珈琲店のおかみさんがあれば、パン菓子を皿に盛つて行つて勤める至子屋のおかみさんもありました。私も部屋にちつとして居られなくなつた。急いで帽を冠り、階段を降りて、斯の人道の中に混らうと思つたのです。夫や兄弟や従兄弟のことを心算的な留守居の婦女、子供、それから老人などが休息する兵卒等の間を分けて、右にも左にも寄り歩いて居ました。私も自分の懐袖の中から巻煙草の袋を取り出し、既に居た五六人の兵卒にすすめたりなぞしました。種々なことが旅の身の胸に響んで來る。それも順序もなく斯の通信のはしに書きつけて見ます。

やうな新生の芽だ。それは可成り長いこと前に萌して來たものであるとも言へよう。けれども何人の骨髄にまでも浸み渡るやう歐羅巴の寒い風が來て、一層その發芽力を刺戟されたやうだ。斯うした者が自分の周囲にある。それが春待つ心を餘計に深くさせる。メレチコウスキイの一人として、また藝術家としてのトルストイを讀んだ時、伊太利文藝復興期のことが論じてあつて、彼の精神の發揚した時代の特徴は藝術的であり又宗教的であつたが、近代の露西亞のルネッサンスが正にそれだと言つてあつたことを記憶する。ルネッサンスとは何であらう。再生の謂だ。私が今自分の周囲に見つけるものは、それに似た芽だ。或はもつと強烈な綜合だ。その特徴は藝術的であり宗教的であるばかりでなく、哲學的にも政治的にも結び着かうとして居る。先頃、モオリニ・パレスはジャン・ダクの記念の日に「レコオ・ド・パリ」紙上へ一論文を寄せて、

もし吾國に於ける十九世紀研究とも云ふべきものを書いて呉れる人があつたら、奈何に自分はそれを讀むのを榮むだらう。明治年代とか、徳川時代とかの區別はよくされるが、過去つた一世紀を眺めて考へて見ると、そこに別様の題が生じて來る。先づ本居宣長の死あたりから其時代の研究を讀みたい。萬葉の研究、古代詩歌の精神の復活、國語に對する愛情と尊重の心、それらのものが十九世紀に起つて來たクラシシズムの効果を収めたことあたりから讀みたい。それがいかばかり當時に眼覺めて來た國民的意識の基礎と成つたかを讀みたい。一方にはあの時代の初に於いて、喜多川歌麿も歿し、皆川淇園も歿し、上田利成も歿し、十八世紀風の特異な藝術が次第に山東京傳とか式亭三馬とか十返舎一九とか爲永春水とか、あるひは歌川派の畫家の群とかの寫實的傾向に變つて行つ

私は今自分の周囲を見廻すと、戦後の佛蘭西の爲めに——來るべき時代の爲めに——せつせと準備しつゝあるものに氣が着く。どう見てもそれは芽だ。間断なく忍りなく安度して居

たことを讀みたい。一方には聖堂を學問の中心として文藝、趣味、道徳の上に支那の憧憬があるかと思へば、一方には學問の研究などが非常な勢いで起つて居る。十九世紀の初期を考へると、舊いものと新しいものとが強烈に衝突して居る。それを委しく讀んで見たい。粗雑な西洋の文藝を受入れようとしてから未だ漸く四五十年だ、兎も角もその初期の間に今日の新しい日本を仕上げた、斯う言ふ人もあるが、それは餘りに中下した考へ方と思ふ。少くも百年以前に遡らねば成るまい。十九世紀の前半期は殆ど其準備の時代であつたと見ねば成るまい。前野良澤とか、桂川市榮とか、杉田玄白とか、大槻玄幹とか、其他足立左内、高橋作左衛門、伊藤半助、足立長高、被褥いふ人達が來るべき時代の爲に地ならしを行つた跡を悉く讀んで見たい。

頼山陽といふ人も其の時代には見逃せない代表的人物であつたらう。あの人の書いたものは随分混り氣の多いものとして、一代の人心をチャアムしたことは争はれまい。けれども山陽には未だ餘程十九世紀風の運つたところが有る。渡邊崋山、高野長英、吉田松陰等に成つて

來ると、何となくそこに武士的新人の型を見る。その情熱に於いてはより熱烈であり、その思想に於いてはより實行的であり、その學問に於いてはより新しいものと成つて來て居る。反社、忿怒、悲壯な犧牲的精神、世の人達の性格を考へると、どうしても十九世紀でなければ見られないやうな激しい動搖と、神聖質と、新時代の色彩を帯びたものがある。其様なことなども精しく書いてあつた、それを讀むことが出来たらと思ふ。

十九世紀は舊いものが次第に類れて行つて新しいものがまだ眞實に生れなかつたやうな時だ。すべての物が統一を欲して叫びを掲げて居たやうな時だ。その中で「十放」といふ一大知識階級が滅落して行つた。幾何の悲劇がそこに際されたらう。それを讀んで見たい。長谷川二葉亭、山田芳妙、尾崎紅葉などの創めた言文一致の仕事は國語の統一といふ上から論じたのも讀みたい。新しい詩歌が僅に頭を擡げたのも漸く十九世紀の末のことである。

ストリンドベリヒは巴里で三年畫業をして來

たと人に語つたとか、斯の言葉は異郷に暮して見たものでなければ一寸傳へ難い。二年近くの間の、自分も大分この苦い畫業を味つた。(三月十三日)

五

代を單に讀み、譯居して、それから學問をはじめたといふ昔の人もある。愛兒を失つた悲氣を忘れる爲めに語學をはじめたといふ人もある。語學の稽古ほど今の自分の心を無邪氣にするものは無い。佛文を讀まうとするには先づグレイあたりから入れ、とレイ氏は自分に勧めて呉れた。所謂時文には新しい言葉や硬質な言ひ廻しなどがずつと増えて來て居る。讀んで外國文學を佛譯したものには讀み易い。佛文で書いたオリヂナルなものに比べると斯の相違を著しく感ずる。翻譯文學には陰影の多い原語の感情が多分に失はれて居ることが思はれる。セエムの河岸にある大きな古本屋でトルストイの子息が阿菊さんのことを書いた「トルストイ」といふ本の佛譯を見つけて來たが、不満足なくらい讀み易くて今の自分には略しくもあつた。

昨年の秋、リモオジエの方に居た間、自分はしばしばサン・テチエンヌの寺院を訪れ、羅馬舊教の空氣の中に身を置き、嚴肅なる宗教樂に耳を傾け、ゴシック風の建築の内部を味ふのを樂みにした。それから復た、巴里へ戻つて來て見ると、ノートル・ダム寺院にあるステュンド・グラス(彩硝子の窓)が特別に光つて見えて來た。あの暗い靜かな石柱の下あたりに立つて見上げると、高い窓々へは仄かな日光が射して來て居る。それが彩色した硝子に描かれた聖者の像などを明るく見せ、紅色や緑色の寶石を鑲めたかのやうな中央の大きな圓形の窓は殊に深い沈んだ色彩に輝いて居た。自分はあの窓を指して巴里にある最も美しいものゝ一つと言ふに躊躇しない。

○ 巴里のサン・ミッセルの通りに接して、ルユクサンブル公園内の草地の一角に、昨年の夏あたりある墓石の掘付けがあつた。その邊はジヨオジエ・サン石像のあるところに近い、

誰かの像でもあの墓石の上に置かれるのか、と思つたら、出来上つたのを見ると白い大理石の碑だ。

「スタンダールに讀す。」として、その下にある文學者の生死の年表が彫つてある。碑の裏面には「ド・ラムウル」を始めとして、著書の題目のみが並べて表してあつた。床しい石碑と思つた。

○

斯の宿の食卓に就き初めた頃、年老いた内儀さんが皆なと一緒にご飯を食つた。斯の宿の人の常だとすると、佛蘭西人の堅韌も随分煩はしいものと思つた。まあ大層結構なことか。實にまあ御見事なことか。些細なことに左様いふ阿子だ。そのうちに斯の内儀さんの萬事山盛にしなければ氣の済まない正直な田舎者の婦人といふことが解つて來た。

露西亞のツルゲネフも巴里に遊んだ。トルストイも巴里に遊んだ。當時露西亞の歐化主義

者であつたと言はるツルゲネフ、西歐の文學は如何に彼の心を解はしめたであらう。それに比べると十九世紀の佛蘭西を中心とした個人主義の弱點を潰破し、恐ろしく露西亞魂を發揮して行つたトルストイ、それからドストイエフスキイ、彼様いふ人達は西歐の文學に酔つては了はなかつた。トルストイの「モオバツサ」を讀み、ルナンに言及したあたりを見て、斯の消息が疑はれる。

○

何と言つてもトルストイやドストイエフスキイはしつかりして居た露西亞人だ。しかし、ルウソフの感化はトルストイの一生を通じて居る。スタンダールの影響はドストイエフスキイの著作に見ることが出来る。あの人達は決して頑なでは無かつた。(三月十六日)

六

旅の途中にロセツナの詩集を一人入れて持つて來た。その詩集の中に佛蘭西の詩人、フランク・ギロンを英譯したのがある。その譯詩の一篇にアベラルとエロイズの事蹟を載つたのがある。Where's Helen, the learned nun.

For when she asks Alhazad, I ween,
Lest numbered and put I rishhood on?

(For Love he won such date and term.)

And where, I pray you, is the Queen

Who willed that I might should steer

Sowed in a neck's mouth down the grain?

But where are the snow of yester-year?

(The Ballad of Dead Ladies.)

東京下谷の池の端の宿で、平田泰木君や戸川秋骨君と一緒に斯の詩を愛詠したのは二十年の昔だ。友人は皆な若かつた。アベラアルとエロイズの愛、何程自分等はそんな放蕩な情を想像したか知れない。あの學問のある尼さんの爲には男も捨て情も擲つたといふアベラアルの名は何程自分等の話に上つたか知れない。敏感でそして jacobite な平田君が、我身の青春に堪へないかのやうに "But where are the snow of yester-year?" と吟詠して聞かせた時の聲は、今だに耳の底にある。

今の佛蘭西語から見るとずつと古い言葉で書いた詩を讀んだフランソワ・ギロンの名、それから中世紀の哲學者であり神學者でありソルボンヌの先生であつたといふアベラアルの名は、巴

里へ来てから一層自分には親しいものと思つた。あの中世紀の名高い坊さんあたりの時代から今のソルボンヌの學問が開けて来たことを想像する。自分は又、ある書籍の中にあの坊さんの肖像を見つけて、世にも稀なる若男であつたことを想像する。

去年の夏、自分は神戶、河田二君と共に巴里にあるベニル・ラセエズの墓地を訪ひそこにアベラアルとエロイズの墓を尋ねた。古めかしく物寂びた一字の堂の内に二人の肖像が静かに置いてあつた。「懸念にそんな悲哀と苦惱とを得た」とギロンは歌つたけれども、斯うして死んだ後まで堂々と世を並べて、今だに顧みられて居るやうな比翼塚といふものも、たんとは有るまい。加にその堂の扉手には、斯の人は終生愛することなき精神的な愛情をかはしたといふことなき立派に書き掲げてある「流石にアムールの國だ」と自分は、話して笑つたことだ。

訪ねる人も數多あると見え、その古い堂を圍繞いた鐵柵のところに限つて男や女の名前が數知らず書きつけてあつた。あたかも二人の運命にあやからうとするかのやうに、柵の中には秋海棠に似た草花が、いちらしくあはれけに咲き

散つて居る。自分はその周圍を廻り廻つて立去るに忍びない氣がした。

「契るならはく契りて未まで逢げよ、もみぢ葉を見よ——」とは、友達がよく酒の上のつれづれに自分に聞かせて呉れた歌だ。あの文句もはつきりとは記憶しない、旅の宿で口吟んで見ると、波濤いふ思を殘した名も知らない昔の人が奈何いふ生涯を送つたかといふことも忘れて了ふ言葉も消えて了ふ。唯言ひ表し難いもののみ、細々と浮んで来る、詞の無い歌に聞入るやうな氣がする。丁度秋の蟲の悲しむのを聞いて、好いとか悪いとか巧いとか拙いとかの言へないやうに。

情熱あるものといへども、眞にその情熱を寄すべき人に遇ふことは難い。ダモンチオのデユウゼに遇ふ、たま／＼斯の思ひ難い人に遇ひ得たといふものである。天才の火花はそこから迸つた。恍惚の深い世界が展開した。ある意味から言へば、あのすぐれた伊太利の女優が

ダモンチオと上り多量の書籍、小説、戯曲を作らしめたとも言へる。デユウゼに交はりあつた時代が眞實に精神を高められもした好い時代のやうだ。デユウゼに別れてからのダモンチオのことを考へると、俗言に斯の感が深い。

多情で情力的なダモンチオは巴里へ来てからも可成多作した。毎年のやうに一編づつの戯曲を公けにした。そのうち自分は「ピサネル」だけをシャトレイ座で見た。最近の「ル・シエヴルフォイユ」は、巴里の舞臺にも上らなかつた。彼には同情のある「新佛蘭西評論」の記者すら、斯様なことを言つて居る。「ダモンチオの逸作も、サン・セバスチアン」あたり迄はまだ好いものが有つた。「ル・シエヴルフォイユ」になつては眞天才の意趣味である。」と。

病めるデユウゼに就いては自分は委しいことを知らない。めつたにデユウゼと言ふ人も無い。彼女は時々ロダンの許へ遊びに来て、そこで自慢の手料理などを作り、主客に振舞ふことを是上なき慰藉として居るとか。(三月十七日)

七

旅人よ。足をとじめよ。お前は何をそんなに

急ぐのだ。何處へ行くのだ。何故お前の眼はそんなに光るのだ。何故お前はそんなに物を捜してばかり居るのだ。何故お前はそんなに離れとして歩いて居るのだ。

旅人よ。お前は此の國を見ようとしてあの星の光る東の方から遙々とやつて来たのか。この國にあるものもお前の心を満すには足りないのか。

旅人よ。夕方が来た。何をお前は涙ぐむのだ。お前の穿き慣れない靴が重いのか。それともこの夕方が重いのか、明日の夕方が苦しいのか。

旅人よ。何故お前は小鳥のやうに震へて居るのだ。假令お前の生命が長く、恐怖の連続であらうとも、何故もつと無邪氣な心を持たないのだ。

旅人よ。足をとじめよ。この國の羅馬萬教の季節が来て居る。お前も来て主の愛を記念すべき夕方に登へ。お前に食はせる麵包、お前に飲ませる水ぐらゐはこゝにも有らうではないか……。

○

自分の國の方である書籍を讀んだ時、その中に十八世紀あたりの佛蘭西の一批評家がシエクスピアに就いて書いた言葉を引つけたことがある。「要するにシエクスピアも、ミシシシな陰鬱な者だ。」と軽く嘲つてあつたやうに記憶する。あの言葉は妙に自分の頭に殘つて居て、多分佛蘭西人は皆な沙々な風に英國あたりから来たものを考へて居るのだらうかと想像した。巴里へ来て見て自分はシエクスピアの行はれて居るのに驚かされた。あの英國のクラシックが半ば佛蘭西のそれで有るかのやうに。

○

模倣とは何ぞや。こゝには多くの東洋のものの模倣がある。世界のあらゆるところから採り得るかぎりのものを採つて、それで生活を豊富ならしめようとする模倣がある。安南、印度、埃及あたりは今、他から模倣されるばかりだ、

○

○

自ら他の好いものを模倣する力が無い。模倣は多きを愛へない。寧ろその力の薄弱なるを恨みとする。模倣力が薄弱なる場合には、他の好いものに冷淡なることも出来なければ、又それを眞に受納れて自分のものとすることも出来ない。

○ 女優サラ・ベルナルが眼の病に罹つて切腕の手術を受けたといふ報知は、斯の戦争の沈んだ空気の中で、巴里の町々へ傳はつた。あの名高い悲劇役者も千九百十五年を思出の多い年として、最早舞臺を退くであらう。オスカア・ワイルドなどのまだ生きて居た頃こそサラ・ベルナルの眞の好い藝が見られた時代ではあるまいか。最近の舞臺に於ける彼女は脚本の選擇といふことにも何れ重きを置かなかつたやうである。彼女は舞臺に上りさへすれば好かつた。多くの看客は彼女の舞臺を味はうとするよりも、高貴なサラ・ベルナルといふ人を見に行つた。自分の知るかぎりでは、彼女の老熟した演技も可憐ブルジョアの爲にあつたやうである。(三月二十一日)

出して居る。

○ ある日、ノルマンディから出て来た姉妹の女客と食卓を共にした。佛蘭西生れの人達でも田舎から巴里へ来ては、旅の自分と左様廻りが無い。食卓で一緒に成つて見ると、斯の人達の體格の大きいことが眼についた。剛健なことが眼についた。血色の好いことが眼についた。細腰で纖柔な巴里の女と来たら、皆な香ざめた顔色をして居る。それから一週間はかり一緒に食事をするうちに自分は種々な好ましい性質を、斯の人達に見つけることが出来るやうに思つた。素材で、人懐こく、どこかに南方の人とちがつた陰鬱なところもある。「ボザリイ夫人」は畢竟斯の人達の中から出て来たのだ。お前はノルマンディのルアン(町の名)を見たか、とはよく巴里の人に尋ねられる。あのフロオベールの姉夫婦が住んだといふルアンへは自分もそのうち小さな旅をこゝろみたい。

○ オスカア・ワイルドの享樂主義からあの

八

ある日、巴里郊外にあるセエヴルの橋畔から電車でセエヌ河の岸を歸つて来た。一大樹園の感あるエリゼエの附近からコンコルドの廣場、チユイリイ公園の石垣の側、ルウヴル王宮の窓の下を通つた。黒い葦木の替の見える對岸の建築物の間を通して向うのソルボンヌの丘の方には古い寺院の尖塔を望んだ。あの邊はまるで石の建築のオーケストラだ。層々相重なる講堂の結晶だ。全體として見て灰白な町の感じも好い。電車より下りて、サン・ミツセルの石橋の上にかゝると、ノオトル・ダム寺院の古塔が桃色の夕日に染まるのを見た。自分は今更のやうに佛蘭西人の建築的才能と傳統を重んずる冷僻な意志を思ひ、尊敬と羨望の念を禁ずることが出来なかつた。

○ ある日、用事があつてコントワアル・ナショナルの建築物の中に入つた。そこは秘歌の代りに廣い床が一切モザイクで造つてあつた。用事ありげな人達は出たり入つたりして居た。その

○ 衛的な想像と、勇敢な精力と、反抗の精神と、成年に「中」の記」を書いた様な宗教的な気分とを吹き去つたら、何が残るだらう。享樂主義も衰へた末になつては、あはれなレアリスムと探ぶところが無い。(三月二十三日)

九

○ 巴里の町には響がある。東京の町には響がある。巴里の町にも響は無いではないが、あの東京の方で聞く勇ましい、饒賣の響や、花賣辻古賣の響や、四季折々の物賣の響に限らず、車夫は聲を掛け、按摩は呼んで通り、押して行く荷車の前後にまで聲があつて、下町の空氣の滯いとところ成ると、流行唄、假白遣ひ、廣告の口上、船屋の歌、其他數へ切れないやうな彼の朝晩の賑かさに思ひ比べると、こゝにはあれほどの響は無い。全く、東京の町は聲で満ちて居るやうな気がする。そのかはり、こゝは響だ。人のかはりに器械や馬の働く響が、石づくめの町の空に捲かれて来る。

○ モン・バルナツスの墓地は此のポオル・ロワイ

なかで汚れた皮の膠着を當て、床の上に腐つき、モザイクの修繕をする一人の年老いた職人があつた。側には鏡、包、木片、セメントらしい物、種々な線様を組立てることの出来る小さい四角に出来た素焼風の原料などが通る人の邪魔に成らないやうに置いてあつた。職人は多くの原料の中から白色のやあるひは薄く彩色したのを選んで、それをモザイク風に宛當め、置き、均し、叩き、撫で、眺め、時には佛蘭西人がよく癖のやうにする肩を動かして何か獨語を喋りながら、實に信念もなく働いて居た。自分は一輪の無心な繪畫を見る気がして、暫時立つて眺めて居たが、あの多くの壯大な建築が斯うした無器用と正直と倦まない心から生れて来ることを思つた。

○ ジヤン・モレアスが生きて居たら、といふ聲をよく聞く。モレアスは深く信じた詩人のやうである。彼の「レ・スタニス」が出て、佛蘭西の象徴主義は絶頂に達したと云はれて居る。シャアル・モオラスは彼と親しい交際のあつた緣故もあらう、彼の爲に、一冊の「モレアス研究」を

○ アルの葦木街から遠くない。そこには詩人ボオドレエルの墓が眠つて居る。自分は時々、あの靜な墓地の方へ歩きに出掛ける。そして彼の「戀の華」を書いた詩人の墓に腰掛けて、時を造つて来ることもある。あの墓地にはモオバツサンも眠つて居る。彼の小説家の墓を探した時は山本龍君や正宗實三郎君と一緒に居た。自分等は青い葉の小さな楠木を一鉢買つて行つてあの墓石の上に置いた。あれは、去年の夏頃のことであつた。墓前に茂る日照葉はまだ眼にある。墓として大きい方でも無いが、丁度あの人の作物に見るやうに確乎した中にも何處か意氣に出来て居る。

○ オデオンの劇場も近い、その廻廊にはフラマリオンの書店が一手で本の店を占めて居る。自分はルキキサンブルの公園の内を通り抜けて、あの廻廊に上ることを散歩の時の楽しみの一つにして居る。時には廻廊の一面と隣合つたフラマリオンの本店を訪ふこともある。エルアイレンの劇曲でも、グリウファンの詩集でも、ノアイニ夫の叙情詩集でも、好きなものが

並べてある。今は巴里の田舎界も新刊物と言へば戦争に關した書籍ばかりだ。文學雜誌などは皆休刊して居る。新聞のマチネエの多くも戦争物だ。藝術も科學も一切休止の姿だ。戦争あるのみだ。

パンテオンも近い。今はあの建築物も閉つて居るけれども、そこを訪ねてビュウイス・ド・シヤンヌの壁畫の前に立つ時ほど深い静寂な心持を感ずることは無い。愛、理想、精進的衝動、カトリック風の敬虔な祈禱の気分。あの壁畫に描かれたサン・ジヌヌ・ギエーグの傳説は此の世界の奈落にも開拓されることを暗示する。

しかしシヤンヌの壁畫がパンテオンの全部では無い。歴史畫、戦争畫、宗教畫の類々々々見るに堪へないやうなものが彼の壁畫の大部分を占めて居る。そこには宗教的献身者の首の飛んだ畫もある。こんな中世風の時い種唐行があつた頃の事を思つて見れば成らない。

會つてギリエー劇場へ行つて懸掛けた。自分の周囲には婦人の容が多かつた。その人達は皆白い華の手袋をはめて芝居を見物するほどの立派なサアトルを形造つて居た。メテリシク夫人のイグレヌの役で「タンタデイルの死」が演ぜられた。幕が下りても、まだ誰も立たうとするものが無かつた。其時自分が席を離れようとしたら、此の芝居はもう是でお仕舞なんでせうかと自分に尋ねる婦人があつた。え、左様です、是が終りの幕です、と答へたら、それから周囲の人達が皆立ちかけた。巴里でルブランの芝居があつてさへ是だ。

ロオトレックの繪畫の前に立つた時は自分は思はず震へた。そこには近代生活の強度な悲哀がある。ある人は、ロオトレックの畫面にはまだ「同情」といふものがある、墮落した婦人の肉體などを憐んで描いた形跡がある。ルブランに至つて始めてデカダンの畫家の本領を見る、と言ふ人もある。この言葉を容れると

しても、自分はこのロオトレックの畫面を見るやうな強い悲哀を忘れることが出来ない。

アウロンヌの森に近いベルラン氏の住宅へ行けば、そこにセザンヌの作品の全景が見られる。そこに畫家の内的生活の自傳がある。セザンヌは殆ど静觀の極度に沈んで行つて居る。その古い林檎などには石のやうな堅さがある。思ひつめた鼓動がある。身動きの成らないやうなものがある。その静物畫は靜かだとは言つても、觸れば血の出るやうな激り詰めたものだ。左様いふ苦しい心が變化を欲し、繪畫の中に音楽を求めて行つたといふは自然だと思はざるを得ない。セザンヌが晩年の作品には一つとしてその内的生活の變遷を語らないものは無い。動かない静物や動かない人物を好んで描いた畫家の色彩までも變り展げて行つて居る、そこに新しいシンプオニーの世界がある。深い舞踏の世界がある。草木も人も靡つて居る。(三月二十五日)

+

これを書いて居るうちに、温かい雨がやつて来るやうに成りました。来るか来るかと思つて斯の雨を待たずに居た。地は有りませんでした。私共は三月月も前から「旅の冬籠り」の間、唯それはかりを待つて居たやうなものでした。左様申しては何ですが、私共の周囲にあつたものことも想つて見て下さい。佛蘭西國境の山岳寄の方では煙霧が深く積雲のために埋められたとか、雨線に立つもの、霧を救ふために毛布を遺棄するとか、左様いふ苦勞を思ひやる市民の心が今日まで續いて來ました。開戦以來、五六十萬の佛蘭西人は既に死んで居るといふ話です。斯の戦争が終る頃には満足な身體でもつて巴里へ歸つて来るものは少からうといふ話です。私共が町で行き過ふ留守居の婦女でも老人でも子供でも、やがて来る春を待つて居ないものは無いやうでした。寒苦、寒苦——斯の避け難い戦争の懐みの中で、世界の苦のなかで、草木の再生がやがて自分等の再生であることを願つて居ないものは殆ど有りませぬ。

去年に比べると今年には草木の芽出もずつと後れました。プラタマの木などは未だ冬枯そ

のまゝです。漸くマロニエの芽がポツ／＼ふくらんで來たところ。しかし日は餘程長くなりなりました。空も明るく成つて來ました。最早暖かくなつて居ます。一雨ごとに私共は春の來るのを感じます。あらゆる草木が復活する中で、やがて来る若葉の世界を待つのも楽しみで、あの白い煙霧を立てたやうなマロニエの花が葉の間に咲いて、冷い硝子窓からも、石の壁からも、春の匂が流れて來るやうな日は最早遠くは無いでせう。

左様言へば、燕のかはりに同窓の飛行船が飛んで來ました。レオン・ドオデエの言葉では無いが、あの空中の海賊が、巴里の市中と市外とに遊撃を落して行つたは三月二十三日の夜でした。損害も大した事は無かつたと言ひます。實は私などはそれを知らずに熟睡して居た位です。あの昨夜の騒ぎを知つて居るか、敵の飛行船をめぐらして撃つた深夜の砲聲を聞いたか、と人に言はれて、始めて左様かと知つた位です。何故砲聲はあんなツマナないことをするの、今頃飛行船で巴里を襲つて見たところ、で共が砲聲の上に何の影響をするのか、斯う第三者は言ひ合ひました。恐らく獨逸軍はそれ

を何らかの戦時に併し、新聞紙上に吹聴し、漸く戦争に疲れて來た國內の不平の聲を止めようとするのであらう、斯う言ふ人もあります。昨日二十四日には町の警戒は一層厳しくなり、あらゆる街路の燈火も消されました。そよ／＼とした南風が吹いて來るやうな夕方でした。淡い新月の光も空にありました。燈點頃に早や窓を閉めるのは惜しい気が致しました。其晩は床に就いてから、けた／＼と物音が深夜の町々を駆けめぐりました。警戒に成つて復敵の飛行船が近づいたことを知りましたが、佛蘭西側の飛行機の迎へ襲ふのに違つて、其晩は巴里までは來られなかつたとのことでした。今は巴里も一時のやうに閉ざされかゝつた位置でなし、市は來るだけの警戒を怠らないし、露西亞側の戦報は地味利方面の勝利を傳へて居る際です。獨逸のゼエブランが襲つて來たと言つても、他で聞き電報で傳へらるゝほどの騒ぎでもないことを申し上げたいと思ひます。七時の夕飯時が來ました。今一里斯の御使りを言き足したいと思ひますが、今日はこれで筆をとめます。(三月二十六日)

に書いてあるゲロンスキイの出發のやうにして、進んで戦地に赴き、自ら救はうとする若い佛蘭西人のあることを想像するに難くない。戦争を遊覧し、まるで車でも馬で行く人のやうにして親しい家族友人に停車場まで見送られたといふ、ソルボンヌ大學の卒業生のあることも自分は知つて居る。その心を思ふと可憐しい。ルネッサンス・フランセズ——心ある佛蘭西人が戦時にかけて燃焼しつゝあるのも、その死の中から持来す回生の力であらう。春が待たれる。(三月三十日)

十一

感想の二三を添へる。
「自分の心は今、鎮に音楽を聞き求めて居る」
文學の中にも、繪畫の中にも、音楽その者の中にも「斯う自分は曾て一役の新片町より」の中に書いた。こゝへ来て自分は勉めて種々な新藝術に接しようとした。心の潤きを感ぜうとした。ドビュッシーの新曲を聴いた時、バルドオ夫人の肉章によつてマラルメの詩が歌はれるのを聴いた時、パグストの強烈な色彩を背景としたニデンスキイの舞踏を見た時、シャン・ゼリゼエの新舞場にモオリス・ドニ及びブワルデルの盛装を見た時、セザンヌの晩年の畫風の變化を受けて更に新たな道を歩まうとして居るマチス其他新進畫家の製作の前に立つた時、一方から言へば、自分が音楽の能はその爲に反つて増したやうな氣もする。近頃ふとある雑誌を開けて見て居るうちに、自分の想像するやうなシンフォニーがマイヨオルやブワルデルの彫刻の中にも流れて居ることを知つた。

○

羅馬舊教の修道院へ行かうとしたデユルタルの近代的な心こそ驚きとした老樹の蔭を頼む長途の旅人にも驚かすべきであらう。近代の生活の中にあつて若しく、鋭い修道者のやうな心をもつたものは「ラ・カテドラル」の作者ばかりでもない。フロオベールさへ「自分は僧侶の最後のものだ」と言つて居る。
行くところまで行つて倒れたやうなエルレエヌには「宗教詩集」がある。新教のみを見て歐羅巴の宗教を言ふのは早計だし、カトリシズムを抜きにして佛蘭西、白耳義の文藝を味はうとすることも困難だ。
ナポレオンの墓から遠くない町の角にフランソア・ザギエーといふ寺院がある。そこで日曜毎にあるコオラスは巴里の最もすぐれた宗教樂と言はれる。時には自分もそこへ行つて彼の音楽に耳を傾けることもある。ユイスマンズの足跡を追ふといふばかりでなく、カトリシズムに心を寄せる新人も多い。

○

自分の國のことすら言ふのは容易でない。況して他の國のことをや。たゞ、斯くして答へに

暮して居るうちには、自然と自分の心に依拂するものはある。幻を浮べることが出来る。「藝術の都、文明の泉源、風俗の中心、流行の中心」とは、曾て佛蘭西の作家が巴里を誇つた言葉だが、それからもう四十餘年の月日が過ぎて居る。自分が今旅の窓から見る一切のものは、随分行き詰つたものといふ氣がする。精しく言へばそこには何程の廣大な天地があるかも知れない。しかし自分の胸に響つて浮んで來るものを言へば左様だ。現代生活の倦怠だ。今の佛蘭西に最も意味のあることを求めたら、數學者のアンリ・ポアンカレ(あの人はもう亡くなつたけれども)、哲學者のベルグソン、批評家のシャアル・モオラス、彼様いふ人達の言つたり考へたり爲たりしたことでも有らうかと思ふ。けれども彼様いふ人達の生れて來たことが、直後に人心の衰弱を證據立て、居るやうに思はれて成らない。そこに發散する空氣は随分氣息の詰るやうなものだ。
戦争が切つた。自分は今の年若な佛蘭西人が何程アルサス・ロレンを失つた恨みや獨逸に對する復讐心で燃えて居るかを知らない。唯自分には、丁度あの「アンナ・カレニナ」の終り

燕のごとく帰る

德國アーゲル港——英國サウザンプトン——倫敦——ナルビユ
ライの波止場——テニムス河口——英吉利海峡——ビスケエ灣

とつぶり日が暮れた。何となく暗臭いほひが鼻の先へ来た。私は暗い知らない外國の町を歩きながら、そのほひを嗅いで見た。何處からそんな海草の乾くにほひが傳はつて來るのか、さうした時夜の空では港町らしい何物をも見ることが叶はなかつた。しかし海に近く来たことだけは感じられた。

實に足掛四年振りでは私はそんなにほひを嗅いだ。もう一度あの海の方へ歸つて行くことを切に感じさせたのも、そのほひだ。いよいよ歸國の途に上る日が來て、その夜のうちに佛蘭西の土を離れようとして居ることを感じさせたのも、そのほひだ。そこは佛國、下セヌヌ州のアーゲルの港だといふ。白耳黨政府の所在地として聞えたその港町に、燈火一つ照れる筈も見えないのは、恐らく戦時のためであつた。

らう。私は眼にアーゲルを見ないで、唯鼻でアーゲルを嗅いだ。

海へ。私にとつては待ちに待った日が來たわけだ。降誕祭の前には既に來る筈であつたその日も半年ほど延びて、旅で迎へる三度目のあの祭と、翌年の正月とも私は巴里の客舎の方で送つた。私がいろ／＼にその日を想像しつつ、樂みと不安とで歩き廻つたあの羅倫の原野では、芽出しの遅いアラタアヌの草木が思ふに違ふて居る間に、進早くサン・セルマンの通りにあるマロニエの枝は青々とした新芽を着けるやうに成つた。もう四月の下旬だ。漸くのことと私の待たびた日が來た。遠く故郷の方に残して置いて來た子供のことも心にかゝり、巴里サン・ラザールの停車場から私はあの三年の都を辭して來た。

一日の汽車も楽しいがであつた。ずつと國まで同行を約したM君は巴里で初めて知るやうな草が出て來た。私は近きて吸ひ慣れた佛蘭西の巻煙草を袋袋か着物の間に忍ばせて置いたからで。

「へえ、大分仕入れて來ましたね。」と税關吏は笑つて、私の貯蓄を見通して呉れた。そして白帯で大きく私の鞆の上に検査済の印を書いて呉れた。

そここゝには英吉利の旅人の群が集つて居た。驚くばかり神妙な、そして物々しい光景がやがてわれ／＼の前に展げた。そこでわれ／＼は旅券の検査を受けた。連の一人でも、すこし検査が遅れるとか、委が見えないとか言へば、直ぐ他のものは心配した。瑞西旅行の記念を旅券の裏にとめて持つて居たM君は一番後廻しにされた。われ／＼は重ねた荷物の側に旅人らしく佇立みながら、四人が揺ふまでは安心しなかつた。

英吉利海峡の定期船ノルマンニア號は暗い波止場でわれ／＼の乗組を持つて居た。私はもう一歩佛蘭西を離れて、英吉利の空の方に移つたことを感じた。何故といふに、そのノルマンニアは英國船であつたから。二年見慣れた佛蘭西人のかはりに、そこには英吉利の水夫が働

(ちとくとの語)

一帯足の疾いS君は先に車のあると進つて歸出した。荷物の紛失を氣遣ふよりも、速に歸れるのが第一に氣遣はれて、昔な暗い道を歩き始めた。その邊は何となく貧しい町つゞきらしいところで、暗の中を透かし／＼通つて行く狭い人道の敷石も凸凹として居た。一番後になつた私は自分の前に動いて行くM君の暗い影を見失ふまいとした。

われ／＼は渡り鳥の群のやうに互ひに呼びかはした。

「まるで命掛けでしたね。」と事談のやうにして笑ふことの出來た頃は、われ／＼の荷物が無事にアーゲルの税關に着いて居た。四人のものは互ひに顔を見合せた。

いて居た。聞慣れた佛蘭西語のかはりに、そこにはアクセントの強い英語が語られて居た。飲み慣れた佛蘭西の珈琲のかはりに、そこには英吉利の紅茶が用意してあつた。

「巴里よ。私は佛蘭西を去らうとするにのぞみ、一語の別れの言葉もなくこのまゝ遠く離れて行くことは出來ない。私が出發の日は、私は朝早くお前の町を歩き、ソルボンヌの古い鐘堂の横から同つゞきの町に添うてパンテオンの前に出、あのルウソオの銅像の周圍をめぐりにめぐつて、立去るに及びぬ程の思をして來た。私はまたもう一度住み慣れた天文臺の附近をも見て行かうとして、細長いサン・ジャックの通りをヴァルド・ダラスの寺院へと取り、産科病院の角へ出、朝に喉によく仕つたり來たりした

になつた畫家で、歐洲開戦以來同じ記憶に繋がれて居る同柄だ。M君の外に、倫敦まではS君N君の二人の好い道連れもあつた。われ／＼は同席四人きりで一室を占領して來たし、車中で國の言葉を出して思ふさま話さうと笑はらうと打勝手であつた。おまけに、車窓に映る美しい眺望があつて、一日の題材にも事足りはしなかつた。殊にあの名高いルアンを初めて見て來た時、美しいセヌヌの下流に川舟を望んで來た時、しかしわれ／＼は多く黙し勝ちに車中の時を過して來た。互ひに言葉すくなく對ひ合ひ、何か話が出て何時の間にかまた黙つてしまつた。斯うした四人のものが暗くなつてアーゲルの停車場に着いたのだ。

われ／＼は互ひに助け合つた。手を分けて、荷物の番をしたり、一臺の荷車を押したりした。ガラ／＼音のする荷車の響を心あてに、波止場を指して出掛けて來たのだ。腹脹とした夜の空気が見知らぬ町々を籠めて居た。われ／＼は四つの黒い影のやうに動いた。何となく海岸に近づいたと思ふ頃は、私はもう可成歩いたやうな氣がした。

是非船まで送らせて呉れると言ふのですから、一緒に連れて参りました。」と夫人が答へた。斯うした幼い人達をわれわれの海運れに加へたことは、一層遠い慮立ちらしい思ひをさせた。姉嬢の方は膝まである子供らしい着物に小さな靴を穿き、皆なに連れられてブラットフォームの方へ歩いて行つた。「ママン、ママン」と事毎に眼を圓くして、母親を呼ぶ様子もいぢらしげであつた。

郵船会社の副支店長の案内で、一同はフェンチャアチの停車場からチルビユリイの船着場まで汽車に乗つた。英吉利風の建築物の見える岸へ行つて集つた時は、一緒に海を越して行かうとする旅人の群も少いことが知れた。同胞としては、K君の家族にわれわれ二人のもの、其他には用務者の歸らしい二三人の人達を見かけるに過ぎなかつた。私が料理人と鑑定したそれらの人達の中には、コオトを着たやうな風俗の一人の婦人の姿をも見かけた。寒い細い雨が時折やつて来るやうな日であつた。M君が着けて居た英國製の灰色の雨巾も、私が旅の外資も、雨や波風のために濡つた。テムムスの河口に停ぶ熱田丸では、船員の多く

が甲板のところ集つて、斯うしたわれわれを待受けて居て呉れた。われわれは小汽船から順に一人づゝ大きな汽船に移つた。

四

碼頭私はテムムスの河口を出て行く熱田丸の甲板の上に、船長から水夫までを同胞に有つた自分の國の汽船の中に、海の魚が黒水にでも有付いた様な氣樂さを見つけた。人種の相違から来る種々な煩ひは、そんな些折が結局何の役に立たうと思はれるにも拘らず、過ぐる三年の間一日も私の心を休ませなかつた。M君も私もまだ倫敦を發つて来たたまの旅支度で——外套なしには甲板の上は寒かつたから——二人並んで、濁つた波の上へ来る五月の雨を降めた。英吉利風の赤い暗い色氣はあちこちに見える帆船の帆の上にもあつた。チャイルド・ハロルドの詩人があの「波濤」の中に歌つたは、あれは斯の鳥のことかと思はせるやうな海の鳴もわれわれの船に近く来て鳴いた。動搖する波のみなたには、沈没した船の帆柱と煙筒とだけが物づく水の上にはあらはれて居るのもあつた。船客の一人らしい英吉利人が私の船へ來

てその沈没した船を指して見せて、それとなく斯の航海の危険なことを仄々かした。しかし私は佛蘭西から英吉利へ渡つて行つたあの暗い夜のやうな恐ろしい不安は感じて居なかつた。

船で食事をする最初の時が来て、私はM君と一緒に食堂の方へ行かうとした。その食堂の入口のところで、給仕頭らしい人が私の前に立つて、至極威厳な調子で言つた。「御食事は御部屋の方で差上げることになりましたから。」

斯ういふ掛りの人の言葉に、思はず私は手を振んだ。「會計の方の都合も御座いまして、御食事だけは御部屋の方へ差上げることになりました。」とまたその人が言つた。

M君と別れて、私は獨りで食堂に近い自分の船室へ行つた。私は人知れず自分の顔を赤めなければ成らないことが有つた。何故といふに、二等船客としての往復切符を所持したM君とも違ひ、私は實際のところ其船室に入るべき客ではなかつたから。巴里を出發する頃から、私はある旅の計畫

を立て、居た。往きには不慣れなことでもあつたから、船でも汽車でもすこしゆつくり出来るやうな方針を執つたが、そのかはり運りは極く簡單にと、倫敦の郵船会社の支店、私のやうな乗客に割引の無いことを聞いて、私は特別三等の切符を求めて来た。事は意外に運んだ。私はあのチルビユリイの船着場から出掛けるといふ際に、熱田丸まで皆なを送つて来て呉れた郵船会社の副支店長がわかれぎはに私に向つて、「御便宜を計りますやうに、船長にもよく話して置きました。」と言つたことを思い出した。「さあ、是方へ、御荷物ももう御部屋の方へ参つて居ります。」と言つて船のボイが案内して呉れたのは、思ひがけない斯の二等室であつた。初めて見た時の斯の船室の入口には英語でもちやんと自分の名前まで掲げてあつた。「御食事は御部屋の方で差上げることになりましたから。」

私は感謝と羞恥の心とで、あの給仕頭らしい船員の言葉を讀んだ。もう少しして私は二等船客らしい顔をして、皆なと一緒に食卓に就くところであつた。無屋付のボイが大きな碗蓋を見るやうな

顔を私のために運んで来た。私事心得なボイはその顔を手早く船室の片隅に置き、皿を並べ、珈琲にデツセルの林檎まで添へて置いて、部屋の入りにある縁の幕を一ぱいに引いて出て行つた。あたかもその前下の外を通過するもの眼から私の部屋を覗して呉れるかのやうに、私は小さな腰掛を引寄せた。戦時らしく黒布の掛けてある丸い船窓から俄かに光線の射して来て居るところで、心づくしの隙に就いた。

私がまだ食事を終らないうちに、M君は入口の縁の幕を開けて笑面を見せた。「へえ、これがあなたの部屋ですか。」とM君は額に垂れる赤味勝ちな髪を掻きあげながら入つて来た。その髪は赤味勝ちなのが何時でも好い光澤をして居る君の顔の色によく調和して見えた。

「なんだか御馳走が有りますね。」斯うM君はまた私の方を見て、半分おかしやうな調子で言つて笑つた。私が顔を片付け

る間、君は私の船床に腰掛けて話した。「時にM君、結局僕も船で割引をして貰つた形に成りましたよ。」

「左様でな。まあ大いに優待された譯なんぞせう。」

「こんなにして部屋を發行はれるよりか、三等船客として寝込んで行つた方が氣が利いてるかも知れません。」

「しかし、船から言へば斯様なことは何でもないのでせう。特三の客を二等に乗せようが、二等の客を一等に移さうが、船室さへ明いて居れば奈様にでも都合のつくものだからです。そりやもう、船の中のことば船長の意見一つでからに。」

「僕は君、子供の時分からずつと長いこと人の家に食事をして来ました。斯うして船に乗つてまで、今だに僕は食客です。」

私は自分で自分を嘲るやうな調子に成つて行つた。開戦の當時以來、協定と一緒に苦勞したM君の前だから、こんなことも言へたのだが。

斯うした私の特別の事情にも拘らず、船の會計まで来て何れとなく私をいたはつて呉れた。船で「敷島」が傾ることなども半ば國へ歸つた思をさせた。夕方には英國海上の警備船が熱田丸に近づいて来て、夜間の航海を戒めて行つたので、われわれの船はそのまま英吉利海

船に停つた。甲板の電燈は消され、船室々々の
燈火も黒くして掩はれた。その時は私は非常に
疲れて、前後も知らずに深い眠に陥つた。

五

M君の部屋は喫煙室に接した甲板の上にあつた。
窓も四つあつて、左舷に面したその二つから
海を望むことも出来た。君は船に就いて、
往きの航海には殆んど酔ひついで行つたとい
ふ程であつたから、すこし酔が抜れてもすると
兎角部屋に籠り勝ちであつた。私は心配して
よく君の部屋を覗きに行つた。

「M君、
と扉を掛けて私が部屋の入口の幕を開けて見
た時は、君は私にそこに立つたことも知らな
いほどよく眠つて居た。

私はその足で左舷の甲板の方へ出た。白い
ペンキで塗つた通風筒がある。柱がある。破網
を巻く鉤の船具がある。あたゝかい霧のため
に濡つた、長い廊下を見るやうな概観がある。
船室の窓の外に近く藤椅子を並べて海を眺める
植民地の英吉利人の客もある。形式こそ違
へ、色彩こそ異れ、すべてが曾てあつたと似より

のもののみだ。あの佛國汽船エルネスト・シモ
ンが、よく往つたり来たたりした甲板の上が、一切
のものから離れようとして海へと急いだ往きの
船旅が、それらの記憶があたかも昨日のことの
やうに私の胸に歸つて来た。

私は太い綱や船具の積重ねてある櫃を這つ
て櫃のところへ出た。フォクストーンの附帯で
望んで来たあの白く光つて見えた英吉利の沿岸
も、遠く／＼後方に成つた。私は水深を測量
するための器械が装置してある船の欄の側に立
つて、そこから波間に投入してある一條の長く
細い綱の総間なくクル／＼廻るのを眺めなが
ら、遠く國を出てから以來のことをしみ／＼と
胸に浮べた。

もう一度私がM君の部屋の方へ引返して行
つて見た時は、入口のところにはボオイが出たり
入つたりして居た。眼をさましたM君は船床
に腰掛け、旅旅の出たらしい顔付で私を呼
留めた。

「まあお入りなさい。このボオイさんは日君を
知つてゐるんですとサ。」

M君とは私も巴里で懇意になつた美術家仲
間の一人だ。あのサン・ラザールの停車場で君

あるひはもう神戸の港も見納めかと思つ
たあの過去つた日のことを振返つて見ると、す
くなくも私はある悲しい決心を擲いて自分の
生れた國を離れて来た。私は一切のものを忘
れたかつた。愛する同胞を忘れたかつた。愛す
る歴史を忘れたかつた。私は全く知らない人
の中へ行かうとした。しかし私の決心は

それほど鞏固なものでは無かつた。私が國を
離るれば離る／＼ほど、仲計に私の心は國の方
へ向ふやうに成つた。巴里の客舎にある間、
一日も日本なしには生きられなかつた。堪へが
たい私の郷愁は旅の月日を可成長いものと思
はせた。ある月日のいかに知く、ある月日の
いかに長いかは、人々の歴を語るところで
ある。過ぐる三年はすくなくも私に取つて可
成長いものであつた。歐洲開戦の當時、私は巴
里の河川を避けて、M君等と一緒に佛國オート・
ゼンヌ州のリモオジュへ行つた。その頃に異
郷で暮した十五ヶ月が早や三年にも四年にも
あたる思をした。その頃に私はもう随分長い
月日の間、故國を見ずに暮した思をした。その
間、日頃親しかつた人の誰の顔をも見ず、誰の
聲をも聞くことの出来なかつた思をした。私は

の歸國を送つた後も、よくわれ／＼の噂に上つ
た人だ。

「え、」とボオイは立働ながら話した。「H
さんは往きも還りもこの船田丸でしたよ。え、
え、私も御懇意に願ひましたが、それは面
白い方ですね。あの方は往きには二等でしたが、
お還りの時は三等でした。」

このボオイの語はわれ／＼二人のものを扱
ばせた。M君と私とは同じやうな旅の方針を
執つて来たことを知つた。唯M君の方はそれ
に徹底し、私は徹底しないといふ相違は有つ
たが。

ボオイが出て行つた。私の部屋から見ると、
そこは位置も好し、それに廣くもあつた。乗
客も少い時だから、M君は一人でその部屋を
占領し、壁にはセザンヌやマチスの畫の複製を
掛けて、船床に寝ながらでもそれが眺められ
るやうにしてあつた。巴里のシテエ・ファルギ
ニールの畫室の方で、私がよく見掛けた模倣更
紗の薄い掛前掛けは、その船床の上にもひろ
げてあつた。

「船草でもあげませうか。」
とM君は船の壁に、黄色い包紙の巻煙草を挿し

て来て、この二十本？ の口の切つたやつを私
に勧めて呉れた。

「へえ、「マリイ・ラン」がまだ有りましたね。
佛國西の煙草は、僕のところにはもう残つて居
ません。」

「それが一袋だけ残つて居ました。」
「よくそれでも是が有りましたね。なんだか吸
つてしまふのは惜しい。一袋、君は物を大切に
して、よく藏つて置く方ですね。あのリモオジ
ユへ行つた時でも、君と一緒に買つた菓子が僕
の方には無くなつてゐる時分に、まだ君のところ
には有りませんでしたよ。僕がもう忘れてしまふ時分
になつても、まだ君のところには残つて居て御
馳走になつたことなんか有りませんでしたよ。」

われ／＼二人のものは斯様な言葉を交したが
ら、僕に残つた煙草の香を嗅いだ。

六

テエヌスの河口から英吉利海峡へ。英吉利海
峽からビスケエ湾へ。斯うした旅の空は、やが
て私の行くべき道であつた。三年前海へと私
を導いた力は、復た斯うした波の上へと私を
導いた。

一寸ぢの旅の船道を辿りに進つた末、あたかも
舊い船橋をさして遠く歸つて行く燕のやうに、
異郷で子供までまうけたK君夫婦やそれから
M君達の行く方へ、一緒に斯の波の上を急いで
来た。

「國の方では、どういふものが酒價を待つて居
て呉れますかサ。」
何かにつけて私はM君にその噂をした。

進めば進むほど私は明るい空へ出て行つた。
気候も温順になつて来た。われ／＼の船では、船
に立つ身張番の水夫があつて絶えず浮流水雷に
注意して居たし、観橋には雙眼鏡を手から
離すことの無い運轉手があつて僅かな水平線
上の船でも見逃すまいとして居た。萬一の危
急に具へるためとあつて、救助用の小舟には、
水、食料、磁石、他小道具の類を用意した。
最早危険區も通過したと言はれる頃には、外
套なしに甲板の上を歩くことも出来た。私は
もう何方を向いても陸を見ることの無いやう
な、驚くばかり美しい海の真中であつた。日
が輝いて来た時は、海は響へやうのない青さ
に光つた。

そよ／＼とした西北の風をうけて熱田丸は日

に三百五十六哩を駛つた。M君はスケッチ用の
畫布や調色板を取出して、氣分の悪いのを忘
れて行かうとして居るらしかった。そろ／＼や
つて来る海上の無聊をまぎらすためにデッキ、
ピリヤードなどを取出す向きもあつた。高い帆
柱を隔てた後方の甲板には、幼い子供等を分
擔してサロンの窓の外を往つたり来たりするK
君夫婦の姿をもよく見かけた。
『K君の旅も容易ぢやないね。』
M君と私は斯う言合つた。
試みに私は煙室の横手に毎日に貼出され
る船長の指示の前に立つて、その前日の正午
に於ける船の位置を讀んで見た。北緯四十三度
三十八分、西經十一度三十五分。その日の位置
は葡萄牙の南端の一角に近いことを知つた。
實に日本は遠かつた。私はその前日までに四
日かゝつて倫敦から七百八十五哩の海上を乗
つて来た。戦時のことで、東洋の空へといろ
ざすものは遠く南亞弗利加の果を廻り、赤道を
二度も越さなければならなかつた。そこから喜
望峯までは五千四百七十五哩もあつた。

故國を見るまで

ビスケニ灣——大西洋——亞弗利加モロッコの沖——赤道——グ
インウィツチ子午線——亞弗利加ダマラ州の沖——南亞弗利加——
ケエブ・タウンの港——ダアパンの港——マダカスカル島——印度
洋——スマトラの島——新嘉堡——香港——上海——日本近海

若船熱田丸は英吉利から積込んで来た多量な
鐵材を初め其他の貨物を船庫に満載しつゝ、
客船としてよりも寧ろ戦時の貨物船とも云ふ
べき形で、海上の危険な區域から一日も早く
脱け出ようとして居た。
航海するものに取つては實に寂しい時であつ
た。熱田丸の船員が居るところによると、敵の
潛航艇の襲撃、もしくは浮流する水雷の被害に
よつゝ、すくなくも一日に一般の船は沈んで居
るといふ。斯うした戦争の及ぼす恐怖はわれ
われが既に通過して来た英吉利海峡やビスケニ
灣ばかりでなく、葡萄牙の近海からカナリイ群
島の附近にまで満がつて居た。熱田丸が成るべ
く陸から離れた神倉を通過しようとして居たの

も、その爲で、この戦時にあつては船客も極く
少なかつた。巴里以來ずつと一緒に旅して来た
M君は、私がその後方の甲板の上に毎日見る唯
一人の同胞の客で、他の二等船客はいづれも英
吉利人のみであつた。それも僅かに男女を合せ
て七人の殖民地行の人達を數へるに過ぎなか
つた。これほど寂しい時であつたが、しかし私
は國を出てから以來自分の長い旅の中で、最
も楽しい時をこの海上に送らうとして居た。
私には旅から旅に疲れて来た身をこの歸東の
船の中で休めて行かうといふ楽しみがあつた。
Ben Wyke。私の顔はこの言葉に盡きて居
た。私は唯この航海の楽しかれと願ふより他
の念慮を有たなかつた。五日ばかり私は早や波
の上を暮らした。私の出て行つたところは西南
の貿易風がそよ／＼と吹いて居る大西洋の最中

だ。われ／＼の熱田丸は多くの航海者の測量し
た海圖と磁石の針の示す方角とによつて、東は
太陽の位置に導かれ、夜は星の位置に導かれ
ながら、廣大無邊な大海の上を南へ、南へと
動いて行つた。

『お國の方へ今お歸りですか。』
私の側へ来て聲を掛けた人があつた。
『え、M君と一緒に。』
斯う私は答へたものの、私の側へ来た人の
誰であつたか、何處で逢つた人かは、どうして
も自分の胸に浮ばなかつた。私は一寸挨拶す
る言葉に困つて、その人の顔を見まもつたまゝ
斯様な風に言つて見た。
『航海には申分のない天氣ですね。』
『全く。風は西南を受けて居ますし、好い時
に君も出掛けて来ましたよ。』
僅かの言葉を交へたぎり、その人は私の側
を離れて行つた。私は誰と話したのか、自分な
がら解らないで居て話した。その人が行つてし
まつた後になつても、どうしても思出せなかつ
た。

しかし、このエトランゼは、不思議と盛らしい気分を私に付けて呉れた。何處の誰であつたか思出せないやうな人に逢つて、一緒に海を眺めながら口をきくといふことも、斯うした旅らしかつた。私は白く曇つた海の柱の側に立つて、甲板の欄の上に自分の手を置きながら、つくづく遊離者らしい心に歸つた。

「A la mer, a la libe mer
O mon Hôte, a la libre mer,
A l'Adriatique verte enlaurmée,
A la mer des jets, a la déesse j'réente
Qui trempe mes nerfs et mes chaus ma!"

(Chant de l'Hôte)

胸に浮ぶは斯の歌の二節だ。あの巴里の客舎の方で口吟んで見た歌の文句だ。私はこれを胸に浮べると同時に、異郷の旅の空でさびしく堪へがたい折々はよく自分の心が海の方へ行つたことを思出した。初めてゴッガンの一漁船の圓の前に立つて見て、あの貴家にさうした奔放な境地のあることを知つた時。一部の巴里人によつて激賞せらるゝリッシュマンの著作を渉るうち、ふとあの劇詩人に「海の詩集」のあることを知つた時。さうした聯想は、いつでも私

の癖を願つて海の方へ向はせた。マルヌの戦の前、私は巴里の混雑を佛國中部の田舎町に逃げ、そこに二月半ほどを送り、それから葡萄の産地なるポルドオの方へ旅したことがあつた。深い秋雨に降られてビスケエ湖を見ることは出来なかつたが、私は獨りガロンヌの河岸に佇んで兎に角海に近いところまで行つたことを酷く懐かしく思つたことがあつた。すへてはまだ昨日のこのやうな氣もする。熱田丸の甲板に来て、私は日頃の空想を實にすることが出来た。

例のエトランゼは甲板を一廻りして、復た私の側へ来た。

「一體、われ／＼の船は何の邊を通つて居るんでせう。」と私が尋ねて見た。
「こゝは君、モロッコの沖合さ。マデイラといふ島から七十哩も外を通つてゐる、こゝから亞弗利加の陸までは、さつと四百六十哩も離れて居る。」
「君はなか／＼嬉しいねえ。」
「私が言つた時は、エトランゼは微笑んだ。私達二人が立つて居るところから、甲板の階段の下の方に複雑な船の構造が見える。船庫の

あるところに横いて、廣い廊下のやうな板敷の床が見える。そこは寧ろ本甲板とも呼ぶべきところで、港へ着けば物摺りともなり、航海中は運動場ともなつて居る。その日の映つた低い甲板の上には、三人の船員を相手にデッキ・ピリヤードの遊戯に餘念もないM君の姿がはつきりとよく見える。ズツク型の船庫の蓋の上に腰掛けて、昔々の遊戯するところを見物な、まだ女學生とも言ひたい英吉利人の姉妹連れの客もある。その側には幼い男の兄の手を引いた一人旅の英吉利の婦人も立つて眺めて居る。
「あの鳥打帽を冠つた人はあれは誰ですか。」とエトランゼが訊いた。
「M君です、巴里を發つてからさつと僕は一緒にやつて来ました。」
「何をすゝ人ですかね。」
「美術家さ。われ／＼の國では新派で知られた人です。」
「まだ若い人のやうだね。」
「あゝいふ人達が、われ／＼の國の畫界では活動して居る。われ／＼の國では何もかも若い、國そのものが若い——すくなくも僕は左様いふ風に考へたいと思つて居る。」

甲板の上の遊戯らしい球の音がM君等の立ち留つて腰を曲めたり彼方此方と走り廻つたりする方から樂しさに聞えて居た。しばらく私はエトランゼと二人で眺め入つて居ると、丁度向うの一等室の高い甲板の方から女の兒の手を引いた婦人がM君等の遊戯を見ようとして階段を降りて来た。

「あの女の人も、君の國の方の人らしいね。」とエトランゼが言つた。

「あれはK君の細君。旦那さんは巴里の大使館の方に勤めて居た人です。あの人は一家族で國の方へ引揚げて行くところですよ。」

海風に髪をなぶられまいとして白い薄絹で頭を包んで居るK君の細君、お母さんに手を引かれて一段づつ船の様子を降りて来る子供、それらの光景が私達の居るところからよく見える。「あの女の兒は可愛らしい人形のやうな容子をして居るぢやないか。」

「短い上衣を着て居るところから膝小僧を出して居るところまで、すつかり巴里の風俗だね。あの兒は佛蘭西人の乳母に育てられたから、佛蘭西の言葉しか知らない。佛蘭西人は君、且の發音が出来ないでせう。ハヒフへホがアイウエ

オとなつてしまふでせう。あの兒が矢張り左様ださうです。なんでもあの細君の語に、「おはやう」といふ日本の言葉を教へようとしたところが、「おは」の「は」があの兒には、どうしても出て来ない。「おはやう」と言ふかはりに、「おかやう」と發音するんださうです。日本人の子供でさへ、佛蘭西に育てば左様ですぜ。甚いものぢや有りませんか。」

「風土化、風土化」とエトランゼは快活に笑ひ出した。やがて私の方を強く見込むやうにして、「兎に角、僕は君にこれだけのことは言へる。まあ君がこれから國の方へ歸つて見たまへ、自分の國が自分の國のやうでは無くなるでせうよ。」

それぎり、エトランゼは口をつぐんでしまつた。私はM君等の方へ行つて遊戯の仲間入をする氣になつた。

船庫を降り、低い本甲板の上へ出て、今迄自分が立派をして居た方を振り返つて見ると、四方に廊下と欄とを隔らした望遠の感じが浮ぶ。私は船庫の横手に見物する人達の前を通りぬけ、見あげるやうに高く太い帆柱の突立つたあたりから船の炊事場寄りの方へ出た。

「M君、熱心にやつて居ますね。」と私が横合から聲を掛けた。船に弱いM君はデッキ・ピリヤードの遊戯にでも紛れて行かうとして居るらしかつた。どうかすると白器で畫の数字を記した赤や白の球が私の立つて居るところまで滑つて飛んで来た。私の側には見物する二三の船員もあつた。その甲板の片隅を廻つて、子供の手を引いたK君の細君が一寸私の方へ挨拶に来た。

「ムツシユウに今日は、しないの。」と細君に佛蘭西語で言はれて、子供は俯向き勝ちに私の方へ手を差出した。こんな場合に握手をすることは御辭儀をするに似たりがないまでに私も放れた。細君は私に向つて、

「ムツシユウは何處に居る、ムツシユウは何處に居るつて、この兒は口癖のやうに申して居ります。」
「遠がなくて、子供も寂しいのでせうか。」
「そのくせ、お目に掛ると斯の通りなんですもの。お轉變なくせに、是でなか／＼はにかみや、なんでもごいませぬね。」
「もうそれでも日本の人には大分慣れましたらう。」

「ええ、お船の方が皆さんが日本の方ですから、事務長さん始めね。この見が、日本人は好きになつた」なんて、そんな生意氣を申し居ります。

とK君が優しく言つた。異郷の旅にあつて細君に優しくする人達の心持は私のやうな獨身者にもよく解る。殊に婦人を大切にする歐羅巴人の中にあつては、尤もK君は家族のものばかりでなく、誰に對しても親切で、丁寧だつた。

には分らなくなつてしまつた。國の方に居ては想像もつかないやうなことが、眼前に見るK君の子供ばかりでなく、自分の内部にも起つて来て居た。僅かに三年ばかりの異郷の旅で、「愛」といふ文字の書き方すらも忘れて居たといふことは、全く自分を驚かした。それほど遠く離れた心持をもつて、もう一度私は故國の方へ歸つて行かうとして居た。

「ママン、ママン。」と母親の旅の衣裳に顔埋めるやうにした。その時私はこの幼い女の兒が平素日本人を見ることを嫌つて居たといふ曾ての細君の話を思い出した。「佛蘭西人を見るとそれは大抵びで、知らない男の方にも直ぐに行つて抱かれたりなぞします。」と言つた細君の言葉を思い出した。

とK君は私を見て笑つて、一緒にその低い甲板から、海を眺めた。日が輝いて来ると海は碧へやうのない青さに光つた。

「自分の國のやうでは無くなるでせうよ。」とあのエトランゼエが私に言つたことは、妙に氣に掛る言葉として私の胸に残つた。

「一つデッキ・ピリヤードのお仲間入でも願ひますかな。」と外交官らしい調子で言つて、私達と一緒になつた。

「こりや驚いた、「愛」といふ字を忘れてしまつた。」と思はず私は自分で自分に言つて見たほど、「愛」といふ字の書き方が胸に浮んで来なかつた。十の下に一と書いて、それから「愛」の字のやうにその下に直ぐ口があつたのか、それが私

そこには若手の運轉士が私達を待つて居る。私はM君と連立つて暗い船の底の石炭庫の内までも見て廻り、海風の吹き通ふ大きな船の据ゑである前へも行つて立つて見た。觀橋の上では、この船に見習ひとして来て居るといふ一人の向船學校の學生にも逢つた。

のが國の方で自分を待たせて居て呉れるやうな氣がして来る。再び故國を見得るといふは實に嬉しいことであり、また心配なことでもあつた。

三

やがて熱が来た。白服に着更へた船員が私の眼前を往つたり来たりするやうになつた。われ／＼の船から起す波の間には、あたかも鹽の結晶のやうに容易に消えない白い泡沫が船に近く浮いて来る。沸く波、熱する潮、それを見ると三年前あの佛蘭西船エルネスト・シモン

板の片隅に持出された壺の上で、柔道の掛聲をさへ聞いた。熱帯に入つて不思議に感ぜらるゝことの一つは、空の色だ。雲もなくて、妙にどんよりとした、不透明な色をして居る。しかもその空から日が熱く照りつける。旅するものの耳朶まで日に焚けて痛む。

「御退屈でせう。」と給仕頭などが私の顔を見る度に至極懇切な調子で言つて呉れたが、私はむしろその懇切の言葉を迷感に感じたほど、それほど斯の處を樂まらして居た。追風で白波の多く揚る海を眺めて行つただけでも、私の心は思ひだ。唯、船の動搖が絶えず自分の身に傳はつて来て、纏まつて物を考へることも出来ないのは残念だつた。日の暮れる頃後尾の甲板に立つて見ると、海上の日夜のさまが私の眼に映る。赤く銅盤を懸けたやうな夕日が見る間に半圓の

すべてが夏景色らしくなつて来た。低い木甲板では帆柱から、船へかけて荒い布の日蔭が渡され、その蔭の船庫の蓋の上で火夫や水夫の群が食事したり、休息したりするやうに成つた。食後に青い労働服を着けた人達が集つて將棋盤を囲む光景なども、往きの佛蘭西船では見られなかつた間だ。私はこの歸りの船旅で最早か／＼の日本的なものを見つけることが出来るやうに思つた。帆柱の間あたりで起る聲、知の竹刀の音をも久し振りで聞いた。時には本甲

キ・ピリヤードの遊戯にまで顔が赤くなるほど持つて生れた性を發揮して居た。言葉の通じない佛蘭西人の中に混つて不安と好奇心とで燃えて行つた往きの旅に比べると、さすがに今度はいろ／＼な便宜を得た。デッキ・ピリヤードでよく顔を合せる船員はいづれも前船學校を出た書生肌の人達で、斯うした船の中で働いて居る火夫や水夫の方へM君や私を誘つて行つて呉れた。炊事場の横手にして機關室を訪れる。そこには眉の濃い機關士が居る。中央の甲板から高い觀橋の様子を昇つて行く。

最前危險區域を脱したとあつて、船では救助用のボートを舊の位置に引附した。「ヨイサ、ヨイサ。」と水夫等が集つて綱を引く掛聲も、何となく元氣づいて聞えて来た。まだそれでも一切の電燈を拖ふ黒布を取去ることだけは許されなかつた。

「いよいよ明日は赤道にかかりますかナ。」
 などと私がM君に言つて見た頃は、船は中央
 亞弗利加のある一角から航路を西南に取つて進
 みつゝあつた。水掃除をした後の朝の甲板に出
 て見るのも心地が好い。乾いた靴で欄の上を
 杖つて居る年老いた水夫もある。曇つた空のか
 なたには驟雨を含んだ雲の遠く浮んで居るのも
 見える。その間から俄かに灰色がよつた青空
 の一部も望まれる。午前四時頃には時々雨がや
 つて来て、蒸々と堪へ難かつた。熱い湿度のため
 に眠氣を催し易く、甲板の欄にもたれたまま、
 私も少し眠つた。K君夫婦が女の兒の手を引
 いて私を見に来たといふのも知らなかつた。

「イル、ドオル。」
 とあの兒は私の假寐して居るところを兩親に
 指して見せて、佛蘭西人の乳母から教へられた
 言葉で左様言つたと云ふ。
 太陽はわれわれの船が通んで行つたところか
 ら見ると北に寄つて居た。實際に言へばあの光
 と熱との源から直下の位置は前の日に既に
 通過したのだ、と私に教へて呉れる船員もあ
 つた。斯うした遠い空にあつては、古代の渡天
 僧が放先で病んで故郷の食物を願ひ、故郷の
 扇を見ては悲んだといふあの心持を思ひや
 ることが出来る。寄ると觸ると、皆な中間に
 は故郷の食物の語がよく出た。この船が神戸
 に着いてから、先づ何を食つて見たかといふ
 やうな語がよく出た。M君は甘黨だから、羊
 羹を五十錢ばかりも買つて思ふさま食つて見た
 いと言ふ。K君は神戸の酒の好いことを言出し
 て、南々とした盃の上に着衣がけか何かで好
 い日本酒の香氣を嗅いで見たらさぞ長旅の疲れ
 を忘れ去ることが出来ようと言ふ。私はまた
 子供の時分に好きで食べたやうな食物を、お花
 見にと言つて母親がこしらへて呉れたやうな辨
 當を、黄色い王子饅頭、糖菓を、それからあの

遊錘を一口に嚙みつぶして見たら、とそんなことを
 話して笑つた。
 翌日は海上で迎へる二度目の日曜に當つた。
 例の朝鮮行の若い宣教師はカトリックの僧服に
 近いものを着け、小形な金線製の聖書を手にし
 て、改まつた顔付で私の側を挨拶して通つた。
 英吉利人のみの禮拜が催されると見え、食堂
 の方からは一同の讃美歌の聲が起つた。その男
 女の合唱の中でも、年若な技師に夫のある腕
 を許した上海行の細君の聲が際立つて高く響
 るやうに聞えて来た。それらの英吉利人が信仰
 の空何は知らないこと、勝手に控へ日暮ちな日
 本人の中にあつて、彼等は無遠慮に團體として
 の強味を發揮した。
 私は甲板に居て海を見て居た。その日の午
 前の海は廣重の靑色を見るやうで、水平線に近
 い部分のみが殊に濃い藍色を成して居た。いづ
 この國に屬するとも知れないやうな二本煙筒の
 汽船がめづらしく私の眼に映つた。甲板の欄を
 支へる白い柱と柱の間から、遠く動いて行く
 船の形を望むほど美しいものはない。向うの
 船は一つの柱から他の柱へと動いて、終には影
 も形も全く見えなくなつてしまつた。

形になつて、やがて水平線のかなたに遠く姿
 を隠してしまふ。そこでは昔昔時が長く短い。
 日が落ちたかと思ふと、にはかに私の周圍は
 暗くなつた。
 金星の見える宵の空を眺めようとして、私は
 M君と一緒に甲板の欄近く欄子を見つめた。船
 の會計といふ人は應應義塾出身で、事務長
 がK君等の方で勤めて居るやうな役廻りを二等
 船客の方で引受けて居たが、この人もよく私
 達の側へ来て、夕暮みががてらの浮世話を持寄
 つた。
 「佛蘭西はさぞ好かつたでせうね。」と會計
 はすこし鼻に掛る聲で私に尋ねた。
 「しかし清潔なことから言へば、この船の方が
 ずっと清潔です。」と私が答へた。
 「さうだらうなあ、佛蘭西人の掃除と来たら成
 つて居ないからなあ。」とM君が横から。
 「日本の船は潔切で好い、と西洋人は皆な左様
 言つて居ます。」と復た私が言つた。現に私が
 乗つて見たフレンチ・メエルの中にも——メサ
 ジユイ・マリタイム、往きには私はあの會計
 の船でしたが——歸りは是非日本の船にする
 いふ英吉利人などが乗つて居ましたつけ。

「つまり、我儘が出来からでせう。」と會計は
 引取つて「食卓に就いても毛唐は言ひたいこ
 とを言ふ。この船の飯はマツて食へないの、
 何のつて。實に事情の多いものぢやないか。」
 「あまりに西洋人の要求を言れ過ぎるんぢや有
 りませんか。」と私が言つて見た。
 「いえ、左様いふ譯でもありませんがね。」と會
 計は打消すやうにして「歐洲航路となると、日
 本人の客はこれで極く少いんです。何と言つ
 ても、歐羅巴人がわれわれの主なるお得意なん
 ですからね。」
 舊曆十六日あたりの月の光もこの甲板の上へ
 さして来た。九日ばかりの航海の間に、男女の
 英吉利人の客の中には早や互ひに近付きに成
 つて、二人づゝ腕を組合せながら月かげに立つ
 もあつた。ダアパンの年若な技師は、子供を
 連れ一人旅の細君と。ボルネオあたりの護謨
 園へ行く途中にあるといふ男は、姉妹連れで
 来て居る姉の方の家庭教師と。私達が朝晩に
 見る欄欄れの中には、朝鮮へ布教のために赴
 くといふまだ年若な宣教師もあつた。二等船
 客の英吉利人としては、その年若な宣教師が
 一番さつぱりとして居て、そして誰に對しても

丁寧で好かつた。
 「兎に角あの手合は、英語の話せないやうなも
 のは、人間ではないやうに思つてゐる。」
 斯う會計は船民地行の英吉利人のことを言
 つて笑つた。その晩はK君も一等室の方からす
 ずしきやうな自慰でやつて来て、浮世話の仲間
 に加はつた。生活の花やかさからK君と同じ
 やうな道を取らうとする多くの青年はあつて
 も、實際選ばるゝものは少いとの語もあつ
 た。
 Notice.
 To-night all clocks on board shall be
 put ahead by 9 minutes.
 Commander.
 時計の針の位置をすこし進すといふこの掲示
 が内外の客のために喫煙室の横手に貼出され
 た航海の十日日には、倫敦から數へると三千三
 十九哩を乗つて来て居た。喜望峯まではまだ三
 千二百四哩もあつた。進めば進むほど時計の
 針の位置を改めなければ成らないといふこと
 も、遠い海上の旅らしかつた。私は神戸と
 上海の間の時計に一時間の相違があつたこと
 を思い出した。日本郵船の旗の形をピンで留め

「も言ふべきあの西半の天才が何處も何處も後世の人の心に活きかへるといふことは、寧ろ一つの奇蹟のやうにも思はれる。巴里の客舎の方で、私はフアゲエのやうな批評家に四巻のルウソオ研究のあることを知り、もう一度ルウソオに歸らうではないかといふ若い時代の佛蘭西人のあることを知つて来た。私は自分の青年時代から好きなルウソオがあの薄命な佛蘭西の新進作家シヤアル・ルイ・フィリップによつて、白耳義の詩人エルスカンと共に、生前愛し慕はれたといふことにも言ひあらはしがたい懐しきを感じて居た。

海は反射は強く成れさせた。私はこの讀みさしの黄色い紙表紙の本を伏せたまま、長い藤椅子の上でしばらく眠つた。眼が覺めて見ると、前に進つて口をきいたエトランゼニが藤椅子の側に立つて海の方を見て居た。

「先刻僕は君を見に来たが君はよく眠つて居た。」

とエトランゼニが言つた。

私は通風筒の何の方から空いた藤椅子を一つ引いて来て、それをエトランゼニに勧め、自分でも懸掛け、それから船で買つた巻煙草を取

つた。夕飯には五日飯が出た。それも赤道通過の儀の意であつたらしい。

夕風の来る後凡の甲板の方で、私ははめづらしい猫の鳴聲を聞きつけた。水夫等に餌はれて居る猫は船中の熱さのために季節も忘れたのであらうか。黒布に覆はれた電燈のかけから眺めると、低い甲板の下の方にも船の燈火が流れて見える。間に包まれた通風筒のかけ、暗い船庫の蓋の上などには、涼み話に集る水夫や火夫がある。何となく大船の夜の感じがするではないかと、私は自分の側へ話し、みに来た眉の濃い機師士に言つて見た。

「斯ういふ船ではまだ駄目です。あなたの言ふやうな大船の感じは眞實には味はれません。それには、どうしても和船でなくちゃ——。」

と機師士が言つて、更に言葉をついで、

「さう言へば、あなたが倫敦からお乗込みになつた時に、私はあの下の甲板に立つて居ましたよ。私は何處かの牧師さんでも斯の船に乗込んで来たのかと思ひましたよ。あなただとは思はなかつた。Mさんはまだ若いから、私共と一緒にデッキ・ピリヤードでもやりさうだが、あなたまで一緒に成つてパツサリおやんな

さらうとは思はなかつた。」

無常の星夜の空を眺めたが、この書生肌な機師士は簡単に自分の過去を語つた。世には十年も交際して居ながら決して自分の生涯をあらささまに話さないやうな人もあり、この機師士のやうにデツキ・ピリヤードの付合ぐらゐで海員としての生活を語り聞かせて呉れる人もある。その時は金星が殊に強い光を放つた。輝いた星影が海に映るほど強く、赤道を越してから南極星も見え始めた。時々私は甲板の欄に近く立つて行つて、そこから暗い海を眺めた。往きの船旅に見て行つた青い燐の光が復た眼前の波の間を流れて居た。

五

風のある涼しい甲板の上で、私は旅の物の中に入れて来たルウソオの「ジュネイ」(又の名、「新しいエロイズ」)を讀み初めた。

「機師」によつてフロオベールに感化を興へたといふルウソオは、この「新しいエロイズ」によつてストリンドベルとあたりにまで影響を興へたのであるまいか、といふことが讀んで行く中にだん／＼思はれて来た。近代人の母體

船もよくある。それだつて別に不思議はない。なにしろ君、この通り廣い海の中でせう。珊瑚島に乗揚げたりなんかして、全く消息の知れなくなつてしまふやうな場合はよくある。それや君、一年中を道して計算して見たら、行方不明になつてしまふ船は何艘あるか知れない。」

「ヒドいものですなう。」

「不思議と言へば君、何でも不思議。君が旅に出掛けて行つたのも不思議。斯うして僕が君に逢つたのも不思議ぢやないか。」

「そんなことを言つては失敬かも知れませんが——」と私が言つて見た。「一體、君は奈何いふ人でしたっけ。」

「僕かね。僕は海から来たものさ。通風筒で澤山だ。」

斯う言つて、エトランゼニは微笑んだ。

丁度その時、この船の水夫らしい男が薬の瓶を手に提げ、着せられた紙付をして、重さうな足を引張りながら甲板を通過した。私達が話し込んで居た直ぐ上部の甲板へは船員以外の昇降を禁じてあつて、そこに船中の病室が設けられている。薬の瓶を提げた男はその病室の方へ行かうとして居る。

午後二時三十分には赤道を通過するとあつて、相間の汽笛を待つ船客一同は甲板に集まつた。早や一時に近しい。まだ汽笛が鳴らない。赤道は既に通過したのかなどと言出すものもあつた。いよいよその海上に差掛るといふ頃、K君が私達を船へに來た。三人連立つて中央の低い甲板に行つて見ると、そこにも男女の一等船客が集つて居る。K君夫婦を除いては、他は皆な外国人であつた。何事かを待受け顔にあちこちと歩き廻つて居るものがある。候中時計を取出して通過の時刻を計るものがある。驚異の眼を見張つて欄に近く行くものがある。

「赤道と言ふからに、何か少しは變つたことでもあるのかと思つた。そこいらが赤くでも見えるのかと思つた。是が赤道か。」

このM君の詞子には私も噴飯さすに居られなかつた。

全く赤道そのものは平々凡々だ。唯そこを無事に通過したといふ旅客としての心持から、K君は記念のための要書を書き、M君は風のある濃い紺青の海と、水平線のかたに起る遠い夏雲の群とを前にして、小さなスケッチを試みた。三時半頃、船では強飯を出して眠

つた。夕飯には五日飯が出た。それも赤道通過の儀の意であつたらしい。

夕風の来る後凡の甲板の方で、私ははめづらしい猫の鳴聲を聞きつけた。水夫等に餌はれて居る猫は船中の熱さのために季節も忘れたのであらうか。黒布に覆はれた電燈のかけから眺めると、低い甲板の下の方にも船の燈火が流れて見える。間に包まれた通風筒のかけ、暗い船庫の蓋の上などには、涼み話に集る水夫や火夫がある。何となく大船の夜の感じがするではないかと、私は自分の側へ話し、みに来た眉の濃い機師士に言つて見た。

「斯ういふ船ではまだ駄目です。あなたの言ふやうな大船の感じは眞實には味はれません。それには、どうしても和船でなくちゃ——。」

と機師士が言つて、更に言葉をついで、

「さう言へば、あなたが倫敦からお乗込みになつた時に、私はあの下の甲板に立つて居ましたよ。私は何處かの牧師さんでも斯の船に乗込んで来たのかと思ひましたよ。あなただとは思はなかつた。Mさんはまだ若いから、私共と一緒にデッキ・ピリヤードでもやりさうだが、あなたまで一緒に成つてパツサリおやんな

さらうとは思はなかつた。」

無常の星夜の空を眺めたが、この書生肌な機師士は簡単に自分の過去を語つた。世には十年も交際して居ながら決して自分の生涯をあらささまに話さないやうな人もあり、この機師士のやうにデツキ・ピリヤードの付合ぐらゐで海員としての生活を語り聞かせて呉れる人もある。その時は金星が殊に強い光を放つた。輝いた星影が海に映るほど強く、赤道を越してから南極星も見え始めた。時々私は甲板の欄に近く立つて行つて、そこから暗い海を眺めた。往きの船旅に見て行つた青い燐の光が復た眼前の波の間を流れて居た。

五

風のある涼しい甲板の上で、私は旅の物の中に入れて来たルウソオの「ジュネイ」(又の名、「新しいエロイズ」)を讀み初めた。

「機師」によつてフロオベールに感化を興へたといふルウソオは、この「新しいエロイズ」によつてストリンドベルとあたりにまで影響を興へたのであるまいか、といふことが讀んで行く中にだん／＼思はれて来た。近代人の母體

「あゝ脚氣患者だ。」
 と私は左に思つた。エトランゼエも私と同じやうに、その病人の極く静かに歩いて行く姿を見送つた。
 「左様言へば、君のお達は奈何しましたか」とエトランゼエが訊いた。
 「M君ですか。海の養生でもして居ませう。」
 「あの人よりは君の方が先に國を出たんだね。往きの旅と見ると、君も變つた。」
 「さうかなあ。これで僕は變りましたかなあ。」
 「君、變は奈何しましたか。何かそれには意味があるんですか。」
 「いえ、別に意味もありません。變の白くなくなつたのは鏡にでも向はなければ自分で分らないが、變の白いのは見えて心細くて仕様がな、いつそ刺つてしまへ、さう思つて、巴里を發つ前に自分で刺つて来ました。」
 「惜しいことをした。變ばかり白くして、眉が黒いのは、何だか變だ。矢張り上と下に白いものがある方が、調和がとれて好い。」
 「君もなか／＼面白くことを言ふ。まあ自分でいくらか異人臭くなつて歸つて来たかとは思ふが、そりや變の刺り方とか、何とか、さう

いふことは仕方が無い。自分の内部に左様變りやうが無い。僕だつても巴里に居る時分に、自分ながら不思議な夢を見たこともある。親戚のものとも、何處の誰とも言へないやうなものを夢に見る。兎に角、それは自分の國の方の女だ。夢だけは日本人だ。それで居ながらその女の眼は西洋人のやうに青かつたりする。どうかすると僕はまた夢に自分の國を歩いて居る。お尋の境内のやうなところが見える。その境内に人家がある。町がある。墓地がある。島がある。左様かと思ふと僕は日本の着物を着てその境内を歩いて居るために、物見高い西洋の子供に頻／＼と問はれたりする。僕の夢はそんな風らしいものぢやないか。三年ばかり外國に居るうちに、それだ。しかし斯様なことは一時的の夢だ。僕自身の體質でも何でもなからうと思ふ。僕は神戶を出掛ける時にも、自分の國に居ると同じ心持で外國へ行つても暮して見ようと思つた。今度もそれと同じ心持で、自分の國へもう一度歸つて行かうとして居る。」
 「君はその積りでも、もし君が自分で自分の眼を變ふやうなことが起つて来たとしたら……」

「あゝ脚氣患者だ。」
 と私は左に思つた。エトランゼエも私と同じやうに、その病人の極く静かに歩いて行く姿を見送つた。
 「左様言へば、君のお達は奈何しましたか」とエトランゼエが訊いた。
 「M君ですか。海の養生でもして居ませう。」
 「あの人よりは君の方が先に國を出たんだね。往きの旅と見ると、君も變つた。」
 「さうかなあ。これで僕は變りましたかなあ。」
 「君、變は奈何しましたか。何かそれには意味があるんですか。」
 「いえ、別に意味もありません。變の白くなくなつたのは鏡にでも向はなければ自分で分らないが、變の白いのは見えて心細くて仕様がな、いつそ刺つてしまへ、さう思つて、巴里を發つ前に自分で刺つて来ました。」
 「惜しいことをした。變ばかり白くして、眉が黒いのは、何だか變だ。矢張り上と下に白いものがある方が、調和がとれて好い。」
 「君もなか／＼面白くことを言ふ。まあ自分でいくらか異人臭くなつて歸つて来たかとは思ふが、そりや變の刺り方とか、何とか、さう

いふことは仕方が無い。自分の内部に左様變りやうが無い。僕だつても巴里に居る時分に、自分ながら不思議な夢を見たこともある。親戚のものとも、何處の誰とも言へないやうなものを夢に見る。兎に角、それは自分の國の方の女だ。夢だけは日本人だ。それで居ながらその女の眼は西洋人のやうに青かつたりする。どうかすると僕はまた夢に自分の國を歩いて居る。お尋の境内のやうなところが見える。その境内に人家がある。町がある。墓地がある。島がある。左様かと思ふと僕は日本の着物を着てその境内を歩いて居るために、物見高い西洋の子供に頻／＼と問はれたりする。僕の夢はそんな風らしいものぢやないか。三年ばかり外國に居るうちに、それだ。しかし斯様なことは一時的の夢だ。僕自身の體質でも何でもなからうと思ふ。僕は神戶を出掛ける時にも、自分の國に居ると同じ心持で外國へ行つても暮して見ようと思つた。今度もそれと同じ心持で、自分の國へもう一度歸つて行かうとして居る。」
 「君はその積りでも、もし君が自分で自分の眼を變ふやうなことが起つて来たとしたら……」

「あゝ脚氣患者だ。」
 と私は左に思つた。エトランゼエも私と同じやうに、その病人の極く静かに歩いて行く姿を見送つた。
 「左様言へば、君のお達は奈何しましたか」とエトランゼエが訊いた。
 「M君ですか。海の養生でもして居ませう。」
 「あの人よりは君の方が先に國を出たんだね。往きの旅と見ると、君も變つた。」
 「さうかなあ。これで僕は變りましたかなあ。」
 「君、變は奈何しましたか。何かそれには意味があるんですか。」
 「いえ、別に意味もありません。變の白くなくなつたのは鏡にでも向はなければ自分で分らないが、變の白いのは見えて心細くて仕様がな、いつそ刺つてしまへ、さう思つて、巴里を發つ前に自分で刺つて来ました。」
 「惜しいことをした。變ばかり白くして、眉が黒いのは、何だか變だ。矢張り上と下に白いものがある方が、調和がとれて好い。」
 「君もなか／＼面白くことを言ふ。まあ自分でいくらか異人臭くなつて歸つて来たかとは思ふが、そりや變の刺り方とか、何とか、さう

いふことは仕方が無い。自分の内部に左様變りやうが無い。僕だつても巴里に居る時分に、自分ながら不思議な夢を見たこともある。親戚のものとも、何處の誰とも言へないやうなものを夢に見る。兎に角、それは自分の國の方の女だ。夢だけは日本人だ。それで居ながらその女の眼は西洋人のやうに青かつたりする。どうかすると僕はまた夢に自分の國を歩いて居る。お尋の境内のやうなところが見える。その境内に人家がある。町がある。墓地がある。島がある。左様かと思ふと僕は日本の着物を着てその境内を歩いて居るために、物見高い西洋の子供に頻／＼と問はれたりする。僕の夢はそんな風らしいものぢやないか。三年ばかり外國に居るうちに、それだ。しかし斯様なことは一時的の夢だ。僕自身の體質でも何でもなからうと思ふ。僕は神戶を出掛ける時にも、自分の國に居ると同じ心持で外國へ行つても暮して見ようと思つた。今度もそれと同じ心持で、自分の國へもう一度歸つて行かうとして居る。」
 「君はその積りでも、もし君が自分で自分の眼を變ふやうなことが起つて来たとしたら……」

六

六

のひびきも傳はつて来た。
西南の風が持つて来る「うねり」は普通の波濤とも異つてわれ／＼の船を動揺させた。翌日は殊にこの「うねり」が高かつた。左様いふ日にかぎつて、M君は部屋に引籠つて、食器のなことをゴボして居た。どうして斯様に自分の飯はまづいのか、あの帆柱の影の粗末な食卓では、水夫等がいかに甘さうに食つて居るのに、とM君が羨ましそうに言つて居た。相變らず私は自分の部屋の方で、ボオイが運んで来て呉れる膳に對つた。どうかすると部屋の前で隠れて居る船員が私の膳にまで上つて来ることがあつたが、船中で一番私の嫌ひなものは斯の船員だ。船で用事飯も随分強かつた。
「いよ／＼明後日はケエブ・タウンへ着きますさうです。」
と言つて部屋を出て行くボオイの聲も何となく元氣づいて聞えて来た。
一日は一日より信天翁の飛んで来るのが多くなつた。航海の二十日に、私が本甲板に立つて「うねり」の静まつた海を眺めて居ると、船に近く飛んで来た一羽の信天翁が丁度私の頭の上で恐ろしく長い標刺をひるげて見せた。私は

はあの海鳥が自分の頭の上へ落ちて来るかと思つたほど、それほど船上に仰ぎ見る事が出来た。最早船ではケエブ・タウン着の時間を測つて旅の慰みに賭などを思ひ付くものがある。一等室から二等室の間を周旋して歩く物数奇な手合もある。M君も一シルリング賭けたと言つて笑つた。われ／＼には亞弗利加の南端に達するといふ楽しみがあり、近く港に着くといふ楽しみがあり、故國を見る前に種々な知らない殖民地を見て行くといふ楽しみがあつた。午後には私は巴里や倫敦の知人へ宛て、記念の葉書を書いた。
一晝夜に三百二十哩ほどの速力で駛つて行つた熱田丸は油を流したやうな静かな夕方の波の上へわれ／＼を連れて行つた。冷たい海の色も何となく南らしかつた。美しい夕日も見た。
七

二十日もかゝつて遠く日ざして行つたケエブ・タウンの港はチチ／＼とした曉方の燈火から私の眼に映して来た。私が船床の上に眼ざめた頃は、船は既に港に入つて居た。私は寢衣のまゝ甲板に上つて、一日港の入口に静止した熱田丸から水に映るその燈火を望んだ。石質のあらはれた三つの連なつた赤山に朝日のあたる頃、船は波止場の方へ動いて行つた。その名からして面白くないライオン峰、テエブル山、デゼル峰の眺望はあたかも高い石の屏風だ。朝霧の籠めた山の裾から傾斜に添うて町のある地勢が何となく荒涼とした感じを興へる。港内には閑散らしく碇泊する一葉の英吉利の軍艦を見るのみで、商船の數とても極く少なかつたが、でも煙の混つた空を前じて使けた煙筒と、帆柱と、帆綱と、その間を飛ぶ鳩の群などを見るのは港らしかつた。朝日は燈臺の立つ橋の上にもあたつて居て、そこを行きかふ英吉利人や土人も見える。
私は上陸の支度して甲板に出て居ると、水夫と監督らしい船員が来て「いよ／＼と私に話しかけた。この人も商船學校出らしい書生肌の人だ。私はM君の支度するのを待つ間、しばらくその船員と一緒に立つて、陸上に見える高い時計臺や、いかに英吉利の殖民地らしい赤く黒ずんだ屋根などを眺めて居た。「金と金剛石が出るんで、兎に角これだけに發

達したやうな町なんです。此處はまあ、私共には餘り用はありません。唯皆さんの御見物のために寄るやうなものなんです。」
とその船員が私に話して呉れた。丁度そこへM君も部屋から出て来て私達と一緒に立つた。斯ういふ場合にはM君は寫生の帳面と鉛筆とを手放さないほど熱心な人だ。
「M君、賭はどうでした。」と私が訊いて見た。
「駄目、駄目、一シル損しちゃいました。」
とM君は言つて、昔なの中で一番近い時間を言ひ當てた英吉利の看護婦の手にあの賭金が落ちたことを話して笑つた。二十日の間も海に暮した私は可成激しい土の満きを覚えて来た。私は唯それを踏むといふことだけでも満足しようとして居た。その心をもつて、私はM君と一緒に陸へと急いだ。
南亞弗利加博物館といふは小規模ながらに、ケエブ・タウンで見ると、きもの一つであつた。種々な土人の裝飾物、酒器、石器、其他初めて来て見る地方の奇異な風俗を示してあるもの前で、しばらく私達は時を逸つた。金剛石を含むといふ石塊の陳列された室へも行つて見た。古代の航海者が喜望峰に達したことを

記念するための文字を刻した幾多の石片の前へも行つて立つて見た。この地方に産するといふ動物の剥製が蒐集された室では、K君夫婦が女の兒の手を引きながら見て廻るのに行き違つた。博物館の出口で、私はこの旅を記念するに好い一小冊子を求めた。
Inscriptions
left by
Early European Navigators
on their
way to the East.
私は小さな美術館をも訪ねた。そこにある繪畫は現代の畫家の手に成つた英吉利風の風景で、見るに足るものは無かつた。霸王樹、芭蕉、それから名も知らない、紫色の花の高い枝に咲いたのが眼についた植物園の内を通りぬけて、あるさゝやかな珈琲店で英吉利風の紅茶をも味つた。倫敦の町なぞを歩いて見かけることの出来ないやうな、實に思ひ／＼の風俗をした殖民地の英吉利人が私達の前を右に往き左に往きして居た。
陸羅巴を見た眼で斯うした亞弗利加の殖民地

地を見ると、すくなくも向うには純粋なものがあつた。こゝには外來の勢力を無理に押し込めて造りつけたやうな濁つたものがある。すべてが實に難然紛然として居る。成程こゝには建築物として立派なものもある。しかしその一つでも殆んど他と調和したものがない。私は斯うした殖民地を見た眼でもう一度自分の國を見るといふことが、何となく氣が／＼になつて来た。
死んだ町を歩いて来たやうな心持をもつて、私は船まで引返した。M君は町から探して来た土人の製作品、早速煙草の卓上を飾つて見た。あたかもそこに標物の別天地でも形造つたやうに。歐羅巴の方の戦争の消息も、その港では判然したことを知ることが出来なかつた。
出帆までにはまだ間があつた。K君に伴はれて、M君と私とを見に来た人があつた。外務省から取調のため一時この遠隔な土地に派遣されて居る官吏で、M君の兒さんを知つて居るといふ。簡短に亞弗利加の氣候をも話して呉れた。一時幸にうんと降り續いて、その仙は殆んど雨の來ることが無い。農作には適せず、土地の發達しない所以だと話して呉れた。恐ら

この官吏はケニア・タウンで遊蕩することの出来る唯一人の同胞であらうかとも思はれた。午後の三時には鐘の方で鐘を響く重い音が起つた。船は波止場を離れて静かに廻轉し始めた。斯うして私はまた二度と旅する機会のあるさうにも思はれない南の果の港を出て行った。

南亞弗利加博物館で見つけて来た小冊子——初代歐羅巴の航海者が遺した記録は私の膝の上にあつた。それを手にして居ると、まだ私はあのケニア・タウンの町の方に自分の身を置くやうな氣もする。私の心は、あの赤味がよつた土の上の日あたりの方へ行つた。竹のやうに青い椰子の樹の蔭の方へも行つた。奇異な植物ばかりの茂り重なつた中で、ところ／＼に秘物を見た。黄葉の方へも行つた。短く黒く土色に縮れた土人の髪の方へも行つた。赤い色の布で頭を包み白衣を身に纏うた婦人の方へも行つた。怪しげな風俗の歐羅巴人と、殖民地生れらしい子供と、混血兒なぞの往きかふ町の方へも行つた。私の心はまた、あの博物館内の青白い鯉の玉子や魚の玉子なぞの並べてあつた室の方へも行き、極々な動物の剥製の方へも行つた。

て、そこに標本として形をとめて山羊、鹿、斑馬、象、獅子、駝鳥、それから何程の種類のあつかも知れないやうな毒蛇と毒蟲などの實際に模倣するといふ驚い未開な地方を想像して見た。

八

それから三日目にダアバンの港へ着いた。喜望峯を廻つて行つたわれ／＼の船は急潮のため一時間に三哩づゝも押し流された。入港もそのために豫定の時よりは後れたとのことであつた。

午前の九時半頃には私は早や動揺を感じない甲板の上で居て、M君はじめ英吉利人の乗客等と一緒に、水先案内の来るのを待受けた。港の入口にある赤けた崖の上には、暗く蒸々とした灰色の雲を遣い背景にして白い燈臺の立つのを望んだ。

「鯨。鯨。」といふ聲が皆々の間に起つた。その邊はどうかするとあの大きな魚が船に近く寄りあがるやうな海だ。一般のランチが熱田丸をめがけて進んで来た。ケニア・タウンでの入港の経験で、

それが水先案内の迎へに来た船といふことが分つた。やがて熱田丸は静かに動き始めて、燈臺の立つ崖の下を過ぎた。

「あの崖に生えて居るのは何でせう。」

「あれは霸王樹の林です。」

「あれがねえ。何か黄色い花も咲いてますね。」われ／＼は水夫の監督をする船員と一緒にこんな話をしながら、一面に霸王樹の林に包まれた岸つゞきの地勢に添うて波止場の方へ入つて行つた。小高い山腹に倚つた岸の上には石炭を積むための装置がしてある。その岸に近く船が停つた時、針金のやうに髪を巻いた黒い皮膚の土人が素足で岸の方から走り寄つて来た。

ダアバンの寄港は船に石炭と水とを積むためであつたから、われ／＼はゆつくり上陸する時を得た。ランチで水を渡つて行くと、間もなく私はなだらかに盛上つた砂山のやうなところへ出た。海水浴場としてこのダアバンが名高いといふことも、その邊の勾配のゆるい地勢を見ただけで點頭される。町の方へ通ふ電車も終點地に近く、路傍の草の上でオレンヂを賣る二人の土人の娘があつた。頭から冠つた白い布

で身體の全體を包んで居るやうな亞弗利加風俗をしながら、通りかゝる土人の若者と共に物言ひ、笑ふ娘達が、現に自分の前に居るといふことだけでも、私には活きた不思議の一つだつた。全く別の世界に暮して来たやうな自分のその日迄と、それらの若い黒人達に近く行つた瞬間と、その間には何の連絡があり何の關係があるかとさへ思はれた。見ると、その娘達は何處から何處まで響くくめだ。耳に輪。鼻に輪。首に輪。指に輪。足にまで輪。青黒い入道も暗い色の皮膚にあつて見れば決して醜くない。むしろその容貌に深さと陰影とを帯びやうに見える。

「黒人もなか／＼好い。」

とさ／＼やいて私は連のM君を笑はせた。そこを離れて電車の停留場の方へ歩いて行くうちに、私はあの可憐な黒人の娘からオレンヂ一つ買はなかつたことを悔いた。

亞弗利加らしい六月初の日あたりや殖民地風の市街を電車の上から見て行つて、ダアバンの中心地へ出た。土人の車大の群の異様な風俗をしたのが、われ／＼の周圍に集つて来て、しきりと乗車を勧めた。歌の角や鳥の羽で頭

を飾つたその風俗は、古くからの土地の習慣ではあるかも知れないが、旅客の眼を引くためのわざとした装束らしくて卑しかつた。矢張り彼様いふ風俗は遠い山間の方に隠れる土人ばかりの中へでも持つて行つて見たいものだつた。

「見て御覽なさい。あの足は何かで白く塗つて居るんですよ。」

とM君は榕樹の葉木の蔭に容を持つて居る土人の車夫を私に指して見せた。

この港町で土人の引く車がわれ／＼の國の意匠を模倣した二人乗の人力車であるのは、めづらしかつた。日本的なもの影がこんな亞弗利加の果にまで及んで居ると考へることも決して悪い心持はしなかつた——人力車そのものの好いか悪いかは別にしても。

半日はかり知らない町で暮して居るうちに、私はあの波止場で一番最初に見た土人から、あの針金のやうに巻き縮れた髪から、あの恐ろしげに光る眼から、あの氣味の悪く黒い皮膚から、あの赤い唇と際立つて白くあらはれる歯から、一概に瘰癧な性質のもの。うに自分の感じだつたことを改めなければならぬやうに成つ

て行つた。私はまた、黒人を滑稽の象徴として見るやうな、ある一部の歐羅巴人を憎むやうにも成つて行つた。ダアバンの博物館を見た眼を移して、町々を往きかふ人達の中に出て見ると、あの土人の製作品として陳列してあつた南京玉をおもしろく意匠したものなぞが土地の婦人の身を飾つて居ることが分る。私はある繁華な町の商家の前で、花嫁かと思はれるほど盛装した土地の若い婦人を見かけたが、その人は巻き縮れた前髪を緩り下げ、その一つ／＼に南京玉の飾を垂れて居た。男や女が素足で日のあつた土の上を踏んで居るといふことも斯うした地方で見れば左様可笑しくない。あの黒人の遊衣は半ズボンの制服を着け、手鎗を携へ、腰から足をあらはして町の角に立つて居たが、その人の銅色の素足は下手な靴なぞを穿いたよりも立派だつた。M君と私とはあの博物館の樓上の窓のところから、椰子や榕樹の葉木の梢の間に港の一部を望むことの出来たやうな、静かな楽しい時をも送つて来た。歐羅巴の方で見て来た種々な名畫の複製が可成多く陳列されてあつたのは一層その樓上を樂しくして見せた。着色版ではあつたが、私は

もう一度あのレンブラントの前へも行った。倫敦で見ることの出来なかつたやうなロセツチのある作の面影にすら接することが出来た。船を指して私達が驚きを覚えたのは、暮色が何ふやうにやつて来た。熱帯的な黄昏の如くさは鬱蒼とした榕樹の蔭などを物凄く暗くしてしまつた。ランチの出るところへ通り着く途に、大分道に迷つた。熱田丸に引返して燈火の映る夜の港の光景を前にした時の私は半日の疲を忘れた。M君を相手に、

「あの桃太郎の傳説は南の方にでも關係があるんぢやありませんかね。先刻の土人の風俗などは鬼にそっくりですね。」と話して見た。私はまた古代の武士が武勇のしるしとしてあの兜の前面を飾つたものと、亞弗利加の土人が額を飾つて居る眼の角と、その間の類似を思つて、自分等の遠い先祖と「南」とを結びつけて想像して見た。

「Mさんには今日はすつかり擔がれてしまひました。私はほんとにエルダンが落ちたのかと思ひましたよ。」

と言つて笑ふM君も私達の側へ来て、最早二十

四日の間も聞かなかつた陸上の消息や、ダアベンへ来て初めていくらか知ることの出来た歐羅巴の方の戦況の噂などをした。私達三人が巴里を辭したのは丁度エルダンの戦争の始まらうとする頃であつた。

「何故日本人がこんなところへ来たのかと言つて、先刻しきりと私に尋ねて居るダアベンの人があるました。私があつた公園に腰掛けて居ましたら、もと／＼このダアベンには葡萄牙人の血も混つて流れてゐるのがあるんださうです。え、え、え、ですから斯の土地の人はあまり英吉利人に好い感情を抱いても居ないのですね。」

といふM君の話もあつた。

ダアベンでの碇泊は翌日まで續いた。非常に多量な石炭の積込を終る迄とあつて、船のボイヤや炊事大の中には海岸へ釣道具を持出し、長い航海中で僅かに見つけた「開散」を樂まうとして居るものもあつた。波止場に近い岸下の砂道に添うて私も海岸へ歩きに出た。船が捕れて引揚げられて行つたといふ場所のあたりに

は、まだ人だかりがして居る。紅い血のあとをそこ／＼に見ることも出来る。私は薊王樹の生ひ茂つた傾斜の間に一筋の細道のあつたを見つけた。そこから岸の上に登つて遠く海を望まうとしたが、毒蛇のゐることを聞いて思ひ止つた。名も知らない草の蔓や短い灌木の類が岸の根にはびこつて居た。その中には紫色の草花の蕾れ咲くものもあつた。試みに私は「磯草」と名づけて見て、旅の記念にとその一つを摘み取らうとした。

「薊王樹に觸るのは、お止しなさいよ。」と向うの方から呼ぶ會計の聲に驚かされて、私はうつかり知らない土地の花も摘めないことを知つた。

まぶしい海岸の日光の中で、私は會計やM君や二三の船員とも一緒になつた。もう直き岸の端の燈臺に近い、突出した岸の岩づたひに一同は大きな岩と岩の間を降りた。見ると、知らない土人が何時の間にかやつて来て、一番高い岩の上へ素足で登つて行つた。波打際に近い岩の隙には涼しい日蔭がある。腰掛けるに好いところがある。どうかすると打寄せる波が私の休んで居た岩の間までも流込んで来て、復た

海のリズムにつれて向うの方へ引いて行つた。私はその日蔭で旅の服から好きな巻煙草を取出し、白い波が砕けるのを眺めながら一服やらうとした時ほど、遠い南亞弗利加の果に身を置いて居るやうな氣のしたことは無かつた。私の眼に映る青い深い海はまだそこから何程際涯も無く續いて居るとも知れなかつた。

やがて私達は日のあつた海岸を船の方へ引返して行つた。めづらしく一羽の鶴を見た。何處から開いて来るとも知れないやうな遠い鶴の聲を聞き、けたのも、めづらしかつた。岸の根には自分の國で見るとも違ふ松葉牡丹の根が這つて居て、その間には種々な色の花も咲き亂れて居た。

「船の花などを摘むのは止した方がい。どうかすると毒草だ。」と會計が言つて居た。

その岸の下で、私は釣竿を提げて来る二人の歐羅巴の子供に逢つた。二人ともズボンまくしつけて、土人と同じやうに足で歩いて居るのも、殖民地らしかつた。

海岸には丁度一艘の捕鯊船が着いた。海賊の船でも見るやうな舊式な汚い船は岸の方か

ら捕れた鯊を引いて来た。聲を揚げて呼ぶもの、走り廻るもの、立つて見物するもの、種々な人種が群がり集つて居る中で、巨大な鯊があをむきに鐵の鎖に繋がれながら、寄生蟲の一面に閉着した白い腹部を露出しながら、海から陸へ揚つて来た。まだ主人公の死も知らず顔な深山な寄生蟲は鯊の體に深く食ひ込んだ自分等の殻を出たり入つたりして、ピチピチ跳ねて居た。その海岸から波止場に繋がれた熱田丸の方を見ると、八千噸からある二本マストの船が城のやうに浮いて居た。もうそろそろ出帆の支度も始まつたと見え、黒い煙筒からはさかんに煙を噴出して居た。

九

エトランゼエは船の方に私を待つて居た。石炭の積込から解散した濃黒な塵は下手に欄にも觸れないほど甲板の上を汚したが、最早水洗ひも済んだ後で、氣持が好い。長い板の間とところ／＼には、まだ半乾きに濕つた部分もある。私は洗ひ立ての甲板をエトランゼエと二人で踏んで、薊王樹の山に對した二階の廊下からでも下階すやうに、岸から歸つて来る人達を眺め

た。私の直ぐ目の下には、このダアベンで熱田丸を離れるといふ年若な英吉利人の技師が上海行の一人旅の細君と腕を組ませて、船中で重ねた調子の別れを惜しみ顔に、波止場の上を極く静かに歩いて居た。多情な細君は時々物に怯えたやうな眼付をして、後方を振返つて見ては復た男と歩調を合せて居た。この二人の男女の客から私は船になるほど種々な場面を見せつけられて来た。

其時、本甲板の下の方で船員全體の點呼があつた。デツキ・ピリヤードで知合になつた運轉士、肩の濃い機師、局長、入港出帆の節に自分等の甲板へ来て水夫の監督をする人、觀橋の上で見かける年若な商船學校の見習生、いづれも他の船員と一緒に二列になつて船庫の前に並んだ。M君や私のところへよく話しかける一等運轉士といふ人も船庫に近い自分の部屋から出て来た。會計も出て行つて前列の左の端に立つた。

「斯様なところで英吉利の官憲から點呼を受ける必要があるだらうか。」と私はエトランゼエに言つて見た。エトランゼエも私と一緒に立つて眺めながら、

「どうかすると港で火夫や水夫の逸出といふ事があるからね。大抵の船が一航海して戻って行く時分には、船員の頭数がよく減つて居るからね。」

港の役人らしい英吉利人船務長と共に本甲板の方に立って、昔ながらの出帆の行つて居た。白い面巾を頭に被せた女中から、五君の子煩の世話をする女の給仕まで出て来た。私の部屋隣のボオイも改まった顔付でボオイ連の仲間に加はつて居た。私はそれをエトランゼニ指して見せて、

「あれが君、僕の部屋にボオイだ。あの隣に立っているのがM君の部屋だ。どうして君、昔な顔だ。見給へ、ボオイの服などを着て居ても、何處か斯う寂気なところが有るだらう。左様思つて時々僕は獨りで喰飯したくなる。それが有る。被褥いふ意氣、イナセなところが、僕等の國の方の特色かも知れぬ。」

巴里の方で見た来た生活のさまざまなが、それからそれと私の胸に浮んだ。私はエトランゼエを誘つて港の見える左舷の甲板の方へ歩き廻りに行つたが、別に浮んだ藍の詰なぞがして見たかつた。

「私達の前には涼しさに青く光るペバミントの注がれた玻璃盃が一つづゝ置かれた。私達二人はその玻璃盃を觸れ合せて、互ひに旅の健康を祝した。」

エトランゼエは葡萄酒のやうなペバミントを一口やつて、

「デアバンは奈何でした。」

「ケニア・タウンより僕にはずつと面白かつた。と私が答へた。」

「左様さ、英吉利の殖民地といふものも大したものさね。」

「僕はケニア・タウンの方でも覗いて来たし、こゝでも一寸遊園地を覗いて来ました。」

「何か有りましたか。」

「賞はねえ、倫敦の方で雑誌屋を覗いて見たら、冒險小説とか情話とか左様言つたやうなものがある、有る、びつくりするほど有る。斯様な味な雑誌の雑誌や小説が一體誰に讀まれるのかと思つて見て来ましたよ。ところがケニア・タウンやデアバンへ来て見ると、それが雑誌屋にずらりと並んで居る。一口に言へば、あれはまあ殖民地向なんだね。」

「コロニスト(殖民地の連中)といふやつが、今

す、しかしそんなのは例外といふものです、まあ百姓の中から確なもの出やうが有りません。」

君さういふ調子さ。その時は歐羅巴人の百姓とか労働者とかいふのは大分彼等の國の方で言ふとは違ふなと思つた。しかし佛蘭西あたりの労働者と来たら、随分また汚いからねえ。僕なんかですら一寸傍へは寄りたくないやうなのが有る。あれはいろ／＼な關係から来て居るんだらうが、一帯歐羅巴人は僕等の國の人ほど着物などを取替へない、年百年中一枚の丈夫な着物で通人さへある。そこへ行くとならば國では比較的安い物を着るかはりに、何枚と取替へる。職人でも何でも清潔としたものを着て居る。歐羅巴の労働者のやうに、あんなに汚い服装をして居ないでも済むからねえ。寄席へ行つて傍へ寄れないやうなもの居ないからねえ。何か斯う僕等の國には歐羅巴の方に無いものが残つて居て——音氣とか、イナセとかいふものがあつて——美と清潔とを愛するやうな天性があつて、それが百々人と左様でない人達との間を調和して来たやうな氣もするね。お、先刻僕が君に話したらう、この船のボオイでも何でも何處か意氣だと言つたらう。おそれくちやもう大した勢カサ。」

君も左様思ふだらう。誰だつて英吉利の殖民地の發達を見て驚かないものは無い。今がもうその絶頂かも知れない。どうも僕の考へには、英吉利の本國まで殖民地のために壓されて来たやうな氣がする。」

倫敦には、君は——

「素通りさ。ほんの九日ばかり。僕はほんの自分の印象を語るに過ぎないがね。しかし彼地に長く居る人から聞いて見ても、倫敦に今有るものは、何でも面白ければ可いと思つて居るやうだね。芝居でも、音樂でも、小説や雑誌の讀物でも、面白ければ可い。それが君、殖民地の連中が要求するものぢやないか。あの金儲けに忙しい連中が、一日働けばもう草臥れてしまつて(娛樂)の外には求めるものないやうな連中が——

「君の言ふのは英吉利本國の殖民地化かね。」

「まあ其様なもんだ。どうも英吉利といふものは弱だ——おそれく是が僕ばかりぢや無からう、正直に英吉利のことを考へるものは左様思ふだらうよ。僕が巴里を出る時は、丁度セルバンテスの三百年祭さ。あの「ドンキイホテ」

「どうかすると港で火夫や水夫の逸出といふ事があるからね。大抵の船が一航海して戻って行く時分には、船員の頭数がよく減つて居るからね。」

港の役人らしい英吉利人船務長と共に本甲板の方に立って、昔ながらの出帆の行つて居た。白い面巾を頭に被せた女中から、五君の子煩の世話をする女の給仕まで出て来た。私の部屋隣のボオイも改まった顔付でボオイ連の仲間に加はつて居た。私はそれをエトランゼニ指して見せて、

「あれが君、僕の部屋にボオイだ。あの隣に立っているのがM君の部屋だ。どうして君、昔な顔だ。見給へ、ボオイの服などを着て居ても、何處か斯う寂気なところが有るだらう。左様思つて時々僕は獨りで喰飯したくなる。それが有る。被褥いふ意氣、イナセなところが、僕等の國の方の特色かも知れぬ。」

巴里の方で見た来た生活のさまざまなが、それからそれと私の胸に浮んだ。私はエトランゼエを誘つて港の見える左舷の甲板の方へ歩き廻りに行つたが、別に浮んだ藍の詰なぞがして見たかつた。

「私達の前には涼しさに青く光るペバミントの注がれた玻璃盃が一つづゝ置かれた。私達二人はその玻璃盃を觸れ合せて、互ひに旅の健康を祝した。」

エトランゼエは葡萄酒のやうなペバミントを一口やつて、

「デアバンは奈何でした。」

「ケニア・タウンより僕にはずつと面白かつた。と私が答へた。」

「左様さ、英吉利の殖民地といふものも大したものさね。」

「僕はケニア・タウンの方でも覗いて来たし、こゝでも一寸遊園地を覗いて来ました。」

「何か有りましたか。」

「賞はねえ、倫敦の方で雑誌屋を覗いて見たら、冒險小説とか情話とか左様言つたやうなものがある、有る、びつくりするほど有る。斯様な味な雑誌の雑誌や小説が一體誰に讀まれるのかと思つて見て来ましたよ。ところがケニア・タウンやデアバンへ来て見ると、それが雑誌屋にずらりと並んで居る。一口に言へば、あれはまあ殖民地向なんだね。」

「コロニスト(殖民地の連中)といふやつが、今

す、しかしそんなのは例外といふものです、まあ百姓の中から確なもの出やうが有りません。」

君さういふ調子さ。その時は歐羅巴人の百姓とか労働者とかいふのは大分彼等の國の方で言ふとは違ふなと思つた。しかし佛蘭西あたりの労働者と来たら、随分また汚いからねえ。僕なんかですら一寸傍へは寄りたくないやうなのが有る。あれはいろ／＼な關係から来て居るんだらうが、一帯歐羅巴人は僕等の國の人ほど着物などを取替へない、年百年中一枚の丈夫な着物で通人さへある。そこへ行くとならば國では比較的安い物を着るかはりに、何枚と取替へる。職人でも何でも清潔としたものを着て居る。歐羅巴の労働者のやうに、あんなに汚い服装をして居ないでも済むからねえ。寄席へ行つて傍へ寄れないやうなもの居ないからねえ。何か斯う僕等の國には歐羅巴の方に無いものが残つて居て——音氣とか、イナセとかいふものがあつて——美と清潔とを愛するやうな天性があつて、それが百々人と左様でない人達との間を調和して来たやうな氣もするね。お、先刻僕が君に話したらう、この船のボオイでも何でも何處か意氣だと言つたらう。おそれくちやもう大した勢カサ。」

君も左様思ふだらう。誰だつて英吉利の殖民地の發達を見て驚かないものは無い。今がもうその絶頂かも知れない。どうも僕の考へには、英吉利の本國まで殖民地のために壓されて来たやうな氣がする。」

倫敦には、君は——

「素通りさ。ほんの九日ばかり。僕はほんの自分の印象を語るに過ぎないがね。しかし彼地に長く居る人から聞いて見ても、倫敦に今有るものは、何でも面白ければ可いと思つて居るやうだね。芝居でも、音樂でも、小説や雑誌の讀物でも、面白ければ可い。それが君、殖民地の連中が要求するものぢやないか。あの金儲けに忙しい連中が、一日働けばもう草臥れてしまつて(娛樂)の外には求めるものないやうな連中が——

「君の言ふのは英吉利本國の殖民地化かね。」

「まあ其様なもんだ。どうも英吉利といふものは弱だ——おそれく是が僕ばかりぢや無からう、正直に英吉利のことを考へるものは左様思ふだらうよ。僕が巴里を出る時は、丁度セルバンテスの三百年祭さ。あの「ドンキイホテ」

「君の前だが、この旅では僕もいろいろなこと
を考へるよ。僕はよく自分の死んだ阿茶のこ
となぞを考へるよ。僕が阿茶に別れたのは十
三の歳だがね、あの阿茶と来たなら、そりやあも
う頑固な人だつたからねえ。僕等の國には十
八世紀の末から十九世紀の前半期あたりへかけ
て非常にさかんな保守的の精神が興つたさ。そ
れが國學といふやつを産み、古語の研究となり、
古代詩歌の復活となり、横いてさかんな愛國運
動とも成つた。僕の阿茶なども矢張りその運動に
加つた一人で、女王様なんことを唱へて、
西洋から入つて来るものを極力排斥したね。
耶穌教などにも大嫌ひで、聖堂も嫌なほどこ
とを言ひつけて、しまひに君、座敷で死ん
だ。その阿茶だらう、僕が十二の歳に英學を
始める時は非常に心懸してね、自分の子供が
祭儀か成つてしまふやうにでも思つたんだら
う。でも、しまひには僕に許して呉れたが、平素
なにしろ阿茶は狂に成るくらゐだから、平素
は優しい人でも、すこし許して来ると可哀しか
つた。僕の兄貴などはどうかすると弓の折で打
たれた。僕はまだ幼少さかつたからそんな目に

はななかつたが、子供心にも阿茶といふも
のは悪いもの、頑固なものとばかり思つた。そ
れから大きくなつても、僕の學ぶこと、爲る
こと、考へることは阿茶と何の關りがあるだ
らう、自分の心持は全く通じないものやう
にばかり思はれて仕方がなかつた。もしあの阿
茶が生きたら、自分の爲すことを見
たら、僕はよく左様思つた。しかし君、僕だつ
て左様思つた西洋を興有がつて、外國の學問を
した時、無いや、無理、好いものでありさへす
れば、假令いかなる國のものであつても、踏踏せ
ずにそれを受納しようとはした。英吉利のもの
でも、獨逸のものでも、佛蘭西のものでも、そ
れから露西亞のものでも、僕はかりぢやない、
一様に學問をした。僕等の國の青年は皆なそれ
だ。僕は自分で自分の學生を指導つて、歩いて
来た道を通つて見ることもある。要するに
僕などが長い間、かゝつて外國の言葉を學んだ
り、外國の本を讀んで見たりしたのは、唯西洋
を模倣する心からでは無い。何卒して聞かして見
たいと思ふものが有つたからだ。言つて見れば、
まあ近代の精神だ。エネブライ・モデルンとい
ふやつだね。何卒して、人として眼を覺ました

い、それが平生の學問の究極の目的だつた。……
不思議なねえ、遠い外國の旅に出て来ると、
子供の時に別れた阿茶のことなどがしきりと想
しくなる。僕等が今日あるのも、被擧して阿茶
の時代の人達が頑張つて居て呉れた御蔭だ。
印度あたりのやうに、外來の勢力に敗けてしま
はなかつた御蔭だ、左様思ふと僕はあの頑固
な可畏しい阿茶に感謝するやうな心持を有つ
て来た。多少なりとも僕等が近代の精神に觸れ
得るといふのは、あの阿茶に強いものが有つ
たからだ。それに觸れ得るだけの力を残して
置いて呉れたからだ。僕は左様思つて来たよ。
いえ實際、父の愛といふやうなものを喚起
したのも、流しい外國の旗だつた。……」
エトランゼエは黙つてこの私の話を聞いて
居たが、椅子を離れて上る際に、「君もな
か／＼話せる、しかし君の言ふことは半分は寢
言だ。」といふ眼付をした。

十二

私の初床はそれまで、食堂の側にあつて、た
つた一人で一室を占領して居たが、新嘉坡以
東は急に乗客も増すといふことで、その日の

を舉いで行かうとするコロネストの連中のこと
なぞを彼等も馬鹿々々しい氣がした。
「僕、僕はケエブ・タウンの博物館で面白い土
産を買つて来た。初代歐羅巴の航海者の記念と
いふやつさ。あれで見ると、何だねえ、歐羅巴
の方から喜望峯を廻つて東へ東へと出ようとし
たのは、もう十五世紀あたりからだねえ。」
「皆な印度に送るつもりさ。」
「左様らしいね、西班牙人も行けば、葡萄牙人も
行けば、英吉利人も行く。印度といふものが克
に角皆な目的だつたんだね。印度が中心で、
それからあの勢力が東の方へ延びて行つたん
だなあ。……印度から安南、安南から支那、支那
から僕等の國……」
その時、左舷の甲板の方からヒイ／＼と女
の聲が聞えた。何事が起つたかと思はれるやう
な女の叫び聲だ。
「何だ。……とエトランゼエも頭を立てた。
私は椅子を離れて、山のやうに慎重な
ある種の周囲を左舷の方へ廻つて行つて見た。
驚く驚くすることの好きなブルネオ行の技師が
情人の妹をつかまへて、子供のやうに驚い
て居るのだ。馬鹿らしく思つて置いた私はエトラ

ンゼエの方へ引返した。
「復た英吉利人が驚いでるんだ。」と私がエト
ランゼエに言つた。「あのヒイ／＼いふのは娘
がくすぐられてるんだ。」
「大袈裟な聲だねえ。」とエトランゼエも馬鹿馬
鹿しさうに笑つた。
やゝしばらく私達二人は黙つて甲板から向
うのスマトラの島影を、海上に連なり續く岬の
かたちなどを賞し眺めて居た。一般の白い汽船
が波の間にあらはれた。すくなくも自分の國の
船では無いらしい。それを見て居ると、あのエ
ルネスト・シモンが私の腕に浮ぶ。
「往きと歸りとは、もう大分種々な港を見た
なあ。」と私が復た言出した。「東洋の方で肝心
な港々は大概今では英吉利のものだね。先朝
の印度の話ぢやないが、僕はこの旅で左様思
つて来た。最初の歐羅巴の航海者なんでものは
必ずしも他の國を奪るつもりではなかつたん
だね。唯、奴等は強いものを一緒に持つて行つ
たんだね。實際歐羅巴の方へ行つて見ると、強
い組織的なものがあるからねえ。左様いふ強い
ものが押込んで行くと、組織的でないやうな弱
いものは否でも應でも敗けてしまふ。だからケ

エブ・タウンでも、ダバンでも、コロンボで
も、新嘉坡でも、結局強いものが支配するやう
に成つちまふ。そいつが僕等の國の方まで延び
て来たんだね。」
「今から思ふと、君の國の長崎や神戸がよく新
嘉坡のやうに成つてしまはなかつたものさね。」
「僕は斯様な風にも考へる。印度や埃及や土耳
其あたりには古代と近代としか無い、と言つた
人の説には全く賛成だ。幸ひにも僕等の國に
は中世があつた。封建時代があつた。長崎が新嘉
坡に成らなかつたばかりぢやない、僕等の國が
今日あるのは封建時代の賜物ぢやないかと思ふ
よ。見給へ、日本の兵隊が強いなんて言つて
も、皆な封建時代から傳はつて来たもの。近代
化だ。兵隊はまあ一傑だが、僕等の國に今有る
ものは何一つとして……好いものでも、悪いも
のでも……どうかすると僕は旅に居て自分の國
のことを考へて、まだ前世紀が自分等の中に
生きて居るやうな氣のすることも有る。眞實に
自分等は革命といふものを疑て来たのか知らん
と疑ふやうなこともある……」
波の間に見える白い汽船は遠くはなつたが、
まだ動いて居た。私は眺め入りながら更に話

午後、M君の部屋の方へ一階に上つた。そこは
暖かい部屋で、甲板へも直ぐに出られた。私は
陰気な階下の部屋を出て、窓から海の望まれる
二階の部屋の方へ引越したやうなものだった。
長い船窓で、船の中から取出して着た軍衣の和
服は解けたり、脱ぎたりした。私はこれを巴
里の客舎の方でも着、この船へ来てからも夏
の服を着、然し甲板の上で暮らしたことが多か
った。時には、人は人の居ない喫煙室の方へ旅
の荷物を持出し、漁師が網を結くやうな手付で
その結びを見て見た。

新嘉坡も近づくにつれ、殖民地の英吉利人
の多くは熱田丸を離れようとして居た。夕方が
私とM君と二人で甲板に出て居ると、出来
るだけ船窓の終りを望まうとするやうな人達が
長い板の端を行ったり来たりした。一船の末
には護衛隊に從事するといふボルネオの技
師とまだ女学校を出て間もないやうな眼鏡をか
けた家庭教師とが腕を組ませて舞臺の番のやう
に甲板を歩き廻るばかりでなく、同船した英吉
利人の中では一番数もあり、徳もあり、日本
人に對しても丁寧で、これから東洋への布教の
途中にあるといふまだ年の若い朝鮮人の宣教師

「Good evening, J」

「今夜は」
「新嘉坡の夜です」
「この私の悪い洒落は不潔な反響をさへ喚
起した。一等室の方に居る和蘭の領事は私の
洒落を氣にして、私が挨拶した言葉の意匠を
K君に尋ねたとか。私は日本語を用ひること
によつて、まるで眼中に人の無いやうな英吉利
人の誇りをすこしばかり傷けた」
「エトランゼニが私に話して呉れたスマトラ
の燈臺の灯も見えて来た。私は往きの佛蘭西
船の甲板の上を思出した。あのアルタアニエ生
れの下クトルが私に指して見せたのも、この燈
臺の灯であつたことを思出した。その時は良い
月夜だつた。私は中央の長い甲板を通り抜け
て、すつと船の舷の方までも水のやうな光を
浴びに行つた。月夜は海上に神秘的な寂寥な感
じを興へるものはない。暗い海は波の上だけ照

までが、ダアバンで入港の時の船に酔つたとい
ふ程に如く人の好きさうな肥つた看護婦と立
つて、慌ましく置かれるやうな眼付をしながら
私達の船を通り過ぎるやうに成つた。宣教師か
ら見ると看護婦の方は年高なやうでもあつた。
この紅ら顔な看護婦は、どうかすると髪を包む
ものから身に纏ふ衣裳まで一切赤づくめで、日
頃「赤色」といふものに特別の興味を持つM
君の畫のモデルに置かれたこともある。佛蘭西
がへりのM君の新派な肖像畫は、もつと美人に
でも描いて貰ふ積りで居たらしいこのモデルに
は解らなかつたこともある。M君は細い觀察
家だから、眼前を散步する人達のことを私に言
つて「あの宣教師は看護婦の方から誘はれたん
ですね」とか「あの家庭教師はなかくしつか
りした女だ、あれでまだ別までは許して居な
いんですね、あそこが歐羅巴の女だ」とかの
噂をした。姿を見かける度に誰にでも微笑ん
で見せるやうなのは、子供を連れて上海行の細
君だ。ダアバンで年若な技術員を見送つた細君は
一等室の内に居るある外國人に腕を任せるや
うに成つた。細君が好きで幕の自體な細君は子
供もそのものに浮かれ歩いて居た。

十三

新嘉坡まで油り着いた。語るやうな群衆に
包まれた港の入り口が、島々の眺望が、早や私
の眼にある。私は一度も赤道を越えず非加利
を通過りして漸く海上の本街道へ出て行つた
やうな氣がした。
往きの船窓で見て行つた波止場の岸、赤黒い
倉庫の建物の光景などがもう一度私の前に展
けて来た。熱田丸へ清き寄せる土人の軽いカノ
オは、あたかも私の方へ歸つて来る三年前の
記憶そのまゝであつた。
往きに見て行つた新嘉坡はあまり感心しませ
んでしたよ。何だか火事場の燒跡でも歩くやう

「あんなに毒に酔つたから、言つてやりまし
た。」と會話に際して同僚の氣樂さでも思出
し、一昔な食卓に坐して居るところで言つ
てやりましたよ。私は後悔した、私は今ま
で英吉利人を敬愛し過ぎた、英吉利人といふも
のはもつと禮節を重んずる立派な國民とばかり
思つて居た。ツツて——ネ。あのケエブ・タウ
ンから乗り込んで来た商人があれせまう。あの
英吉利人は昔ながらの私の方に賛成しち
まひました。一英吉利本國の人はもう駄目です。
昔なもうデカダンです、南亞弗利加の殖民
に居るものの方が遙かに健全です。」とさき。
この又聞きにした南亞弗利加のコロネスト
の聲は思はず私を驚かした。左様言へば、あ
の商人は他の英吉利人の客を避けて、甲板の片
隅に腰掛けながら獨りでよく海を眺めて居た。
ダアバンから乗つて来る十五日の船窓の間
に、私はある洒落を思ひ付いた。それは悪い
洒落かも知れない。しかし會話の言葉ではな
いが、英語の語せないものは、人間に無いと思

な氣がしました。
「左様ですか、新嘉坡はなかく好うござ
んすぜ、好い線はあるし、色彩は鮮明だし、ほ
んとに熱帯地の港らしい感じがありますね。」
「もう一度よく見て行くんですね。」
「新嘉坡の港にして、私は上陸を急いだ。
港内には特にこの戦時で準備の任に當つて居
る日本の海軍の船があり、波止場へ上ると英吉
利人や支那人やマレー人に混つて歩き廻つて居
る同胞がある。ケエブ・タウンやダアバンを離
てこの港へ来ると、船から上つたばかりでもう
こゝまで及んで来て居る日本の國の勢力が盛
じられる。陸上の消息に傳ふて行つた、私は何
よりも先づ新聞を買つて、北海の海軍、キツナ
ナア將軍の死などを尋ねた。まぢく、の噂が
あつたメルダンの戦争も、新嘉坡まで来て初め
て眞實のことが分つた。
一積に上陸を約したK君と船と連立つて、間
もなく私は支那風の家屋を日本の領事館に
宛てたその静かな屋根の下に居た。窓にアカシ
ヤの茂つた博物館の建物の内にも居た。K君夫
婦には海岸に近いこぢやんとした町の角で別

れたが、その海にはシャムの土人、フィリッピン人、マレー人、支那人、それから何程かの人種が入り混れて居るかと思はれる程、相異なつた風俗と色彩とが私の眼についた。

「海岸の並木の方へ行かう。」
とM君を誘つて行く車中で、私はめづらしく日本の脚車下駄の音を聞きつけた。あのカラコロ、カラコロといふ音を私は何年振りで聞いたらうと思つた。

M君に聞けば青龍樹といふ名のある熱帯的な並木の茂り續いたあたりには、楽しい影があつた。私はある青草の上を歩んだ。シャムの土人が二人休んで居る側を歩んだ。M君と二人でそこに足を投出した。

「M君、今日の博物館もなか／＼面白かつたね。マレーの土人の造つたものには驚いた。あんなにわれ／＼の國の意匠に近いものがあるうとは思はなかつた。」

「船の形などはそつくりでしたな。」
「主人の形で、刀を腰に差したのが有りませんでした。よつほどわれ／＼は南洋の方に興味が有るんですね。」
休み／＼話した。

私は傍に居るシャム人の年とつた女を孫らしい二人の娘達の風俗を眺め、それらの人達が身に纏ふ赤い筒袴のある姿を眺め、腰巻を眺め、目さうに食ふ檳榔樹の實などを眺めて、自分の好奇心をそゝられたばかりでなく、つい近くの並木の蔭で支那人が割いて賣つて居るアナナスや、桃に似て形の白いめづらしい果物を自分でも割つて見たかつた。

「あなたとここで賣つてるやうな物は、何だか汚らしい。」

とM君は顔を歪めて、笑ひながら見て居た。私の好奇心は唯それを見ただけでは承知しなかつた。行つて屋敷の前で立つと、支那人は並と馬車が入つた汚い道と、上手に割いた果物とを私に出して呉れた。

「M君、」
と私は呼んで、氣味悪がる連の手にアナナスを分けた。

「一人の長ふやうなものは何でも食へるよ。」
「でも、あの腰を付ける氣には成れない。」

私ははげしく笑ひながら味つた。
M君はマレー人の腰に纏ふやうな、模様のあつた布地を買つて行きたいと言つて、支那人の町

の方へ私を誘つた。途中に、路傍の並木の蔭で「へぎ」を直接に土の上に敷き、米の飯を盛り、カシエ粉の汁らしいものを掛けて賣る大道店があつた。土人の客はそれを手掴みでやつて居た。

「序に、あれを食つて見たら奈何です。」
とM君は私に話して言つた。

故國を見る前に、私は早やこの港町でかすの日本のものを見つけて行くことが出来た。すつかり國の風俗で町を歩いて居る二三の女の子供にも逢つた。その中の一番幼いのは腰に巾着をさへ下げて居た。商家の密進した支那人の街から逃れ出るやうにして、息のつまるほど熱した空気の道を、私は海岸へと急いだ。日ざかりの知らない支那人も、樹蔭のある海岸も、賭博に耽り書を食ふシャム人の側も、十七日續けて海に暮した私達にはすべてが懐かしかつた。

やがて私達は午後三時頃迄に食ひはぐれた食事をした。ある爲に、日本の蕎麦屋のあるやうな町を人に教へられて行つた。そこは船着場のいづこにも見出さるやうな場所であつた。岸には日本の旗、下駄、其他の雜

物を賣つた外に、船客の命と健康の救済を期した家などが眼についた。同じやうに軒を連ねた家々の窓にはいくつかの藤椅子とめりんすの座蒲團とが並べられて、浴衣に細帯を締め髪を束ねたやうな同船の女が家の外に集つて、往來の運溝を渡つて居るものもあつた。奥間の三味線の音に陰氣な町の空氣を通して何處からともなく響き傳はつて來て居た。

私ははげしく笑つた。そしてそれが國から來たものとあれば、好いものとなし、悪いものとなし、自分等の注意を引いた。支那人の引く人力車に乗つて、もう一度海岸に續く青龍樹の並木の下あたりまで引返して行つた頃は、まだ日は暮れなかつた。自動車を廻つて樹蔭へさしを割れに來る支那の良家の娘らしい人達もあつた。熱帯地らしい港町はその夕方から暮生るかのやうにも見えた。波止場へ行く車の上で、蟲の聲を聞きつけた。お積、お積の音のかしこしく耳にひびく船まで歸つて來ると、私の胸は数限りもほいほいと多量な印象で満たされて居た。波止の夜は香紙を巻いて甲板に臨み船室の窓々を深く閉じたから、とても涼しい船床の上では眠られなかつた。私は喫煙室の

方が横に成つて居ると、ボルネオの技師、家教師とこの妹、私ら親の看護婦などは既に船を去つて居た。入れ替りに日本人や支那人の客が乗込んで來た。新嘉坡から一掃に成つた同船の男女は主に護國の連中であつた。私の周囲は早や國の方の言葉、挨拶、話、笑ひ聲、甲板の上を踏む女の足音の下駄の音などで満たされた。熱田丸はこれらの新しい客を乗せて午前の八時頃に港を出て行つた。

十四

北緯十度三十五分、東經三十度三十七分といふあたりへかゝる頃は船は一層速力を加へた。一晝夜に私は三百三十哩を走つて行つた。見たばかりでも眼の眩むやうな激しい日光の射した甲板へは、どうかすると熱い熱い熱い太陽を崇拜する回教、享樂と肉慾との國、明日のことを考へないといふマレー人の生活——それらのものは實にこの強烈な光と熱との中にあることが想像せられた。

新嘉坡を出て三日目の朝のことであつた。朝

飯を済ました後私は船尾の甲板の方へ行つた。水深を測量するために欄の上に設置されてある浮標は相變らず獨りでぐる／＼廻つて居た。私はその前に立つて、故國を指して歸つて行く情熱とした自分の姿を鏡に描いて見た。十日ばかりの横には早や故國を見ることが出来るその自分の心の期待と不安とを思つて見た。熱帯の無い藍色の海に、遠く近く輝ける白い波に、船が残して行く青い泡と白い泡とそれからずつと向うの方まで光つて見える一筋の水尾とに、獨りで私は鏡から見入つて立つて居るその自分の心を思つて見た。

私は船具の多い船の甲板のあたりを一廻りした。階上の病室の方へ通ふ藤椅子の下あたりへ出た。丁度向うの通風筒の側を廻つて私の方へやつて來るエトランゼエに逢つた。

「大分賑かに成りましたね。」
それが私の側へ來て立つた時のエトランゼエの挨拶だつた。

三晩の間一日も忘れることの出来なかつた國の方を思出させるやうなものが、今は早や私の直ぐ眼前にある。黒いものづくめの巴厘風俗を見慣れて來た眼には、一切模様の無いものは

無いやうな女の兒の長い袖や、帯や、子守として着て居る女中の赤い襟までが眼につく。子供の眼を促すやうな幼年童顔の美しい表紙する見慣れた来た質素なものは違ふ。大きな東屋も、帽子を被る國には一寸無かつたものだ。浴衣がけで藤椅子の上に横に成つて居る女の素足を見るのも殊にめづらしい。どうかすると、それにはみだらな感じをさへ伴ふ。あちこちに不規則に置並べてある藤椅子の下には、客の去つた後と見えて、ビールの空瓶やら、蜜柑の皮やらが取散してある。

「汽笛一響、

新橋を、

早やわが汽車は

離れたり——」

無邪氣な子守はこの唱歌を歌ひながら、女の兒の手を引いて甲板を歩き廻つた。

「君の國の歌だ。」

とエトランゼは私の肩を叩いて言つた。

私は斯うした淺海なメロディで自分の國の唱歌を代表させたくなかつた。私は何とも言つて見やうの無いやうな気がして、唯黙つて居た。

長い沈黙がエトランゼと私の間に続いた。私はこの沈黙が言ふより辛かつた。私は甲板の隅に近く行かうとすると、エトランゼも一緒に隣に水を、復たしばらく二人で黙つて海を眺めて居た。

「僕は冷いかねえ。」

とエトランゼが言出した。

「別に君が冷いとは思はない。私は他に言ひ

標がなかつた。

「僕はこれで大分君の國の人並に逢つた。海か

ら歸つて行く君の國の人で、左様話の合はな

いやうな人は無かつた。一體、君の國の人はあ

まり自分を知らな過ぎる。海へ出て来て昔な

眼を開けて居る。見給へ、その證據には一人

として満足して歸つたものは無い。絶望して自

分の國を呪ふか、あきらめて黙つてしまふか、

さなければもう何事か爲る氣がなくなつて隠

遁するかだ。」

「自分の國を思へばこそ左様だよ。冷淡なもの

なら、嘆氣にも成らない。隠遁もしない。僕

に言はせると、左様いふ人達こそ眞實の愛國者

だ。」

「歸る人が多いぜ。」

「君には國が無いのかね。」

「行く先が僕が國。——僕るところが僕の國さ

——だから、僕は君に訊いてるぢやないか、僕

は冷いかつて言つてるぢやないか。黙つて言

ふ譯ぢやないが、君は僕を煩いとも思つて來

たのかい。」

「君もまた妙なことを言ふねえ。」

「試みに僕から離れて見給へ。それが君に出

來たら、えらい。君は僕から離れたつもりでも

僕はもう絶えず君に働いて居る。且海の洗

禮を受けたものが、どうして心に革命を引起

さないで済むものか。」

「一體、君は僕を如何しようと思ふんだね。」

「だからサ、まあ左様むづかしいことを言はず

に、長く心安くしようぢやないか。友達として

協を續けようぢやないか。折角斯うして君とは

御馴染で成つたものだ。」

「そりや僕の方でも願ふところだ。」

「左様云へば、大變子供が泣出したね。」

「なんでも新嘉坡の方から、お母さんが國の方

へ連れて歸る女の兒だ。妹の方はさうでも

ないが、姉さんの方が被嫌して泣くんだ。昨夜

たぞは一體中泣きつづけた。恐ろしい事件な兒だ。彼様泣かれたんぢやお母さんが堪らない。それに君、あの兒は子守の背中であつちや、どうしても眠らない。

「たしかにあの聲は、君の國の子供の泣聲だ

ね。」

渡邊の連中が喫煙室の方から出て来て、中

には私の傍へ話しかけに來たので、エトラン

ゼは別れて行つた。

新嘉坡以來、われ／＼の甲板は長崎とか仙臺

とか栃木とかの方へ歸つて行く同胞の客で主

なる部分を占められるやうに成つた。居残る僅

かの英吉利人は隅の方へ小さくなつてしまつた。

それにしても私はあの眼さへ留ませば泣き續

けて居るやうな氣むづかしい、我儘な女の兒の

泣聲を——子守の背中であつちや夜寝つかない

といふあの女の兒の泣聲を——エトランゼエ

に聞せたくないと思つたばかりでなく、東洋へ

の初旅らしい年若な朝鮮行の宣教師にも、南亞

弗利加の商人にも聞かせたくないと思つた。

英吉利人の女の客では、子供を連れて來た君

のみが二等室の方に残つた。多岐な君はめつ

たに甲板の上へ顔を見せずに、獨りて靜かな食

室の方に居て、好きな洋琴のお流ひ——傳ふもなかつた。どうかするよ置る涙のないやうな無君の獨りて歌ふ聲が自分で合ひの手に弾く洋琴の音に和して、高く響くやうに響き傳はつて來た。それまで甲板の上では、家族連れの渡邊の連中が無邪氣な鐵道唱歌などを子供に歌つて聞かせて居たが、左様した國の方の素人の聲はずつかりあの無邪氣の強い調子に沈黙させられてしまつた。

十五

香港まで歸つて來た。往きの旅の記憶は一層新しく私の胸に蘇つた。驟雨が來ては復た止むやうな黄緑な海、香港の入口らしい幾多の島嶼、その一つに立つ白い燈臺の眺望などが、もう一度私の前に展けて來た。低く垂下つて來る雲又雲の帯は海上に薄く近く容を斷ず島と島の間を往つたり來つたりして居た。

口邊にある水道に流うて船は港の方へ入つて行つた。海まで通つて來て居る大陸的な地勢は、あたかも山間に分け入るの思ひをさせる。樹木といふものを見ることは出来ないが若草の緑に包まれた連山の光景を、私は甲板の上に

立ちながら望んで行くことが出来た。ある水道の曲に、山の傾斜の極のところ、病院らしい大きな白い建築物をも望んで通つた。水道の中にはとろ／＼に旗印を立て、水雷の浮流する位置を示した場所もあつた。その邊で私の眼に付いたものは、近い山から山を往來するさかんな雲の帯だ。夕立を帯びて風の涼しい水蒸氣の多い空氣の中に、香港の港が次第に近く見えて來た。私の周囲には立つて港を望む人ばかりであつた。例の泣き易い女の兒もその時は着物を着更へさせて貰ひ、赤いリボンなどを髪にかけておとなしく母親に連れられて居た。靜かに水道を動いて行つた船が港に入つた頃は、早や陸上に燈火を望んだ。港はまだ暮れきらない頃だつた。支那風の帳棚が群立する間から夕方の船の立ち登るのを望み見たばかりでも、身は既に東洋にあることを感じた。

入港の時間がすこし遅れたとかで、われ／＼は其晩上陸を許されなかつた。港の役人が來て外國人の乗客は皆な旅券を調べられたが、日本人だけは其事もなしに済んだ。神妙な英國の官費は斯うして印度人の現進を監視するのだとも聞いた。現に熱田丸にも一人の印度人

の音があつて、その人は大分皆々の眼を引いた。私は朝鮮の宣教師の手に「印度の豊饒」と題した新刊書のあつたことを思出した。その中にはあの詩人タゴールばかりでなく、私なぞの名前を聞いたことも無い幾多の現代の印度人に就いて書いてあつたことを思出した。其晩は貨物の揚卸しの聲もなく、入込んで来る港の人は商人の聲もなく、それだけでも気が持た好かつた。低気圧が過ぎ去つた後とかで、港口に碇泊した船へは涼しい夜風が沖合の方から通つて来た。潮水のやうな水に流る無数の燈火の前に、私はK君の家族やM君等と斯の航海中の最も静かな夜を過した。

朝になつて見ると、われわれの船は大東商船会社の淡路行の汽船の近くに停つて居た。港を出て行かうとする郵船会社の汽船もあつた。その港に見る七八艘の大きな汽船で、大きな煙筒で、自分の國のもので無いものは無かつた。斯の戦時に際する日本の船の活動も思ひやがる。朝の五時半頃からわれわれの船ではもうさかんな貨物の揚卸しが始まつた。本甲板の上あたりは機械的な荷積の装置の響や、支那人の足を呼び留めて耳も遠くなるほど

であつた。山のやうに茶箱などの積まれた波止場を通り抜けて私はM君と一緒にランチの出来るところへ急いだ。

「往きにはこの香港あたりから、そろそろ早く成りかけて、一日町を歩いたらカラが船のやうに成つちましたよ。香港は蒸暑いところだと思ひましたよ。でも君、今度は暑い方から来たんだからそれほど驚きませんね。」

私はM君に話した。

私達二人は海岸の通りから女王ギタトリアの立像のあるあたりを歩いて見た。三年の間を置いて、時の歩いて行つた足跡が斯の曾遊の地にも認められる。もうあの樹葉から散笑に移つたばかりの時のやうな長い髪を振舞して、大衆の聲を引いて行く支那人の車夫などは一人も目に見かけなかつた。

丘上の公園でしばらく時を過した。棕櫚椰子その他の樹木が繁つたあたりの石の上に二人して置かけた。風雨、雲霧、日光、寒暑、乾濕の度を異にした遠い異地の方から歸つて来て見ると、私達は自分の國の方で見るやうな思はずんだ樹木の葉を早やこの香港に見つけることが出来た。

「あゝ蟬が鳴いて居ますぞ。久しぶりで蟬の聲などを聞いた。」

私はM君に話した。あそこに前菜が生えて居た。こゝに蟬が通つて居た。そんなことにまで私は子供のやうに驚いた。

公園の出口に寫眞屋を用して居る國の方の人に教へられて、懇しい食物の味へるといふ町の方へと出掛けて行つて見た。やがて私達は新嘉坡の方で見た来たと同じやうな陰気な町の中を歩き過つた。昔の一つも食つて見たいと思へば、どうしても左様いふ町を訪ねなければ成らなかつた。港へ来て日本人の町と言へば、必とまた左様いふ場所を教へられた。そこは南洋の一部とも英領の殖民地とも思はれないほど、日本の港町や船着場にあるやうなものが有る。喧嘩がある。格子窓がある。二階の欄から見た着物が有る。夜と露とを取道へて居るやうなその界限へは手許無沙汰な日の光が射し入つて居る。何もかも飽き疲れて、ひっそりとして、欠びをして居るやうにも見える。思はしい遠食にも有つて居なかつた。深山は来て物食ふ私達に取付いた。もう少しで私は井の中の飯と一緒に蟬の一つを呑み込んでしまふところ

であつた。静かな港の折には、假令有つても眼につかなかつたやうな支那風のものも——付ては自分等の半程は愉快し嘆息して止まなかつた支那風のものも私の眼についた。そればかりでは無い、三年の月日の間に進んで来た一若い支那が何となく私の眼についた。私は殊にそれを支那の婦人に見つけた。前菜を分け、かいた眼付をして深窓から出て来た若草のやうな娘を町に見かけることは、たしかに多くなつた。

たやうだ。

「支那は好い。國の方で思つたやうなものぢやない。殊に支那の女は好い。」

私はM君に聞えよがしにそれを言つた。M君は佛蘭西あたりの女に比べて時に支那の女を褒めるほどの理由も見當らないといふ顔付をして居たので、尤も私は歐羅巴に居る頃から支那を好くやうに成つた。今度香港へ来て見て一層その心を増した。隣國にあるものを好くやうになつたのは海の外へ出て来た旅の荷物の一つだ。唯私はこの愛好心が單なる趣味に耽ることを恐れる。

涼しい風の来る海岸の通りをランチの出来るころまで引越して行つた頃は大分二人とも歩き廻つた後だつた。私は或れて海岸の小屋に腰掛けた。その屋根の下から直ぐ岸のところまで来て居る船を、動いて行く船を、櫂の長い支那風の舟を、日の火の旗を掲げて通るランチを、其並敷へきれないほどごちやうとした海内の眺めを賞して居た。その海岸の小屋のところに群を待つ五人の支那の青年に逢つた。その中に一人、白い涼しさうな支那服を着け、洋傘を手にした若い支那の女が混つて居た。さ

「支那の女の着物には、靴も似合ひますね。」

私はM君にさう言いたが、南洋風のものとは西洋風なものとの調和が、自分等の眼前に居た若い支那の婦人に左様をかしくないのも不思議だつた。私はまた袂の旅で見つた支那人の多くが鈍いうらんだ眼をして居たことを思い出して、それを眼前に見る人達に思ひかけて、すくなくも若い支那が自分等ごときの通りすがりの旅客の眼にすら映するやうに成つたことを想つて見た。

ランチを待つ間、私はM君と二人で小屋の前を歩いて見た。一夜の碇泊の後には斯の港を離れ去らうとして居た私達の前には、船着場も多く見かけるやうな土地の人達も通つた。